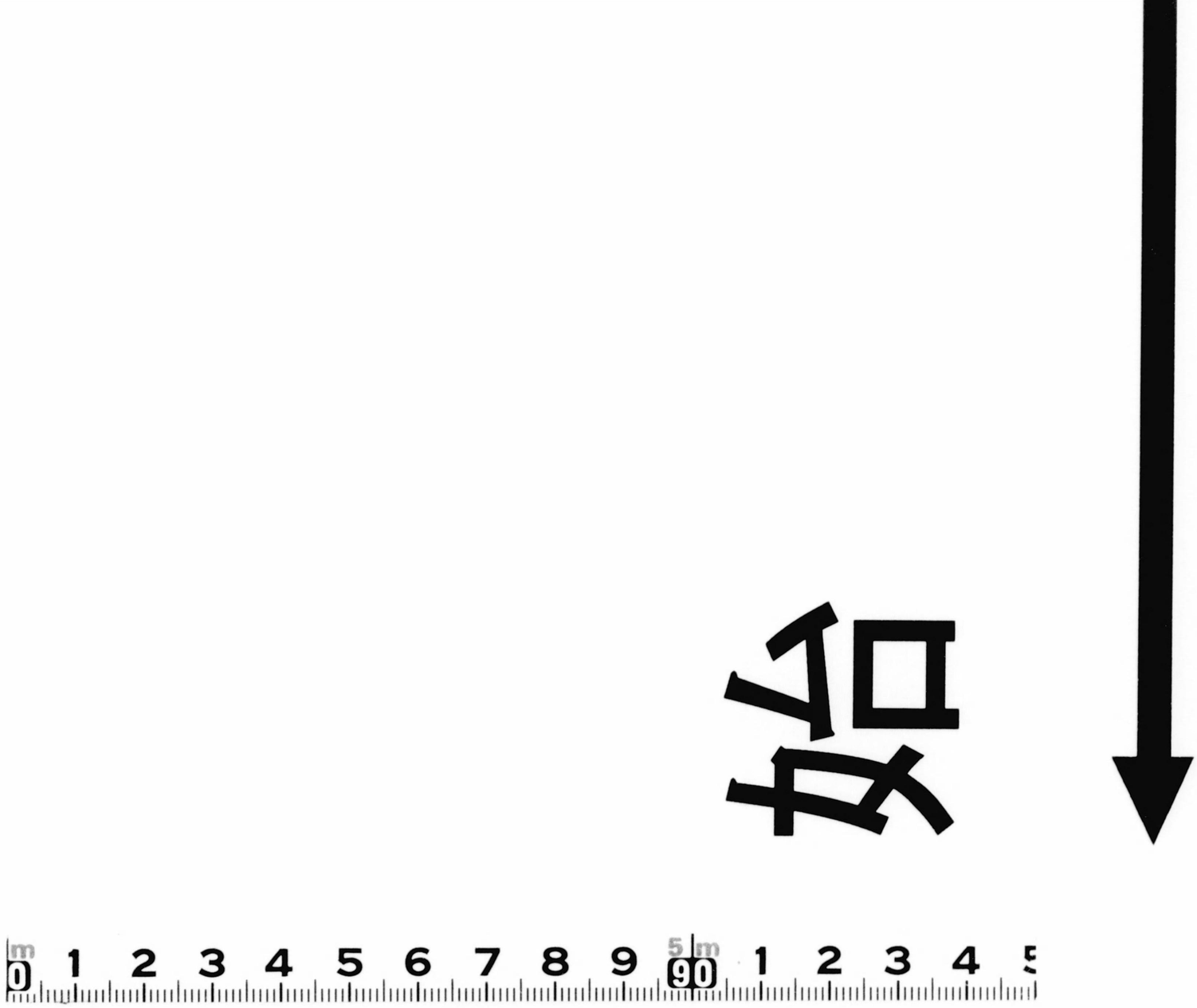
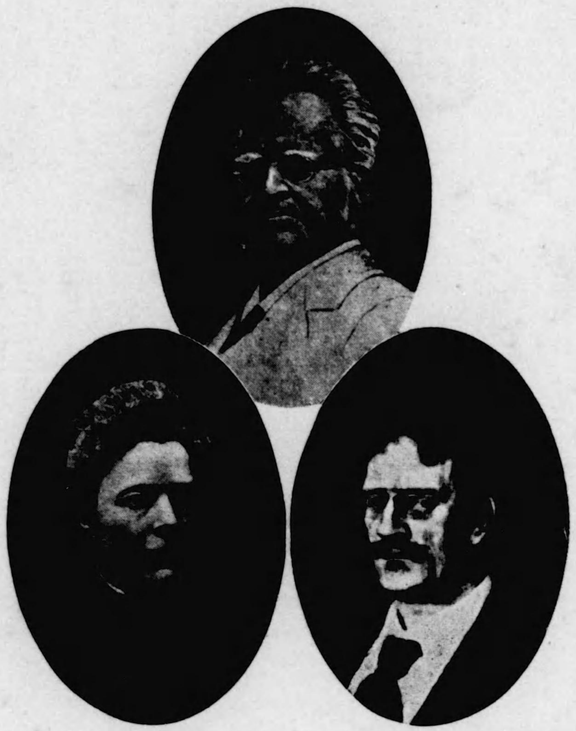

設

北歐三人集



ビヨルンソン

ハムスン　グラルレフ

新潮社出版

908
7

国立国会図書館蔵書

国立国会
25.2.21
図書館

200541

解說

(一)ハムスンに就いて

北歐といへば、單に北歐羅巴の意味に取つて、獨逸や、露西亞までも引括(ひつくる)める場合もあるが、此處では諸威語、瑞典語ノルヂスクの意味で、單にスカンヂナヴィヤ諸國卽ち、丁抹、諸威、瑞典、それからアイスランドを含めてのことである。

北歐作家中の巨人はイプセンとストリンドベルヒ、それからビョルンソンであるが、これは何れも故人であつて、現存作家の中で、第一流として、その實力からも、又名聲の上からも世界的なのは、この『飢ゑ』の作者クヌット・ハムスンである。

ハムスンは千八百五十九年八月四日諸威グゥドブランスダール縣のロムに生れた。彼の生家はスクゥルト・バッケン(見晴しが丘?)といふ名のついた、非常に景色の好いところである。彼は此處に美はしい自然の裡にテッサ瀾(フォス)の轟然たる音を聞いて過した。彼の作品の多くが常に自然美に對する嘆賞に費されてゐるのは、この影響を蒙つたものであらう。

彼の父はペーデル・スクゥルト・バッケンといふ仕立職であつた。クヌットの外に四五人の子供があつたので、家計は次第に困難になつて、子供達は隣り近所の扶助を受けるやうな有樣であつた。この子供達のなかで、クヌットは非常な體力と健康の持主で、同時に極めて食慾が旺盛であつた。

然るに千八百六十年、諸威に未曾有な經濟的困難が起つたとき、彼の父は遂に亞米利加移住を思ひ立つたのである

が、運命はこれをクヌットの後年に實現をゆづり、一家をあげてノルラン地方のハマーロイに移り住ませることになつた。然し、そこでも亦安住の地を得なかつたものか、父は再び、かの漁業で名高いローフォトン島に移つた。クヌットはそのとき四歳であつた。彼はこの荒涼たる自然のうちに成長して行つた。その後數年間、牧師の伯父のところに寄食してゐた。彼はこの時の生活をその詩趣豐かな筆で、『ノルスク・ファミリイ・ジゥルナル』に書いてゐる。年を經た教會堂、物寂しい墓場、世離れた宗教家の生活といふやうなものが、この多感な少年の心を動かして、後年の素地をこにつくらしめたのであつた。

十七歳の時、彼はボードオユの靴屋へ弟子にやられたが、文學に志を立てたのは、それ以來のことで、千八百七十七年には小説『謎めくもの』を上梓したが、恐らくこれがハムスンの第一作であらう。つゞいて『再會』と題する詩と『ビョルゲル』と名のついた物語が發表された。但し今日では稀覯書である。

靴屋に奉公してゐるうち、彼は職人の身に適しないのを知り、遂に決意して、行方定めぬ放浪の旅に上ぼつた。彼はまづ漁村に行つて、トロール漁船の石炭擔ぎとなつたが、一箇處に長く足を止めることはなかつた。彼はこの間、一度は地方の或る高官の家庭教師になつたこともあれば、又後援者を得て、外國旅行の資金を惠まれたこともあつた。

ハムスンが亞米利加に渡つたのは、彼が二十四歳のときで、その目的はユニテリアン派の牧師となるにあつたと云ふが、遂に目的を達することが出來なかつたばかりか、生活に追はれて、あらゆる烈しい勞働に從事した爲めに、すつかり體を惡くした。彼は或る夕方ミネアポリスの驛場で、賣り手になつて、大聲に怒鳴つてゐると、急に胸が裂けたやうな心地がして、喀血した。醫師は診察して、奔馬性肺結核で、今後三ケ月の生命しかないから、若し歸國したいなら、今すぐの方がいゝと云ふのであつた。

彼は醫師の注意など俟たずに、只無暗に歸國を急いで、旅費のないまゝ、機關車に乘せて貰つて、ニュー・ヨークまで三日の旅をした。ところが驚くべきことには、その間、向ひ風の爲めに强く空氣を肺の中に吹き込まれたので、ニュー・ヨークに着いたときは、もう、さしもの難病も半ば癒えてゐたのだつた。そしていよ〳〵諸威に歸つて、更に二三ケ月休養すると、すつかり健康な體になつたのだつた。これは千八百八十五年のことである。

健康になつた彼は、此處に年來の志望である文學に專念して、まづ二三の小話や、亞米利加文學觀や、『罪』と題する小品などを發表した以外に、文學巡回講演を試み、ヒェランやストリンドベルィについて、諧謔と機智とに富んだ話で聽衆を悦ばした。

千八百八十六年の秋、彼は再び亞米利加に渡つて、ビョルンソン、イプセン、ヒェラン、ガルボル、リェなどについて講演をして廻つた。彼はその批判の方法ではブランデスに、その主張ではビョルンソンに學ぶところがあつた。

歸國後、彼は『近代亞米利加の思想界』といふ長い論文を發表したが、これによると、ハムスンの米國に對する感想は甚だ面白からぬものであることが窺はれる。しかし彼は後に至つてこの書を絶版にした。

『飢ゑ』の斷篇が發表されたのも此頃(千八百九十年)で、之を載せた丁抹の雜誌『新土』は間もなく廢刊してしまつた。

彼はやがて巴里に行つて、アルベルト・ランゲンを知り、その手で、初めて『飢ゑ』が本となつて、諸威で出版されることゝなつた。文壇に於けるハムスンの位置は此處に動かし難きものとなつた。その後の彼の名聲は年と共に高まつて、小説、詩、劇と數多くの作を出したが、千八百九十八年、グリムスタードとアレンダールとの間にあるニョルンホルムに土地を求めて、これに住ひ、半ば農民のやうな生活をしながら、夢想と創作とに耽つてゐた。

×

ハムスンの作品を一覽すると、よく彼の生活と一致してゐることが分る。彼は言葉の至上の意味での「私小說」家である。勿論、劇作もやはりハムスン自身の反映ではあるが、小說に於て顯はれる彼自身の姿こそはより鮮かである。例へば『飢ゑ』は彼の失意、焦慮の極、今日の食にも困つてゐながら、どこまでも文學に功名を立てようともがいてゐた時代を表明し、『神祕』、『牧羊神』、『ヴィクトリヤ』、『陶醉』等は彼の漂泊時代を反映してゐる。

ハムスンの諸作を通じて流れる精神はロマンチックである。『飢ゑ』の如きは、痛ましい、血の滲み出る現實で、生か死かの境目に立つ人間の尊い體驗記錄であるけれども、そのリアリスチックな描寫の間に、途方もない空想が雜へられ、或は自分は今餓死するほどの境遇にありながらも、他人の窮乏に同情して、金品を惠んだり、困りきつた揚句、つまらぬ不正をしてみるが、すぐ良心に責められて、その償ひをしたり、或は又故なく他の惠みを受けることを屑しとせず、折角厚意をもつて贈られた金をむざ〳〵他人にやつてしまふといふやうな、人道主義的、理想主義的なところが澤山に入つてゐる。若しロマンチックとは主として空想的なものゝ謂ひであるならば、彼をさしてロマンチケルと呼んでも決して間違ひはない。

ハムスンは又、北歐のドストエフスキイと呼ばれる。がしかし、ハムスンにはドストエフスキイの宗教的空氣がない。ユニテリアンの牧師とならうとした彼と、正教の素朴、單純な、最も善いところを多くもつたゾシマ長老を創造したドストエフスキイとの間には、よしや等しく宗教的であるとしても、非常に大きな開きのあることは明かである。熱し、その人道的氣魄に於て、又その貧者の生活を克明に、同情を以て描いた點に於て(特にこの『飢ゑ』に於て)、彼を北歐のドストエフスキイと呼んでも差支はないであらう。

彼の作品の、も一つの特異點は、その浮浪人生活の描寫であらう。尤もゴーリキイのそれとは餘程趣きを異にしてゐるが、彼の大多數の作には浮浪兒が出てくる。現に、この四五ヶ年間の作品を見ても、浮浪者の出てゐないのはない。『野の發展』でも、『井戸端の女』でも、『絕筆』でもさうである。最近の『漂浪者』(小說)に至つては、名からして彼の浮浪癖を示してゐる。

數多いハムスンの作は皆それ〴〵の趣きを具へて、尊敬すべきものであるが、中でもこの『飢ゑ』は一頭地を拔いてゐる。ハムスンがノーベル賞を受けたのは千九百十七年に出した小說『野の發展』の爲めであるが、私から見れば、『飢ゑ』はその紙數も遙かに尠ないけれど、緊張と力と、その出來榮えの見事さに於て、その特色の著しさに於て、寧ろ『野の發展』の上にあるものではないかと思はれる。實際、貧者の飢ゑを描いて、これほどまで徹底したものは世界に二つとはない。『ヘンリイ・ライクロフトの手記』の如きがあるけれど、それにはなほ多くの餘裕が生活のうちに見出されて、とても『飢ゑ』とは比較にならないのである。私は『飢ゑ』を以てハムスンの最大傑作となすばかりでなく、北歐文學(小說)中の最大收穫、世界の文學中でも、第一位に推さるべきものと信じてゐる。

最後に、ハムスンの文體は決して明快、的確とは言へない。諾威で文章の規範となるのはイプセンとビョルンソンであるが、ハムスンの文章は時としては諾威人にも意味を十分にとり兼ねるところがある。從つて英譯、獨譯共にそれぞれ解釋を異にする場合がいくらもある。殊に會話と地の文との關係が極めてあやふやであつて、會話を三人稱にして間接話法で記述しながら、なほ會話の語勢をそのまゝに殘してゐるのは頗る奇怪で、それが特にこの『飢ゑ』には多いから、譯する際に非常に困難を感じた。しかしその風變りなところに、ハムスンの面白味が多分にあるのだから、餘りに敷衍し過ぎて說明的に流れても、味がなくなるので、出來る限り解し易く譯しては置いたが、又この程度ならば解るだらうと思ふところは、そのまゝに殘して置いた。豫め讀者の御諒解を願つて置く。(宮原晃一郎)

(二) ビョルンソンに就いて

「或日、家へ歸つてくると、自分の部屋にビョルンソンが來てゐた。」とストリンドベルヒは、その『魂の發展史』の中で、ビョルンソンを描いてゐる。「ヨハヒはビョルンソンの肖像を二枚見た事がある。一は若い時分で、『シンネエヴェ』を書いた時である。もう一枚はもつと後のであつた。前のは體格の大きな、立派な男振りで、眞黑な一杯の髯に、口の周圍には憂鬱な諸威風な特徴を備へてゐた。後者は獅子の鬣のやうな大きな頭をして、二の目が大きな眼鏡の後に射らんばかりに輝き、若い男の髭位もありさうな眉毛をしてゐた。……丁度今こゝで午後の薄暗い光の中に、ソファに頗る嚴丈さうな體格ではあるが、外見はさう特に變つた風も見えない男が腰かけてゐるのを見た。」と言ひ、「ビョルンソンが笑ふと、もう使ひへらされた短い危げのない二列の齒が見えた。それは子供の乳齒を想はせた。」とも書いてゐる。(秦豐吉氏の譯による)

これがビョルンソンの外貌である。この外貌の下には、どんな精神が潜んでゐるのであらうか。

ビョルンスティエルネ・ビョルンソン(1832—1910)は、生前、ヘンリック・イプセンと對立し、又併稱された大作家である、イプセンとは、青年時代から、或時は敵として、或時は友として、相角逐し、相拮抗して行つた。それで丁抹の大批評家ブランデスも、「イプセンとビョルンソンとは、諸威古代の二人の王シグゥルとエュスタインに比せらるべきである」と云つてゐる。一は故郷に止まつて、祖國の開發のために働いた王であり、一は他國へ出て行つて、大膽な冒險によつて、祖國の名譽を高からしめた王である。そして、イプセンが國境を越えて、國際的に働いたエュスタインならば、諸威の國民的作家として、祖國の啓蒙のために働いたビョルンソンは、自らその戯曲に描いたシグゥルその人でなければならぬ。

ビョルンソンの生れたのは、エステルダアルのクヴィクネといふ土地で、父は牧師であつた。この土地は隨分荒涼たる處で、冬は雪が屋根までとゞき、住民は粗野で、それを制御するのには、牧師に大きな力が要つた。ビョルンソンの七歳の時、父はロムスダアルに轉任した。そこは兩方から二つの山脈が迫つてゐる間にひらけてゐる峽谷で、その綱長いわづかな平地はよく耕された耕地で、その中を溪流が流れてゐて、落ちて瀑布となり、更に峽江と云つて、岩山の間へ深く海の入り込んでゐる入江へと注ぐ。さうした變化が、この土地に美しい景色を與へてゐる。が、冬になると、もう一面の雪で、景色はそのすべての變化を失つてしまふのだ。そして、かうした自然の中にゐるロムスダアルの住民は、やはり粗野で、性急で、氣まぐれであるが、又、一面、率直で、考へ深くて、眞摯でもある。さうした自然と人間とが、少年のビョルンソンに深い印象を與へた事は云ふまでもない。彼の農民小説は、この少年時代の經驗の賜物に外ならないのだ。

ビョルンソンは、モルデの學校に行つたが、學業よりも、むしろ小説や、北歐古譚(サガ)や、民謡を讀み耽つた。十六歳のとき、クリスティアニアに出た。大學に入つてからは、演説がうまいのと、性格が熱烈で力强いのとで、忽ち大學生間に大變な人氣を得てしまつた。それから、彼は劇場に入浸るやうになり、劇評を書き出した。同時に、また詩を書き、戯曲を書いた。この最初の戯曲は、幸ひに劇場から採用されたが、彼はそれを取戻して、破つてしまつたので、今殘つてゐない。次いで、一層の圓熟と洞察とをもつて、『兩戰の間』(一八五七年)をわづか二週間で書き上げた。これが彼の戯曲の處女作で、彼の名を一躍高からしめたものである。同じ年、彼ははじめて小説に手を着けて、『シンネエヴェ・ソルバッケン』を書いた。これは彼獨特の農民小説の最初の企で、しかもその中での傑作と目せられるものである。丁度ビョルンソンが二十五歳(日本流に云へば二十六歳)のときの作である。次いで、その翌年に、『アル

ネ』を書いた。この作によつて、ビョルンソンの作家としての地位は全く定まつたのである。

複雜な事件本位の小説、例へばデュマの『モンテ・クリスト伯』などを讀んだ後で、かうした素朴な、原始的な作品に向ふと、あまり單純で、平淡なやうに思はれるかも知れない。然し、これはより多く人の心に訴へるものである。若し、落着いて、この中に盛られたしみ〴〵した人情味を味はひ得たなら、深い感動を受けるに相違ない。

ビョルンソンの農民小説は、一名、山嶽小説とも云ふ。それは彼の生れた山嶽地方を舞臺としてゐるからである。春は遲く、冬は早い高原の峽谷から、地平線をかぎる高い山の彼方の、南の國をあこがれて、美しいあこがれの歌をうたふ少年アルネの心は、またその土地の人の心である。アルネは詩人である。そして、この小さい詩人の詩情を培うたものは、その數奇な生立ちばかりではなくて、また、周圍の美しい自然であつた。ビョルンソンの農民小説にあつては、自然と人生とは、全く切り離し難い關係のもとにある。自然も人生の一部であり、人生も自然の一部である。『アルネ』の冒頭には、杜松や樺やヒイスなどが、裸の岩山を綠のいろに蔽はうとして、一度びは恐ろしい洪水のために押流されながらも、つひに鬱蒼たる山にしてしまふ一段の序曲がついてゐるが、これが結末に、ボオル・ベエンが、その戀敵ニルスの子を婿にした時、この山を見上げて、自然の力を感じて言ふ言葉と照應して、作者の根本思想を示してゐる。然し、大自然は人間の喜怒哀樂の上に、超然としてゐる。大自然にとつては、何百年も一瞬である。ツルゲエネフの『散文詩』の中に、アルプスの最高峯ユングフラウと、フィンテラアルホルンとの對話があるが、山と山が一寸話してゐるうちに、もう人類は影をひそめてしまふのだ。

批評家として卓越してゐた小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）は、その大學の講義の中で、ビョルンソンの農民小説、とりわけ『ソルバッケン』を激賞してゐる。トルビョルンとクヌウトとの格鬪の描寫を引いて、一言も多くなく、少くない、その簡潔な筆致を賞揚して、最も北歐古譚（サガ）の體を得たものだと云つてゐる。全く、ビョルンソンの文體は、暗示的で、印象的で、簡潔を極めてゐる。少しも修辭に墮したところがない、文章を飾つたところがない。反復をいとひ、餘計な說明を避ける。そのため、時には、我々日本の讀者には、一寸納得の出來ぬ場合もないではない。例へば、『ソルバッケン』の第二章のところに、トルビョルンが、日向丘に遊びに行くところがあるが、あそこなども、遊びに行つたといふ事を書かないで置いて、いきなり、シンネエヴェとトルビョルンとの會話を出して、その事を知らせてゐるなど、その一例だ。かうした簡潔な文體は、サガに學んだものでもあるが、一面から云ふと、そこに取扱はれた農民の寡默な性質、簡單な物の言ひ方に影響せられてゐる點もあつて、一種の印象主義と、サガの體とが、自然に融合一致してゐる譯だ。

そして、そこに描かれた生活と、作者の思想とは、飽くまで健全で、純潔で、光明的である。そこには强い信仰がある。そして、その人物の鮮かさ。「ビョルンソンの少年少女は、その青春と戀愛との描寫は、世界文學中でも、最も特異な創造である。ビョルンソンほど、純潔な處女の戀を美しく描き得たものはない」と、ワルテル・フォン・モロの云つた言葉は眞實である。思ふに、この二作は、理由なくして、世界文學中の傑作の中に伍してはゐないのである。

ビョルンソンの制作は、大體、二つの時期に分けられる。その處女作を出した時分から、劇場監督となつて、盛んに筆を執つた後、三十七歳、一時筆を絕つまでと、外國に遊んだり、コペンハアゲンから出てゐる雜誌の編輯者となつたりして數年を過した後、再び筆を執り出した後年との二つである。そして、この前の時期は、小說では農民小說、劇では歷史劇の時代で、劇では主に北歐古譚（サガ）から材を得て書いたが、小說の方でも、現代を取扱つたとは云へ、舊習に囚はれた農民生活を描いてゐるので、近代的の氣分はなく、內容も形式も、ともにロマンティックであつた。また、『ソルバッケン』や、『アルネ』に見られるやうに、澤山の詩を小說の中に挿入するところなども、いかにも獨逸のロ

マンティック派の詩人の小説を思ひ出させる。

この前期の作品の主なものは、小説では『シンネエヴェ・ソルバッケン』(一八五七年)『アルネ』(一八五八年)『快活な青年』(一八五九年)『漁夫の娘』(一八六八年)等。戯曲では、『兩戰の間』(一八五七年)『シグウル』(一八六二年)『マリア・ステュアート』(一八六四年)『新夫婦』(一八六五年)等である。

後期のビョルンソンは、サガの體を離れ、農民生活を離れて、近代的題材と近代的樣式とを得て來た。その精神に於いても、牧師的な傾向から、戰士的傾向に移つて來た。小説では『マグンヒルド』(一八七七年)『カピテン・マンサナ』(一八七九年)『塵埃』(一八八二年)『旗は市と港にひるがへる』(一八八四年)『神の道』(一八八九年)『アブサロンの髪』(一八九三年)『マリイ』(一九〇六年)等。戯曲では、『編輯者』(一八七五年)『破産』(一八七六年)『王』(一八七七年)『新しきシステム』(一八七九年)『手套』(一八八三年)『人力以上』(第一部一八八三年、第二部一八九五年)『地理と戀愛』(一八八五年)『パウル・ランゲとドラ・バルスベエル』(一八九八年)『ラボレムス』(一九〇一年)『若き葡萄の花咲くとき』(一九〇九年)等がある。

一體、ビョルンとは、諸威語で熊の義であるが、名にも姓にも熊の字がついてゐるビョルンソンは、幾分毛むくぢやらな熊のやうなところがある。素朴で、正直で、不器用で、徹底的の田舍者で、また喧嘩癖をもつてゐる。その爭鬪癖が、この期間に於いて、彼を戰士として活動せしめ、政治の領域でも大いに働かせた。或ひは世界の平和運動のために、或ひは露西亞との通商に便なる無凍港のために、政論家としても働いた。一方、社會劇の方に進出して、イプセンと角逐せんとしたのもこの期間である。

『手套』はまたこの期間に於けるビョルンソンの活動の一面を代表する。兩性問題に專心し、情慾の問題の解決に熱中した一種の清教徒たるビョルンソンの、所謂スワワ運動なるものゝ核心がこゝに出てゐる。結婚する場合、男子が女子に求める貞潔を、女子もまた男子に求めんとするこの女主人公スワワの要求は、女性が極度に奴隷的地位にある我が日本では、むしろ奇異に感ぜられるものがあるかも知れない。が、こゝでは我々は北歐人特有の嚴格な倫理觀念を考慮しなければならない。ビョルンソンの最後の作は、『若き葡萄の花咲くとき』である、これはその一生の自己清算であり、エピロオグである點で、しばゝイプセンの『我等死者目覺むるとき』(蘇生の日)と比較論評されるものである。

一九一〇年の四月、この巨人は、その愛してゐる故國のアウレスタッドの別莊ではなく、外遊中巴里で、卒中で死んだ。四年早く生れたイプセンよりも四年遲れて。つまり、イプセンとビョルンソンとは、丁度同じ年で死んでゐるのである。

(三) ラゲルレフに就いて

セルマ・ラゲルレフ(1858—)は、現存の人で、今年七十歳である。三十二歳迄は、全く無名の人であつた。瑞典の片田舍の女教師が、世界的名聲を馳せて、ノーベル賞の受賞者にならうとは、當時誰も思つたものはなかつたであらう。

ラゲルレフは、一八五八年、フリュクスダアルのモオルバッカに生れた。その土地のあるウェルムランドの地方は、一年の大半は雪と氷に閉されて、道はとてもわるく、交通は不便であつた。瑞典の他の土地とは一寸切り離されたやうな有樣で、たゞ夏のわづかな間だけ、他處から人が入つて來るだけである。そんな狹い土地で、彼女は二十二歳まで靜かに暮して、それまで誰も描き出した事のなかつたその土地の人情風俗、風變りな人物や性格を觀察し、心に印象したのであつた。

ラゲルレフの閲歴は、極めて簡單である。別に取り立てゝ言ふほどの事もない。一八八〇年に、ストックホルムに行つて、そこの女子高等師範に入り、一八八五年に、地方の一都市ランヅクロナの女學校の教師となつて、十年間、その職にあつた。この平凡な一女教師を、一躍世界的名聲の持主としたのは、彼女の處女作『ゲスタ・ベルリング譚』であつた。

一八九〇年に、ストックホルムの婦人新聞『イドゥン』が、約百頁ほどの小説を懸賞募集した。ラゲルレフは、それに應募して、『ゲスタ・ベルリング譚』の最初の斷片を送つた。これが後にあんなにも愛され　尊重されて、瑞典ばかりでなく、世界中にその名をつたへられた作物の成立つた動機であつた。彼女はこの成立ちの次第を、『ゲスタ・ベルリング譚の作られた事情』といふ自叙傳的な文中に詳述してゐる。

この『ゲスタ・ベルリング譚』は、ビョルンソンに於いて著しかつた北歐古譚（サガ）の調子が、更に徹底的に用ゐられて、その物語自身が新しいサガとなつたものである。ラゲルレフ自身の言葉によると、その幼時や、少女の時分から、いろ〳〵の傳説や口碑が、自分のまはりで物語られてゐたので、それらが故郷の自然と相交錯して、深く頭に刻み付けられてゐたから、後年、ストックホルムの街を歩いてゐた時、それらの故郷のサガを、この故郷の風景と共に、一つの物語に書いてみたいといふ考へが浮んで來たのだといふ。そこで、懸賞小説に應募して當選した作品を更に書き足して、五百頁の大小説とし、玆にはじめてその多年の夢想を實現し、古いウェルムランドのサガを完成したのであつた。

この作は近代には稀らしい散文の叙事詩ともいふべきもので、その主人公ゲスタ・ベルリングは、片田舎の牧師であるが、世事に疎い、情熱的な奔放な男で、詩を作らぬ詩人である。瑞典の天才的な詩人アルムキストが、幾分そのモデルとなつてゐると云はれてゐるが、ラゲルレフが、アルムキストの小説『茨の書』を、ビョルンソンの小説とゝもに愛讀してゐたと云へば、多少肯かれる點もないではない。大抵の女流作家は、その作中の男主人公に戀着してゐると云はれるが、ラゲルレフにあつても、ゲスタ・ベルリングは、彼女の戀人であつた。それほど深い愛を以て、魅力ある性格に造り上げられてゐるのである。ゲスタの周圍には、種々樣々の風變りな、面白い人物が澤山ゐて、いろんな突飛な事件を捲き起す。まるで古傳説を讀むやうな興趣を持つてゐる。

かうした特色は、ラゲルレフの作品全部を通じて一貫してゐる。次いで出た短篇集『目に見えぬ紐』より、ずつと後年の作、『ニルスの不思議な旅』に至るまで。

ラゲルレフは、一八九五年、その教職をなげうつて、純粹に作家として立つた。そして、瑞典王室から旅行手當を受けて、やゝ長く、獨逸、瑞西、伊太利に遊び、シシリヤを舞臺とした『反基督の奇蹟』（一八九七年）を書き上げた。『ゲスタ』とは反對に、これは南方の情熱の讃歌である。一八九九年には、埃及、パレスティナに遊んで、後に、ダラルネの農夫の宗教的覺醒を取扱つた大作『エルサレム』を完成した。その他、著名の作品は、『アルネ氏の寶』『リリエクロナの故郷』『ヤンの鄕愁』『死の馭者』『聖なる生涯』『基督の傳説』『一片の生活史』等である。

然し、それらの中で、こゝに譯出された『地主の家の物語』は、疑ひもなく、傑作である。恐らくラゲルレフの書いた最良の物語の一つであらう。獨逸の作家トマス・マンは、この作を評して、その主人公の狂氣の描寫が、毫も空虛なこしらへものでなく、臨床醫學的の研究にもとづいた眞實性を有つてゐる事と、女主人公の理性の力と勇敢さとが、いかにも素直に描破されてゐる事とを賞讃してゐる。また、批評家ポリツキイは、その構想の巧妙な點、『ゲスタ・ベルリング』にありあまつてゐた抒情的の感嘆や、筆癖の無くなつてゐる點を指摘して、彼女の才能の最も圓熟した頂點を示すものだと評してゐる。

ラゲルレフは、もと〳〵傳説の世界から出發した人であるだけに、非常にロマンティックで、さうした要素に富んでゐる點は、ビョルンソンよりも更に顯著である。それゆゑ、彼女の傳記者である瑞典の批評家、オスカアル・レヴェルティンは、「セルマ・ラゲルレフは近代文學の最も驚異すべき破格（アノマリイ）である」と評してゐる。それゆゑ、この『地主の家の物語』に於いても、狂氣、假死（かし）、幻想、透視、その他の超絶的な、自然の秘密が、重要な動機（モチイヴ）となつてゐる。第一、この女主人公のイングリッドは、いつも夢の世界に生きてゐるやうな、非常に幻想的な、幾分透視的の能力を持つた女で、幻の人と現實の人が、始終ごつちやになつてゐる。憂愁夫人（フラウ・ソルゲ）といふ蝙蝠の化身のやうな幻想上の人物が、彼女の心の眼にあらはれてくる場面など、まるで近隣の地主の夫人が訪問でもして來たかのやうに、極めて自然に、當然事のやうに描き出されてゐる。その現實と幻想とが別に繼目（つぎめ）も見えぬ位ゐに移動して行く。作者の物語の才能は天禀と云はなければならない。

『沼の家の娘』は短篇集『一片の生活史』中最も長いもので、最傑作と云はれてゐるものである。我々日本人に取つては、或ひは『地主の家の物語』よりも一層深い興趣があるかも知れない。献身的な女主人公の愛情は、涙ぐましい程のもので、義理人情の幾微にふれると、ついほろりとしやすい日本人の性情にとつては、何と云つても、深く心に沁（し）みるものがある。日本的と言ひたいところはそこである。特に、作者が婦人であるだけに、さすがに女性心理の描寫は、男性の作家の及び難いものがある。デリケエトで、よくその微妙なニュアンスを寫し得てゐると思ふ。

附言

終りに譯者として一言すれば、正確と平明とを併せ得べく、最善の努力はしたつもりであるが、何分力の足（た）りないものであるから、思つたほどの効果も擧げ得なかつたのは、恥かしい事である。

發音は大體、宮原晃一郎氏の示教に從つた。たゞ、『シンネエヴェ・ソルバッケン』は、嚴密に云へば、『シュンヌゥヴェ・ソルバッケン』が正しいと云ふ事であつたが、從來の讀み方とあまりかけ離れて、やゝ耳遠いので、獨逸讀みに從つた事を諒として頂きたい。

ビョルンソンの邦譯は、從來、相當に行はれてゐる。就中、矢口達氏が明治四十五年に、既に『アルネ』を譯出されてゐるのは、大なる功績である。『ソルバッケン』は三ト於菟吉氏が、大正七年に譯出されてゐる。其他、野尻抱影氏が『マグンヒルド』を、渡邊清氏が『アブサロンの髪』を、まだ二三あつたと記憶する。戯曲では、森鷗外先生が『人力以上』と『手袋』を、島村民藏氏が『若き葡萄の花咲くとき』を、其他小山内薫氏はじめ、かなり、いゝ譯を出されてゐる方があつたやうに覺えてゐる。ラゲルレフの邦譯は、野上彌生子氏が『ゲスタ・ベルリング』を譯されてゐる外、譯本のある事は知らない。上述の如く、既に邦譯あるものは參照して益を得た事尠少でない、玆に記して謝意を表したい。また、譯語の點で、大宅壯一、土井逸兩氏から有益な助言を得たのと、措辭の上で金子薫園氏に配慮して頂いた事と及び佛語を八木さわ子氏、土井逸氏に教へて頂いた事をも、感謝しなければならない。

ビョルンソンのテキストは、最も正確と云はれるエス・フィッシェル版全集と、アルベルト・ランゲン版とを主として、レクラム版を參照し、ラゲルレフはランゲン版全集に、レクラム版を參照した。ビョルンソンの英譯はつひに手に入れる事が出來なかつた。然し、上記の三書は、嚴密に對照しつゝ譯したので、多大の勞力と時間とを費したが、結果のその勞力に伴はないのは、ひとへに譯者の淺學菲才の罪である。（以上、生田春月）

目次

飢ゑ……クヌウト・ハムスン作　宮原晃一郎譯……一
アルネ……ビヨルンソン作　生田春月譯……一五九
シンネエヴェ・ソルバッケン……同……二六七
手套（三幕）……同……三六五
地主の家の物語……ラゲルレフ作　生田春月譯……四三一
沼の家の娘……同……三三九

カヴーの絵――「アルネ」第十四章の一情景

飢ゑ

クヌウト・ハムスン作
宮原晃一郎譯

一

僕がクリスチャニヤ――誰一人として、そこに飢ゑたといふ痕跡を身につけないで、そこを立ち去ることが出來ない不思議な市――をうろつき廻つて、飢ゑに惱んでゐた時のことである。

僕は屋根裏の部屋に、目を覺したまゝ、まだ臥つてゐると、階下で六時を打つのが聞えた。もうすつかり明るくなつて、家内の者共は、階段を昇つたり降りたりしてゐる。僕の部屋の戸口の傍に、壁紙の代りに貼つてある『モールン・ブラーデット』の古新聞には、燈臺監察官の告示と、その少し左のわきに、大きな、肉太の文字で、パン屋ファビアン・オルセンが新らしく燒いたパンの廣告が載つてゐるのを、僕ははつきりと讀むことが出來た。

僕は目を開けるが早いか、昔からの癖で、今日こそは、何か一つこれぞといふ嬉しい目に會ふだらうかなと、考へ始めたのだつた。近頃僕は、聊か金につまつてゐた。僕の持物は謂ゆる『叔父さん』（質屋）のところへぶちこまれて、僕は妙に苛々しく、辛抱氣がなくなつて、ときには眩暈の爲め、まる一ん日寢床に入つてゐることも一度や二度ではなかつた。時たま運が向いて來ると、どれかの新聞に小說を一篇書いて五クローネル（一クローネは約五十錢クローネルはその複數）を得たこともあつた。愈々明るくなつて來ると、僕は廣告文を讀んでゐるのだつた。

『門内右側 屍衣お仕立所ヨンフルウ・アンデルセン』（ヨンフルウは英語のミスに當る）と、痩せつこけて、きら〳〵する文字をはつきり讀むことも出來た。そんなことをして一時間もつぶしてゐるうち、階下で、八時が鳴るのが聞えたので、やつと起き上がつて、衣服を着た。

僕は窓を開けて外を見た。と、自分のすぐ鼻つ先に、一本の干物綱が引張られてあるのと、廣々した野原とが見渡された。遠くには、燒け崩れた鍛冶屋の火事跡に、幾人かの人足が、燃えさしの取片付けをしてゐる。僕は窓に肘をつ

いて、空を眺めた。まつたく、からつと晴れた好い日になつた。秋がもう來てゐた。すべてが色を變へて凋落する、美しく、冷かな季節である。街路にはもう騷がしい物音が聞えて、僕を戸外へ誘つた。歩くたんびに、みし〳〵と軋の波打つて動く、空つぽなこの部屋は、がたつびしな、不氣味な棺桶のやうな感じがするのだつた。戸にはちやんとした鎖もなければ、部屋の内に煖爐の設備もない。僕は靴下を穿いて寢るのが例になつてゐたが、それは翌朝、少しでもよけいに乾いてゐるようにといふ心遣ひからだつた。僕の心を慰める唯一のものとては、たゞ小さな、赤い一脚の搖椅子で、夕暮などその椅子に腰掛けて、居睡りをしたり、いろんなことを考へ耽つたりするのだつた。風がひどく吹いて、戸が開つ放しにでもなつてゐやうものなら、何ともたとへやうのない奇怪な叫びが部屋の内を通つて行くし、壁の中からも響くといふ具合で、戸のそばに貼り付けてある『モールン・ブラーデット』は、片方の手の長さほどに裂けるのであつた。

僕は立ち上がると、寢床の隅に轉がしてある包みを解いて、何か朝飯になるやうなものを捜して見たが、何にも見付からなかつたので、又向き直つて、窓のそばへ行つた。「えゝ、どうにでもなれ、これ以上、何か仕事を見付けやうとしたつて、どうなるもんかい。」と、僕は考へた。

それまでには、もう幾度と數へきれない拒絶、半端でふいになつた約束、てんから、いけないと跳ね付けられた申込み、やつてもやつても無駄になる新規な試みといふやうなものが、すつかり僕を落膽させてゐた。僕は集金人にならうとしたこともあつたが、手遲れになつて、駄目だつた。のみならず、僕には五十クローネルの保證金を納める才覺がつかなかつた。一番おしまひには、消防隊に志願したのだつた。我々五十人は玄關の間に立つて、胸を突き出し、力があつて、勇氣に富んでゐるといふ印象を與へようとした。一人の檢定官が、この志願者達をぐるりと見て廻つて、その腕に觸つたり、又は一言二言質問をかけたりするのだつた。しかし、僕の前だけは素通りして、頭を振りながら、「この男は眼鏡をかけてゐるから不合格だ。」と言ふのだ。僕は早速眼鏡をとつて、もう一度その前に立つてみた。僕は眦を釣り上げ、眼をナイフのやうに鋭くした。すると檢定官め、又候にや〳〵笑つて、僕の前を素通りしてしまつた。僕をちやんと見覺えてゐたのだ。それに何よりも一番悪いことは、僕の服裝が、もう一廉の人間としてその位置を求めに出られないほど、ひどく損みかけてゐたことだつた。

いつだつて、僕のすることが、すら〳〵と順序よく運んで行つたことなんかありはしなかつた。僕は最近には不思議なほど何にも失くなしてゐた。櫛一枚すら殘つてはゐなかつたし、寂しくてたまらぬ時に、讀むべき本すらも持たなくなつてゐた。夏ぢう、僕は墓地や、宮城の公園に行つて、そこに腰を下し、新聞に投書する原稿――驚くべき發見や、不安な頭に湧いてくる氣分や、思ひ付きなど、いろんなものを一段々々と書き綴るのであつたが、自暴になつて、途方もない問題を選んだことも屢々あつた。けれども、それは長い間僕を緊張さして置くだけで、いつだつて實際、採用されたことはなかつた。一篇が出來上がると、僕は又新たなものに取掛つた。屢々編輯長達から、いけないと言はれても、辟易しなかつた。いつも、自分に向つて、なあに、いつかは成功するさと、言ひ聞かしてゐた。又、時折り、運が向いて、好都合にいつた場合には、たつた午後に一仕事したゞけで、五クローネルにあり付くこともあつたのだ。

僕は、再び窓から離れて、洗盤に行つて、地ずれのしたズボンの膝頭に、少しばかり水をかけ、黑く新らしく見えるやうにした。それが濟むと直ぐ、例の如く紙と鉛筆とをポケットに入れて、部屋を出た。そして下宿の主婦さんに氣づかれないように、非常に靜かに階段を降りた。僕の間代が滯つてから、もう一二日經つてゐるのだが、差當り支拂ふ金を持つてゐなかつたのだ。

九時であつた。車の響や、人聲が空に滿ちた。路を歩む人の足音や、馭者の鞭の音などがそれに雜つて、素晴しい朝の合唱を形作つてゐる。到る處この騷がしい往來の有樣に、僕もすぐ元氣づいて、だん〳〵と、心のくつろぎを感じ始めた。單に、新鮮な空氣の中に、朝の散歩をするといふだけのことなら、僕が考へ付きもしないことだつた。空氣が僕の肺臟に何の關係があるものか。僕は巨人のやうに力强く、荷車をも平氣で擔ぐことが出來るぢやないか。すがすがしい、異常な氣持、明るい、のんびりとした感じが僕を捕へた。僕は往き來する人間の觀察を始めた。壁に掲げてある看板を讀んだり、通り過ぎる電車の上から僕をちらと見て行く乘客の眼付に心を動かしたりして、あらゆる下らぬこと――僕の行手を横切つては、消え去るすべての小さな出來事が、身に迫るまゝにしてゐた。

だがまあ、こんなよい天氣に、少しでも食べるものがあつたなら！

幸福な朝の印象がすつかり僕を醉はしてしまつて、僕は限りない滿足に浸つた。そして只もうこれといふ確かな理

由もないのに、機嫌よく鼻唄をうたひだした。或る肉屋の店に、一人の女が籠を提げて立ちながら、晝飯の腸詰を見立てゝゐた。僕が通りすぎる拍子に、その女はこちらに向つて顔をあげた。女はたつた一本の前齒を持つてゐた。近頃、僕はひどく神經質に、物事に感じ易くなつてゐたので、女の顔つきは、直ぐ僕の胸に、厭な氣持ちを起させた。長い、黃色な齒は顎から生えた小さな指のやうに見えて、此方へ向けたその目には、まだ腸詰が一ぱいに入つてゐるやうだつた。僕は一ぺんに食慾を失つて、むかついて來たので、市場のところへ來て、噴水に近寄り、その水を一口飲んだ。目を上げてみると、ヴォール・フレールセルス教會の大時計は十時を指してゐた。

僕は町筋をもつと先へ通つて行つた。ところ構はずぶらついて、必要もないのに、曲り角に立ち止つたり、用もないのに、折れて横町に入つたりした。僕はたゞぶら〳〵と、陽氣な朝はうろつき廻り、他の幸福な人達の中に交つて、呑氣に歩いてゐたのだ。空には眼を遮るものもなく、晴れ晴れと明るく、僕の心には一片の陰影も止めなかつた。

もう十分間も、僕の前を歩いて行く、一人の跛足の老人があつた。その老人は包みを片手に提げて、體ちうを動かしながら、ありつたけの力を出して急いでゐるのだつた。僕は老人が一生懸命にせい〳〵息をしてゐるのを聞いて、その包みをちよいと持つてやつたらといふ心が起つた。でも、その人に追ひ付かうとはしなかつた。グレンセン通で、ハンス・バウリを見かけたが、彼奴頭を下げるのもそこ〳〵に、急ぎ足で行つちまつた。なんだつて彼奴あんなに急いだんだらう。まだ彼奴に一クローネだつて强請らうなんて思つてはゐなかつたんだ。それよりも二三週間前に、彼奴から借りてた敷布を、大急ぎで彼奴に返してやらうと思つてたんだ。僕が、ちつと工面がよくなつてゐりや、誰からだつて敷布なんか借りやしなかつたんだ。今日が日にも、『未來の犯罪について』とか、或は『自由意志について』とか、何とかかんとか、或は少くとも十クローネルを儲けられる、讀むに足るべき論文を書き出してゐないものでもなからう……

かう、その論文のことを考へつくと、僕は俄かに、大急ぎでそれを書きたいといふ衝動に驅られ、あらん限りの、腦味噌を絞つて見ようと思つた。で、宮城の公園の或る適當な場所に行つて、息も吐かずに、その論文を書き上げてしまはうとした。

ところが、老いぼれの不具者めが、やつぱり、跛ひきひき僕の前に歩いて行くので、僕はとう〳〵ぢり〳〵し出した。何だつてこの不具者め、いつまでも俺の前に邪魔んなつて歩きやがるのか。こいつの歩いて行くのは、何處までも果てしがないやうにさへ思はれる。ひよつとしたら、こいつ、俺ときつちりおんなじ處を歩いて、始終、俺の目の前に立つてやらうと決心したのかも知れないぞ。僕が怒つたせゐか、その老人は四角に來るたんびに、ちつとばかり歩度をゆるめ、どつちの方角に向つて、僕が行くだらうかと待つてゐて、その方へ、又もや例の包みを大きく振りながら、極度の力を振り絞つて、先に立つて行かうとするやうに見えるのだつた。僕は行く〳〵、この厄介な人物を見てゐるうち、だん〳〵と、そいつが憎いと思ふ心が募つて來た。この老いぼれが、少しづゝ、僕の明るい氣分を壞して來るやうに感じた。又清らかな美しい朝もそれと共に醜く汚されてしまふやうでもあつた。こいつは我武者羅に、力づくで、世界の或る場所に獅噛み付いて、自分たゞひとりの爲めに、歩道を占領しようとしてゐる、大きな、よたよたの昆蟲みたやうだつた。僕達が丘のてつぺんに辿りついたとき、僕はもうそんなことをしてゐたくなくなつたので、或る店の飾窓に向つて立ち止つた。こいつが往き過ぎるのに、都合よくしてやらうといふつもりだつた。で、何分か經つてから、僕が再び歩き出すと、そいつめ又僕の前を歩いてゐるのだ。僕が休んでゐた間、そいつもやつぱり立ち止つてゐやがつたんだ。僕は夢中で地團駄踏みながら、二足三足前へ進み出て、そいつに追ひついて、その肩を叩いた。

老人はは、つとして立ち止つた。二人は、お互に睨み合つた。

「牛乳を買ふ錢がちつとあるといゝんだが。」と老人は言つて、首を傾げた。

成程、そんなことだらうと、今分つた——僕はポケットをさぐりながら言つた。

「牛乳の代だね。成程。僕も近頃、金まはりが惡いんだ。しかし、君がどれくらゐ要るのか僕は知らんがね。」

「私は昨日ドラメンで食べてから、まだ何にも口に入れないんでさあ。」と、その老人が言つた。「一文なしで、おまけにまだ仕事もめつからないんです。」

「君は職人かい。」

「直し屋です。」

「何の。」

「靴直しです。それに靴を造ることも出來ます。」

「それは又別な話として、」と僕が言つた。「君は此處でちよつと待つてゐたまへ。そしたら、いくらか君にお金を、

ほんの二三オウレ（一オウレは約五厘）だけれど、工面してあげるから。」

僕は大急ぎでピーレ街を下つて行つた。そこには豫ねて知つてゐる質屋が、或る地下室に店を開いてゐるのだ。尤も僕はこれまでたゞの一度も、その店へ行つたことはなかつた。僕は門口を入ると、急いで胴着を脱いで、丸めて小脇に抱へた。それから階段を上つて、店の戸を叩いた。僕は頭を下げて、胴着を机の上に抛つた。

「一クローネ半です。」と主人が言つた。

「えゝ、結構。」と僕は答へた。僕もよく〳〵金に困つて來なければ、それを手放す氣にはなれなかつたのだ。

僕は錢と書附とをもつて、元の場所へ戻つて行つた。この胴着の質入れは、全くすばらしい發見であつた。僕は朝飯を十分に食べられるだけの金を殘して置かう、そして午後のうちに『未來の犯罪』の論文を書き上げてしまはなければならん。僕は直ぐに、人生つてものは、やつぱり良いもんだと感じ始めた。そこで跛足を早く追つ拂つてしまはうと思つて、急いで引つ返した。

「さあ、これを取り給へ。」と、僕は言つた。「君が誰よりもまづ僕に言つてくれたのは嬉しいよ。」

老人は金を受取つて、まじ〳〵と僕を見た。何だつてこ

いつ、俺を瞶めてゐやがるんだらう。何だか殊更に僕のズボンの膝つ頭に目をつけてゐるやうな氣がして、その厚かましいのに、厭になつた。こん畜生め、俺が見掛けほど貧乏だと思つてやがるのか。俺は今、一篇十クローネルもする論文を書かうとしてゐるところだと知らないのか。それぱかりぢやないぞ、後々のことだつて、ちつとも心配なんかしてやしない。俺は手が幾つあつたつて足りないほど澤山の仕事を持つてゐるんだ。こんなに好いお天氣ぢやないか、俺が見ず知らずの立ん坊に酒を奢つたからつて、何の不思議もないことぢやないか。まつたく、その男の妙な眼付をしてゐるには積に障つた。で、別れる前に、一度うんと叱り付けてやらうと決心した。

「おい、君はどうも厭な癖を出すね、人が君に金をやらうとしてゐるときに。」

老職工はぽかんと口をあいて、後ろの壁に頭をもたせかけてゐたが、そいつの乞食頭がちつと働いて、僕がからかつてゐると思つたのだらう、貰つた金を戻さうとした。僕は地團駄踏んで、金は取つて置けと呶鳴りつけた。たゞ理由もなしに、僕がそんな面倒な骨折をしたと思つてゐるのか。明らさまに言へば、僕は、この男に借金してゐるかも知れやしない。して見れば、僕はたつた今、古い借金を怨ひ出

した譯なのだ。だから、この老いぼれの靴直しは、實に義理の固い、指の爪尖まで正直な人間の前に立つてゐたわけなんだ。つまり、金はその男のものだつた。……おや、何で禮なぞ言ふことがあるものか。僕の方こそ却つて嬉しいんだ。左樣なら。

僕は立ち去つた。僕はやつとのことで、その仕事にあぶれた奴を追つ拂つてしまつた。そしてもう邪魔がなくなつた僕は再びピーレ街を下つて、或る食料品屋の前に立ち止つた。飾窓には食料品が一ぱいに陳列してあつた。僕はそこに入つて、何か少し食物を買はうと心にきめた。

「チース一片と、フランス・パン一つ。」と言つて、僕は半クローネを帳場へ投げ出した。

「チースとパンをこれだけみんな差上げますか。」と主婦さんは訊いた。人を馬鹿にした口吻で、こつちの顔を見向きもしない。

「無論、五十オウレだけみんな。」と、一向平氣な顔をして答へた。

僕は品物を受取つて、その年増の、太つちよの主婦さんに、馬鹿丁寧に挨拶すると、大急ぎで城山を越えて、公園に上つて行つた。僕はひとりベンチに腰を下して、もつて來た食物をがつ〳〵食つたら、すつかり氣持がよくなつ

た。こんなに腹一ぱい食つたことは久振りだつた。すると、長らく泣いた後に感ずるやうな、飽滿した安靜を少しづゝ感じ出した。僕はすつかり勇氣づいた。僕はもはや『未來の犯罪』のやうな、簡單明瞭で、歴史を注意して讀んだ人なら、誰にだつて出來る問題を書くことは、つまらないやうに思つた。それよりもつと大きな仕事が出來る氣がした。僕はいろ〳〵な困難に打ち克つて行く氣持になつてゐたので、三部に亙る哲學の認識論を書くことに、決心した。僕はきつとこれによつて、カントの詭辯を木つ葉微塵に打ち碎くべき機會を得るだらう。けれども、僕はノートを出して、仕事に取りかゝらうとすると、鉛筆をもつてゐないことに氣がついた。僕は、それを質屋に置いて來てしまつたのだ。僕の鉛筆は、胴着のポケットに入つてゐたのだから。

まあ、どうして、一々僕のすることにはこんな邪魔がはひるのだらう。僕は幾度も呪ひの言葉を吐きながら、ベンチから立ち上つて、しばらくそこの小徑を往きつ戻りつしてゐるのだつた。あたりは非常に靜かであつた。遠くドローニンゲンス・リュストフス（遊覽地）のあたりには、二人の子守女が、乳母車を押してゐるだけで、その他には、何處を見ても人ひとりゐなかつた。僕はぶり〳〵して、狂人のや

うにペンチの前を往つたり來たりした。どうしてかう物事がすべて逆さになつて行くんだらう。三部に分れた哲學上の大論文が、ポケットに入れたまゝ置き忘れた、たつた三オウレの鉛筆一本で躓いてしまふなんて。だが、ピーレ街をも一度下つて行つて、僕の鉛筆を取戻して來たらどんなものだらう。公園が散歩に來る人達で、一ぱいになるまでには、まだ可なり澤山書けるだけの時間がある筈だ。哲學の認識に關するこの論文は、果してどれほどまで多數の人間の幸福に寄與するかは、未だ何人も斷定することを得ないではないか。僕は自分に向つて、それはきつと、多くの靑年にとつて、大きな助けになるだらうと言つた。しかし、よく考へると、僕はカントを攻擊したくなかつた。僕がそれを避けるのは何でもないのだ。問題が時間及び空間にふれたとき、僕はたゞ、ちよつと、人が氣付かぬほど筆端を反らしてしまへばいゝのだ。けれども、ルナン、老牧師ルナンのことなんかに對して僕は責任はもてない。……どんな事情があらうとも、兎に角幾つかの欄を埋められるだけの論文一篇を書かなければならない。何しろ、永らく間代が滯つてゐるから、朝など主婦さんと、階段で顏合せる時、いつまでもぢつと見てゐられると、その日一ん日惱まされるのだ。別に暗い心も持つてゐない、樂しい時ですらも、ひよつくりと、その顏が想ひ出されるのはたまらない。僕はどうしても、それをお終ひにしなけりやならない。だから僕は急いで公園を出て、鉛筆を取戻しに質屋へ出かけて行つた。

城山を下つてゐるとき、僕は二人の婦人に追ひついて、そのそばを通り過ぎる拍子に、そのうちの一人の袖に觸つた。見ると、それは丸つこい、ちつとばかり蒼白い顏をしてゐるのだつた。俄かにさつと赧らんだその婦人は、不思議なほど美しく見えた。なぜ赧くなつたかは知らない。多分、誰か通りがゝりの者が、何やら言葉をかけたのを聞いたのか、或はたゞ、自分の胸のうちでこつそりと考へたことがあつたのだらう。でなければ、僕がその腕にさはつたからなんだらう。高く、ふくらんだその胸は烈しく浪打つて、手はかたく日傘の柄を握り緊めた。どうしたと言ふんだらう。

僕は立ち止つて、再びその婦人をやり過ごした。しばらくの間、僕はそれ以上進めなかつたのだ。この場の有樣すべてがそれほど不思議だつた。鉛筆のことで我ながら腹が立つて、いら〳〵した氣分になつてゐるところへ、つい今しがた、空つぽな胃袋につめ込んだ食物のお蔭で、ひどく昂奮してゐるのだつた。すると、俄かに考へが變な方に向

いて行つた。その女の後を跟けて、何とかして驚かさうといふ、妙なことをやつてみたくて仕方がなくなつた。そこで、僕はも一度その婦人に追ひ付いて、通り越してから、突然、後ろを振り向いて、顏と顏とを向ひ合せて、ぢつと見てやつた。僕は立ち止つて、女の目のうちを覗き込んだ。と、すぐに僕は、自分でも今まで一度も聞いたことのない名——滑つこい、擽つたい響きのあるユラヤリィといふ名を思ひ付いた。で、その女が僕のすぐそばまで來たとき、僕は反り身になつて、さも眞實らしく言つた。

「お孃さん、あなたの本が落ちますよ。」

僕がさう言つたとき、どんなに僕の心臟が皷動したらう。聞き取れるほど、どき〳〵した。

「私の本ですつて？」と、女はその連れの婦人に訊いた。けれども立ち止りはしなかつた。

僕の惡戲な心はます〳〵增長した。僕はやつぱりその後から跟けて行つた。その時、僕は狂氣じみたことをしてゐるのだと、自覺したけれど、如何ともすることが出來なかつた。僕の取亂した狀態は僕と一緒になつて走つた、そして僕に最も狂的靈感を與へ、僕は又その命ずるがまゝに從つて動いた。どんなに、僕は自身に向つて、俺は狂氣じみたことをしてゐるぞ、と言つてみたところで、何とも仕方がなかつた。僕は婦人たちの後ろから、馬鹿氣きつた道化顏をしい〳〵、ついて行つた。僕は幾度も烈しく咳拂ひをしながら、婦人たちを追ひ越した。さうして、始終その二三歩先に立つて、極めてのろ〳〵歩くので、背中に婦人の目を感じて、その邪魔をしてゐることが恥かしくなり、覺えず首を縮めた。少しづゝ、僕はどこやら、遠い〳〵ところに來てゐるやうな、變な氣持になつた。首を縮めて、砂利の上を歩いてゐるのは、どうやら自分でないやうな、心許ない感じもした。

二三分のち、婦人たちはパシャ書店の前に來た。僕は先へ行つて最初の飾窓の前に立つて、その女が僕の傍を通り過ぎるとき、前へ進み出て、又先程の言葉を繰返した。

「お孃さん、あなたの本が落ちますよ。」

「いゝえ——でも、何の本でせう。」と、氣遣はしさうに女が言つた。「あの方の言つてらつしやる本て、何か、あなた分つて。」

そして、その女は立ち止つた。僕は女が間誤つくのを恐ろしく喜んだ。女の目に現はれた不審の色は、僕をすつかり嬉しがらせた。女の頭では、僕がちよつとした出鱈目を言つたのだと、悟ることが出來なかつたのだ。女は本どころか、紙一枚すら持つてゐなかつた。それにも拘らず、ポ

ケットの中を捜したり、幾度も自分の手をしらべたり、或は後ろを振向いて、目分の歩んで來た方を眺めたりして、その小さな、優しい腦漿を極度に絞つて、僕の言つてゐる本とは、どんなものかを知らうと努めるのだつた。その顏色は何遍も變つて　今こんな表情をしてゐるかと見れば、又すぐに別なものがあらはれ、その息遣ひは、はつきりと聞えるほどで、胸のあたりに並んだ釦すらも物怯ぢした一列の目のやうに、僕を瞶めてゐるらしく思はれた。

「あんな人の言ふことなんか氣にかけなくてもいゝわ。」と、連れの女は言ひながら、その手を引張つた。「あの人は醉つ拂つてゐるんだわ。あなた、あんなに醉つてるのが分らない？」

不思議なことには、この時、僕は何やら妙な靈感でも受けてゐるかのやうに、周圍に起ることは何一つとして見逃しはしなかつた。一疋の、大きな茶色の犬が、街筋を森の方へ突つ切つて、ティヴォリイへ下りて行つた。その犬は、頸にニッケルの首環をはめてゐた。街筋のずつと向うには、通に向いた二階の窓が一つ開いてゐて、一人の女中が、そこから體を出して、袖を捲くし上げて、硝子の外側を拭いてゐた。かういふ風に、何物も僕の注意から漏れなかつた。僕の頭は明るく、確かなものだつた。突然強い光りが僕の周圍を照らしたやうに、すべてのものが、きら〳〵と鮮かに僕の頭に流れ込んだ。僕の前に行く婦人達は二人とも帽子に青い鳥の羽をさし、頸には蘇格絹の組紐を卷いてゐた。僕はふと、姉妹だらうと思つた。

二人は角を曲つて、シスレル樂器店の前に立ち止つて、何やら話した。僕も立ち止つた。それから二人は元來た通を引返して、僕の傍を通り過ぎ、大學のところからまがつて、サンクト・オラーヴス廣場に行つた。僕は始終その尻に、出來るだけ喰つ付いて行つた。二人は一度振返つて、半ば氣味惡るさうな、半ば不思議さうな眼付を僕に向けたが、僕はその顏に怒つたやうなところも、困つたやうな風も見受けなかつた。僕の無作法を迷惑ともしてゐないらしいその辛抱强さに對しては、僕もすつかり恥かしくなつて來た。僕は目を伏せた。もうその婦人達の邪魔をしまい。只その寛容を眞に感謝する心持で、どこかに入つて見えなくなるまでは、目を放すまいと思つた。

二番地の大きな四階建の家の前で、女達はも一度後ろを振返つて、その中へ入つた。僕は噴水のそばの、街燈の柱に靠れて、二人の足音が階段を昇るのを聽いてゐた。足音は二階で消え失せた。僕は街燈をはなれて、家を見上げた。すると、妙なことが起つた。上の方で窓掛が高くあがつて窓が開くと、一人の女が頭を出して、訝しさうな目がぢつと僕を見つめた。

「ユラヤリィー」と、僕は小さな聲を出してしまつて、顏の火照るのを覺えた。何だつてあの女は、人の助けを呼ばないのだらう。なぜそこの花鉢を取つて、僕の頭の上に拋り付けないのだらう。でなけりや、何でもいゝ、他のものをもつて來て、僕を目蒐けて投げつけて、追つ拂はうとしないのだらう。僕たちは向ひ合つて立つたまゝ、動きもしないでゐた。それは一分間ばかり續いた。窓と街路との間には何等かの思ひが飛び交はすだけで、一言も口からは出なかつた。やがて女は身をかへしたので、ちよつと僕は體がひきつゝた。優しい衝動が僕の官能をそゝつた。僕は女の後ろ肩や、奥へ消えて行くその背を見た。窓から離れるそののろ〳〵した歩み振り、その肩をわざとらしく强く搖ぶつたところは、僕に向つて頷いてゐるしるしとも見えた。僕の血はその優しく、美しい挑拨を鋭敏に感じた。そして俄かに不思議なほど嬉しくなつた。で、僕は身をかへして街筋を下つて行つた。

僕は振返つて見る氣もしなかつたので、その女がも一度、窓際に戻つて來たかどうかを知らなかつた。が、しかし、後になつてその疑ひを繰返して見れば見るほど、いよ〳〵不安になつて、心が苛々して來るのだつた。多分、女はその間、其處に立つてゐて、僕の一擧一動を殘らず打戍つてゐたことだらう。そんなに後ろから檢められるといふことは、僕にとつては、どうも堪らないことだつた。だから僕は出來るだけ、しやんと身を伸ばして、前へ進んで行つた。けれども僕の足はひきつり出して、立派な足取りで歩むやうに見せようとすればするほど、却つてよろ〳〵として定まらなかつた。落着いて、平氣を裝ふ爲め、無意味に手を振り、通に唾を吐き、顏を上向きにして見たが、何の役にも立たなかつた。絶えず自分の背に、僕をつけ廻してゐる眼を感じて、體ぢうがぞく〳〵した。もう堪らなくなつたので、とう〳〵横町に逃げ込んで、そこから鉛筆を取戻しに、ビーレ街へ廻つて行つた。

僕はそれを取戻すのに、別段何の面倒も見なかつた。店の者は僕に胴着を持つて來て、ありつたけのポケットを殘らずお捜しなさいと言つた。僕は鉛筆の外に質札二枚をその中に見付け出して、それは自分のポケットに移し入れ、主人に向つて、深切にしてくれた禮を述べた。ところが、僕はます〳〵その人が好きになつたと同時に、俄かにその人の前で、自分を善い人間に思はせたいといふ氣が起つた。で僕は、戸口の方へ一足、歩き出してから、何か忘れ物をし

たふりして又後戻りした。僕はその人に説明してやる必要があると思つたので、向うの注意を惹くやうに、わざと鼻聲で唸つた。それから鉛筆をもつて、それを高く差し上げた。

「どんな鉛筆だつて、」と、僕は言つた。「その爲めわざ〳〵こんな遠くまで出かける氣には、僕、なれないんですが、この鉛筆だけは特別です。それにはそれだけの理由があるからです。つまらなくは見えても、この鉛筆は僕を世の中へ出してくれたのですからね。つまり、人生に於ける位置を僕に與へたのですねえ……」

僕はその外には何にも言はなかつた。主人は机の處へついと寄つて來た。

「なるほど、さうですかね。」と言つて、彼は訝しげに僕の顏を見た。

「この鉛筆で、」と、僕はそんなことに頓着なく、冷靜につづけた。「僕は哲學上の認識に關する三卷の論文を書いたのです。」

ところが、先方では、奇怪にもこの有名な話を、噂にも聞いたことがなかつたらしい。

彼は言ふのだつた——何だかそんな名や、そんな題を聞いたやうな氣がすると。

「さうでせうとも。」と、僕は言つた。「それこそ僕が書いたのです。」

そこで、結局主人も、僕がそんな小つぽけな鉛筆の屑を取戻しに、わざ〳〵歸つて來たことが不思議でないと、呑み込めるやうになつた。それは僕にとつては、大きな價値のあるもので、殆ど子供一人に匹敵するものであつたこと、その上に、僕が、彼の厚意に對して衷心から感謝してゐるといふこともよく分つたのだ。まつたく、僕はその恩を忘れまい、きつと、きつと、僕は確かにその恩を憶えてゐよう。男子の一言だ。僕はこのとほり、馬鹿ッ堅い人間であるし、また彼はほんとに感謝に價する人であるのだ。左樣なら。

僕は、さも、人を尊敬さるべき位置に引立てゝやれる有力な人物といつたやうな身振りで悠然として戸口に向つた。深切な質屋は、僕が其處を立去つて、も一度振返つて、左樣ならと言つたとき、二度まで頭を下げた。

階段で、僕は小さい鞄を提げた一人の女に出會つた。その女は、僕が處狹しと濶歩して來るので、小さくなつて傍へ身を寄せた。僕は不愍になつて、何か臭れてやるものはないかと、無意識にポケットの中を搜してみた。が何にも見付けなかつたので、悲觀して、俯向きながらその女のそばを通り過ぎた。少時してから、その女もやつぱり質屋の戸を叩いてゐるのを、僕は聞いた。その戸には鋼鐵の線が張つてあつて、人が叩訪したときには、すぐガチャ〳〵と鳴るので、僕はその音を聞き付けたのだつた。

太陽は中天に昇つて、時計は殆ど十二時であつた。市中は賑かになり始めた。お午の食事の時間は近付いて、挨拶を交はしたり、高い聲で笑つたりする人達が、カルル・ヨハンス街をぞろ〳〵と浪のやうに往來した。僕は肩を窄めて小さくなりながら、人に見付からぬやうにして、そつと、往來を見物してゐる二三人の知り合ひの前を通り過ぎた。僕は、宮城の丘の公園まで行つて、ひとり物思ひに耽つた。

僕が逢つた人達は、皆よくもあんなに輕やかに、又樂しさうに頭をふり立て、恰も舞踏室の中でも通るやうに、この世の中を渡つて行くのだらう。只一人たりとも、憂ひの色を帶びてゐる目は見付からなかつた。誰の肩にだつて、苦しい重荷を載せかけられたことはあるまい。恐らくは惱ましい思ひ、僅かばかりの祕やかな苦痛すらも、その樂しい胸のいづれにも宿つたことはあるまい。僕は若いまだ巢立ちをしたばかりの、こんな青年男女と肩を並べて歩いてゐるのに、もうとうの昔に、幸福なんてどんなものか、とんと忘れてしまつてゐた。そんなことを考へて、歩いてゐると、自分といふものが、不公平な待遇を受けてゐることを見出した。何だつて先月以來、僕はこんなひどい目にばつかり逢つてゐるのだらう。僕は、もう明るい氣分なんか藥にしたくも持合はしたことがなかつた。どつちを向いても癪に障ることだらけであつた。僕は自分ひとり、ぢつと落着いて、腰を下してゐることが出來なかつた。小さな、つまらぬ事件が、容赦なく僕の心象に喰ひ込んで、どうしても僕の力を浪費さしてしまふので、防ぎがつかなかつた。僕の傍を掠めて通つた犬、紳士の釦穴にさした黃色な薔薇のやうなものでさへ、僕を拘泥らはして、ひどい暇潰しをさせるのであつた。僕はどこかに病氣をもつてゐるのぢやなからうか。運命が僕に、その恐ろしい指をさしてゐるのではなからうか。けれども何だつて、僕だけにさしてゐるんだらう。でも、なぜ南亞米利加の人には、さゝないんだらう。僕は事の始終を熟々考へてみると、いよ〳〵譯が分らなくなつた。まるで僕は神樣の御機嫌の風向き次第、その御慈悲を試す試驗臺に供せられてゐるやうに思はれるのだつた。順序も何もあつたものでない。たゞ一足飛びに全世界を飛び越して、直ぐ僕にぶつゝかつて來るとは、神樣の遣り口は全く變である。僕の外、古本屋のパシヤだつて、

回漕店のヘンネケンだつてゐるんぢやないか。

僕は道すがら、そんなことばかり考へ耽つて、どうしても頭を他へ向けることが出來なかつた。皆の罪の爲めに、僕だけを苦しめる神の專横に對して最重大な抗議を見出した僕は、ベンチを見付けて、それに腰掛けてからも、やつぱりその問題を考へ込んでゐたので、他の事を思ふのを妨げられてしまつた。五月のあの日に、僕にけちがつき始めてからこつち、僕は自分の衰弱が少しづゝ加はつて行くのをはつきりと認めることが出來た。僕は自分の欲する方へ行くには、あんまり弱つてゐるやうだつた。害蟲が僕の内部に侵入して、穴を喰ひ開けてゐたのだ。神は僕を全然亡ぼしてしまふつもりだらうか。僕は立ち上つて、ベンチの前を往つたり來たりした。

僕はそのとき、體ぢうに最も烈しい苦惱を感じてゐた。兩腕が痛みさへして、殆どあたりまへに動かすことすら出來なかつた。それに先程の過食も手傳つて、ひどく氣分が惡かつた。僕は滿腹で、なほ昂奮しながら、顏も上げずに、ぶらり〳〵と、あつちへ往つたり、こつちへ來たりしてゐた。そこらを通つて行く人達は、閃光のやうに、僕の傍を過ぎた。しばらくすると、僕の腰かけてゐるベンチに、二人の紳士が腰を下した。紳士は葉卷をつけて、高い聲で、べら〳〵喋りたてた。僕は癪にさはつたから、詰つてやらうかと思つたが、身をかへして、公園のずつと奥へ行き、隅つこに新たなベンチを見つけて、腰を下した。

神に關する考へが、再び僕をとらへた。僕が職を求める度毎に、いつも邪魔ばかりして、ほんのその日一日の食を得ることすらも妨げてゐるのは、許して置けない不都合なことのやうに思はれた。或る時期の間、僕が飢餓に苛まれ通しでゐたときには、僕の腦味噌は、だら〳〵溶けて、頭の中から流れ出して、おかげで僕といふものは、空つぽになつたやうに感じたことがあつた。僕の頭は輕くなつて、途方もない遠方にふつ飛んでゐた。僕はもはや、肩の上に、頭が重く乘しかゝつてゐるやうな氣がしなかつた。又何でも物を見るときには、眼を大きく見開いてゐるやうな氣もした。

だからそのベンチに腰掛けて、そんなことを考へると、愈々益々、神のしつこいおせつかいが癪に觸つた。若し神が僕を貧乏にして、その行手に、障害に障害を積み重ね、僕を傍近く引寄せて改悛させるつもりならば、神は少し思ひ違ひをしてゐることを知らしてやる事も出來るのだ。僕は反抗心に燃えつゝ、殆ど泣かんばかりにして天を睨みつけ、心のうちで、後にも先にも、たつた一度、僕のこの考

へを神に言つてやつた。

幼い折に學んだ教への斷片が心の裡に浮んだ。聖書の言葉が僕の耳に來て、歌のやうに靜かに響いた。僕はそつと獨言を呟いて、嘲るやうに頭を一方に傾けた。何だつて僕はこの世に於ける僕の體と呼ばれるこの哀れな蛆蟲に、食はせ、飲ませ、又着せようと心配しなけりやならんのか。僕の天なる父は、天が雀に對する如く、僕に注意を拂つてはゐなかつたのか。神は僕の神經に指をさし入れ、まるで、出鱈目に、少しばかりその組織を掻き紊したやうだ。それから、神はその指を引っ込めた。見よ、その指についてゐる細い纖維と細い絲を。それこそ僕の神經の絲なんだ。だから神の指の刺つた後には、大きな穴が出來て、僕の胸には、神の指のとほつたなりに疵がついてゐる。けれども神はその指で僕に觸つたきりで、その後はかまはなかつた。一度も觸らうとはせず、又何の害をも加へないで、無事に去らしてくれた。穴のあいたまゝに、うつちやらかして——。要するに永久に主にまします神からは、僕に何の害も下らなかつたのである。

スツゥデンテ・ルーネンの森から、風傳ひに音樂が聞えて來た。してみると、もう二時を過ぎてゐるのだつた。何か書いて見ようと思つて、紙を取出したその拍子に、ポケットから床屋の回數券が落ちた。僕はそれをあけて、枚數を算へて見ると、まだ六枚ほど殘つてゐたので、覺えず「有難い！」と叫んだ。僕はまだこれから二三週間は、床屋へ行つて、綺麗になることが出來るんだ。

僕はまだ殘つてゐるこの小さな財産の爲めに、直ぐに機嫌を直した。僕は皺を丁寧に延ばして、その回數券をポケットに藏ひ込んだ。

けれども僕はやつぱり書くことが出來なかつた。二三行書くと、もう何にも考へが起らなくなつた。僕の考へは餘處へいつてしまつて、或るきまつた努力に集中することが出來なかつた。

あらゆるものが僕に影響して、氣を散らした。蠅や小さな蚊が紙の上にとまつて、僕を妨げた。僕はそれを除かうとして、息を吹きかけた——强く、强く吹きかけた。けれども駄目だつた。小さな蟲どもはのけ反り、體を重くして、その細い脚を踏ん張つて、懸命に爭つた。その場から退かなかつた。何かしらしつかりした足掛りを見付け、句讀點とか、紙面の凹凸とかに踵を當てゝ踏ん張り、或は自分たちの勝手に歩けるまでは、そこにぢつと靜かに止まつてゐるのだつた。

可なり長い間、この小さな蟲共に、僕はかゝづらはつて

ゐた。そして趺坐をかいて、呑氣にそれを眺めてゐた。突然、クラリオネットの音が二三度、森の方から響いて來て、僕の思想に新らしい衝動を與へた。でも、やつぱり論文は書けないので、すつかり氣をくさらして、紙をポケットに藏ひ込み、ベンチの上に仰向けにひつくりかへつた。さうした刹那、僕の頭は、どれほど美妙な思想でも、何の苦もなく考へることが出來るほど、明晰だつた。こんな曇梅に臥てゐながら、自分の胸から足にかけて目を滑らせると、僕は脈が搏つたんびに、足がひきつるやうに動くのに氣がついた。で、半ば身を起して、自分の足を眺めると、これまでに曾て感じたことのない狂氣じみた、變な氣持を經驗した。まるで、光りの驟雨が、神經を通つて行くやうな、美妙な、不思議な感じが、僕の神經を通つて行つた。靴に目をつけると、まるで舊い知己にでも會ふか、さもなければ、一度裂き取られて失くなつた體の一部分をまた取戻したやうでもあつた。それから靴が優しいさゞめきを、僕に向つてさゝやくのを聞きとつた。「弱蟲！」と、烈しく自分を叱つて、兩手を握り緊めて又、「弱蟲！」と繰返した。僕はこんな可笑しなことを感じる自分を嘲り笑つて、大眞面目になつた。僕は非常に嚴格に、又甚だ賢明な口をきいた。そして涙を滾すまいとして、堅く目をとぢた。僕は、未だ曾て自分の靴を見たことがなかつたものゝやうに、その外觀を研究し始めた。僕が足を動かしたときの樣子や、その形や、又その破れた革などを檢め、その皺や、白い縫目やが、それに表情を與へ、その面相をかたちづくつてゐることを見出した。僕自身の本質の幾分かゞ、この靴に乘り移つて、僕の『自我』に對する生靈のやうな動きを、心に起した。それは、僕自身の呼吸をする一部分のやうでもあつた。

僕は腰を下したまゝ、恐らくはまる一時間もこんな妄想に耽つてゐたらう。そこへ一人の小さな人が來て、僕のベンチの他の一端に腰掛けた。彼は腰を下すが早いか、さも歩いたのが辛かつたやうに、喘ぎ〳〵呼吸して、

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、いや本當だ。」

と言つた。

その聲が耳に入ると直ぐに、僕はまるで風がすうつと頭の中を吹き通つたやうに感じて、靴は靴として拋つとくことにした。そして僕が、今の今まで感じてゐた錯亂した精神狀態は、遠い〳〵昔のことのやうに思はれた。多分そんなことは一年或は二年も前に起つたといふ方がいゝかも知れない。おまけに、もう記憶から消え失せかけてゐるほどつまらない些細なことであつた。僕はその老人に目をつけ

だした。

この小さな男は一たい僕に何の關係があるんだらう。ありやしない、爪の垢ほどだつて。たゞ手に持つてる一枚の古新聞の廣告面を外の方に出して、中に何やら卷き込んでゐるつきりだ。僕は好奇心を起して、新聞から目を外らすことが出來なかつた。僕は、その新聞は、非常に珍らしい、世の中にたつた一つよりないものだらうといふ、狂氣染みた考へを起した。好奇心は愈々昂まつた。僕はベンチの前をあつちこつちと歩き始めた。恐らくそれは書類であらう。公文書——危險な證書——を盜んだものだらう。又それは祕密な條約、何かの陰謀だらうといふ考へが僕の頭にひらめいた。

その男は靜かに腰掛けて、何やら考へてゐた。なぜ此奴、他の人がするやうに、新聞を持つのに、題名のある方を外に向けてゐないんだらう。その陰謀といふのは、一體どんなものだらう。彼はその紙包を決して離さうとはしないやうに見えた。どんなことがあつても——恐らく、ポケットに入れて安心しようともしなからう。その紙包の中には、きつと何物かゞ潜んでゐることは、生命を賭けても斷言する。

僕は空を見上げて、一寸考へた。どうもその祕密の內容に立ち入ることが出來ないといふ事實だけが、僕の好奇心を唆り立てた。僕はその男に何かやつて、話の緒を見付けようと、ポケットを探つてみると、床屋の回數券に手がふれた。けれども、再び元へ藏ひ込んだ。と、俄かに僕はひどく圖々しくなつて、胸のあたりのポケットを叩いて、かう言つた——

「あなた、卷煙草を一本あげませうか。」

「いや有難う。」その男は煙草を喫まないのだつた。目を助けて置く爲めに(彼は盲目同樣だつた)煙草を止めなけりやならなかつたのだ。「併し、御厚意だけは大變有難いです。」

その男の目は、ずつと前からいけなくなつたんだらうか。そしたら、多分讀むことは出來ないのぢやあるまいか。一度だつて新聞を讀んだことがないんだらう。

一度もないんだ。すると、いよ〳〵もつて可哀さうだ。

その男は僕を見上げた。惡くなつた目は、硝子のやうな角膜をして、目玉は白くなつて、厭な氣持を起させた。

「あなたは此處らの人ぢやありませんね。」と、彼が言つた。

「えゝ、」——この男、自分がもつてゐる新聞の題名を讀むことが出來ないのだらうか。

「讀めませんか。」

「どうやらかうやら。」——だが、それでゐて、すぐに僕の

言葉を聞いて、餘處の者だと感づいたのだ。それはこの男に言はせると、僕の語調に、どこか違つたところがあつたからだ。それはほんとに些細なことなのだが、彼はよく聞き分けるほど善い耳をもつてゐた。夜になつて、みんなが寢靜まつたとき、彼は隣りの部屋にゐる人の呼吸の音を聞き取ることが出來る……「私、あなたにお尋ねしようと思つてゐたのは、何處にお住ひですかつてことでした。」

ふと、嘘が僕の頭の中に湧いた。僕はどうなるか、後のことも考へずに、うつかり嘘を吐いてしまつた。僕は答へた——

「サンクト・オラーヴス廣場二號です。」

そこには噴水があつて、瓦斯燈がついて、木が二三本立つてゐる。この男はそれを知つてゐた。

「何番にお住ひですか。」

僕はこれで一切きりをつけようと思つて立ち上つたが、やつぱり、しつこく新聞のことが氣になつて堪らない。どんな價を拂つてもこの祕密を明かにせずには置けない。

「若しあなたがその新聞を讀めないとすれば、なぜ……」

「二號だと仰しやつたやうですね。」と、その男は僕の不安にお構ひなく、續けた。「私は、二號にゐる人をみんな知つてたことがありました。お名前は何と仰しやいますか。」

僕は急拵への姓名を見付けて、此奴を追つ拂はうと思つたが、すぐうまい考へが浮んだので、この小うるさい亡者をへこまさうと、拋りつけるやうに、

「ホッポラティ」と言つた。

「ホッポラティ、成程。」と、その男は頷いたが、この難しい名の一綴りすらも間違はなかつた。

僕はびつくりして、その顏を見た。彼は大眞面目で言つて、何かぢつと考へてゐるやうな顏付をした。僕がこの出任せの途方もない名を口に出すが早いか、その男はもうちやんと呑み込んでしまつて、夙うから聞いて知つてゐるといつたやうな風をした。そのうちに彼はその紙包を、ベンチの上に置いた。すると、僕の好奇心は神經をびり〳〵さした。僕はその新聞に二三の脂で出來た汚點を見付け出した。

「旦那、あなたは舟乘りさんぢやありませんかね。」と、彼は言つたが、その聲には、別に皮肉を隱してゐるやうではなかつた。「わしは旦那が、舟乘りして いらしつたやうに憶えてゐますが。」

「舟乘りですつて。お言葉ですが、あなたの仰しやるのは兄貴のことでせう。兄貴は、ヨット・ア・ホッポラティと言つて、汽船問屋です。」

僕はこれで此奴も止すだらうと思つた。ところが、何でも此方の言ひなり次第に撥を合はして來る。

「なか〳〵腕きゝだつて評判ですが。」と、彼は釣り出すやうに言つた。

「勿論、なか〳〵の敏腕家です。」と、僕は答へた。「豪商です。あらゆる商賣をやつてゐます。支那の越橋、露西亞の鳥の羽、毛皮、木材、墨汁……」

「へゝ、なか〳〵おやりなんですね。」と、老人はひどく昂奮して、僕の話の腰を折つた。

話が面白くなつて來た。僕はつい調子に乘せられて、次から次へと嘘が頭に浮んで來た。僕は再び腰を下すと、もう新聞やら、珍らしい書類のことなんか忘れてしまひ、夢中になつて、相手の言葉を遮つた。このチビ魔の正直なところが、すつかり僕を向う見ずにしてのけた。僕は此奴を減茶苦茶に嘲して、煙に卷いてやらうと思つた。

彼はホッポラティが發明した、電氣仕掛の讃美歌の本を知つてゐたらうか。

「え。何ですつて、電氣……」

「電氣の文字で、暗い處でも見えるんです。すばらしい大仕掛けな事業です。幾百萬クローネルの資本を運轉して、活字を鑄造し、印刷所を經營して、定傭ひの職工がうよう〳〵集つて仕事をしてゐます。僕の聞くところでは、なんでも七百人からゐるさうです。」

「さうですとも、私もさう言つたぢやありませんか。」と、その男は靜かに言つた。それ以上は言はなかつた。彼は一言一句僕の言つたことを信じて、少しも不審がらなかつた。これには僕もいさゝか參つた。僕は彼が僕の出鱈目にすつかり面喰ふだらうと豫期してゐたのだ。

僕はなほ一つ二つ自棄糞の嘘を發明して、口から出任せに、それを拋り出してやつた。ホッポラティは九ヶ年間、波斯の大臣を勤めたのだと匂はしてやつた。

「貴方は、波斯の大臣がどんなものか想像がつかないでせう。」と僕は訊いてやつた。それは此處の王樣以上のものだつた。寧ろ回教國の王樣とも言ふべきものだつた。けれどもホッポラティは一切の仕事を見事にさばいて行つて、少しも行詰らなかつた。それから又、僕はその娘で、妖精のやうに、王女のやうに三百の女の奴隷に侍かれて、黃色な薔薇の蕚に坐つてゐるユラヤリィ姫のことを話した。その姫は僕が今までに見たうちで、最も美しい女だつた。あんな美しい女は僕の知るところでは、他に比べるものがない。この話が嘘なら、僕は立處に神罰を蒙つてもよいと誓ひもした。

「そんなに美しかつたんですか。」と、老人はぼんやりした顔で言ひながら、地面を眺めた。

「美しいのなんのつて。それはもう可愛らしい、まつたく罪なほど綺麗でした。眼は荒絹のやうで、腕は琥珀です。只一目ちらりと見られただけで、もう接吻でも受けたやうに、うつとりとなつてしまふ。又若しその女が僕を呼んだとしたら、葡萄酒の光りのやうにその聲は僕の胸を貫き通すでせう。」

その娘がなんでそんなに美しくないものか。君はそれぢや、その娘を集金人か、或は消防夫みたいなものと思つてゐたのか。いや、どうして、その娘は只もう、天國の美であつたのだ。君に言つて聞かすがね、その娘はまつたく神仙譚中のものだ。

「成程。」と、老人は言つて、すましてゐた。

その落着いた樣子が、僕の癪に觸つた。僕は自分の聲にのぼせ上がつて、すつかり眞面目になつて話した。盜み出した公文書、何處か外國との條約書といふことは、もう僕の考へからなくなつてゐた。小さな、平べつたい紙包は僕たち二人の間の椅子の上に載つてゐた。僕はもうそんなものを、かれこれと詮議立てして、中に何があるかを調べて見る氣がちつともなくなつてゐた。僕は今、自分の目先に、

不思議な情景を展開し行く僕自身の物語に、すつかり心を奪はれてゐた。血は頭に上つて、僕は腹の底から笑つた。

この時、老人は出掛けようとして、ベンチを立ち上がつたが、餘り唐突と思はれないやうに、

「そのホッポラティさんは、大した財產家でせうね。」と、訊いた。

何だつて、このどう盲目の、いやな老耄れは、いけづうづうしくも、僕が創作した珍らしい名前を、まるで市のどこの雜貨店にでも、ざらに見付かるものゝやうに拋り出しやがるんだらう。一字だつて間誤付きはしないし、又一纒りだつて忘れてゐないぢやないか。この名前は、此奴の頭ん中に喰ひ込んで、すぐさま、根を張つたのだ。僕はむつとした。この、どんなことをしても、へこませることの出來ない、又不審がらせることの出來ない人間に對する僕の反感が、胸のうちにむく〳〵と頭を擡げ始めた。

「僕はそんなことはちつとも知りません。」と、ぶつきら棒に答へた。「僕はまるつきりそんなことは知りません。だが、も一度だけ言はしてもらひませう。その人の名はヨーハン・アーレント・ホッポラティといふんです。その頭字から判斷するとさうなるんです。」

「ヨーハン・アーレント・ホッポラティ。」と、老人は繰返した

が、僕の語氣が烈しいのに、面喰つた樣子だつた。それつきりで口を噤んだ。

「あなたはまあ、その細君と逢つて御覽なさい！」と、僕は、强い調子で言つた。「太つた人で……いや、あなたは、その細君が特別太つてゐるとは思はないでせう。」

（成程、太つてゐるでせうねえ、そんな人の奥さんなら）だつて——

老人は此方が躍起となれば、一々やさしく、物靜かに答へて、僕の氣持を惡くし、立腹させることを懸念するらしく、言ひ淀むのだつた。

「えい、もう勝手にしろ。貴樣きつと、僕が此處に腰をかけて、出鱈目の嘘ばつかり言つて聞かせると思つてゐるんだらう。」と、僕はもう我を忘れて叫んだのだつた。「貴樣は、ホッポラティといふ名のついた人間がゐるつてことを信じないのだらう。僕はまだ、これほど老人で、つむじ曲りで、意地の惡い人間を見たことがない。一體、どんな惡魔が憑いてゐりや、貴樣のやうになるだらう。おまけに貴樣は僕を素寒貧だと思つてゐるんだらう、これが餘處行の晴衣で、すまし込んで腰掛けてはゐるが、その實ポケットに卷煙草の一ぱい入つた筥だつてありやしないなんて。僕は貴樣のやうな奴にはまだ出會つたことはない。それならはつきり言つちまうぞ。神も照覽ましませだ、僕は貴樣でも、又その他の者でも、決して容赦なんかはしないからな。よく覺悟してゐろよ。」

老人は立ち上がつた。開いた口もふさがらない風で、押し默つたまゝ立つて、僕の發作が終るまで聞いてゐたが、やがて慌しくその包みを背に投げかけて、歩き出した。殆んど走るやうに街路を向うへ、老人らしい小刻みの足取りで歩いて行つた。

僕は後ろに倚りかゝつて、だん〳〵遠くなつて、縮まつて行くその背を見てゐた。僕は何故そんなことを思つたのか分らないが、これまでに、あんな賤しい、いやな背を見たことがないやうな氣がした。だから、其奴が自分から行つてしまはないうちに、此方で叱り飛ばしてやつたことを後悔しなかつた。

日が暮れ出した。太陽は沈んだ。あたりの木々はざわついた。遠い、體操器械のあたりに群がつてゐた子守娘どもは、その乳母車を押して、家路をさして歸り始めた。僕は心が落着いて、上機嫌になつた。たつた今しがた經驗した奮激は少しづゝをさまつて、僕は、がつかりすると共に睡氣がさして來るのを覺えた。又、しこたま食つたパンも、格別さはりにはならなかつた。最上の機嫌でベンチに倚り

か〻つて、目を閉ぢると、ます〳〵眠氣を催して來るのであつた。で、こつくり〳〵と居睡りをしながら、殆んど全く、熟睡に陥らうとした時、公園の園丁が手を僕の肩にかけて搖り起した。

「もし〳〵、こんなところに腰掛けて、寢ちまつちゃいけませんよ。」と、彼は言つた。

「はい〳〵。」と言つて、僕はすぐに立ち上がつた。すると、忽ち自分の悲慘な狀態がパッと目の前に明かになつた。僕は何でもいゝから、見付けなけりやならなかつたのだ。職を見付けるなんてことは、もう駄目になつてゐた。持つて行つて、見せた推薦狀も、もう古くなつてゐた上に、あんまり名の知れない人が書いたんで、効能が薄かつたのだ。のみならず、この夏ぢうか〻つて、はね付けられ通しだつたのには、僕もすつかり閉口してゐたんだから。それに——、何と言つても間代は借越しになつてゐるので、僕はそつちのかたをつけなけりやならなかつた。その他のことは、當分、後廻しだ。

全く、いや〳〵ながら、僕は又もや紙と鉛筆とを取り上げた。そして紙の四隅に一つづゝ、機械的に千八百四十八年と書きつけた。あゝ、たつた一つでもいゝから、今、もし思想が、僕の頭に浮んで、口に言葉となつて出てくれたなら！　以前にだつて、全く、そんなことはあつたのだ。そんなことが實際あつて、僕は長い論文を、何の努力も用ゐないで、すら〳〵と書き上げることが出來て、大變幸運に惠まれた時もあるのだ。

僕はベンチに腰掛けて、幾十度となく、千八百四十八年と書きつけた。この數字を、いろ〳〵な風に、くしや〳〵に書きながら、何か考へが浮んで來るのを待つてゐた。散漫な思想の群が、僕の頭の中にひらめいた。日暮れの氣分が僕の氣を滅入らせて、妙に哀愁をそゝつた。もう秋が來てゐて、すべてのものが、既に深い睡に入り始めた。蠅や小さな蟲は一番に打擊を蒙つた。木の上や又地面にはざわざわがさ〳〵と落着きのない物音が聞えた。死ぬまいとして、爭つてゐる生命の音である。蜉や螽斯などのやうな蟲の生活は、なほしばらくの間は續いてゐる。その黄色な頭を芝生の中から突き出し、その足をあげ、長い觸角をふるつて前へ進んで行くと、俄かにがつくりと仆れ、腹を上向きにして、ひつくり返る。どの植物も、それ〴〵獨自の色を帶びて來る。初寒にほのかな息を吐いてゐる。切株は蒼白く日に向つて立ち、落葉は蠶が匐ひ廻るやうな音を立てて、地上をさら〳〵と走つてゐる。秋だ。季節は謝肉祭騷ぎの眞最中のやうだ。薔薇の葉はその血のやうな紅色の上

から、消耗性の奇怪な輝きを帶びて、燃えるやうになる。

僕は自身をこの昏睡に陥りかけた世界のたゞ中に、特に死にかゝつてゐる蟲のやうに感知した。僕は非常な恐れを抱いて、ベンチを立ち上り、烈しい足取りで、二三歩あるきかけた。

「いや、いけない。」と、僕は兩手を握り合せた。「こんなことは、もうお終ひにしなけりやいかん。」そこで僕は再び腰を下して、鉛筆を手に取上げ、眞面目に一篇の論文を書き上げようとした。人が鼻つ先に、未拂ひの勘定書をつきつけられてゐるときには、安閑と手を束ねてゐられるものではない。

徐々に、考へが纏りかけた。僕はそれに乘じて靜かに鉛筆を動かした。序章に當る一二頁はよく念を入れて書いた。それは何の首端にでも向くやうに、たとへば、旅行記にでも、又論文にでも、あとで僕が善いと思つたものゝ初めにくつゝけて出せるやうに書いた。何につけたところで、それは非常に立派なものであつた。で、僕は主題として取扱ふべき人なり物なりを捕へようと探したが、遂に一つも見出すことが出來なかつた。こんなに無益な努力をしてゐるうちに、僕の思想は又紊れて來た。僕は自分の腦が本當に狂つてしまひ、頭は洞になつて、空になつて、しまひには中味も何も無くなり、輕々と肩の上に乘つかつてゐるやうに感じた。僕はこの頭のがらんとした空虛を全體に感得した。僕は頭の頂邊から、足の爪先まで穴をあけられたやうに思つた。

「主よ、我が神よ、我が父よ。」と、苦しさに叫んだ。それ以上のことは言へないで、續けざまに、幾度も〳〵この叫びを繰返した。

風が木の葉を鳴らして、荒れ模樣になつた。僕はなほしばらく、ぼかんとして紙の面を瞶めたまゝ腰かけてゐたが、やがてそれを折り疊んで、そろ〳〵とポケットに押し込んだ。肌寒くなつて來たのに、僕はもう胴着をもつてゐなかつた。上衣を首の邊まで釦をかけ、手をポケットに突込んで、さて立ち上つて行つた。

今度だけは成功してくれ、たつた今度だけは。もう二度も宿の主婦は、眼付で、間代の支拂ひを請求したのだ。僕は下を向いて、そのそばを間誤〳〵しながら、こそ〳〵と逃げ出さなければならなかつた。僕はも一度あんなことをすることは出來ない。この次に、あんな眼付をされたら、部屋をすてゝ、潔く一身を處置しよう。兎に角、いつまでこんなことをしてはゐられない。

僕が公園の出口に來たとき、一度怒りつけて、逃げ出さ

してしまつた、背びくの老人に、またもやばつたりと出會つた。例の疑問の新聞を自分のそばのベンチの上に開いたまゝ置いてゐたが、それには、様々な食物が一ぱいに入つてゐた。老人は呑氣に腰を落着けて、むしや〳〵喰つてゐた。僕は最初、すぐに彼のところへ行つて、自分が先程したことを辯明して、免しを願ふつもりであつたが、彼が食事をしてゐるのを見ると、尻込みしてしまつた。鳥か獸の爪に似て、皺の寄つた指が、脂つこいバタ附パンに絡みついてゐるのが、いやらしくつて、嘔吐が出さうだつたので、何にも話しかけもせずに、そのまゝ彼の傍を通り過ぎた。彼は僕を見知つてゐなかつた。角のやうに汎ひのないその眼を僕の方へ向けはしたけれど、顏の筋一本動かしはしなかつた。

僕は、さつさと行つてしまつた。

例によつて、僕は行く手に見當る新聞掲示板の前に立ち止つて、適當な勤め口の廣告に目を通すのだつた。すると僥倖にも、僕がやつてみることの出來さうなものを一つ見付けた。グルウンランス街の某商人、毎晩二時間づゝ帳面附をする人を求む、給料は面談の上といふのであつた。僕はその商人の番地を書き留めて、心竊かに、この位置を給へと神に祈つた。仕事に對する報酬を他の者よりも幾分か安く要求しよう。五十オウレで澤山だ。まづ四十オウレか。それなら別に大した違ひもない。

家に歸つて見ると、卓子の上に、主婦からの書置が載つてゐた。それには、間代を前拂ひにしてくれるか、さもなければ、出來るだけはやく立退いて貰ひたいと書いてあつた。僕はそれを失敬なことだなんて思つてはならない。それは尤至極な要求であつたのだ。世にも深切なマダム・グンネルセンだ。

僕はグルウンランス街第三十一號の商人クリスチィに宛て應募狀を書いて封筒に入れ、四角のポストに投げ込んだ。それから自分の部屋へ上つて行つて、搖椅子にかけて考へ込んだ。兎角するうち闇はます〳〵濃くなつて、今は起きてゐるのが困難になつた。

* * *

翌朝、僕はばかに夙く目を覺した。目をあけたときは、まだ眞つ暗であつたが、間もなく階下で五時を打つのを聞いた。も一度寢ようと横になつたが、もう睡ることが出來ず、目はます〳〵冴えて、いろ〳〵様々なことが頭の中に浮んで來るばかりだつた。

ところが、突然、小話か小說に向くやうな、立派な文句を、ひよつくりと思ひ付いた。それはこれ迄に類のない程

美妙な言葉の掬出物であつた。僕は臥たまゝで、この言葉を口のなかで繰返して見ると、迚も素晴しいものだつた。それから又、少しづゝ、續きが考へつかれるので、俄かにぽつかり目をあけて、跳び起きるなり、寢床の後ろの卓子の上にある紙と鉛筆を取つた。僕はまるで、自分の脈管の一つが破裂したやうにも思つた。言葉は言葉に續いて、ひとりでに順序よく並び、それ〴〵の位置を形造つた。一つの場景は、他の場景につらなり、動作や臺詞は、僕の頭に湧き出で、奇怪な心地善さが、僕を捕へた。僕は魔に憑かれた者のやうに書いて書いて、書きまくつた。一行書けば又次の行と、一瞬も休みはしなかつた。思想は卒然として僕に臨み、且つ、絶え間なく流れ出すので、澤山書き漏らしたこともあつた。僕は全力を注いで働いたのだけれど、この思想の噴出を書き盡すほど、迅速にペンを動かすことは出來なかつたのだ。思想の洪水はなほ僕を襲うて歇まなかつた。僕は材料で一ぱいになつて、僕の書く言葉は一々天啓の如く口に顯示された。

この奇蹟的期間は、幸にもしばらくの間、續いて〳〵、終りさうもなかつた。僕は膝の上に書いた紙を十五頁から二十頁ぐらゐ載せてゐた。その時とう〳〵行き詰つて、鉛筆を擱いた。この紙がいくらかのお金になつて吳れたなら、僕も助かるわけだ。僕は寢床から跳び立つて、衣服を着た。あたりはいよ〳〵明るくなつた。戸のそばに貼つてある臺監察官の告示をどうやら讀むことが出來るやうになつたし、窓際によれば、必要の場合には、書き物をしても見える程度になつてゐた。だから僕はすぐ様、書き散らした原稿の淨書に取り掛つた。

不思議な光りと色の濃厚な蒸汽が、その幻想から立ち騰つた。僕は我ながらうまいことを書いたのに駭かされながら、次から次へと書き寫して行つた。そして獨言に、こんなにうまい文章はまだ讀んだことがないと呟くのだつた。僕は滿足に目が眩んだ。喜びにのぼせ上つた。僕は得意の絶頂にのぼつた。自分の原稿を手に載せて、目方をひいて見たら、大ざつぱな見積りで、差當り五クローネルがところは大丈夫あつた。僕は、こんな異色ある原稿をたゞでやつてしまふなんて考へは、ちつとも持つてゐなかつた。僕の知つてゐる限りは、こんな小說はざらにある種類のものではない。で、僕はひとりぎめに、その價を十クローネルとした。

部屋のうちは、ます〳〵明るくなつた。僕は目を戸に向けると、『門内右側、ヨンフルウ・アンデルセン屍衣お仕立所』といふ例の骸骨めいた文字を、別に困難しないで、

認めることが出來た。それから後、餘程經つて七時が鳴つた。

僕は起き上つて部屋の眞中に立ち止つた。マダム・グンネルセンの警告は、よく〳〵考へてみると、寧ろ時機を得てゐたことが分る。元來、この部屋は僕には向かないんだ。此處には窓に、簡單な綠色のカーテン一つすらかけてないし、又衣服を掛ける釘も、さうたんとは壁に打つてなかつた。向うの隅つこにある見窄らしい搖椅子は、畢竟、これでも搖椅子でございといふ洒落で、可笑しくもないのに、わけもなくお腹の皮を撚らせる代物だつた。大人が腰掛けるのには餘りに低過ぎるばかりでなく、幅が狹いので、嵌り込んだが最後、立ち上るのには、靴脫ぎ板をつかつて、體を引つこ拔かなければ間に合はないほどだつた。要するに、この部屋は精神的の仕事をするに向くやうに出來てゐなかつた。又僕も、これ以上、借りてゐる氣もしなかつたのだ。いや、どんなことがあつても、借りてゐたくなかつたのだ。僕はあんまり長いこと默つて辛抱して、この豚小屋に住まつてゐたのだ。

希望と滿足とにそゝのかされて、ポケットから始終出しては讀み、出しては讀みする、驚くべき原稿に、絕えず心を奪はれながらも、僕はいよ〳〵眞面目にすぐさま移轉を決行することにした。僕は包みを出した。それは赤い風呂敷に一二枚の襯衣と、パンを包んで持ち歸つた幾枚かの皺くちやの古新聞とが入つてゐた。僕は敷布をぐる〳〵卷きにして白い用箋の殘りをポケットに押し込んだ。それから、もう何にも取り殘したものはあるまいかと、念の爲め、隅つこを搔き搜して、何にもないことを確めると、窓際に行つて、外を眺めた。曇つて、濕つぽい朝だつた。鍛冶場の燒け跡には誰もゐなかつた。庭には濕氣を吸うた物干綱が壁から壁にぴんと張り渡されてゐた。それはいづれも僕が以前から知つてゐる光景であつた。そこで僕は窓際から引退り、敷布を腋にはさんで、證憲監察官の告示に恭しく頭を下げ、又ヨンフルウ・アンデルセンの屍衣の廣告にも敬禮して、戸を開けた。

ところが、僕は俄かに、主婦のことを考へ出した。僕は移轉することを知らして置かなけりやならん。そしたら、僕つて人間が、どれほど正直だか分るだらう。僕は又期限以上一兩日、その部屋を使はして貰つたお禮を一筆書き殘して置かう。

僕はもう救はれたから、こゝしばらくは大丈夫だといふ確信をもつてゐたので、そのうちに僕が此處へ來て、五クローネルだけ、主婦に渡さうといふ約束までしてしまつた。

僕は主婦が、どんな正直な人間をその屋根の下に置いてゐたかつてことを、いやといふほど知らしてやらうと思つたのだ。

僕は書置を机の上に殘して來た。

も一度、戸口に立ち止つて、後ろを振り返つた。浮び上つたといふこの輝かしい感じは、僕を恍惚とさせ、神に對して、又萬有に對して感謝の念を起さした。僕は寢床のわきに膝をついて、高い聲で、この朝、僕に對して大恩惠を垂れ給うたことを、神に感謝した。

僕はそれをちやんと知つてゐるのだ。僕が今しがた感じて、書き取つた靈感の煥發は、僕の心に臨んだ驚異すべき天來の奇蹟であつた、前日僕があげた苦惱の叫びに對する答へであつたことを知つた。

「神が爲し給うた！　神が爲し給うた。」

僕はかう叫んで、自分の言葉に感激しながら涙を流した。時々誰かゞ階段を上つて來るやうな氣がするので、耳を欹てた。

が結局、僕は立ち上つて行つた。音を立てないやうにして、階段を下り、首尾よく人に見つからずに門を出た。

街路は今朝降つた雨で光つてゐた。天は濕つぽく、低く市の上に垂れ罩め、どこにも日の光りは見られなかつた。

僕は考へた、今日はどんなことがあるだらうかと。僕は例によつて市廳の方へ行つた。時計は八時半であつた。なほ、一二時間、そこらをうろついてゐなければならなかつた。新聞社へ行つたところで十時前では駄目だ——多分十一時前でも。僕はそれまでの間方々を歩きまはつて、朝食の工面をしたがよい。僕は空き腹を抱へて、寢床に入るだらうなんて懸念は持つてゐなかつた。有難いことにはそんな時期は夙くに經過してゐた！　それは過去の經歷であつた、惡夢であつた。今からは運が向いて來る！

その間にも綠の敷布は僕の厄介物であつた。僕は衆人の眼の前で、こんな包みを提げてゐる姿をどうしても見られたくなかつた。そんなところを見たら、人は、僕を何だと思ふだらう！　途すがら僕はそれを藏つて置いて、後から取りに行かれるところはないかと考へた。そのとき僕はセムブに行つて、それを紙に包ませれば善いと思つた。見かけがよくなるばかりでなく、それを提げてゐてもちつとも恥かしくなくなるだらうと思ひついた。僕はその店に入つて、一人の雇人に僕の用を言ひつけた。

その男は先づ敷布を、次に僕の顏を見た。彼は輕蔑するやうに肩をすぼめて、その包みを受取つた。僕はぎよつとした。

「おい少し氣を付けてやつてくれ！」と、僕は叫んだ。「高價な硝子の器が二つ入つてゐるんだからね。包みはスミルナ行きだ。」

これはうまくいつた。素晴しくうまくいつた。その男は手を動かす度に、「御勘辨を願ひます、どんな大事なものが、敷布の中に入つてゐるか存じませんので。」と詫を言ひ〳〵した。彼が包裝を終つたので、僕は、前にもスミルナへ貴重品を送つたことがある者だといふやうなことを言つて、彼に手數をかけた禮を述べた。彼は僕の爲めに戸を開けてくれた。僕が出て行くと、彼はも一度頭を下げた。

僕は大市場の人込みの中をぶら〳〵と歩いて、わざと盆栽賣りの女の傍近くへ立ち止つた。霧の立つ朝の、血のやうに見えて濕つぽく黨る紅い薔薇は、すつかり僕の欲望をそゝつて、竊に一輪を盜んでやらうといふ罪な考を起さした。僕はたゞなるべく近くへ寄る爲めにその價を訊いたのだ。若し金が手にあれば、どうにかしてそれを買ふのだつたらう。僕の生活のうちで、あつちこつちから少しづつ節約して、それくらゐの金を得ることは立派に出來たのだから。

十時を打つたので、僕は新聞社へ行つた。所謂『鋏』といふ切抜係が或る古新聞を切り抜いてゐた、主筆はまだ出てゐなかつた。御用はといふので、僕はその大きな原稿を渡し、これは非常に大切なものだから、主筆が見えたら、ぢかに手渡しするように、念を押して、僕も亦後から返事を聞きに來る積りだと言ひ足した。

「よろしうございます！」と『鋏』君は言つて、再び新聞の切抜きを始めた。

彼はやゝ冷淡にそれを受取つたと、僕は思つた。然しこちらも何も言はずに、只少し無頓着な風に頷いて、立ち去つた。

さあ、又今度は少し暇になつた。若し天氣でもよくなつたら！　本當にみじめな天氣であつた、風がなくて、さつぱりとしたところがない。婦人達は用心の爲めに雨傘を、紳士は雨着を用意してゐるのだが、何とまあ可笑しく、又みじめなことだ。

僕はも一度市場へ行つて、青物や薔薇を見た。そのとき僕は自分の肩に置かれた手を感じて、振り向いた。『お孃さん』がお早うと、挨拶した。

「お早う？」と、僕は彼の用事が何であるかを直ぐに言はせるやうに疑ひを含めて答へた。僕は『お孃さん』を餘り好まないのだ。

彼は不審さうにじろ〳〵と、僕が胸に抱へてゐる大きな、

出來たての包みを見て、訊いた——

「君がそこに持つてゐるのは何だね？」

「僕はセムブに行つて衣服のきれ地を買つて來たのだ。」と、僕は無雜作な調子で答へた。「僕ももうこんな風姿をして歩かうとは思はないよ。僕は自分の服裝に、あんまりかまはなさ過ぎたからね。」

彼は僕を見て、それは意外だと、びつくりしたふうだつた。

「ときに、御機嫌はどうだね？」

「至極結構。」

「ぢや、今何かしておいでかね。」

「何かして……」と、僕は答へたが、ちよつと面喰つた。

「僕はクリスチィ商會の簿記係をしてゐるよ。」

「あゝさう！」と言つて、彼は少し後退りした。「それはどうも羨ましいことだね！　お金が儲かるんならちつとお裾分けしたらどんなものだ！　左樣なら！」

彼は少し行つてから、又歸つて來た。彼は杖で、僕の包みを指して言つた——

「君に、その衣服の仕立屋を御紹介しよう。僕のイサクセンよりも上手な仕立屋なんか滅多にありやしないよ。あれを君のところへ上げようか。」

何だつて此奴、僕の仕事に嘴を入れやがるんだらう。どんな仕立屋を僕が雇はうと、此奴の知つたことか。僕は立腹した。このお洒落な、おつちよこちよいのにやけ男の妻は僕に癇癪を起さした。此奴が僕に借りてゐる十クローネルのことをもち出して、可なり小つぴどくたしなめてやつた。けれども彼が答へをする前に、僕は彼に催促したことを早くも悔いて、恥かしくなり、彼と顏を合はせることが出來なくなつた。丁度そのとき一人の婦人が通りかゝつたので、その婦人を通す爲め、僕は急いで後退りして、それをよい機會に、自分の行く道を歩いた。

待つてる間に僕は何をしたら宜いだらうか。空つぽな懷中でカッフェに入るわけにもいかない。又今頃訪ねるやうな知り合もなかつた。僕は行きなりぱつたりに市をうろついた。しばらく市場とグレンセン通りとの間をうろついて、新たに掲示された『夕刊』を讀み、カルル・ヨハンス街へ下り、そこから曲つてヴォール・フレールセルス墓地に行き、教會堂の傍の丘の上に、靜かな場所を見出した。

僕はそこで、閑靜な、濕つた空氣の中に瞑想しながら、うと〳〵しかけては、寒さに身顫ひするのだつた。かうしてゐるうち、時が經つていつた。

あの小說はまつたく、靈感の藝術から生れ出た小さな傑

作であつたらうか。可なり悪いところがないとは言へまい。よく〳〵考へて見ると、それが採用されるといふことは確かでなかつた。否、決して採用なんかされやしない、馬鹿野郎め！　あれはまつたく平凡なものだ。きつとまるでなつてゐないだらう。もう疾くの昔に、紙屑籠に抛り込まれてゐないと、どうして斷言されようか……僕の信念は動搖した。僕は跳び上つて、驀地に墓地を駈け出した。

アケルス街に下つて、或る店の窓から覗き込むと、時計はまだ十二時を少し過ぎたばかりだつた。それでなほさら僕はがつかりしてしまつた。僕は、きつともうお午はとつくに過ぎたことゝ信じてゐたのだ。四時前には主筆を訪ねて行つても駄目なのだから。僕の小説の運命は、僕の頭を暗い豫感で一杯にした。それを考へれば考へる程、夢と熟とに滿ちた腦髓で、殆ど眠つてゐながら、だしぬけに、立派なものが書けたなんて思つたのが、甚だ馬鹿げたことだつた。勿論僕は自ら欺いて、何でもないことを朝中悦んでゐたのだつた！　勿論！……

僕は大急ぎでウルレヴォルス道路を上り、サンクト・ハンスハウゲンを過ぎ、廣い野に出、サーゲネの狹い、奇怪な小徑に入り、中庭や畑を越え、とう〳〵その果ては見極めのつかない田舍道へ出てしまつた。

此處で僕は立ち止つて、引返さうとした。餘り歩いたので體中が暖かになつた。そしてすつかり悄氣込んで、のろのろした足取で引き返した。僕は二つの乾草を積んだ荷車に逢つた。馭者達は乾草の上に臥て、歌を唄つてゐた。二人とも帽子をかぶらず、二人とも圓い、心配のなささうな顏をしてゐた。僕が行きちがつた時に、彼等は何とか話しかけるだらう、僕のことを何とか言つて、揶揄つて來るだらうと思つた。果して、僕が彼等に近寄つたとき、そのうちの一人は僕を呼びかけて、小脇にかゝへてゐるものは何かと訊いた。

「敷布だ。」と僕が答へた。

「一體今何時かね。」と、彼が訊いた。

「僕もはつきり分らないが、多分三時頃だらう。」

すると二人の者は笑つて、通り過ぎた。その途端僕はふと一方の耳に綱の當つたことを感じた。僕の帽子はけし飛んだ。馭者達は、僕に揶揄はないでは通つて行かれなかつたのだ。僕は多少狼狽して、帽子を濤際から拾ひ上げて、歩みを續けた。サンクト・ハンスハウゲンで僕は一人の男に會つた。彼は僕に、もう四時を過ぎたと教へてくれた。

四時過ぎ！　時計はもう四時を過ぎてゐた！　僕は市へ出て、新聞社へ急いだ。主筆はもうとうの昔に出勤して、

編輯局を退出したかも知れない！　僕は歩いたり、跳ねたり、交る〳〵やつて行つた。荷車につき當つたり、躓いたりしながら、どん〳〵と通行人を追ひ越した。馬とも競走した。時間に間に合ふようにと、狂人のやうに走つた。僕は門内に突入した。四跳びで階段を上つて、戸を叩いた。

何の答へもない。

退けちまつた、退けちまつた、と僕は思つた。戸を押してみた。戸は開くのだつた。僕はも一度叩いて、中に入つた。

主筆はその机に倚り、顏を窓に向け、ペンを手にもつて何やら書かうとしてゐるところだつた。僕がはあ〳〵と喘ぎながら呼びかけると、主筆は半分此方へ體を捻ぢ向け、僕を見て、頭を振つた——

「暇がないので、まだお作は拜見しません。」

僕は兎も角、主筆がまだあれを棄てゝゐなかつたことを悦んで、かう言つた——

「いゝえ、それはもう、よく存じてをります。別に急ぎはしません。二三日中には、それとも……？」

「えゝ拜見します。お宅も分つてゐますから。」

僕はもうお宅がないことを言ふのを忘れてゐた。

面會は終つた。僕は頭を下げて、戻つて行つた。

希望は再び僕の心に蘇つた。まだ何物をも失つてゐない、それどころか、その爲めになほ一切を得ることも出來るのだつた。

僕の頭は、天上に於ける大會議を描いてゐた。その會議では既にあの小話で立派に十クローネルを僕に贈るべしといふことに、決定してるんだと、想像し出したのだ……

それにしても、たゞ一夜を明かす場所を僕がもつてゐたならば！　何處に身を置いたら一番良からうか、と考へ込んで、道の眞中に立ちつくしてゐたほど、この問題に強くとらはれてゐた。僕は何處に自分がゐるのかを忘れて、恰も海の中の澪標のやうに立つてゐた。浪が荒れて、そのまはりに騷ぎ立つてゐる。新聞賣りの小僧は僕に『ヴイキンゲン』を突きつけて言つた——

「これは本當に面白いですぜ、本當に！」

僕は、吃驚して目をあげた——再びセムブの前に來てゐるのだつた。僕は急いで店の方に後ろを向け、包みを前の方へ持ち直した。それから急いでキルケ街を下り、誰か窓から見てゐやしないかと氣遣ひながら、大急ぎに急いだ。インゲブレット館や劇場のそばを過ぎ、切符賣場の角を曲つて、海岸通りを要塞近くの方へ行つた。そこで再び僕は自身をベンチの上に見出した。そして改めて考へた。

僕は一體何處に今夜宿をとつたものだらうか。僕が這ひ込んで、明日の朝まで身を庇ふ穴が見つかるであらうか。僕の傲岸な心は元の部屋に戻ることを許さなかつた。一たん出した自分の言葉に悖ることは思ひも及ばないことだ。だから僕はこの考へを鼻の先であしらつた。そして心のうちで、小さな赤い搖椅子のことを思つて、えらさうに微笑した。聯想によつて、僕は突然、曾てヘグデハウゲンで住つてゐたことのある廣い剛室づきの部屋のうちに僕自身を見出した。僕は卓子の上に、濃厚な味のバタ付パンを盛つた皿が載せてあるのを見た。ところで、光景は一變して、やがてそれは牛肉となつた、おいしさうな牛肉、雪白のナプキン、大きな塊のパン、銀の肉叉となつた。そして戸が開いて、主婦が入つて來て、お茶のお代りは如何と薦めた……

幻と夢！

僕は自身に言つた、若し僕が今食物を得たならば、僕の頭は又狂ひ出し、以前と同じやうに熱が頭に出て、いろんな狂人のやうな考へと闘はねばならなくなると。僕の體具合は食事をするに堪へない——食べられるやうに出來てゐなかつた。これは僕の風變りな點、即ち、特異質であつた。

多分夕方にでもなれば、宿のことはいゝ考へが出るかも知れない。それは決して急ぐことではない。一番へまな場合でも、森の中にだつて寢る所を見つけることも出來る。郊外の何處でも適宜に選擇される、又氣候もまだ凍える程に寒くはない。

海は眠むたさうに靜かにうねつた。汽船と無細工な舳のひしやげた荷足船が、その青い水面に畝を立てゝ、右に左に筋を曳いて往つたり來たりしてゐる。又一方、煙は煙突から羽毛のやうに舞ひ昇り、機械のピストンの音は濕つた空氣にこもつて仄かに響いた。日も照らず、風もなく、僕の後ろの樹は濕り、僕が腰掛けたベンチもびしよ〳〵して冷たかつた。

時は經つた。僕は居睡りを始めた。疲れて、背中から少し寒氣がぞく〳〵して來た。暫くすると、ひとりでに眼瞼が垂れ下つてくるのを覺えた。で、僕はその下るがまゝに任した……

眼を醒ましたときには、あたりはもう暗かつた。僕は間誤ついて、寒さに顫へながら、包みを取り上げて歩み出した。暖を取る爲めに、だん〳〵足を早目にして腕をばたばたと打つ付け、もう殆ど無感覺になつた脚をさすりながら、消防署のところまで來た。時計は九時であつた。僕は永い間眠つたのだ。

だがまあ僕は一體どうすればいゝのだ。何處かへ落着かなけりやならんのだが……僕はそこに立ち止まつて消防署を見上げた。そしてその部屋の一つに、消防手が後ろを見せたとき、うまく廊下へでも潜り込んで、ちよつと一服することは出來まいかと考へた。僕は階段を上つた、そしてその人に話しかけようと思ふと、彼はその斧を捧げて敬禮し、僕が言ひ出すのを待つてゐた。此方へ刃を向けて振り上げた斧に、僕はぎよつとして、覺えずぶる〳〵と顫へた。僕はこんな物凄い武器をもつた人が恐くなつて、後退りし、何も言はないで、たゞ段々その人から遠のいて行つた。斧の光りを見ないように、手を額にあてたが、その恰好はまるで何か忘れたものを考へてゐるやうであつた。そしてこそ〳〵と逃げ出した。再び外に出たとき、僕は大きな危險から遁れ出たやうに、ほつと安心の息を吐いた。

僕は急いで立ち去つた。

寒さと飢ゑとに愈々堪へ難くなつて、僕はカルル・ヨハンス街の方へ行つた。僕は高い聲で呪ひをはじめた。人が聞いてゐるのもかまはなかつた。議事堂の傍まで來ると、丁度最初の茂みのところで、僕はふと知り合ひの青年畫家で、ティヴォリイで横つ面を撲られようとするのを救つてやつた緣故から、その後一度訪ねたことのある者を想ひ出した。

僕は指を鳴らして、トルデンショルド街を下り、C. Zacharias Bartel の名刺を貼つた戸口を見出して、そこを叩いた。

彼は自ら出て來た。麥酒と煙草の臭ひがしたので、厭な氣持がした。

「今晩は！」と、僕は言つた。

「今晩は！　君ですか？　何だつてまあこんなに遲く來たのですか。ランプの光りぢや、あの畫のほんとに善いところは分らないのです。僕は、矢張りあの積藁を描いてゐるんですが、一二ヶ所修正しました。晝間御覽なさい。今は駄目です。」

「それでも、今ちよつと見せ給へ！」と僕は言つた。しかし彼がどの畫のことを言つてゐるのか、想ひ出せなかつた。

「とても駄目です！」と、彼が答へた。「何もかもすつかり黄色に見えます！　それに又差支へもあります。」彼は顔をさし寄せて小聲で囁いた。「今夜婦人が來てゐます。ですから、そんなことはして居れません！」

「あゝ、さうか、それぢや言ふまい。」

僕は引き退つて、左樣ならを言つて、立ち去つた。

今は林の中に行つて寢場所を見つけるより外には、もうどうにも仕方がなくなつた。たゞ地面がそんなに濕つてゐ

なかつたら！

僕は敷布を撫でつゝ、愈々露宿ときめると、だん〳〵心が落着いてきた。市中に宿所を見つけようと永い間あせつた爲めに、全身ぐた〳〵に疲れて、まつたくうんざりしてゐたのだつたが、運を天にまかせて、これからは靜かに休まれると安心して、頭に何の思ひもなく街路をぶら〳〵と歩いて行くやうになつてから、僕の心は愉快になつた。大學のそばを通つて、時計が十時を過ぎてゐるのを見た。そこから僕は路を上の方へとつた。ヘグデハウゲンの或る處で、飾窓に何やら食物の陳列してある食料品屋の前に立つた。そこには一疋の猫が圓いフランス・パンの傍に眠つてゐて、その後ろには、脂肪を盛つた大皿一つと燕麥粉の入つた澤山の硝子罎とがあつた。僕は暫くそこに立つてそんな食料品を眺めてゐたが、勿論買ふべき金の持合せがないので、それに後ろを向けて又惨い歩みを續けた。僕は非常にそろ〳〵と歩いて、マヨールスツウエン（市長邸）を通り過ぎ、なほそれよりもずつと先へ、しばらく行くと、遂にボークスタートの森に辿り着いた。

此處で僕は路から外れて、一休みした。それから都合のいゝ場所を搜し出すと、柴や枯草を蒐めて、いくらか乾いた小さな丘の上に寢床を拵へ始めた。包みを解いて、敷布を延べた。僕は永く歩き廻つて、疲れ切つてゐるので、直ぐ床に就いたが、ちやんと寢つくまでは幾度となく寢返りを打つた。僕の耳はいくらか痛かつた。それは例の乾草車に乘つた奴に打たれてから、少し膨れ上つてゐたのだ。で、その方を下にすることが出來なかつたから、靴を脱いで、それを廣い包み紙で覆うて、頭の下に置いた。

闇はあたりを罩めて、すべてが鳴りを靜めた。けれどもたゞ空には永遠の歌が囁いた。風だ。決して歇むことのない、遠い、かすかな呟きだ。僕は、その果てしのない、心地よい囁きが、僕を惑はす程永い間耳を傾けてゐた。それはまさしく僕の頭上を旋廻する世界、歌を唄ふ星の交響樂であるといふやうな考へを起すまで……

「しつかりしろ、馬鹿め！」と言つて、僕は自分を叱りつけ、から〳〵と、高く笑つた。「梟が鳴いてゐるんだ、此處こそあの鳥には、約束の國カアナン（夢想の地）ぢやないか。」

そこで僕は起き上つて又坐り直して、靴を穿き、闇の裡を歩きまはつたが、結局又横になつて、腹の立つのや恐さを忍びながら、夜明頃にやつと、暫く眠りに落ちた。

* * * *

僕が目を醒ました時はもう晝であつた。どうやら正午に

近いといふ氣がした。僕は靴を穿き、敷布をたゝんで、市へ歸つて行つた。今日も亦、日の光りはちつとも見えなかつた、そして僕は犬のやうに寒さに顫へた。僕の脚は死んでゐた。僕の眼は晝の光りに堪へ兼ねるやうに、涙を出し始めた。

三時であつた。飢ゑはそろ〳〵頭を擡げ出した。僕はぶつ仆れさうな氣持で、ひよろ〳〵と歩きながら、時々そつとあたりを見廻した。蒸汽賄所（簡易食堂）に行つて、獻立を讀み、それに書いてある牛肉や豚肉は僕の口には合はないといつたやうに、肩をすぼめて、輕蔑の意を示した。そこから僕は停車場へ行つた。

俄かに例の變な頭の混亂が起つた。僕はそれに氣を止めずに、ずん〳〵遠くへ行つた。けれども頭は惡くなる一方で、とう〳〵或る階段の處へ腰を掛けなければならなくなつた。僕の心全體は、恰もその內部の何かゞ脱け落ちたかのやうな、又は帷帳或は布などのやうに、頭腦は眞つ二つに裂けたやうな變化を起した。僕は腰を下し、一二度息をついたが、自分で自分に驚いてゐた。但し、僕は自覺を失つてはゐなかつた。なぜなれば、僕は昨日から少し耳の痛いことを、明瞭に意識してゐたし、又知人が通りかゝると、直ぐにそれと氣づいて立ち上り、その人を呼びかけたりしたのだから。

今迄もあつた澤山の苦痛の上に、又更に附け足されたこの新たな苦痛の感じは、一體どんな性質のものだつたらうか。それは濕つぽい地面に露宿した結果であつたのか、それとも僕がまだ朝食を食はないからのことか。全體眞面目に考へてみると、こんな生き方をするのは、つまらぬ、無意味なことである。キリストの神聖な苦痛にかけて言ふ、僕がなぜかゝる稀有な迫害を受けるのか、さつぱり譯が分らないと。すると、ふと僕は、なあに、俺が惡者になつてこの敷布を『叔父さん』の店へもつて行けばいゝぢやないかと思ふのだつた。そしたら一クローネだけは借りられて、三度の適當な食事をすることが出來るから、何か外に收入を見つけるまでは支へていけるのだつた。卽ちハンス・パウリに一杯食はしてやるのだ。僕はすぐ質屋の方に向つて出かけた。けれども入口で立ち止まつて、決心がつき兼ねたやうに頭を振つて、身をかへした。

店を遠のくにつれて、僕の悦びは增していつた、といふのは、僕がこの小さな誘惑に打克つたからである。自分は確かに正直であるといふ確信が、僕の頭に起つた。自分は君子である、破船の漂ふ汚穢な浮世の海のたゞ中に、我こそは眞白き燈臺である、といふ矜らしい氣持が、僕の心を滿たし

た。一皿の食を得んが爲めに他人のものを質に入れ、飲み食ひして罪に落ち、悪者呼はりされて、自分の良心の前に目を伏せる――そんなことは、斷じて、斷じて出來るものか。僕はそんなことを、一度だつて眞面目に考へはしなかつたのだ。そんなことは、一度も思ひつかなかつたのだ。散漫で、取り止めのない一時の出來心には責任がない。まして、恐ろしい頭痛に惱んでゐながら、他人の敷布を持ち歩いた爲め、殆ど死なうとしてゐる時のことだもの、猶更のことである。

時節が來たなら、どうにか助かる道があるにちがひはない！　さういへば、僕が履歴を送つたグルウンランス街の商人もあるぢやないか。あれから毎日、朝早くも晩遲くも催促に出かけたことなんかないぢやないか。僕は自分から出かけて行つて、返事を訊くべき筈だつたのだ。それは全然無益な試みでもあるまい。僕にも今度は、運が向いてくるかも知れない。幸運といふものは妙に突然開けるものである。そこで僕はグルウンランス街へ向つた。

僕の頭に起つた先刻の昂奮は僕をやゝ弱らした。僕は極端にのろ〳〵と歩きながら、商人のところへ行つてから、何と言つたものだらうかと考へた。彼は或は善い人かも知れない。機嫌がよかつたら、或は、僕から求めないでも、前借として、快く一クローネを出してくれないものでもない。こんな人間は時折、實際非常に意外な考へを出すものだから。

僕は或る家の門口を入つて、唾でズボンの膝頭を濕めし、少し體裁を繕つて、暗い片隅の箱の後ろに敷布の包みを隱し、通を越して、その小さな店に入つた。

一人の男が立つてゐて、古新聞で袋を貼つてゐた。

「御主人のクリスチィさんにお目にかゝりたいのですが。」と、僕は言つた。

「クリスチィは私です。」と、その男が言つた。

「おやさうですか！」私の名はこれ〳〵で、應募の申込みをして置きましたが、どうなつたか分りませんので、訊きに上つたのです。

彼は僕の名を二三度繰り返して、笑ひ出した。

「まあ御覽なさい、これを！」と言つて、彼はポケットから僕の手紙を取り出し、「貴方、どうぞこの日附を御覽なすつて下さい。お手紙の日附は千八百四十八年となつてをります。」と言つて、彼は大口開いて笑つた。

「それはどうも、飛んだ間違ひでした。」僕は悄氣込んで言つた。不注意だ、頭がどうかしてゐたのだ。仕方がない、僕も諦めた。

「私の方ぢや數字を少しも間違はない人が要るのです。」と、彼は言つた。「私も殘念に思ひますよ。御筆蹟もはつきりしてゐますし、お手紙も結構だとは思つてをりますが……」

僕は暫く待つた。これつきりで、後の言葉がないものとは思へなかつたから……でも、彼は再び袋張りにかゝつた。

「まつたくそれはいけませんな。」と、僕は言つた。「ひどくいけませんな。けれども、勿論二度とやるやうな事はありませんし、このちよつとした誤りで、一般の簿記に私が向かないとは言はれないでせう。」

「えゝ、私はそんなことは申しません。」と、その人が言つた。「ですけれども、そんなわけで、私も他の人を使ふ氣になつたのです。」

「ではもう空席はないのですか。」と、僕が訊いた。

「えゝ。」

「あゝ、それぢやもう仕方がない！」

「えゝ。お氣の毒ですけれど……」

「左樣なら。」と、僕が言つた。

僕はかん〳〵火のやうに、いきりたつた。僕は包みを門の隅から取つて、齒を喰ひしばり、歩道を行く平和な人達に突き當り、押しのけたりしながら、しかも御免なさいとも言はなかつた。一人の紳士が立ち止まつてやゝ鋭く僕の亂暴を詰つた時、僕は振り返つて、彼の耳に、何か譯の分らぬことを叫び、その鼻の下に拳骨をつきつけて、再び歩み去つた。自分でもどうすることも出來ない無茶な憤りが、僕をとらへてゐたのであつた。彼は巡査を呼んだ。僕はちよつと巡査に揶揄ふ事は、この上ない結構な事だと思つた。で巡査が僕に追ひ付くように、態と歩度をゆるめた。けれども巡査は來なかつた。人が衷心から熱烈に求めて、而もうまく成功しないといふことについては、そこに何か特別の理由があるのだらうか。なぜ僕は千八百四十八年と書いたか。こんな呪はれた日附が僕に何の關係があるか。今僕は、飢じい目をして漂浪し、僕の五臟六腑がまるで蟲のやうに腹の中をのたくつてゐるのに、一日かゝつても飯にありつく運がないのだ。そして時が進むにつれて、僕は愈々精神的にも肉體的にも空虛になつた。僕は日を追うて次第に零落して、立派な行ひが出來なくなつた。僕は恥づるところなく自己を欺いた。家賃を拂ふといつて貧乏な人を欺いた。それでゐて全然後悔もせず、良心の咎めも受けないで、他人の敷布をどうかしようといふ、最も汚ない考へとなほ鬪つてゐた。僕の内心には汚點が、黑い黴菌が出來てだん〳〵擴がつて行つた。天には神が在し、僕の上に活眼

を開いて、僕の零落がすべての藝術の法則に從つて、平均にそろ〳〵と、調子よく、行はれていくやうに監視してゐるのだつた。けれども地獄の底では悪魔がぢり〳〵しながら、僕が大きな罪、赦され難い罪を犯して、正義の神が、僕を地獄に突き墮し給ふのがこんなに永引くのを待ちあぐねてゐるのだつた……

僕は足を早めて、いよ〳〵滅茶苦茶に歩いたが、突然左へまがると、美しく飾つた、明るい門口に來た。僕はぷんぷん怒つてゐた。僕は立ち止らなかつた、一秒も停止しなかつた。けれども門の拵へ方の違つてゐることには直ぐ氣がついた。戸口に附いてゐる細かな附屬物や、裝飾や、狀石など皆明かに僕の眼に入つた。僕は階段を昇り、二階に行つて烈しくベルを鳴らした。なぜ僕は二階までしか行かなかつたのだらうか。又なぜ、玄關の階段からは一番遠くにあるこのベルの紐を曳いたのだらうか。

黑い緣のついた灰色の衣服を着た若い婦人が出て來て、戸を開けた。僕を見て、ちよつと驚いた樣子だつたが、やがて頭を左右に振つて、言つた——

「いけないわ、今日は何もないんですから。」

そして彼女は、戸を閉めさうな樣子を見せた。

どうして僕はこの婦人に對して口を噤んでゐられよう。

向うでは僕を乞食とより外思はなかつたではないか。僕は冷靜になつて、心が落着いて來た。僕は帽子を脫いで、恭しく頭を下げた。そして婦人の言つたことが聞えなかつたやうに、特に丁寧に言つた——

「お孃さん、あんなにひどくベルを鳴らして濟みません。どうぞお免し下さい、私勝手が分りませんものですから。——自分が乘る車の後押しが一人要ると廣告なすつた方が、此處にいらつしやいませうか。」

彼女はしばらく、この證めいた出鱈目を、立つて考へてゐた。心では僕を何者だらうと疑ひを抱いてゐるらしかつた。

「いゝえ、」と、やつとのことで、彼女が言つた。「いゝえ、此處にはそんな病人はをりません。」

「おいでになりませんか。お年をめしした方です。一日二時間押して、一時間四十オウレだと申しますが？」

「いゝえ。」

「さうですか、ではどうも失禮致しました。」と、僕は言つた。「では多分階下でございませう。自分の知り合ひの者を、若しやお勸め申すことが出來るかと思ひましたんで。私はウェーデル・ヤルルスベールイ（諸國に於ける最後の貴族の姓）と申します。」

僕は、もう一度頭を下げて、後へ退つた。若い婦人は火

のやうに顏を赧らめ、もぢ〳〵して、どうすることも出來ないで、たゞ立つたまゝ、僕が階段を下りるのを見送つてゐた。

僕の心持はもとの冷靜にかへつて、頭は明るくなつた。今日は何も遣るものがないといふ婦人の言葉は、冷たい水を頭からぶつかけられたやうな働きを僕に及ぼした。人が心の裡で僕に指をさして、竊かに『あそこに乞食が行く、あいつは裏口からお餘りを貰つて食べる乞食の一人だ！』と言つてゐると思ひつく程、頭がはつきりして來た。

ムウレル街で、僕は或る料理店の前に立ち止つて、中でステーキにしてゐる肉の新鮮な香りを嗅いだ。僕は、すんでのことに、手を扉の把手にかけて、用もないのにふらふらと中へ入らうとしたが、はつとして、その場を立ち去つた。

僕は大市場に行つて、ちよつと靜かに休む場所を搜したが、ベンチは皆塞がつてゐたので、徒らに教會のまはりをぐる〳〵とまはつて、身の置き處をさがした。

「當り前だ！」と、僕はふさぎ込みながら獨言を言つた。「當り前だ！　當り前だ！」

そして再び歩き始めた。僕は市場の隅にある噴水に行つて、水を一口飲んで又歩き出した。足を曳きずりながら、店毎に、その窓の前に永く立ち止つたり、僕の前を通り過ぎる車に、一々眼をつけたりしてゐた。僕は頭に灼きつけるやうな熱をおぼえた。何やら變なものが、僕の蟀谷をぴく〳〵動かした。飲んだ水はひどく僕の胸を惡くした、僕は通路のあつちこつちの隅に、少しづゝ吐いて歩いた。こんな風にして丁度クリスト教會の墓地に來たので、肱を膝につき、手で頭を押へて、腰を下した。かうして縮こまつた姿勢をとつてゐると、胸の中の小さな患ひを最早感じなくなつた。

一人の石工が僕のそばに、大きな花崗岩の上に腹甫ひになつて、碑文を刻んでゐた。彼は靑い眼鏡をかけてゐた。彼はふと僕に、もう殆ど僕が忘れてしまつてゐた知人、銀行にゐた人で、この前オブランスケ・カッフェで偶然行き會つた人を、想ひ起さした。

若し僕が恥を忍んで、彼に向つて訴へたならば——彼に今、僕は所持金が手薄になつてゐる、暮しに困つてゐる——と本當のことを言つたならば！　僕は彼に床屋の回數券を買つて貰へるのだ……畜生め、何處へ失せやがつた、床屋の回數券は！　一クローネ分の切符だぞ！　この阿呆め。僕は尊い寶を搜したが、ちよつと見つからないので、地團駄ふんで、冷汗を流しながら探した。とう〳〵他の紙——

白いのもあり、書き散らしのもあるが、いづれも價のない――と一緒に胸のポケットの底にそれを發見した。僕はこの六枚の切符を初めから、又終りから、幾度となく數へてみた。僕はそれには大して用がなかつた、でも、僕がもう髪を刈らないといふ事は、氣紛れ、ふとした出來心だつたらう。僕は半クローネで助かるのだつた、コングスベールイ（銀鑛山の名）の光つた半クローネの銀貨で！　銀行は六時に閉られる、僕は七時か八時には、オブランスケ・カッフェの外でその人に會ふことが出來るだらう。

僕は腰かけて、永いことこんな考へに耽つて喜んでゐた。時は經つた。周圍の樫の樹は烈しい風にざわめき、日は傾いた。銀行に出てゐる若い紳士に、たつた六枚の床屋の回數券をもつて行つたゞけでは、少し不足ではないか。彼はそのポケットに、まだ手のつかない二クローネルもする立派な床屋の回數券をもつてゐないものでもない。僕のよりももつと美しい、清潔な回數券をもつてゐないとは誰が言へよう。僕はポケットにある樣々の物に觸れてみた。添へてやるやうなものはないかと。が、何も發見しなかつた。若しや僕の襟飾を進呈することにしたらどんなものか。上衣の釦をすつかりかけたら、襟飾なんか無くても濟みはしまいか。どうせ胴着をもう有たないのだから、さうしなければならないのだ。僕は胸を半分敞うてゐた大きな襟飾を解いて、よく皺を伸ばし、床屋の回數券を添へて白い紙に包んだ。それから教會のそばを去つて、オブランスケに下りて行つた。

市廳の時計は七時であつた。僕はカッフェの附近をうろついた。鐵柵に沿うて往つたり來たりしながら、目を鋭くして戸口を出入りする人を見張つた。とう〳〵八時頃、威勢のいゝ瀟洒な若紳士が山手の方から來て、カッフェの戸口に向つて行つた。その姿を見ると僕の心臟は胸の裡で、小鳥のやうに羽搏きした。僕は言葉もかけずに、いきなり飛びかゝつて行つた。

「半クローネ、どうぞ。」と、僕は言つてしまふと、大膽になつた。「これです――これを抵當にして……」僕は小さな包みを彼の手に渡した。

「僕は金を持つてゐません」と、彼が言つた。「いやまつたく持つてゐません。」と、彼は僕の眼の前に錢入れをつき出した。「僕は昨夜家を出たつきりで、一文なしです。御覽の通り持つてゐません。」

「えゝ、えゝ、それはもう僕もお察ししてゐます。」と、僕は答へて、彼の言葉を信じた。そんな小さなことで彼が嘘を吐く理由がなかつた。のみならず彼がそのポケットを捜し

て、何も見つけなかつた時、その碧い眼は聊か曇つたやうに見えた。僕は後へ退つた。

「御免なさい！」と、僕は言つた。「いやなに、今ほんのちよつと差支へたもんですから。」

僕が少し行つてから、彼は僕が包みを忘れたと言つて呼びかけた。

「取つて置いて下さい、取つて置いて下さい！」と、僕が答へた。「それは貴方に差しあげたものです、ほんのちよつとした、つまらないものです――でも、この地上で僕がもつてゐる殆ど一切のものです。」

僕は自分の言葉に打たれた。その言葉は薄暗い夕方に、ひどく悲慘に聞えたので、覺えず涙をこぼした……

風は新たに吹き募つて、雪は天空を飛んだ。暗くなるにつれて、愈々寒くなつた。僕は泣きながら街を下りて行つた。いよ〳〵ます〳〵自分をあはれと思つて、絶えず一つ二つの言葉――止んだかと思へば又涙を誘うてやまぬ叫びを繰返した。

「あゝ〳〵つらい、ほんとにつらい！」

一時間經つたが、その時間が又ひどくゆつくりしてゐたので、うんざりしてしまつた。僕はしばらくトルヴ街の、或る家の階段のところに腰掛けてゐた。が、誰か來かゝると、戸口に潜り込むが、又ぼんやり立つて、燈火のついた店家を覗き込んだりしてゐるのだつた。家の中では、金や貨物の受渡しをしてゐた。とう〳〵僕は教會堂と、市場との間にある板塀の後ろに、適當な場所を見つけた。

どうしても今晩はもう林に行くことは出來ない。どうとも、成るがまゝに任せる外はない。僕には歩く力がなくなつてゐた上に、道は馬鹿に遠かつた。僕は今宵一夜を出來るだけ上手に、今居るところで過さう。餘り寒くなつたら、教會の邊を少し歩き廻らう。僕はもうそんなことに屈託しやしない。そこで僕は後ろに寄り掛つて、うと〳〵と眠つた。

周圍の喧しさは歇んだ。店は閉められた。通行人の足音はだん〳〵稀になり、窓は皆暗くなつた……

眼を開けると、僕の前に立つてゐる一つの影があつた。光つた金釦は、それが巡査であることを僕に推測させた。が、その顔は見えなかつた。

「今晩は。」と、彼が言つた。

「今晩は。」と、僕は答へたが、何だか恐くなつた。僕はうろたへながら立ち上つた。巡査はしばらくもじ〳〵しながら立つてゐた。

「貴方は何處にお住ひですか。」

僕は口癖になつてゐるので深くも考へずに、元の住所ー僕が出てしまつた屋根裏の番地を言つた。

彼はまだ少時默つて立つてゐた。

「僕が何か惡いことでもしたといふんですか。」と、訊いた。

「いゝえ、決してそんなことはありません。」と、彼は答へた。「けれども貴方は、もうお宅へお歸りなさるがよろしいですよ。此處に寢てゐちや寒いですから。」

「まつたく寒いです、それは僕も知つてゐます。」

そこで僕は『左樣なら』を言つて、本能的に、元の住居へ行くべき途を辿つた。只用心して、音がしないやうにさへすれば、そつとその家へ入ることが出來るのだ。階段はみんなで八つあつたが、只その一番上の二つだけが、踏むとギイと鳴るのだから。

僕は下の入口で靴を脫いで、階段を上つて行つた。あたりは森としてゐた。二階では時計がかち〳〵と鈍い音を立てゝをり、子供がちよつと泣いたのが聞えた。それつきりで、後は何も聞えなかつた。僕は自分の部屋の戸口を見つけ出して、いつも馴れてゐるので、鍵もつかはないで少し持ち上げ氣味に戸を開けて、部屋に入り、又そつと戸を閉めた。

すべての物が僕が出た時のまゝであつた。窓掛は開けてあり、寢床は空つぽだつた。卓子の上に僕は一枚の紙を見付けた。それは多分、僕が主婦に宛てた書置であらう。彼女は僕が行つてしまつた後、一度もこの部屋へ來ないのだらう。僕は手さぐりにその白いところをさぐつた。するとそれは意外にも手紙であつた。手紙？　僕はそれを窓に持つて行つて、闇のうちに、この物凄い筆蹟を出來るだけよく檢めて見た。そして、とう〳〵その字のなかに僕自身の名を發見した。

「あゝ。」と、僕は思つた。「主婦の返事だ。若しか僕が又歸つて來やしないかと、部屋に入るのを斷つてゐるのだ！」

そつと、まつたくそつと僕は部屋を出た、一方の手に靴、も一方の手に手紙をもち、小脇に敷布をはさんで、出て行つた。僕は立ち上がつて、齒を喰ひしばりながら、かたびしと鳴るすべての階段を首尾よく降りて、又もや下の戸口に立つた。

僕は再び靴を穿き、長いことかゝつて紐を結び、結び終つてからも尙ちよつと腰を下して、手紙をもつたまゝぼんやりと自分の前を眺めてゐた。

それから立ち上がつて行つた。

瓦斯燈の光りが街路にちら〳〵してゐた。僕は光りの下

に行つて、敷布の包みを街燈の柱に凭せかけて、極めてそろ〳〵と手紙を開けた。

それは光りの流れのやうに僕の胸を貫いて通つた。そして僕は、自分の口が小さな音を出したのを聞いた。それは言葉をなさぬ喜びの音であつた。手紙は主筆からのものであつた。僕の小話が採用されたのだ。載ることがきまつたのだ！

「少し添削した……一二の誤りを正した……才筆である……明日載せる……十クローネル。」

僕は笑つた、涙を流した、跳ねた、街路を駈け廻つた、立ち止まつた、跪いて、天を仰ぎ、高く、嚴かに譯の分らないことを誓つた。そのうちに時が經つた。

明るい朝になるまで、夜通し、僕は悅びに夢中になつて、街路をうろつき、繰返し〳〵言つた——

「才筆である、又小さな傑作である、天才的作品である。それで十クローネル！」

二

二週間後、僕は或る夕方外出した。

僕は再び墓地に腰を下して、新聞社に送る原稿を書いてゐた。それを書きあげるうちに十時が鳴つて、あたりは暗くなり、門の閉るときが來た。僕は飢じくなつて來た、無暗と飢じくなつて來た。なほ惡いことに十クローネルの金は、あんまり早くなくなつてゐた。僕が食物を口にしないことは、これで二日、殆ど三日である。僕は弱りきつて、鉛筆の運びもたど〳〵しかつた。僕はポケットに一本の壞れたナイフと、鍵の環とをもつてゐるきりで、一オウレの持合せもなかつた。

墓地の門が閉れば、僕は家へ歸らなければならない。けれども、眞暗で、からつぽな僕の部屋に對する本能的な恐怖から——僕が現在どうやら住つてゐることを許されてゐたブリキ工場の跡に行くのが恐さに、僕は益々ふら〳〵しながら、無茶苦茶にロードスツェン街（市役所通り）を駈けぬけ、海岸に出て、鐵道棧橋のところで腰を落着けた。

ちよつとの間は心配も頭になかつた。僕は自分の雜澁も忘れて、薄闇のうちに、穩かに、美しい海の景色を眺めて、ゆつたりした氣持になつてゐた。

以前からの癖で、僕は先刻書いてゐた文章を讀み返して樂しまうと思つた。惱んでゐる僕の頭には、これが又、今まで書いたうちで一番佳い作であるやうに思はれたのだつた。僕はポケットから原稿を出して、目のそばに近く持つて來て、一頁から他の頁へと眼をとほした。が、しまひには疲

れて、それを再びポケットに藏ひこんだ。

何もかも森としてゐた。海は黑い眞珠貝のやうな色をしてをり、小さな鳥があつちこつちへ、僕の身のまはりを音もなく飛び交はしてゐた。向うの方に、一人の巡査が見廻つてゐる外には誰もゐないで、港はひつそりとしてゐた。

僕はもう一度持物の勘定をして見た——壞れた一本のナイフと鍵の環だけで、一オウレもない。突然僕は、ポケットに手を突き込んで、又原稿紙を引張り出した。それは機械的動作、無意識的神經の痙攣であつた。僕はそのうちの何も書いてない一枚を取つて——どんな考へであつたか知らないが——中に何か一ぱいに入つてゐるらしく見えるやうに紙包みを拵へ、それを遠く鋪石の上に拋つた。紙包みは風でなほ少し先の方へ飛ばされたが、やがてそこに止まつた。

この時分から、飢ゑが僕を襲つて來た。僕は腰掛けたまま、丁度びか〳〵光つた銀貨ではち切れさうに膨らんでゐるやうなその白い紙包を見て、自分でも、その中に實際何物かゞ入つてゐると信じようとした。僕は口に出して、さあ、あの金額を言ひ當てゝ御覽！と、僕自身に向つて言つた——若し正しく言ひ當てたならば、それは僕の物になるのだつた！　僕はその中に小さな、可愛らしい十オウレの山と、その上に、緣にぎざ〳〵の一ぱいついた見事なクローネ金貨が入つてゐるのを——錢の一ぱい入つた紙包み——を想像したのだ！　僕は眼を圓くしてそれを眺め、おい盜みに行つちやどうだい、と心のうちで言つてゐた。

すると僕は、そこにゐる巡査が咳をするのを聞くといふ段取りだつた——どうして咳をすることなんかを僕は考へついたのだらうか。僕はベンチから立ち上つて巡査に聞えるようにわざと二三度咳拂ひをする。巡査め紙包みを見つけたら、きつと飛びついて行くに違ひない。

僕は再び腰を下して、この下らない思ひつきを悅んで、夢中で手を拍ち、大きな聲をして、嘲り笑つた。

あん畜生め、ぎやふんとまゐるだらう！　そんなさもしい眞似をして、それで地獄の一番熱い沼や恐ろしい苛責の中に墜ち込んで行かなかつたら、お目にはかゝらないや。

僕は飢ゑにすつかり醉つぱらつてゐた。飢ゑて僕はふらふらになつてゐた。

一二分經つと巡査は鋪石にその劍をがちやつかし、四方に眼をくばりながらやつて來る。しばらく歩いてゐる。彼の目の前は眞晴な夜である。彼は紙包みを見つけない——その近くに寄つて來るまでは。彼は立ち止まつて、それを見る。紙包みは白く、如何にも中味のあるものらしく棄てられたところに轉がつてゐる。多少の金は入つてゐたらう。銀貨が少し入つてゐるのぢやあるまいか……

ところで彼はそれを取り上げる。ふむ、輕いな、ばかに輕い。多分、高價な鳥の羽か、帽子の飾り……そこで彼奴が、その大きな手で、用心しながらそれを開けて、中を見る。

僕は笑つた、笑つた、膝を打つて狂人のやうに笑つた。けれども、聲は一つも喉から出なかつた。僕の笑ひは靜かで、熱病的で、涙を含んでゐた……

そこで鋪石が再び鳴つて、巡査は棧橋を渡つて行く。僕は涙を溜めて、吃逆しながらせい〳〵息して、熱に浮かされたやうに、我を忘れて喜んだ。僕は高い聲で獨言を始めた。自分にその紙包みのことを話して聞かした。巡査の身振を眞似て空虛な自分の手のうちを檢め、幾度も〳〵、繰り返して言つた——ほら巡査め咳したぞ。拋りなげて、咳をしやがつた。拋りなげて咳をしやがつた！

僕はこの文句に新しい、辛辣な言葉を添へた。又全體の文句を訂正して、お終ひをかう鋭く尖らした——彼奴一度咳をしやがつた、コッホ、コッホつて！

僕はこの文句をいろ〳〵に變へることに夢中になつてゐた。そしてそれにも飽きて、もう愉快でなくなつた時は、夜が更けてゐた。眠たい安靜が僕を征服した。心地よい疲勞が僕を襲つた。僕はそれに抵抗しなかつた。

闇はやゝ濃くなり、眞珠色の海には少し風が出て來た。檣を天に突立てゝゐる船は、來たら一呑みと僕を待ち受ける無言の怪物のやうに、その黑い船體を現はしてゐた。僕は最早何の苦痛をも感じなかつた。僕の飢ゑはその鋭鋒を鈍らした。その代りに僕は周圍の何物からも觸られず、又誰からも見てゐられない嬉しさに、空虛な心地よさを感じた。僕は、足をベンチの上にあげ、後ろに倚りかゝつて、この孤獨な幸福を念入りによく味つた。僕の心には一點の雲も、不愉快な感じもなかつた。僕に考へられるだけの範圍内では、仕遂げずにゐる望みも慾も持つてゐなかつた。僕は目をあけたまゝ、放心狀態になつて臥そべつてゐた。僕はうつとりと、魂を宙に浮かしてゐた。

その間、僕を妨げる物音は一つも聞えなかつた。柔かな闇はあらゆるものを僕の眼から隱し、理想的休息の裡に僕を葬つた——たゞ耳の中には靜寂な物音が、單調に響いただけである。向うの黑い怪物は、夜が來たら僕を誘つて、遠く、海の上の人住まぬ國につれ出すだらう。また彼等は、僕をユラヤリィ王女のお城につれて行くだらう。そこには想像もつかぬ美しさ、とても人間世界には見られぬ美

しいものが僕を待つてゐるだらう。また王女自らは、すべてのものがアメチスト寶石で出來てゐる、光りかゞやく大廣間の、黄色な薔薇の玉座に着いて、僕が入つて行くと、手をこちらへ差伸ばし、僕が近寄ると、目禮して歡迎の言葉をかける。そこで僕が、跪くと、王女は言ふ――「ようこそ參られた、騎士殿、妾と妾の國とは、御身のお出を悦びます！　妾は御身を待つて二十の夏を過し、明るき夜な〳〵常に御身の名を呼び、御身が悲しめるときには、妾は涙を流し、御身が眠れるときには、妾は快き夢を贈りました。」――そして美しい王女は僕の手をとつて、長い廊下をつれて行くと、そこには高位高官の人々が居列んで、萬歳を叫ぶ、又目の醒めるやうな明るい立派な庭園を通れば、そこには三百の優しい少女達が遊び戯れ、笑ひさゞめき、更に別な廣間に入れば、そこはすべての物がエメラルドで出來て、輝き渡つてゐる。日はきら〳〵と照り、廊下や通路には、いみじき音樂の合奏が聞え、得ならぬ香りが僕の鼻を撲つのである。僕は王女の手をとると、自分の血に、魔法にかゝつたやうな、放恣な歡びの情が沁みわたる心地がする。僕が自分の腕を彼女の腰にまきつけると、彼女は囁く〳〵、此處ではいけませぬ、もつと先へ參りませうと、で、我々二人は、何もかも紅寶石づくめの紅い部屋に入る。

そこで泡立ち溢れる美しさのうちに僕は沈んでしまふ。そのとき僕は、身に王女の腕がまきつくのを感ずる。彼女の呼吸は僕の顔にかゝる、彼女は囁く――「ようこそいらせられた、妾の愛人！　接吻して下さりませ！　もつともつと」――

僕は腰掛から眠の前に星の光りを見る、そして僕の幻想は光りの颶風に吹き去られる……

僕は眠りに落ちた儘そこに臥て、やがて巡査から起されたのだ。僕は殘酷にも、悲慘な現實の生活に呼び戻された。僕の最初の感覺は、自分が露天に吹晒しになつて、呆やりしてゐたことであつた。が、間もなくそれは烈しい失望に變つて行つた。まだ生きてゐるといふ悲しみの爲め、僕は殆ど泣き出すところであつた。僕が眠つてゐる間に雨が降つたので、僕の着物はぐつしより濡れて、手足はしめり、たまらなく寒かつた。

闇は一層濃くなつて、僕の前にゐる巡査の顏容を見分けることがやつとだつた。

「さあ、」と、彼が言つた。「お立ちなさい！」

僕は直ぐに立ち上つた。若し彼がも一度臥ろと言ひつけたなら、僕はその言ふなりにしたであらう。僕はすつかり悄氣てしまつて全く力が脫け、おまけに次の瞬間には再び

飢ゑを感じ始めた。

「ちよつと待て、馬鹿。」と、巡査は僕の後ろから叫んだ。「帽子を置いていつちやいかん。うん、よし行け〳〵。」

「私も矢張り何やら――何やら忘れたやうな氣がしました。」と、僕は、吃りながら氣のない返事をした。「有難う、左樣なら。」

僕はよろめきながら行つた。

若し少しでも食べるパンを持つてゐたなら！　歩きながら食べられる程、小さな、良い、黑パンがあつたなら！

欲しいと思ふ珍らしい黑パンのことを僕ははつきり想像した。僕は烈しく飢ゑを感じた。死んでしまひたくなつて、感傷的に泣いた。僕の難澁はいつを限りと果てもなかつた。僕は突然通路に立ち止まつて、地團駄を踏みながら、聲高に罵つた。

「彼奴、僕を何と呼んだか？　馬鹿だつて？　僕を馬鹿と呼びやがつたな！　うぬ、どうするか思ひ知らしてやるぞ、巡査め！」

そこで僕は身をかへして、走せ戻つた。僕は怒りに燃えた。躓いて倒れたけれど、なに糞ッと跳ね起きて、再び走つた。停車場前にくると、すつかり疲れて、最早、埃橋まで戻つて行かれさうもないと思つた。のみならず僕の怒りも、走つてゐるうちに納つてゐた。遂に僕は立ち止まつて、息を吐いた。

「巡査の言葉は、まつたく何の氣もなしに言つたことであらうか？――さうだ、けれども僕は一から十まで我慢がならない。――まつたく！」と、僕は叫んだ。「だが、彼奴はそれ以上の善い言葉を知らなかつたのだ！」かう解釋してみると、僕の心は治まつた。僕は、彼がそれ以上の言葉を知らなかつたのだと繰り返した。そして再び引き返して行つた。

「おや〳〵。貴樣何を考へ出したんだい！」と、僕は怒りを含んで自分に言つた。「こんなに泥だらけの街路を、こんな暗い晩に、狂人のやうに走るなんて！」

飢ゑが堪へ難く腹を嚙んで、僕をぢつとして居らせなかつた。少しでも腹を滿たさうと思つて、僕は幾度となく唾を呑んだ。それで幾分か足しになるやうに思はれた。かうなるまでには、既に幾週間も、僕はほんの少しゝか食物に有り付けなかつたので、近頃はすつかり力が拔けてしまつてゐた。運よく何かの手段で、五クローネルを得たときでも、新たな飢餓時代が僕の上に來るまでに、十分恢復がつけられるほど永く、その金が殘つてゐるやうなことはなかつた。僕の背や肩が一番可哀さうな目に遇つてゐた。胸の

うちの小さな苦しみなら、うんと強く咳をするとか、或はうんと身を屈めて行けば、それで一時は、押へることも出來た。けれども背中と肩とには、手のつけやうがなかつた。一體僕の前途が少しも明るくなりさうもないのは、どうしたことだらう！　他の人のやうに、僕には恐らく生きて行く權利がないのだらうか。たとへば古本屋のパシヤ、回漕店主のヘンネケンのやうに？　僕は巨人のやうな肩をもたなかつたらうか。働くべき二本の太い腕をもたなかつたらうか、又自分の日々のパンを稼ぐ爲めにムウレル街の木挽所に職を求めたことがなかつたらうか。僕は怠けてゐたのだらうか。僕は職を求め、講義を聞き、新聞記事を書き、讀書をし、狂人のやうに夜も晝も働かなかつたらうか。又守錢奴のやうな生活をしなかつたらうか。澤山金をもつてゐる時にはパンとミルクを食べ、懷の寂しい時には、パンだけですまし、文無しになると何も食はずにゐたではないか。ホテルなんかに泊つたこともないし、又第一階に部屋をもつたこともないのだ。僕は屋根裏に住つたこともあれば、雪が降り込むので、去年の冬から神も人も逃げ出してしまつたブリキ工場に住つたこともあるのだ。さう考へて來ると、僕には一體すべてが何が何やら少しもわけが分らなくなつてくる。

僕は歩み〳〵、こんなことを考へた。が、僕の心のうちには、惱みも憤りも又猜みも、爪の垢ほどもなかつた。

或るペンキ屋の傍に僕は立ち止つて、窓から中を覗き込んだ。僕は二つの密封した箱に書いてある花形の頭文字を讀まうとしたが、暗すぎて見えなかつた。又下らない考へを起したことを僕自身に對して腹を立てた。その箱に何が入つてゐるか、分らなかつたので、ぶり〳〵して、窓を一つガーンと叩いて、行つてしまつた。先に巡査が行くのを見て、歩度を早めて彼に近寄り、まつたく出しぬけに言つた——

「十時ですね。」

「いや二時です。」と、彼は怪しみながら答へた。

僕は怒りに喘ぎながらなほ二三歩前に駈け抜けて、拳を握り締めて言つた——

「よくお聞きなさい、いゝかね君——十時ですぜ。」

彼は立つて、しばらく考へ、呆れたやうに僕の顔を見戍つてゐた。が、とゞのつまり、彼はきはめて物靜かに言つた——

「兎に角貴方は家へ行かなけりやならん時刻です。お家へお送りしませうか！」

その深切に僕は逆らふことが出來なかつた。僕は自分の

眼に涙が湧くのを覺えて、急いで答へた——

「いゝえ有難う！　ちよつと遲くまで外出してゐたのです。カッフェにゐたのです。どうも有難う。」

僕が行きかけると、巡査はヘルメット帽に手を擧げた。彼の深切はすつかり僕を感動させた。僕は彼に與へる五クローネルの金を持たないのを殘念に思つて泣いた。僕は立ち止まつて、巡査が徐々と歩み去るのを見送り、顏を隱して泣いた、彼が遠ざかるにつれて涙は愈々烈しくなつた。僕は自分の貧乏を罵つた、自分に惡口をついて、糞味噌にけなしつけた。殆ど家に歸りつくまでそれを續けた。門に來ると僕は鍵を失くしたことに氣がついた。

「きまり切つてら！」と、僕は自分に喰つてかゝつた。「鍵を失くしちやいけないつてことは！　下は既で、上はブリキ工場になつてゐる此處に僕は住つてゐるのだから、門は、夜は締められて、誰だつて開けられはしない——鍵を失くして何んでよいものか？　僕は、犬のやうに濡れてゐる、少し空腹、少し空腹、まつたく少し空腹、そして足が少し妙に疲れてゐる——鍵を失くして何んでよいものか。僕が内へ入らうとしてゐるとき、家中アーケルに移つてゐられでもして何んでよいものか？……」

僕は飢ゑと疲れとですつかり依怙地になつて、獨りでやけにから〳〵と笑つた。

僕は厩の中で、馬が足を踏み鳴らすのを聞いた。二階の自分の窓が外から見えるけれども、門を開くことも出來なければ、内へ潜り込むことも出來なかつた。疲勞と焦慮とに苦しみながらも、棧橋に引つ返して、鍵を搜さうと思つた。

雨は又降り出して、もう僕の肩には水が滲みとほつてくるのを感じた。市廳のところで僕はふと可いことを思ひついた。巡査に門を開けて貰はうと、僕は直ぐ一人の巡査のところへ行つた、そして急いで自分と一緒に來て、若し出來るなら、戸を開けて僕を入れて呉れと言つた。

ほう！　若し出來るなら！　まつたく！　けれども彼には出來ない、彼は鍵を持つてゐない。警察の鍵は此處にはない、探偵局にあるのだ。

では僕はどうしようか？

ホテルに行つて泊らう。

が、ホテルに行つて泊れはしない、僕は一文も金を持たないのだから。僕は外出したまゝ、カッフェに入つてゐたのだ、巡査は十分その事を了解してくれた……

我々はしばらくホテルの階段に立つてゐた。彼はぢつと考へて、僕をしげ〳〵と見た。戸外では雨が烈しく降つて

ゐた。

「ぢや貴方は無料宿泊所へ行つて、無宿者だと言つたらいいでせう。」と、彼が言つた。

無宿者だと？　それは少しも僕の考へ及ばなかつたことだつた。まつたくそりやうまい考へだ！

そこで僕はこの結構な入れ智恵を警官に感謝した。僕が單にそこへ行つて、無宿者だと言ひさへすれば！

簡單明瞭だ！……

……

「姓名は？」と、係の巡査は言つた。

「タンゲン――アンドレアス・タンゲン。」

なぜ嘘を吐いたのだか僕には分らない。僕の考へはふらふらとして定まりなく、思つてもゐない澤山のことを思ひ付かせるのであつた。僕はこの途方もない名前を、咄嗟のうちに考へ付いた、そしてそれを何の巧みもなしに抛り出したのだ。僕は必要のない嘘をついた。

「職業は？」

これには僕もぐつとつまつた。

「ふむ。」と、僕はまづブリキ職にならうかと思つたが、それは駄目だつた。僕はブリキ職人らしくない名をつけてしまつたばかりか、鼻の上には眼鏡をかけてゐた。そのとき僕は大膽にも一歩進み出て、きつぱりと、勿體ぶつて言つた――

「新聞記者です。」

係の巡査は、それを書く前に先づ肩を搖り上げた。すると、僕は宿無しの大臣といふ見得で、受付の手摺の前へ進み出た。けれども係の巡査は別に疑ひも起さなかつた。僕が答へに躊躇したことを、彼はよく察してゐたらしい。頭の上に屋根をもたないで、新聞記者がこんなところに來てゐるとは、何といふことだらう！

「何新聞の――タンゲンさん？」

「モールン・ブラーデット（朝日新聞）の。」と、僕は言つた。「今夜は少し遲くまで外出してゐましたので……」

「さう、みれなら別に言ふことはありません！」と、彼は僕の言葉半ばに遮つて、微笑した。「若いお方がお出歩きなさる時には、得てそんな……いやもうよく承知してをります。」

彼は立ち上がり、丁寧に頭を下げた後、巡査に言つた――

「このお方を特別室にお通し下さい。左樣なら、お休み。」

僕は自分の大膽に背中がぞくぞくした。そして手を握り締めて、汗をかきながら、堅くなつて歩いた。

「瓦斯は十分間ともつてゐます。」と、巡査はまだ戸口に立ちながら言つた。

「それから後は消えますか。」

「消えます。」

僕は寢床に坐つて、戸の鍵の廻される音を聞いた。明るい部屋は大變氣持がよかつた。僕はすつかり落着いて、うつとりと戸外の雨の音を聞いてゐた。僕にはそれ以上心地の善い部屋を求めても得ることは出來なかつたであらう。僕は滿足した。手に帽子を持ち、向うの壁の瓦斯燈に眼をつけながら、寢床に坐つて、最初巡査に掛け合つたいろ〳〵な情景を憶ひ出してゐた。先づどんなに僕は巡査を馬鹿にしたゞらう！　「新聞記者タンゲン」「どの新聞ですつて？」と來た。そこで「モールン・ブラーデット」とやつた！　どうだい「モールン・ブラーデット」は、あいつの胸にこたへたらう！「それなら別に言ふことはありません――」どんなもんだい？　二時まで、スチフトスゴールン（知事官舍）に盛裝でゐて、戸口の鍵と、二三千クローネル入つた紙入は家へ忘れてきた。どうぞ、この方を特別室へお伴れ申して……

すると突然瓦斯が消えた、まつたく不思議なほど、細くもならず、ゆらめきもせず、俄かにすうつと消えた。僕は深い闇の裡に坐つてゐた、自分の手をすら、まはりの白い壁すら、見分けることが出來なかつた。寢るより外に仕方がないので、僕は衣服を脱いだ。

けれども、僕の疲れは、睡眠不足の爲めではなかつたから、眠れなかつた。しばらく横になつて、闇を、底知れぬ眞黑々の、僕が究め盡されぬ闇を眺めてゐた。僕の考へでは到底捉へることの出來ないものだつた。只もう限りなく眞暗で、僕をひし〳〵と壓迫するやうに感じられるものだつた。僕は眼を閉ぢて、小さな聲で歌を唄ひ、心を紛らす爲めに、寢床の上で、體をあちこち搖り動かしてみた。が、何の役にも立たなかつた。闇が僕の心を捕へて、少しの間も落着かせなかつた。體が闇に溶けて、闇と一つになりはしまいか。僕は寢床の上に起き上つて、手を振りまはしてみた。

僕のいら〳〵した狀態は、すつかり僕を征服してゐるので、僕がどれ程それに抵抗した所で甲斐がなかつた。世にも不思議な幻想に捉はれてゐる僕は、自分を叱つたり、子守唄を口吟んだり、心を落着けようと努力して、汗水流してゐるのだつた。僕は闇を見つめてゐたが、まだこれまでにこんな眞黑な闇をつひぞ見たことがなかつた。僕が一種特別な闇、曾て知らなかつた逆らふことの出來ないものゝ前に坐つてゐることは疑ふべくもなかつた。嗤ふべき考へが僕の心を占め、あらゆるものが僕に恐れを抱かしめた。

寢床のそばにある壁の小穴――釘の穴か何かの痕――を見つけて、大變氣になり、觸つてみたり、吹いてみたり、深さをさぐつてみたりした。それは決してたゞの穴ではなかつた、決して。それは僕がどうしても大膽にしらべてみなければならない、複雜な、祕密な穴であつた。この穴のことを考へて、好奇心と恐れとに我を忘れた僕は、その深さを測つて、それが隣りの部屋につゞいてゐるのでないことを確める爲めに、とう〳〵寢床から立ち上つて、僕のナイフを取らなければならなかつた。

僕は眠らうとして、仰向に臥てみたが、實際は又闇と闘ひを始めるのだつた。

戸外では雨が歇んでゐて、何の物音も聞えなかつた。僕はしばらく、街路を通る人の足音を聞かうと、耳を欹てゝゐた。と、誰やら一人歩く音がした。やがてそれが巡査であることが分つて安心した。突然僕は指を幾度も鳴らして笑つた。

「うまいぞ、うまいぞ。」

僕は新らしい言葉を發見したと思つた。僕は寢床の中に起き上つて言つた――

「Kubrab。これは在來の語の中にはないのだ。僕がそれを見つけたのだ――普通の言葉のやうに字母から成立つてゐる。どうだい、えらいもんだらう、おい君、僕がこの語を發見したんだぜ――Kubrab――文法上重要な意味のある言葉だ。」

その語は闇のうちに、僕の前に、はつきりとあらはれた。

僕は自分の發見に驚嘆して眼を瞠つてゐた。そこで僕は自分に向つて囁きはじめた――

「誰かゞこつそりのぞいてゐるかも知れないから、僕は自分の發見を祕密にして置かう。」

僕は飢ゑから生ずる愉快な空想に墜ちてゐた。僕はうつとりとして、何の苦痛も感ぜず、思想には締りがつかなくなつてゐた。僕は靜かに坐り込んで、あれからこれへと順ぐりに、いろんな事を考へ込んでゐた。僕の思想を、最も奇怪に飛躍さして、據處もないこの新しい言葉の解釋を求めた。「神ともティヴォリイ（諸國の首府オスロにある遊び場所）とも解する必要はない。誰が牛市と解さなければならんと言つたか？」僕は烈しく手を握り締めて、繰り返した。「誰が牛市と解さなければならんと言つたのか。」又よく考へ直してみた時に、それが鈔前の意味であらうと、日の出の意味であらうと、少しも構はなかつた。こんた語の意味を發見することは、さう難しいことではない。時が來るのを待たう。その間、僕はそれを考へながら眠らう。

僕は寢床の上に横になつて、げら〳〵笑つた。けれども何も言はなかつた、それが良いとも悪いとも言はなかつた。二三分經つて、僕はいら〳〵して來た。新發見の語は、僕をつゝき立てた。絶え間なく立ち戻つて來ては、僕の心を昂奮さして、逆せ上らした。僕はこの語が意味してはならないものを定めたが、何といふ意味に解釋しなければならないかは決定しかねた。

「それはたゞ枝葉の問題だ！」と、僕は高く獨言を言つて、腕を拱み、「それはたゞ枝葉の問題だ。」と繰り返した。語は運よく見つかつた。それが、主なる事であつた。けれども、その解釋についての考へが果もなく僕を苦しめて、眠ることを妨げた。この珍らしい語に十分適當な解釋は一つもなかつた。とう〳〵僕は又寢床の上に起き上り、兩手で頭を抱へて言つた――

「いや、それを移住又は煙草製造所と解することは不可能だ。若しそんな解釋がつけられるなら、僕はとうの昔にさう決めて、そのかたをつけてゐたのだ。いや、一體この語は何か心理的なことを、感情とか心的狀態とかを意味してゐるのではなからうか――若しやそれを僕が分つてゐないのぢやあるまいか。」

そこで僕は何か心理的なことを見つけようと考へてみた。すると、誰か他の者が差出口をしたやうに、僕の眼つてゐる言葉のうちに或る考へが雜つて出たので、僕は怒つた――

「何だ面白くもない？　そんな馬鹿げたことなんか世の中にありやしない！　撚絲だ!?　勝手にしやがれ！」僕がそれを特に撚絲と解することが厭だつたとしたら、僕にはさう解さなければならない義務がありはしない。僕は自分でその語を發見したのだから、何とでもそれを解する立派な權利をもつてゐる。が、僕はまだ僕の意見を述べた覺えはないのだ……

けれども、僕の頭は愈々混亂して行つた。とう〳〵僕は寢床から跳び起きて、水道栓を探した。咽喉が渴きはしなかつたけれど、頭に熱があつたので、本能的に水を求めた。僕は水を飲んでから寢床に行つて、どうにかして眠らうと決心し、眼を瞑つて、ぢつとしてゐようと努めた。そこで數分間身動ぎもせずに臥つてゐた。僕は汗をぐつしより掻いて、血が烈しく脈管に搏つのを感じた。

いや、あの巡査があの紙包みの中に金があると思つて、開いてみたのは、非常に面白い。あいつたゞ一度咳拂ひをしたきりだつた。けれども矢張りあいつ、あすこを往つたり來たりしてゐるだらうか。僕の腰掛にかけてゐるだらう

か。……あの青い眞珠色……船……

僕は眼を開けた。眠れないのに、どうして眼をつぶつて居られるものか。前と同じ暗黑が周圍を取り卷いてゐた。僕の黑想がその前にたじろいで、捉へることが出來なかつた。前と同じ、底無しの黑い永劫が、僕の周圍を取り圍んでゐた。僕はそれを何に擬らへることが出來ようか。この暗黑を言ひ現はすに足るだけの黑い言葉、若しそれを口に發したら、直に唇が腫れる程の恐ろしい言葉を見つけ出さうと、絶體絶命の努力をした。あゝ何たる暗さであらう！すると又港の事、船の事、僕を待ち受けてゐた黑い怪物の事が想ひ出された。その怪物共は僕を嚥み込み、僕をしつかり押へて、陸や海を越えて、誰もまだ見たことのない暗い國を通つて、走つて行くだらう。僕は船の甲板に居るやうな心地がした。水の上を駛つてゐるやうだつた。宙に浮いてゐるやうだつた。深く〳〵沈んで行つた……僕は心配でせい〳〵言つて、寢床にしつかりと縋りついた。僕は、毬のやうに空をとほしてしゆう〳〵と音を立てゝ飛んで行つた。手を堅い床の板に打ち當てた時、僕はどんなに安心したゞらう！

「かうして死ぬのだ。」と、獨語ちた。「今こそお前は死ぬのだぞ。」

僕は少し横になつて、今こそ自分は死ぬのだと思つてゐた。そこで寢床に起き直つて、嚴しい口調で訊ねた——

「僕が死ぬんだつて言つたのは誰だ。僕があの言葉を發見したのなら、それが何を意味するかを、自分で決定する權利は僕にあるんぢやないか。」

僕は自分が取り止めもない事を口走るのを聞いてゐた。僕は、喋つてゐるうちにも矢張り自分の聲を聞いた。僕の亂心は、衰弱と疲勞から來た發作であつた。けれども意識は失はなかつた。すると突然、氣がちがつたなといふ考へが、頭の中を通つて行つた。恐ろしさの餘り、僕は寢床から跳び出した。よろめきながら戸口に向つて行つて、戸を開かうと一二度それに衝突つたが、頭を壁にうちつけ、高く悲鳴をあげたり、指を嚙んだり、泣いたり、喚いたりした……

何もかも森閑としてゐた。只僕の聲だけが、壁に反響した。牀の上に仆れて、起き上れもせず、なほしばらくは部屋のうちをのたうちまはつた。そのとき、高く僕の眼の直ぐ前の壁に、鼠色の四角なところを見つけた。白い色——前兆——それは日光であつた。あゝどんなに僕は嬉しく思つてホッと安心の息を吐いたであらう。僕は牀の上にひれ伏して、この幸福な光りに、嬉し泣きに泣いた。感謝の念

で一ぱいになつて獻欽きしながら、窓に向つて接吻を投げたり、まるで氣が狂つたやうであつた。然しまた僕はこの場合にも、自分で何をしてゐるかをちやんと意識してゐた。すべての不愉快は一時に去つた。すべての失望と苦痛とは歇んだ。この瞬間、僕の願ひでまだ叶へられずにゐるものがあるなどゝは、とても考へられなかつた。僕は牀の上に起き上つて、腕を拱み、夜の明けるのをぢつと辛抱して待つた。

何といふ夜だつたらう！　何の物音も聞えないとは！と、僕は不思議に思つた。けれども僕は又、收容されてゐるすべての人達の上に超然として、この特別室にゐるのであつた。僕は宿無しの大臣、と言つても差支へはない。僕はかう上機嫌で、壁の段々明るくなる四角な光に、ぢつと目をつけてゐながら、大臣を氣取つてひとりで嬉しがり、自らフォン・タンゲン（敬稱語）と名乘り、大臣のやうに口をきいた。僕の幻想は依然として止まなかつたが、たゞ心だけはずつと落着いて來たのだつた。若し財布を家へ置き忘れるやうな、悲しむべき手拔かりをしなかつたならば！「大臣閣下、御寢遊はしますならば、御案内申しませう。」僕は極めて眞面目くさつて、いろ〳〵煩雜な禮儀作法を盡して寢床に行つて横になつた。

今はもう明るくなつて、部屋の大體をどうにか認めることが出來る程となつた。それから少し經つと、扉の大きな把手を見ることが出來た。それが僕の心を紛らした。單調な闇、僕自身を見ることすら妨げる程濃厚な、苛立たしい闇は破れた。僕の血はより穩かになつて、間もなく眼がひとりでに閉ぢるのを覺えた。

＊　＊　＊　＊

扉を一二度叩いた音に僕は眼を醒ました。大急ぎで跳ね起きて、あわてゝ衣服を着た。僕の衣服は、まだ昨夕の、づぶ濡れのまゝであつた。

「下に行つて、當直の者に申告して下さい。」と、巡査が言つた。

又形式責めに會ふのかと氣遣はしくなつた。

僕は下の大きな部屋に入つた。其處には三四十人の者がごろ〳〵してゐた。皆宿無しだ。そして、一人々々名を呼ばれて、食券を渡された。當直の巡査は傍に立つてゐる巡査に、絶えず口をきいてゐた——

「あの人は食券を貰つたかい。皆なに食券をやることを忘れないやうにし給へ。食べたさうな顏をしてゐるよ。」

僕は立つて、その食券を眺めながら、自分も一枚欲しいものだと思つた。

「新聞記者、アンドレアス・タンゲン。」

僕は進み出て、頭を下げた。

「貴方はどうして此處へおいでになりましたか？」

僕は一切の事情を語つた。昨夜と同じ話をした。平氣でまじ〳〵と嘘を吐いた、眞顏で嘘を吐いた——カッフェで少し夜を更し過ぎて、門の鍵を失くした云々つてやつを。

「あゝ、」と、彼は言つて微笑した。「さうですか？　よく眠れましたか。」

「大臣のやうに！」と僕が答へた。「大臣のやうにですよ！」

「それは結構です。」と、彼は言つて、立ち上つた。「左樣なら！」

そこで僕は立ち去つた。

一枚の食券！　僕もそれが欲しかつた。僕は三晝夜も何にも食はなかつた。パン一片さへも！　けれども、誰も僕に食券を上げませうとは言はなかつた、又僕にも強請る勇氣が出なかつた。そんなことを言はうものなら、直ぐに疑ひを受けるだらう。內幕がばれて、僕が實際何者であるかが分つて、氏名詐稱の廉で拘引されるだらう。だから僕は頭を高くあげて、まるで百萬長者のやうな態度で、上衣の裾に兩手をさしこんで、堂々と濶歩して市廳を出た。

太陽は旣に暖かに照つてゐた。もう十時で、ヤング・トルヴェットの往來は賑かであつた。どつちへ行つたらよからう？　僕はポケットを叩いて、原稿をさぐつてみた。十一時になつたら、主筆に會つてみよう。

僕は臺地の欄干に倚つて、目の下の往來を見てゐた。そのうちに僕の衣服からは蒸氣が騰りだした。飢ゑは新たに襲つて來て、僕の胸を嚙んだ、心臟をどき〳〵言はした、その小さな針で刺して、僕を痛がらした。「縋つてみるやうな知己朋友はあるまいか。」僕は、よし十オウレの端金でも出してくれさうな人を記憶に求めてみたが、見つからなかつた。その日は好い天氣であつた。日もよく照らせば僕の周圍も十分に明るかつた。天は風いだ海のやうに、リュル高原の上を流れてゐた……

それには氣も止めないで僕は歸途に就いた。

僕は非常に飢ゑてゐたので、路傍に落ちてゐる鉋屑を取り上げて、舐つた。それが大きな助けになつた。早くこれに思ひつけばよかつたのに！

家の門は開いてゐた。馬丁は例の如くお早うと挨拶した。

「好いお天氣ですね。」と、彼は言つた。

「えゝ。」と、僕は答へた。それ以上僕には何も言へなかつた。彼に一クローネ貸してくれと言へなかつたらうか。出來ることなら、彼も悅んで貸して呉れたゞらう。僕は彼に

手紙を一本代筆してやつたこともあるんだから。

彼は何やら言はうとして、ぐつと唾を嚥み込んだ。

「好いお天氣、さう。ふむ。ところであつしは今日宿の主婦さんに拂ひをしなけりやならねえのだが、旦那、すまねえけれど五クローネル貸していたゞけやすまいか？　貴方の御用も勤めたことがあるんだから。」

「いゝや、イエンス・オライ君、そいつは僕にはまつたく出來ないんだ。」と答へた。「今は駄目だ。あとなら——今日午後ならどうかしらんが……」

僕はよろめきながら階段を昇つて、自分の部屋へ行つた。其處で僕は自分の寢床に臥ころんで、笑つた。何といふ意外の仕合せであらう、彼が僕を買ひ被つたのは！　僕の名譽は救はれた。この僕に五クローネル貸せだつて！——あゝ有難い〳〵！　まるで蒸汽賄所の株を五つも買つてくれと求めるか、アーケルの別莊を下さいと求めてゐるやうなものだ！

僕はこの五クローネルのことを思ふと、噴飯してしまつて、だん〳〵笑聲が高まつた。

僕は貧乏神の子ぢやないか、えゝ？　五クローネル！　まつたく僕は此處ぢや一廉立派な人間だつたのだ！　僕の愉快は增した。僕は夢中になつた。畜生め！　此處は馬鹿に食物の臭ひがしやがる！　本當にお晝過ぎになると、此處はカッレッの臭ひがする！　チェ〳〵。

そこで僕は厭な臭氣を拂ふため、空氣を入れようと思つて窓を開けた。

「給仕、ビーフをもつてこい！」

そこで机——書き物をするときには、膝で支へてゐなければならぬ哀れな跛足机——に向つて最敬禮をして恭しく訊いた——

「あのいかゞでございませう、葡萄酒一杯もつて參りましては？」

「わしはタンゲン、國務大臣タンゲンぢや。外出して少々夜更かしをしたので……門の鍵を……」

又もや埒もなく、僕の頭は迷ひ出した。取り止めのないことを言つてゐるのを自分でも知つてゐた。だが、自分の言つてゐることは、たゞ一言と雖も、耳に留めてゐたし、自分で分つてもゐたのである。僕は自分に言つた——

「今お前は又取り止めのないことを喋つてゐるぞ。」と。

けれどもそれはどうにも仕方がなかつた。まるで目を醒ましてゐながら、夢のうちに話をしてゐるやうなものだつた。僕の頭は輕く、痛みもなければ、壓迫感もなく、心には何の陰影もなかつた。僕は其處から出帆したが、何

の障りもなく夢幻の國へ着いた。

「お入り！　まあ、お入りなさいつてば！　御覽のとほり紅寶石づくめです。ユラヤリィ姫！　ユラヤリィ姫！　膨れ上つた紅い長椅子だ！　なんてまあ王女はあらい息づかひをなさるだらう！　あたしゃ接吻してよう、ねえ、あたしの可愛い人、あらもつとよ、もつとよ！　あなたの腕は琥珀のやうで、あなたの唇は燃えてゐる……給仕、僕はビーフを註文したんだが……」

日光は窓にさし込んだ。下からは馬が燕麥を食ふ音が聞えて來た。僕は坐り込んで、鉋屑を舐り、子供のやうに、愉快な心持で、嬉しがつて、にこ〳〵してゐた。始終僕は原稿にさはつてみた。時折、それには心づかずにゐることもあつたが、僕の本能は絶えずその存在を僕に告げ、僕の血はそれを僕に想ひ起さした。すると又、それを引張り出してみるのだつた。

原稿は濡れてゐたので、それを擴げて日に干した。それから部屋の中をあちこちと歩きまはつた。すべてのものが何とまあひどい有様なのだらう！　牀の上には、あたり一面にブリキの切れつ端がちらばつてゐるし、腰掛ける椅子とては一脚もないし、露はな壁には一度だつて帽子掛けの釘が打たれたことはないのだ。すべてのものが、地下室の『叔父さん』に持つて行かれて、失くなつてゐた。厚く埃の積つた一二枚の紙が、僕の財産の全部であつた。寢床にはもう二三ヶ月前に、ハンス・バウリが貸してくれた綠の敷布がかけてあつた……

ハンス・バウリ！

僕は指を鳴らした。

ハンス・バウリが僕を救つてくれるだらう！

そこで僕は彼の番地を想ひ起した。

どうしてハンス・バウリを忘れてゐたらう！　彼は、僕が早く來なかつたと言つて、きつと怒るだらう！

急いで帽子を取つて、原稿を取り蒐め、階段を駈け降りた。

「おい、イエンス・オライ！」と、僕は厩を覗いて叫んだ。「多分午後には君にお助けすることが出來ると思ふよ。」

市廳のところまで來ると、十一時を過ぎてゐたので、直ぐに主筆のところへ行く決心をした。新聞社の前で立ち止まつて、原稿の頁が順序どほりになつてゐるかどうかを檢めた。僕はそれを丁寧に皺延ばしをして、再びポケットに入れ、戸を叩いた。戸口を入るとき、僕の心臟の高く鳴るのが聞えた。

『鋏』君は例によつてそこに居た、僕は恐る〳〵主筆のことを訊いた。返事がない。彼は大きな鋏をもつて、地方新聞の小さな記事を切り拔いてゐた。

僕は質問を繰り返して、なほ進んで行つた。

「主筆は來てゐません。」と、『鋏』君は、やつぱり此方を見向きもしないで言つた。

「ぢきお見えになりませうか？」

「そんなことは分りません、まるで分りませんよ。」

「編輯局は何時まで開いてゐますか？」

それには答へがなかつたから、僕は去るより外に仕方がなかつた。『鋏』君は始めから終りまで一度も僕に眼をくれなかつた。彼は僕の聲を聞いて、見るまでもなくそれが僕であることを知つたのだつた。

お前の評判は此處ぢやそんなに悪いのだぞと、僕は心に言つた。誰もお前に返事さへしてくれようとしないのだ。だが、若しやそれは主筆からの言ひつけなんぢやあるまいか。僕のあの名高い小説が採用されてからといふもの、僕は殆んど毎日のやうに主筆を訪うて、何の役にも立たないものを見せたのだつた。彼は一應眼を通しては、僕にそれを突き戻したのであつた。彼は恐らく、こんなことはもう御免だと、思つたのではあるまいか？……僕はホーマンスビュイエンの方へ行つた。

ハンス・バウリ・ペテルセンといふ學生は百姓の子で、四階の屋根裏に住つてゐた。だからハンス・バウリ・ペテルセンは貧乏人であつた。僕は路々金の事を思つてほく〳〵と欣び、きつとそれが手に入るものと考へた。門口に來てみると、戸は閉つてゐたので、ベルを鳴らさなければならなかつた。

「僕は大學生ペテルセンに、話がしたいのです。」と、言つて、入らうとした。「僕は、あの男の部屋は知つてゐますから。」

「大學生のペテルセン？」と、下女が言つた。「屋根裏に住つてゐる人ですか。あの方ならお移りになりましたよ。」

下女はペテルセンの移轉先をまつたく知らなかつたが、手紙が來たら、トルボート街のヘルマンセンのところへ屆けてくれるように言ひつかつてゐると、その番地を教へた。

僕は十分の希望と確信とをもつて、ハンス・バウリの所在を訊き出さうと、トルボート街に出掛けた。それは僕の最後の手段で、僕は是非それを役立てなければならないのだつた。途中新築中の家の前を通りかゝつた。そこには二三の指物師が戸外で、立つて鉋かけをしてゐた。僕は堆かい鉋屑の中に手を差込んで、そのうちから二つ三つを取つて、口の中に押し込み、なほ他に、後々の爲めにもと、いくら

かをポケットの中に入れた。そして道中を續けた。僕は飢ゑに呻いた。或るパン屋の店窓に魂消る程大きな十オウレのパンを、十オウレの値段ではそれ以上大きなものは出來まいと思はれる程の大きなパンを見かけた……

「僕は大學生ペテルセンの住所を知りたくて來たものですが。」

「ベルント・アンケルス街十番地、屋根裏。」——若し僕がそこへ出かけて行つたら？　若しか來てゐた手紙を深切にそこへもつて行つてやつたなら？

僕は再び市を上へ、もと來た路をとつて、指物師達のところを通り過ぎた。彼等は、今は膝の間にブリキの碗を置いて、蒸汽賄所で出來た、暖かいうまい晝飯を食べてゐた。パン屋の前にくると、あの大きなパンはまだ皿の上に乘つてゐた。そして僕は、ベルント・アンケルス街に來たときには、疲れきつて、もう半死半生の有樣であつた。戸口は開いてゐた。僕は澤山の困難な階段を昇つて屋根裏へ行つた。そしてハンス・パウリに會ふや否や、彼の機嫌をよくするようにと、まづポケットから手紙を取り出して置いた。

彼は、事情を話したなら、この援助を拒みはしまい、決して拒むまい。ハンス・パウリは僕がいつも言つてゐるとほり、なか〳〵義俠心のある男だから……

戸に僕は彼の名刺を見付けた——

H. P. Pettersen, stud. theol.—reist hjem.（神學生、ホウ・ペェ・ペテルセン。——歸鄉）

僕は其處にぺたりと坐つた。敷物のない牀の上に坐つた。すつかり落膽して、へと〳〵になつてしまつた。僕は機械的に一二度繰返した。

歸鄉！　歸鄉！

僕はぢつと靜かにそこに立つてゐた。涙も眼に湧いては來なかつた。何の考へも、何の感じも持たなかつた。眼を瞠つて、手紙を瞶め、何をしようともしなかつた。十分、恐らく二十分以上も經つたらう。僕は始終同じ場所に立つて、指一つ動かさなかつた。この無言の放心狀態は殆ど居眠りをしてゐるやうだつた。その時、何者かゞ階段を昇つてくるのを聞いて、立ち上つて言つた——

「大學生ペテルセン君なんです——僕はあの人宛の手紙を二通もつて來てゐるんですが。」

「あの方はお國にお歸りなさいました。」と、女は答へた。「けれども休暇がすめば、歸つていらつしやいます。お差支へがなければ、お手紙は私がお預り申しませう。」

「はあ有難う、御深切さま。」と、僕は言つた。「あの人が歸つてから直接渡すことにしませう、中には大事なことが書

いてあるかも知れませんから。左樣なら。」

僕は外に出て、路のまん中に突つ立ちながら、兩手を握り締めて、聲高に言つた——

「神よ！　お前に一つ言ふことがある。お前は頓馬だ！」

僕は歯を喰ひしばり、天に向つて罵つた——

「お前は頓馬だ！　糞！」

僕は二三歩行つて、又立ち止まつた。僕は突然態度をかへ、指を組み合せ、首を傾げ、優しく敬虔な聲で訊いた——

「お前も亦彼に願つたのか、我が子よ？」

それは誠らしくは響かなかつた。僕はHam（彼に、即ち神に）といふ言葉に大伽藍のやうな大きな頭文字をくつゝけて言つたのだ！　も一度——「お前も亦彼に救けを呼ぶのか、我が子よ？」

そこで僕は頭を垂れて、聲に愁ひを含ませて答へた——

「いゝえ。」

それもまた誠らしくは響かなかつた。

「お前は空涙を出すことが出來ないのだ。馬鹿！　ほんとに、お前はかう言はなけりやならないんだ、——私は父なる神にお祈りをしました！——と。そしてお前は、お前の言葉に、最も哀れつぽい調子を附けなければならん。さうだ——もう一度でいゝ、さう、少しはよくなつた。お前は、癲癇病みの馬のやうにぜい〳〵言はなければならん。さうだ、よろしい！」

そこで僕は、せつせと僞善の稽古をして、それがうまく出來ないときには、自分のことを、馬鹿だの唐變木だのと罵つて、路傍で地團駄を踏んだ。通行人がふりかへつて、不思議さうに見て行つた。

僕は絶えず鉋屑を嚙んだ、そして出來る限り大急ぎで、よろめきながら街筋を海の方へ下つて行つた。知らぬ間にいつか停車場前へ來てゐた。ヴォール・フレールセルス教會の時計は、二時半を指してゐた。僕は少時立ち止まつて考へた。汗が僅かばかり顏に滲み出て、眼に入つた。

「一緒に棧橋へ來い。」と、僕は自身に言つた。「そんなに暇があるんなら！」そこで僕は自分にお辭儀をして、鐵道棧橋へ行つた。

港には船がゐた。海は日光にかゞやいた。何處を見ても、活氣が漲つてゐた。汽笛の音や、肩の上に箱を載せた人足や、賑かな荷揚歌などで、あたりは充ちてゐた。すぐ近くには一人の菓子賣女が、その商品の上に、赤い鼻を突き出してゐた。女の前にある小さな板の上には、罪な程いつぱいに美味いものが乘つてゐた。僕は癪に障つて餓を向いた。女は食物の臭を波止場中に漲らしてゐた。「ちよつと、

窓を開けろ！」僕が、そばに坐つてゐる紳士に向つてこの菓子賣女や、又他の菓子賣女を許して置く不都合を烈しく訴へた。……不都合でせう、ねえ、ほんとに。貴方も多分不都合とお認めでせう。」……けれども紳士は氣味わるがつて、僕の話を聞かうともせずに、立つて行つてしまつた。僕もその人の誤つてゐる事を正してやらうと堅く決心して、直ぐに立つて、その後に跟いて行つた。

「實際衞生上の點からです。」と言つて、僕は彼の肩を叩いた。

「御免なさい、私は此處に初めて來た外國人です、又衞生の狀態も知りません。」と言つて、紳士は、恐ろしさうに僕を見つめた。

彼が外國人であるなら、仕方もないことだ……何か、彼の用を足してやることは出來まいか。そこいらを案内するやうなことは？　いけないかな？　そんなことなら僕は悦んでするし、又彼にとつてはいくらも金のかゝることぢやないが……

けれどもその人はどうしても僕から離れてしまはうとして、急いで街路を突切り、別な側の歩道に行つた。

僕は再び元のベンチに戻つて、腰掛けた。僕はひどく落着きがなくなつてゐた。直ぐそばで鳴らし始めた大きな手風琴は、一層僕をいけなくした。甲高い、金屬性の音につれて哀れつぽく唄ふ小娘の歌、ウェーベル（獨歌）の一節。笛の音に似た、惱ましい手風琴の音は、僕の血をそゝつて、共鳴するやうに神經を震へ出さした。で、僕は直ぐに、腰掛の上にひつくりかへつて、それにつれて自分でも小聲で唄つた。飢ゑた者にどうして感激がなからうぞ！　僕はこの音調にとらはれ、この音に融合せられて、流れ出すのを感じた。僕は自分が、山々の上高く浮び上り、舞ひながら、明るい空中を流れて行くのを、はつきりと感じた……

「一オウレいたゞかして下さい！」と、手風琴ひきの小娘は哀れつぽい聲を出して、そのブリキの皿を差しつけた。

「たつた一オウレ！」

「よし。」と、僕は無意識に答へると、跳ね起きて、自分のポケットを捜した。けれども小娘は僕がたゞ揶揄つてゐるのだと思つて、一言も言はずに、去つてしまつた。この無言な寛容は僕にとつて迚も我慢が出來なかつた。若し娘が僕に悪口を吐いたなら、僕にとつては却つてよかつたゞらう。僕は苦痛に堪へ兼ねて、娘を呼び戻した。

「僕は一オウレも持たないのだ。」と、言つた。「けれども お前を覺えてゐるから、多分明日あたり上げるよ。お前の名は何といふのかい？　うん、そりやいゝ名だ。僕は忘れや

しないよ。それぢや明朝……」

娘は何も言ひはしなかつたけれと、僕を信用してゐないことは、分つてゐた。僕はこの小さな貧乏娘が僕を信じないのを見て、失望して泣いた。

だが、も一度と、僕は娘を呼び戻して、急いで上衣を脱いで、胴着でもやらうとした。「その代りに埋め合せをしてあげるから。」と、僕は言つた。「ちよつとお待ち！」

が、僕は胴着を持たなかつた。

僕に胴着なんかありやうがない。それは、僕の所有物でなくなつてから、もう一週間も經つたではないか。驚いた娘はもう待つてなぞゐなかつた。急いで行つてしまつた。

僕は、娘の行くにまかせるより外に仕方がなかつた。人が僕のまはりに集り出した、そして高い聲で笑ふのだつた。一人の巡査が人込みを押分けて、僕に近寄り、どうしたことかと訊いた。

「何でもありません。」と、僕は答へた。「なあに何でもありません。僕は自分の胴着を小娘にやらうとしたゞけなんです……娘の親父に……君其處に立つて、笑はなくたつていいよ。僕はたゞ家へ行つて、他の胴着を着ればいゝんだからね。」

「往來の妨げをしてはいかん！」と、巡査が言つた。「さあ行け！」と、言つて、巡査は僕を押しやつた。「おい、こりや君の紙だらう？」と、彼は僕の後ろから叫んだ。

「おや〳〵、僕の新聞原稿だ、非常に大切なものだ。どうして僕はかう不注意になつたんだらう……」

僕は自分の原稿を受けとつて、順序を檢め、立ち止まりもしなければ、あたりに目をくれもしないで、新聞社へ出かけて行つた。ヴォール・フレールセルス教會の時計は四時であつた。

編輯局は閉つてゐた。僕は泥棒のやうに、忍び足で、音を立てぬようにして階段を下り、途方に暮れて、ぼんやり門前に立つてゐた。

どうしたらよからう？

僕は壁に倚りかゝり、足もとの石を見つめて、考へてゐた。留針が一本足もとに落ちてゐた。僕は體をかゞめて、それを拾ひ上げた。

若し、上衣の釦をちぎつて取つたらどんなものだらう。それがいくらの金になるだらうか。恐らくそんな釦は、僕に用はないだらう、釦は釦に違ひないが。

僕はそれを手に取つてよく端々まで見究めると、まるきり新らしいものゝやうであつた。それは矢張りいゝ思ひつきであつた。僕はナイフでそれを切りとつて質屋へ持つて

行かう。五つの釦を賣ることが出來るといふ希望が直ぐ僕に元氣をつけた。僕は言つた——

「まあ、まあ、これで助かる！」

すつかり嬉しがつて、僕は直ぐ上衣の釦を一つづゝ取り始めた。その間僕は次の會話を心の裡でやつてゐた——

「さうだよ、君、ねえ、少々困つてるんだ、ちよつと金に困つてゐるんだ……品がいたんでゐる？　餘計な饒舌をするない。僕よりも釦を使ひ減らしてゐない奴があつたらお目にかゝらないよ。僕はいつも上衣をばさ〳〵開けはだけて歩いてゐるんだからな。……おい君。それは僕の癖になつてるんだ。持前だよ……いや〳〵、君が厭だつて言つたところで、さうなんだからね。だがそれでもつて僕は十オウレを手に入れるのだ、少くとも……いや一體誰が、君にそんな事をしろと言つたのだ？　君は默つてゐて、僕の邪魔をしないがいゝぜ……さうださうだ。そこで君が巡査をつれて來たつてかまやしない。君が巡査をつれに行つてる間、僕は此處に待つてるよ。僕は君のものを何一つ盗みはしないから……よしと。左樣なら、左樣なら！　僕の名はさうだよ、タンゲンだよ、僕は外出して、少し夜を更かし過ぎたんでね……」

その時誰かゞ階段をのぼりかけた。僕は忽ち現實に歸つて、『鋏』君を認めたので、あわてゝ釦をポケットに押し込んだ。彼は僕の會釋に答へもせず、通り過ぎてしまふつもりで、俄かに自分の指の爪を一心に眺めるふりをした。僕は彼を呼び止めて、主筆のことを訊いた。

「來てゐませんよ。」

「嘘言ひ給へ！」と、僕は言つた。そして自分でも驚く程落着いた態度で、續けた。「僕は主筆に話があるんだ。それは大事な用なんだ。僕は、スチフトスゴオルンからの報告を知らしてあげたいのだ。」

「ではその事を私に仰しやれませんか。」

「君に？」と、僕は言つて、『鋏』君をじろ〳〵と見た。

それは利き目があつた。彼は再び上つて行つて、戸を開けた。僕の心臓は口元まで飛び出しさうだつた。僕はなに糞ッと、かたく齒を喰ひしばつて、勇氣をつけ、戸を叩いて、編輯長室に入つた。

「今日は！　やあ、貴方ですか。」と、主筆は打ち解けて言つた。「まあお掛けなさい。」

歸れと僕を直ぐに追出した方が、却つて慈悲だつたのだ。僕は涙の出るのを覺えた。

「御免なさい、どうぞ……」と、僕は言つた。

「お掛けなさい。」と、彼は繰り返した。

僕は腰掛けて言つた——あの新聞に載るようにと力を入れて書いた記事を、僕は、も一つ持つてゐる。僕はそれに骨を折つた、異常な努力をしたのだと。

「拜見しませう。」と言つて、彼はそれを手に取つた。「貴方のお書きになるものには皆力が籠つてをります。けれどもそれは餘り烈しすぎます。も少し冷靜になさるがいゝですよ！　どれも熱があり過ぎます。が、兎も角も拜見しませう。」そこで彼は再び机に向き直つた。

僕はやつぱり腰掛けてゐた。一クローネ下さいと言はうか。なぜいつもそんなに熱があり過ぎるかを説明しようか。さうしたらきつと僕を助けてくれるに違ひない。そんなことは何も今初めての事ではなかつたのだ。

僕は立ち上つた。ふむ！　併し、僕がこの前やつて來たとき、主筆は金がないと言つて嘆息しながら、なほ僕に渡す金を集めに、使ひを出したことがあつたつけ。今もそんな事になるのだらう。いや、そんなことはある筈がない。もう主筆は仕事をしてゐるぢやないか。あれが見えないのか。

「もつと何か他に御用がありますか。」と、主筆は訊いた。

「いゝえ！」と言つて、僕は聲に力を入れた。「いつ又お伺ひしたらいゝでせうか。」

「おゝ、いつでも貴方のお通りがけにお寄り下さい。」と、彼が答へた。「一兩日してから。」

僕は、自分の要求を口に上せることが出來なかつた。僕にはこの人の深切が限りもないやうに見えた。僕はそれを尊重しなければならない。寧ろ餓死するがいゝ。で、僕は立ち去つた。

僕は外に出て、又飢ゑに襲はれると、一度ならず、なぜ一クローネの無心も言はないで編輯局を出たかを悔んだ。僕はもう一つ鉋屑をポケットから取り出して、口に入れた。それはまだ利き目があつた。

なぜ僕は早く斯うしなかつたのだらう。「やい〳〵、貴樣恥を知れ！」と僕は言葉を口に出して自分に言つた。「あの人に一クローネを強請れば、又迷惑をかけるつてことを思ひ付かなかつたのか。」

僕は自分の恥知らずの考へに、自分を責めた——

「こんな卑しいことは、まだ聞いたこともない。」と、僕は言つた。「お前は只一クローネ欲しさに、いきなり人に飛び付いて、殆どその人の眼をくり拔くやうな亂暴な眞似をするなんて——うぬ、貧乏犬めが！　しッ、失せやがれ！　さつさと！　さつさと！　畜生め、もつと早く！　愚圖々々するとひどい目に會はせるぞ！」

僕は自分を罰する意味で駈け出した。奔馬のやうに跳びながら、こみ上げてくる叫びを呑み込んで、街又街を走り過ぎ、若し止まらうとすると、聲を出さずにひどく自分を叱り付けて走つた。いつのまにか遠くピーレ・ストレーデの通りを上つてゐた。僕はその時、足がぴたりと止まつてしまつて、もう走れなくなつたのに腹を立てゝ、殆ど泣き出すところだつた。僕は體全體を顫はして、或る階段に身を投げた。

「こらッ、止めろ！」と、僕は言つた。そして自責の爲めに、再び立ち上つて、強ひて立つてゐようと努めた。僕は自分を嘲つて、自分の飢ゑ疲れきつた樣を小氣味よく思つた。

幾分か經つた後、遂に坐らうとする力に打ち克たれてしまつた。けれども僕は階段の上の一番窮屈なところを擇んだのであつた。

有難い、休むと好い氣持がするわい！

僕は顏の汗を拭ひ、大きく、深い呼吸をついた。

何とまあ僕は無暗に走つたのだらう！　だが僕は悔いなかつた。それは相當の罰だと思つたからである。なぜ僕はあんなに一クローネを欲しがつたのだらう？　そんなことをしたら、どうなつたか、今こそ知ることが出來たのだつた。

僕は自分に向つて語り始めた。母のやうに懇々と自分を說諭した。僕は疲れて力が拔け、ます〳〵感じ易くなつて泣き出した。靜かな忍び泣き、涙の出ない啜り泣き。

十五分或はそれ以上、僕は同じ場所に坐つてゐた。往來の人は、少しも邪魔にならなかつた。子供達がそこらに遊んでゐた。一羽の小鳥が、通りの向う側の樹に鳴いてゐた。

一人の巡査が僕に向つて來て、言つた——

「なぜ貴方はそこに腰掛けてゐるのですか。」

「なぜ僕が此處に腰掛けてゐるのかつて。」と、僕が反問した。「慰み半分です。」

「私はもう半時間も貴方に眼をつけてゐた。」と巡査が言つた。「貴方は此處に三十分も腰掛けてゐますよ。」

「さう、それぐらゐになりますねえ。」と、僕が答へた。「だからどうしたといふんです？」

僕は立ち上つて、ぶり〳〵しながら其處を去つた。市場に來て、立ち止まつて、通りを見おろした。

慰み半分だと？　何といふ返事だらう？　疲れてゐるから——かうお前は答ふべき筈だつた。そしてお前は泣くやうな聲をしなければならなかつたのだ——お前は馬鹿

だ、お前は決して斐ふといふことを知らない！——疲れてゐるからだといつて、馬のやうに溜息しなけりやならなかつたのだ。

消防署のところへ來たとき、僕は再び新らしい考へに捉はれた。僕は指を鳴らした。大きな聲で笑つて、通行人を驚かした。

「うん、」と僕は言つた。「これからお前はレヴィオン牧師のところへ行くがいゝ。是非さうしよう。さうだ、物は試しだ。なぜお前は愚圖つてゐるんだ？　天氣だつてこんなにいゝぢやないか？」

僕はパシヤ書店に行き、牧師レヴィオンの住所を紳士錄で搜し出して、出かけて行つた。

「今度こそ時節到來だ。」と、僕は言つた。「もう馬鹿をしなさるな、良心だなんかつてお前は言ふのかい。無意味なことを言ふもんぢやない。お前は、良心なんか持つてゐるには餘りに貧乏だ。お前は飢ゑてゐる、一番大事な用があつて來てゐるんだよ、一番必要なものが要るんだよ。お前は頭をかしげて、お前の言葉に調子をつけなけりやいけない。お前はさうしようとは思はないか。いやか。ぢや僕は一足もお前と一緒には行かないよ。お前はそれを知つてゐる筈だが。うん、確かに知つてゐる。お前は周圍と苦鬪を續けて來た。闇の力や、巨きな、聲のない、夜の怪物と鬪つた。それは恐ろしいことだ、葡萄酒や牛乳にひどく渴してゐても、口に入れた例がないのだ。お前はそれ程までになつてゐる。今お前は此處に立つて、空つぽなランプの油壺だけより外にはもつてゐない。けれども、幸にもお前は恩寵を信ずる、お前はまだ信仰を失はないのだ！　お前は恩寵を信ずるなら、合掌して、眞の惡魔のするやうに、うまく見せかけなけりやならん。黃金神だけは、どんな姿をしてゐても、お前は寄せつけないが、たゞ一二クローネルの寄附帳だけは別物だ。」

僕は牧師館の門口に立つて、その貼札を讀んだ——

『執務時間、十二時より四時まで』

「もうヘマはやるまいぞ！」と僕は自分に言つた。「今度こそ眞面目にやらなけりやいけないぞ！　頭を低くしてね、そら、もつと〳〵……」

僕は牧師館のベルを鳴らした。

「私は牧師樣にお目にかゝりたいのですが。」と、女中に言つた。けれども、神樣のお名前を引合ひに出すことは僕には出來なかつた。（神樣の名を引合ひに出す事はを食などが哀願する場合）

「只今お出かけになりました。」と、女中は答へた。

お出かけ！　お出かけ！　それでこつちの目的がすつか

り打ち壞された。言はうと思つてゐたことがすつかり狂つてしまつた。此處まで態々やつて來たことが何の役に立つたのか。僕はそこに立ち竦んでしまつた。

「何か特別な御用でも？」と、女中は訊いた。

「いゝえ何も！」と、僕は答へた。「少しも用はありません。餘り天氣が好いものですから、ちよつとお訪ねしてみたのです。」

僕が立つてゐれば、女中も立つてゐた。僕は態と胸を突き出して、女中に、上衣の釦がちやんと揃つてゐることを見せようとした。そして、なぜ此處にやつて來たかを見てくれといふやうな眼付をしたが、女中は少しも覺らなかつた。

「本當に良いお天氣です、えゝ。あの、奥さんはお在宅なんでせうね？」

「えゝ。でもリウマチスで床についたきりお體を動かすこともお出來なさいません……何かお言づけでもございましたら。」

「いゝえ、それには及びません。私は只ぶら〳〵散歩してゐるだけです、運動の爲めに……。食後は散歩に限りますからね。」

僕は元來た路を戻つて行つた。この上饒舌を弄したからとてどうなるものか。のみならず僕は眩暈がして來た。仆れはしなかつたが危く正氣を失ふところだつた。執務時間、十二時より四時までだ。僕は餘り遲く來たのだ。恩寵の時間は過ぎてゐたのだ！

大市場に來て、僕は教會の傍の腰掛に腰を下ろした。一體これはどうしたと言ふのだ。なぜこんなに世間が暗く見えるのだらう！　僕は餘り疲れてゐたので、泣くにも泣かれなかつた、何をしようとする力もなく、たゞそこに坐つたまゝ動かず、飢ゑきつてゐた。胸のうちはまるで火がついたやうで、不思議な苦痛が、炙き金で五臟六腑をかきまはすやうだつた。鉋屑を舐つてももう駄目だつた。僕の顎は無益な仕事に疲れてしまつた。僕はもうそんなことを止めた。諦めた。そればかりではない、路ばたで拾つて、直ぐに囓つた林檎の褐色の芯で胸を惡くしたのだ。僕は氣分が惡くなつた。手頸の靜脈が太くふくれ上がつた。

一體僕は何を期待してゐたらうか。僕の生命をいくらか長める一クローネの金を求めて、終日駈けまはつてゐたのだ。避け難い運命が一日早からうが、又遲からうが、結局同じことではないか。若し僕が、人並みの人間なら、ちやんと家へ歸つて、寢床に入つて運命を待つたのだらう。僕の頭はちよつとの間、明かになつてゐた。

今こそ僕は死ぬべきだ。時は秋で、すべての物が眠りに入る季節だ。僕は手段といふ手段はもう皆やつてみた、知つてゐる限りのあらゆる救助の機關を利用し盡くした。僕はかう考へると、一層感傷的になつた。それでもなほ、何かの救ひがありさうなものだと空頼みをしながら、竊に呟いた——

「貴樣は馬鹿者だ。貴樣は、もう死にかけてゐるぢやないか！」

僕は先づ、一二通の書置を書き、一切の支度をしなけりやならないし、僕自身の用意もしなけりやならん。僕は體を洗ひ清め、寢床をちやんと整頓し、二三枚の白紙——僕がなほもつてゐた一番清潔な——を枕にかぶせ、絲の敷布を……

絲の敷布！

僕は突然、ぱつと眼を開いた。血が頭に上り胸は高く鼓動した。僕は腰掛から立ち上つて、歩き出した。生命は再び僕の全身に浪打つた。僕は一歩々々きれ〴〵な言葉を繰返した。

「絲の敷布！　絲の敷布！」

僕は、何物かを取りにでも行くやうに急ぎ出した、そして暫く經つと、再びブリキ工場の僕の住家に來た。

一瞬も躊躇せず、又決心を少しも鈍らさずに、僕は直ぐ寢床に行き、ハンス・バウリから借りた敷布を丸めた。僕のうまい思ひ付きが僕を救へなかつたなら、それこそ不思議なことだつたらう。僕は心の中に浮んだ馬鹿げた懸念——即ちこれは私の名譽の上の最初の汚點だといふ内心の囁きには耳を假さなかつた。そんなことは僕には分りきつたことだつた。僕は聖人でもない、又馬鹿堅い道德者でもない、僕にはまだ理性が殘つてゐる……

僕は敷布を小脇に挾んで、ステーネルス街五番地へ行つた。

僕は戸を叩いて、初めて、大きな、見馴れぬ廣間に入つた。戸の鈴は僕の頭の上で、いやといふ程鳴つた。一人の男が側の部屋から、食物を一杯に頰張つて、口をむしやむしや言はしながら出て來て、帳場に立つた。

「どうかこの眼鏡で、半クローネ貸して臭れませんか。」と、僕が言つた。「二三日經てばきつと受出しますから。」

「え？……いや、それは鋼鐵縁ぢやありませんか。」

「えゝ。」

「ぢや、お貸し申すことは出來ません。」

「成程、そんなことは出來ないでせうね。ほんの冗談でした。で僕は此處に不用な敷布を一枚持つてゐるんですが、

これなら取つていたゞけると思ひますが。」
「お生憎さまですが、手前どもでは寢具類はもう一ぱいなんです。」と、彼が答へた。そして僕がそれを展げると、彼はちよつと見て、叫んだ——
「どうもお氣の毒樣、さういふものは手前どもでは戴けませんから！」
「僕は一番ひどく損んだ側を先きに見せたんですが、他の側はずつと良いんです。」
「えゝ、よく分つてゐますが、手前共ではそれを戴きたくはございません。又何處へお持ちになりましても、それで十オウレもお借りなさることは出來ませんよ。」
「いや、これだけでは大した價値のないことは分つてゐます、けれども、他の古い敷布と一緒に糶賣に出せないことはないでせう。」
「いえ、そんなことは出來ません。」
「二十五オウレには？」と、僕が言つた。
「いえ、私のとこぢや、そんなものは、ちつとも引受けたくないんですよ。そんなものを家に置きたくないのですから。」
そこで僕は再び敷布を小脇にはさんで、家へ戻つて來た。

僕は何事も起らなかつたものゝやうに、再び敷布を寢床の上に擲げて、いつもの通り、出來るだけよく皺を延ばし、僕が今質屋へ持つて行つた痕跡を、すつかり消してしまはうとした。僕がこんな下らない入質などをやらうと決心した時には、僕は明白な意識をもつてはゐなかつたらしい。この事を考へれば考へる程、理窟が合はぬやうに思はれた。それはついうつかり心の弱點に乘ぜられたに違ひない。だが僕はその罠にはまるやうなことをしなかつた。僕は初めからそれは結局、うまく行かないと推量してゐたから、特にまづ眼鏡を出して試してみたのだ。で僕は、自分が一生の最後を傷つけるこの罪を犯さなかつたことを、非常に悅んだ。
そして僕は再び市中をうろついた。
僕は又もヴォール・フレールセルス教會側の腰掛に腰を下した。首を胸まで垂らし、今までの昂奮の反動でがつかりして、飢ゑと疲勞とに打負かされて、こつくり〳〵居眠りを始めた。
かうして時が經つて行つた。
なほ一時間ばかりは戸外に居ようと思つた。戸外は家の内より明るいばかりでなく、新鮮な空氣の中にゐると、胸の苦しみがそれ程ひどくないやうに思はれたからだ。それ

に家へだつて餘り晩くならないうちに歸りつけるのだ……
僕は居眠りしながら考へたりして、ひどく苦しんだ。何か口に入れて舐るものが欲しいので、小さな石を拾ひ取り、きれいに拭いて口に入れた。それより外には僕は身動きもしなければ、眼も動かさなかつた。僕の周圍には人が往來した。轍、蹄、話聲などあたりの空氣に反響した。
然しあの釦の質入れをやつてはどうだらうか？
いや、それは勿論駄目である。こんな妄想を起すのは、矢張り本當に病氣になつてゐるのだ。けれど、よく考へてみると、僕の歸り途はどうしても『叔父さん』のところ——僕がお馴染の『叔父さん』の店の前を通るより外に仕方がなからう。
やうやく僕は立ち上つて、足を曳きずりながら、のろのろと街路を歩いて行つた。僕の眉の上は燃え始めた。眉は熱で釣り上つた。それでも出來るだけ急いだ。再び、パンの陳列してあるパン屋の前に來た。
「さあ今度は此處に立ち止まつちやいけない。」と、僕は決心したふりをして自分に言つてきかした。けれども入つて行つて、パンを一片下さいと願つたらどうだつたらうか。それはちよつとした心の閃きであつた。「馬鹿な！」と、僕は呟いて、頭を振つた。そして自分を嘲笑ひながら、再び歩いた。店に行つて物を乞うたところが、無駄なことは、僕がよく知つてゐたのだ。
レプスラーゲル小路の、或る門内では、戀仲の男女が何か囁いてゐた。少し行くと一人の女が窓から顏を出した。僕は考へ込みながら、そろ〳〵と歩いて行つた。何事か深い思案に暮れてゐるやうに見えたらう。と、その女は通りへ出て來た。
「どうしたの、兄さん？　病氣？　おやまあ、その顏つたら！」
女は急いで行つてしまつた。
僕はふと立ち止まつた。
僕の顏はどうなつてゐたのだらう。僕は本當に死ぬところだらうか。僕は頬を手で撫で廻してみた。痩せてゐた。勿論痩せてゐた。兩頬は、底深い二つの盃のやうになつてゐた。だがまあ……僕は足を曳きずつて行つた。
けれども又立ち止まつた。僕はまつたく、信じられぬ程痩せてゐるに相違なかつた。眼は頭の中に引込みかけてゐた。一體僕はどんな風に見えたらうか。人が生きた體を、只飢ゑから、こんな不具にしなければならないとは怪しからぬことだ。僕は又憤りの念の起るのを感じたが、それは最後の一燃えで、單に筋肉の痙攣に過ぎなかつた。

一體これは何て面だ？　此處に國内無雙の頭をもつた、又强い人夫でも――神よ免し給へ――粉微塵にぶち碎くことの出來る一雙の拳をもつた僕が、クリスチャニヤ市の中央で、飢ゑの爲めに不具者のやうに憔悴してゐるとは！　それは何かの法令規則でゞもあることか。僕は乳を搾る小舍に臥て、牝馬が挽臼にかゝつてゐるやうに晝も、夜も、勞働した。僕は眼玉の飛び出す程讀書した。そして、頭の底から智慧を絞り出して、腦味噌の飢饉を起してゐるのだ。それだのに、糞ッ！　何の得るところがあつたか。白首さへ僕の顏を避けたではないか。けれどもそんなことは「もう止めろ」つて言ふんだ――おい、貴樣分つてゐるか！――「止めろ」と言つてゐるのだぞ、畜生め！

愈々募つてくる憤りに齒ぎしりしながらも、矢張り衰弱を感じて、泣き且つ呪ひながら、往來の人には目もくれないで、狂人のやうに歩き續けた。僕は幾度も自身を責め苛み、わざと額を街燈の柱に打つけてみたり、掌に深く爪を立てゝみたりした。はつきりと物を言はないからと言つては、自分の舌を狂人のやうに嚙み、それを痛いと感ずる度毎にから〳〵と笑つた。

「それはさうだ、けれども僕はどうすればいゝのか。」と、しまひに僕は自分に訊いた。そして街路で幾度も〳〵地團駄踏んで、この言葉を繰り返した。

「僕はどうすればいゝのか。」

一人の紳士が通りすがりに、微笑して言つた――

「癲狂院へ行つて監禁して貰ふのさ。」

僕はその人の後姿を見送つた。その人は僕等が『公爵』と綽名をつけてゐた、知り合ひの婦人科醫であつた。彼は、僕の內情をちつとも知らなかつた。それでも僕がその手を握つたことのある知人であつた。僕は落着いた。監禁？　さうだ、僕は本當に發狂してゐた。彼の言ふ事は正しかつた。僕は自分の血の中に發狂を感じた。狂氣の荒れまはるのを腦の中に感じた。そんなことは、僕はもうお終ひにしなければならん！　さうだ、さうだ！　そこで僕は再びそろそろと、悲しい歩みを始めた。僕だつて何處かへ落着く處をきめなければならない！

僕は又立ち止まつた。

「けれども監禁はいけない！」と、僕は言つた。「それはいけない！」

そして心配の餘り、僕はぜい〳〵と呼吸をはずましてゐた。僕は天に向つて、監禁されないように愁訴した。も一度市廳に行つて、一點の光りもない、暗い監房に禁錮されるなんて、そんなことはいけない！　僕がまだ試みたこ

とのない、違つた方法がなほ殘つてゐた。そこで僕はそれをやつてみようと思つた。僕はたゞ勉强して、根氣よく、家から家をまはつて歩けばよいのである。たとへば樂器店シスレルのところである。あそこへは、まだ一度も行つたことはなかつた。「そら、もう良い考へが一つ浮んだ……」と自分に言ふと、嬉し涙が流れた。たゞ監禁されさへしなけりゃ！

シスレルとはよく思ひついた！　それこそ天啓ぢやないか。彼の名は何の理由もなしに、突然僕の心に浮んだのだ。ひどく遠い處に住つてゐるが、是非訪ねてみよう、そろそろと歩いて、ときゞ休みさへすればよい。道も分つてゐるし、これほど零落しなかつた時には度々そこへ行つて、二三の樂譜を買つたこともある。半クローネ下さいと言つたらどうだらう？　それぢや餘り少くて失禮だと向うで氣の毒がるだらう。一クローネと切りだすことだな。

僕は店に入つて、主人はおいでなさるかと訊いた。僕は主人の事務室に通された。立派な流行の服裝をした主人は、そこに腰掛けて、書類を讀んでゐた。

僕は吃りながら、無躾を詫びて、用向きを話した。何ともしやうがなくてこゝに來たこと……お返しするのにそんなに永く暇はとらせないといふこと……僕の文章が幸に新聞に載れば……彼は僕に對して、大きな恩惠を施すことになるといふこと……

僕が話してゐるうちにも、始終彼は机に向つて、その仕事を續けてゐた。僕が言ひ終ると、彼は半身を此方へ向けて、その美しい頭を振りながら、言つた――

「いけません。」

全く『いけません』と言つたゞけだつた。その說明はなかつた、もう一言も言はなかつた。

僕の膝は烈しく震へた。僕は小さな、ワニス塗りの戶棚に身を支へた。僕はも一度頼んでみようとした。あのファテルランドにゐた時、何だつて彼の名が心に浮んだのだらう。僕の左の方の腋の下が二三度ひきつゝて冷汗が流れ出た。

「えゝ、僕は全く飢ゑきつてゐるのです。」と、言つた。「おまけに、可なり健康を害してゐます。きつと一兩日中にお返しゝますから、どうでせう、一つお情で貸して下さることは出來ませんか。」

「貴方、何だつて私のところにおいでなすつたのですか。」と、彼が言つた。「貴方はまつたく私の知らない人です。通りから、だしぬけに入つて來た人です。貴方を知つてる新聞社へ行つたらいゝでせう。」

「けれども今夜は！」と、僕は言つた。「もう社は退けてを

ります。それに僕はひどく空腹なんです。」

彼は續け様に頭を振つた。僕が出口の把手に手を掛けてからまでも續けて振つた。

「左様なら！」と、僕は言つた。

それはちつとも天啓ぢやなかつた、と思つて僕は苦笑した。そんなことを天啓と云へるものなら、僕だつてそれぐらゐのヒントはいくらでも與へることは出來る。

僕はこの區から次の區へと、疲れた足を曳きずりながら歩いた。時々一寸階段に休んだ。若しか監禁されたら！監房の恐ろしさが僕に附き纏つて、一刻も安心させなかつた。巡査に出會ふ度に、それを避ける爲め、僕は横路に逃げ込んだ。

「さあもう百歩だ。」と、僕が言つた。「もう一度、運を試してみるんだ！　一度ぐらゐはものになるだらう！」

そこに僕がまだ足をふみ入れたことのない小さな絲屋があつた。たつた一人の男が、帳場の後ろで仕事をしてゐた。瀬戸物の札をかけた事務室の奥には、荷物の一ぱい詰つた戸棚や臺が、ずらりと並んでゐた。僕は丁度來合せてゐるお客が、歸るのを待つてゐた。お客といふのは靴のある一人の貴婦人だつた。

その女の幸福な顔と言つたら！

僕は上衣の釦に注意を惹かうとしてみたが、女は見向きもしないで、去つてしまつた。

「何ぞ御用ですか。」と、雇人が覗いた。

「御主人はおいでなさいますか？」と、僕が言つた。

「ヨツウンハイムンの山登りに參つてをります。」と、彼が答へた。「何ぞ特別な事でも？」

「ほんの二三オウレのことなんです。」と言つて、僕は、作り笑ひをした。「僕は腹が空いてゐますが、一オウレも持つてゐません。」

「それぢや貴方は私と同じ身代なんですね。」と彼は言つて、すまして荷拵へにかゝつた。

「おゝ、僕を追ひ出さないで下さい――追ひ出さないで！」と僕はぞつと悪寒を感じながら言つた。「僕は空腹で、本當に死にかけてゐます。もう幾日も何も食はないのです。」

彼は極めて眞面目に、一言もいはずに、そのポケットを一つ〳〵裏返しにした。これでも俺の言つたのを本當にしないのか？と云ふやうに。

「たつた五オウレです。」と、僕は言つた。「さうすれば、それが二三日のうちには十オウレになつて貴方に戻ります。」

「ぢや貴方は錢函から五オウレ私に盗み出せつて言ふんですか。」と、彼は苛々して言つた。

「えゝ。」と、僕は言つた。「どうぞ錢函から五オウレ取つて下さい。」

「そんなことは私には出來ません。」と、彼は結んで、「もうそんなお話は澤山です。」と附け足した。

僕は、飢ゑに惱み、恥で赧くなつて出て行つた。

いや、こんなことはもうお終ひにしなければならん！これはあんまりひどい。僕は永い年月、立派な行ひをして來た。非常な障害のうちに毅然として立つて來た。然るに今忽ちにして、情ない乞食に身を落してしまつた。この一日で考へが荒んで、物慾に心が汚れてしまつた。小つぽけな商人なんかにあはれつぽく持ちかけて、涙を流すことを恥ぢなくなつた。而もそれが何になつたか。口に入れるパン一片なくとも、なほ堪へて行かれないこともなかつたらうに。僕は自分に愛想の盡きることをしてしまつた。さうだ、そんなことは、もう止めなければならん！　もう家の門が閉つてゐる頃だ。急がないと、もう一度市廳に泊るやうなことにならう……

僕は急いで行つた……

これを考へると僕は力がついた。も一度市廳の宿泊所に泊ることは眞平だ。

前屈みになり、手で左の脇を押へて、苦しみを幾分か弱めるやうにしながら、僕はやう〳〵足を曳きずつて歩いた。知り合ひの者に挨拶せねばならない面倒を避ける爲め、眼を鋪石にばかり向けて消防署の方に急いで行つた。有難いことにヴォール・フレールセルス教會の時計はまだやつと七時であつた。門が閉るまでにはまだ三時間あつた。少しも心配する必要はなかつたのだ。

やつてみなかつたことは何一つだつてありはしない、もうやれるだけの事は皆やつてしまつたのだ。だのに一日の間に一度だつて良い目に會はないとは本當にどうしたことだ！　誰に話してみても、それを信じはすまいし、書いてみても、それを假作事だと言つて、たゞの一箇所だつて信じはすまい！　まつたくどうにもしやうがなかつたのだ。この上は餘計に歩きまはつて、ひどい目に會はないだけの事だ。

ふん、まつたくあれは嘔吐の出さうな厭なものだつたさ、お前が僕のきたない遣り方に、蟲酸をはしらしたのは無理もない。若し一切の希望がなくなつたら、もうお終ひだ。が、待てよ、厩の燕麥を一握り盗むとしたらどんなものだらう。けれども、この考は單に一筋の光明、瞬間の希望の輝やきに過ぎなかつた――僕はもう厩が閉つてゐることを知つてゐたから。

僕はのんびりした氣持になつて、蝸牛の觸はふやうに、家へ歸つて行つた。僕は渴きを覺えた。幸にも、この日初めての渴きであつた。行く〳〵水を飲む場所を搜した。僕は市場から遠く離れてゐたので、誰かの家へ入つて行かなければならなかつたが、それは厭だつた。恐らく自分の住居へ戻りつくまで待つて居られたかも知れないが、それはなほ十五分かゝるのだ。それにしても、僕が一ぱいの水を飲むに堪へるかどうかは、容易に言へるものではない。僕の胃の腑は最早何物にも堪へなかつたのだ。僕が道すがら呑み込む唾ですらも、胸をむか〳〵させたほどだから。

けれども釦は？　僕はまだ釦を試してみたことはない。

そこで僕はぴたりと立ち止まつて、莞爾と笑つた。

きつとこれも何かの役に立つだらう！　僕だつて全く運が盡きたわけぢやない！　僕はそれで十オウレだけ手に入れられるだらう。明日は又何處かで、十オウレ手に入る。それから、太曜日には新聞の原稿料が入る。僕にも運が向いて來るわい、僕はどうして釦のことを忘れてゐたのだらう！

僕は釦をポケットから取り出し、歩きながらそれを眺めた。眼は嬉しさに眩んで、自分の歩いてゐる路がまるつきり見えなかつた。

夕方によく僕が出かけて行つた、僕の生血を吸ふ恩人！その人のゐる大きな地下室の質屋を、僕が覺えてゐないでどうしようぞ！　僕の所有物は次から次へと、その中へ消え去つた——家から持出した些かなもの、僕の最後の本など。あの競賣の日に、そこに出かけて行つて、僕の本が立派な人の手に渡るのを見る度に、悅んだものである。俳優のマーゲルスンの手に僕の時計が落ちた時などは、鼻が高かつた。僕の處女作の詩を載せた曆は、僕の知人が買ひ取つた。それから僕の外套は、或る寫眞屋に引き取られた。だからもう何にもぐづ〳〵言ふべきことはない。

僕は釦をちやんと手にもつて、店へ入つた。

『叔父さん』は机に凭つて、何やら書いてゐた。

「別に急ぎはしないのですが。」と、僕は邪魔をして、怒らしてはいけないと思つて恐る〳〵言つた。僕の聲は、自分でもこれまでに覺えのない程變だつた。僕の心臟は金槌を打つやうに鼓動した。

彼はいつもの通り、にこ〳〵して僕の方へやつて來て、兩手を臺の上に平に置き、何も言はずに僕の顏を見た。

「僕は取つて貰はれるかどうかお訊きしたいものを持つて來ましたよ。——家へもつて歸るのも邪魔なんで。えゝ、あると全く面倒臭いもので——釦なんですか。」

なぜ又釦が邪魔なんだらう、なぜ釦が邪魔かしら？彼は僕の手を見下した。

若しやこの釦で何オウレか貸して貰へまいか？……彼がこれ位ならばと考へるだけの値段で——まつたく彼自身の見積りで……

「釦？」と、『叔父さん』は僕の言葉を怪しさうに、僕をみつめた。「その釦？」

ほんの葉卷煙草一本の値段だけか、でなくとも彼の見計ひでいゝのだ。丁度通りすがりで、ちよつと寄つてみたんだ。

すると質屋の老爺は笑つて、何も言はずに机へ向き直つた。僕はそこに立つてゐた。僕は過分の望みをかけてはゐなかつたけれど、どうにかなるだらうとは思つてゐたのだ。それだのにこの笑ひは、僕に取つて死の宣告だつた。では眼鏡ではどうだらうか。僕は勿論眼鏡を手放す積りだつたのだ。それは言ふまでもない、と言つて、眼鏡を外した。たつた十オウレ、でなければ五オウレでもいゝ。

「貴方の眼鏡でお貸し申すことは出來ませんよ。それは御存じの筈です。」と、『叔父さん』が言つた。「その事は前にも申上げましたでせう。」

「でも僕は郵便切手が一枚入用なんで……」と、僕は低い聲で言つた。「書いた手紙が出せなかつたものですから。十オウレか五オウレの切手が要るんです。」

「いや、もうどうぞ行つて下さい！」と、彼は僕に向つて手を振つた。

さう〳〵、さう來るところだと、僕は獨語ちた。器械的に眼鏡をかけ、釦を手にとつて出かけた。僕は左樣ならを言つて、例によつて戸を閉めて出た。

さて、もうこの上、どうしようもない！

階段の外で立ち止まつて、僕は、もう一度釦を眺めた。

「あいつこれを取らうとしないんだ！」と、僕が言つた。「これは新らしいのと餘り違はないのに。さつぱり譯が分らないな。」

僕がかう眺めて立つてゐる間に、一人の男が傍を通つて、地下室へ入つて行つた。彼は通りすがりに、ちよつと僕に突き當つた。僕達は互ひに御免なさいと言つた。そして、僕は振り返つて、彼を見た。

「おやッ、君か。」と、彼は突然下の段から言つた。そして後戻りして上つて來た。僕はそれが誰であつたかを知つた。

「おや〳〵、君はまあどうしたんだね！」と彼が言つた。

「君は何しに此處へ來たんだ？」

「ほゝう――『叔父さん』に用事があつたのだよ。君も行くところだね？」

「うん、さうだ――君の持つてゐるのは何だい。」

僕の膝は顫へた。壁に倚り掛つて、手の釦を差出した。

「何だい、そりや？」と、彼は叫んだ。「ひどい落ちぶれ方ぢやないか。」

「左樣なら！」と言つて、僕は行きかけた。僕は涙で胸が塞がつた。

「おい、ちよつと待ち給へ！」と、彼が言つた。

何を僕は待つのか。彼も『叔父さん』のところへ行くのだ。きつと、結婚の指輪をもつて來たのだらうに。又、二三日も食はないでゐて、下宿の主婦に拂ひが溜つてもゐるのだらうに。

「うん。」と、僕は答へた。「若し君が用を直ぐすまして出てくるんなら……」

「無論さ。」と、彼が言つて僕の腕をとつた。「けれども、僕は君の言ふことは信用出來ないぜ。君どうかしてゐるから、僕に尾いて下まで來給へ。」

僕は彼が何をしようとしてゐるかを悟つて、突然、自分の體面といふものを想ひ出した。僕は答へた――

「いけない！　僕はベルント・アンゲルス街に七時半までに行く約束が……」

「七時半だつて、成程！　けれども今はもう八時だよ。これ此處に時計がある。今こいつを下に持つて行くところなんだ。だから一緒に降りて來給へ、君は腹が空つてゐるんぢやないか！　少くも五クローネルは手に入れてあげるから。」

彼は僕を中へ突き入れた。

三

一週間は立派に、樂しく過ぎた。

その時は一番の困難な峠は越してゐた。僕は元氣づいて、あれからこれへと仕事が忙しかつた。僕は一時に三つ或は四つの仕事を抱へてゐた。その仕事は僕のあはれな頭に起る一閃光、一思想を捉き取つたものであつた。萬事、前よりもずつと好都合に行くやうに見えた。僕があれ程駈けずり廻り、あれ程多くの希望をかけてゐた近作の原稿は、とうの昔に主筆から突き戻されてゐた。僕の方でも侮辱されたと思つたので腹が立つたから、讀み直しもしないで直ぐに引き裂いてしまつた。それから後は、僕は別な方面に仕事がありはしまいか、他の新聞にわたりをつけてみようかなどゝ思つた。愈々いけなくなつたら、船の中に逃げ込んでもいゝと思つた。波止場にはノンネン號が出帆の準備を整へてゐた。アルハンゲリスク（北氷洋の露國の港）か、或は何處へでもその船の行く先へ、勞働しながら渡つて行かれるだらう。どちらにでも見込みはつけられた。

近頃の絶食で僕は體をいためてゐた。髮がぼろ〳〵と拔けだした。頭痛は、朝のうちが特にひどかつた。又神經過敏は少しも癒らなかつた。書間書き物をするときには、手に痙攣を卷きつけた。これは只、手に自分の息がかゝるのに我慢がならなかつたからである。若しイエンス・オライが下で戸を烈しく閉めるか、犬が裏庭へ入つて吼えでもすると、まるで骨髓に冷たい棒を突きとほされるやうに、體中に響き渡るのだ。僕はひどく弱つてゐた。

來る日も來る日も、僕は仕事に精出して、ゆつくり飯を食つてゐる間もなく、再び書きものに取りかゝるのであつた。その時分には僕の寢床の上も、脚がよろ〳〵する机の上も、僕が交る〴〵に手を付けてゐる書きかけの紙や、ノートで一ぱいになつてゐた。その紙にはその日新らしく僕の頭に起つた考へが書き附けられたり、消してしまはれたりした。又、一度死んだところでもちよい〳〵色彩に富んだ佳句がある爲めに、再び生き返ることもあつた。僕は一章々々と非常な骨折で、たど〳〵と進んで行くのであつた。

或る夕方、僕の勞作の一つがどうやら出來上つたので、僕は悅んで、いそ〳〵と、ポケットにそれを押込み、『大將』（新聞の編輯部）のところへ出掛けた。それは少しの金を得ようとして、又もや非常な努力をしてゐる眞最中であつた。僕のポケットには、もう幾オウレも殘つてゐなかつたのだ。

『大將』はそこに僕を腰掛けさした。……そして又書き物を續けた。

僕は小さな事務室の中を見廻した。胸像、石版畫、切拔き、まるで人間を頭からでも手足からでも呑み込んでしまへさうな、不體裁な、大きな紙屑籠などが置いてあつた。僕はその怪物のやうに龍の顎を開いて、いつも新らしい沒書――新らしい踏みにじられた希望――を受取らうと待ち構へてゐる有樣を見ると、何だか情けなくなつて來た。

「今日は幾日ですか。」と、突然『大將』は机のところから訊いた。

「二十八日です。」と、僕は『大將』の御用を足してやれることを悅んで答へた。

「二十八日……」

彼は矢張り書き續けた。やがて彼は一二の手紙の封をして、幾枚かの紙を屑籠に拋り込み、ペンを擱いた。そこで

椅子の上に身を揺つて、此方へ向き直つた。僕がまだ戸口に立つてゐるのを見ると、半ば眞面目な、半ば巫山戯た手眞似で、そこにある一つの椅子を指した。

上衣の前を開けても、胴着を着てゐないことを彼に見られないやうな具合に身を向けて、僕はポケットから原稿を取り出した。

「之はコルレッジオ（南伊大利の、文藝復興期に於ける有名なる畫家）の小さな評傳です。」と、僕は言つた。「殘念ながら、お氣に入るやうには書いてないかも知れませんけれど——」

彼は僕の手から原稿を取つて、頁を繰つた。彼は僕の方に顏を向けてゐた。僕がもう子供の時分からその名を知つてゐる人で、又その新聞で多年僕に大きな影響を及ぼしてゐるこの男を、近くから見ると、髪は縮れて、見事な碧い眼は始終そは〳〵してゐた。彼は時折少し鼻を鳴らす癖があつた。そのペンの觸るゝところ、常に血みどろな流れを現出するこの記者の優しさは、蘇格蘭の牧師でも遠く及ばないやうに見える。この人の前にゐると、僕は自然に畏敬と嘆賞の念とが起つて、涙がおのづと眼に浮ばずにはゐなかつた。僕は我知らず進み出て、どれ程彼が僕に與へるところがあり、どれほど僕は彼が好きであるかを告げ知らせ、どうか僕を困らさないで下さいと願はうと思つた——僕はあはれな馬鹿者で、おまけにひどい目に會つてゐるものです……

彼は僕を見上げ、そろ〳〵と原稿を下に置いて、坐つたまゝぢつと考へ込んだ。拒絶の言葉を出し易いやうに、僕は少し手を伸ばして、言つた——

「あゝ、やつぱり、それぢや駄目ですかね。」

そして僕は、そんなことを深く氣にしてゐないと言ふやうに微笑した。

「私共ぢやまつたく通俗的なものが入用なんです。」と、彼が答へた。「どんな讀者を私共がもつてゐるかは、貴方が御存じの通りです。で、もう少し平易にしていたゞけませんか。それとも一般の讀者にもつとよく分る他の題材を見つけていたゞくとしませうか。」

彼の遠慮深さは僕を驚かした。僕は、自分の原稿は沒書となるものと悟つたが、それでもまだ、きつぱりとした拒絶を受けはしなかつた。この上永く彼を煩はして置くまいと、僕は言つた——

「えゝ、さうされないこともありません。」

僕は戸口へ行つた。

ふむ、先方ぢや此方がこんな物をもつて行つたので、迷惑したといふのだらう。……僕は頭を下げて、扉の把手を握

た。

「若し御入用なら、」と、彼が言つた。「少し前金を上げてもかまひませんが……その金に對してお書き下さればいゝのです。」

彼は、僕には迚も急いで書けないと見たので、こんな譲歩を申し出たのである。僕は答へた——

「いゝえ、有難う。もう暫くはやつていけますから。御厚意は大變有難うございますが。左樣なら！」

「左樣なら！」と、『大將』は答へて、同時にその机に向き直つた。

彼は今、僕に法外な厚意を見せたのであつた。僕はそれを有難く思つた。僕は『大將』が驚いてしまつて何の躊躇もなく、直ぐ十クローネル拂つてくれるやうな、又僕も十分滿足するやうな文章が出來るまでは、二度と彼を訪れまいと決心の臍を堅めた。そこで僕は家へ歸つて、直ぐ書き直しに取りかゝつた。

翌晩から、八時頃瓦斯燈が點されると、きまつて次のやうなことが起るのであつた——

僕がその日の勞苦を癒すため、通をぶらつかうとして玄關を出ると、門の直ぐ前の瓦斯燈のところに黑い衣服を着た一人の女が立つてゐて、僕がそのそばを通り過ぎるのを、眼で追つてゐるのであつた。僕はその女が始終同じ衣服をつけ、その顏を、胸まで垂れる厚い面紗で隱し、柄に象牙の環のついた小さな雨傘をもつてゐることに氣がついた。

その女を、いつも同じ場所に見るのが、もう三晩つゞいた。僕がその傍を通り過ぎると直ぐに、女はゆるやかに身をかへして、通を下つて行くのであつた。

昂奮した僕の頭は、ひそかにその觸角をのばして、直ぐに、女は、きつと僕を訪ねて來るのだといふ、馬鹿げた推量をしたのだ。後には、僕はその女を呼びかけてみようか、何人を捜してゐるのか訊いてみようか、何か扶けをしてあげることはないか、家まで送つてあげませうと訊いてみようかなどゝ思ふやうになつた。僕は、服裝こそ遺憾ながら粗末だが、暗い通路を彼女を保護して行くことは出來るのだ。けれども、僕はなぜかしら葡萄酒一杯とか馬車賃とかいふやうなものが、その爲めに要りはしないかと危ぶんだ。僕はもう一文も持つてゐなかつたのだから、情けない空なポケットは、僕をひどく落膽さした。僕は女のそばを通るとき、ふ少し、しつかり眼をつけて見る勇氣をもたなかつた。飢ゑが又僕を襲ひ出した。僕は昨晩から何も食べないでゐた。が、今度は左程に永い間の斷食でもなかつた、以

前にはもつと幾日も食べないでゐられたのだから。けれども僕は、もとのやうに飢ゑを辛抱してゐることは出來なくなつたらしい。たつた一日食べないでも、殆ど死にさうな氣持になり、水を飲むと直ぐむか〳〵嘔氣を催して來た。その上、夜寢てゐると凍える程寒いので、晝間出歩く時のまゝ、そつくり衣服を着込んで、寢床に入つた。毎晩、氷のやうに色蒼ざめ、堅く縮こまつて寢るのであつた。古い毛布はすき間漏る風を防ぐことが出來ず、朝、目を醒ますと、戸外から吹き込んで來た寒風で、鼻が塞つてゐるのだつた。

僕は往來を歩きながら、どうして身を立てゝ行かうか、次の文句をどう續けたら善いだらうかと考へた。ちよつとでも蠟燭をつけることが出來たなら、僕は夜どほし働いてゐたらうに。一二時間もすれば、僕は仕事に油がのつて、翌朝は又『大將』を訪ねられようものを。

僕はもう外に仕方はないから、オブランスケ・カッフェに行き、銀行員の若い知人を訪ねて蠟燭を買ふ金を十オウレだけでも貸して貰ふことにきめた。僕は何の邪魔もされないで多くの部屋を通り過ぎた。賑かにお客達が圍んで、飲食してゐる卓子の幾つかを通り過ぎた。僕はカッフェのルウダ・ルムメット（赤い部屋）にまでも入つてみたが、僕のたづねる人は見えなかつた。ふさぎ込んで、ぶり〳〵しながら、元の街路に出て、宮城の方へ向つた。

畜生め、俺の不運はいつまで經つたつて果しがありやしない！

大股に、怒つた歩調で、衣服の襟をやけに首筋に押し上げ、手をズボンのポケットに差込み、途々ずつと、自分の星廻りの凶いことを呪ひながら歩いて行つた。この七八ケ月の間といふもの、一時間だつて心配の絶えた事はなかつた。一つの難局を切り拔けて、ものゝ一週間も經たぬうちに、又新らしい困難が僕の膝を打ち挫くのであつた。しかしこの慘苦のうちにも、僕は正直に振舞つた。徹頭徹尾正直だつた。あゝ僕はどんなに馬鹿だつたらう！

僕は一度ハンス・バウリの敷布を質屋へ持つて行つたので、どれ程良心の苛責を受けたかといふことを、獨りで言ひ出した。僕は自分の鋭い正義の念を嘲笑して、街路に唾を吐いた。僕は自分の愚かさに對して、十分に強く言ひあらはすべき適當な言葉を見つけ出せなかつた。

そんなことはもう止めなければならん！

その時街路で僕は、小學生の貯金が落ちてゐるのを見るとしたら、それが聖書の中の貧乏な寡婦の十オウレ一枚のやうなものだつたにしても、僕はそれを拾ひ上げてポケッ

トに入れ、平氣でそれを盜んで、終夜石のやうに靜かに眠つたであらう。そのとき僕は言葉に盡されぬ程苦しんでゐた。僕の忍耐はもう失はれて、どんなことでもやる覺悟でゐたのだつた。

僕は宮城の周圍を三四度廻つて、家へ戻る積りだつたが、も一度公園の中を少し歩いて、カルル・ヨハンス街を通つて歸つて行つた

十一時頃であつた。街路はやゝ暗く、靜かに女と二人連れだつて行く者やら、がや〳〵と賑かな五六人の群やら、しつきりなしに人が通つた。祕密な商賣の始まる、歡樂の時刻となつたのである。さら〳〵いふ女の衣摺れの音、短い、肉感的な笑ひ聲、波打つ胸、烈しく喘ぐ呼吸、遠くグランド・ホテルのあたりで「エムマさん！」と叫ぶ聲、通路はまるで、湯氣の立ち騰る沼のやうであつた。

僕は我知らずポケットの中に、二クローネルを搜した。通り過ぎる人の一擧一動に籠る慾情、暗い光りを投げる瓦斯燈、靜かに、飽和された夜など、すべてが僕に向つて包圍攻擊を始めた。囁き、抱擁、顚へながらの告白、とぎれとぎれの言葉、かすかな鳴聲、ブロム・クヴィストの門内で、大きな聲で客を呼ぶカッテン（即ち娼婦）——大變な賑かさだ。かゝる場合に空手でゐることは、たとへやうのない悲しみであり、慘めさである！　が、僕は二クローネルといふ金を持つてゐなかつた。何たる屈辱、何たる不名譽だらう！

あはれな寡婦の僅かな遺產でも、僕は盜んでやらう。又小學生の帽子やハンケチ、乞食の面桶などでも、僕は今若し手に入るなら、默つて屑屋へ賣拂つて、飲み食ひに使つてしまつたらうなどゝ、今更想つたりするのだつた。己れを慰め、己れを清くせんが爲めに、僕は、自分のそばを通り過ぎる、この愉快さうな人々のあらゆる非難を發見しようと努めた。僕は怒つて肩を搖り上げ、一組又一組と通つて行く者共を、一々輕蔑の眼で見送つた。飴ん棒舐りの學生共は、胸の上に女を靠せかけて歩いて、西歐風の遊蕩兒を氣取つてゐやがる！　これらの若紳士、銀行家、商人、女でさへありや水夫の女房でも結構なぼろつ買ひ、たつた麥酒一杯でもう立派な家に潜り込んだ牛市の牛商人め！

何て妖婦共だ！　昨夕客にとつた消防夫や馬丁共の暖みが、その脇にはまだ殘つてゐやがる！　玉座はいつも空いてゐます。どうぞお上りなさい、だとさ。

誰にひつかゝつたとて構ふものかと、僕は無遠慮にぺつと唾を遠くへ吐いた。眼の前に互に肩をすり合せて、伴れだつて歩いてゐる人間共に對する輕蔑の念が、胸にこみ上げて來て、癪に障つて仕方がなかつたのだ。僕は頭をあげ

て、自分が汚ないところへ入りこまずに行けることを愉快に思つた。

議事堂前の廣場では一人の娘に出會つた。その女のそばまで行くと、無暗と僕を見つめるのだつた。

「今晩は！」と、僕が言つた。

「今晩は！」と、言つてその女は立ち止まつた。

ふむ、何だつてこんなに遲くまで歩いてゐるのだらう？今頃カルル・ヨハンス街を若い女の身空で歩くのは、少々大膽ぢやないか。ほんとにさうだとも。でも僕が話しかけたら、分りよく言へば、お宅までお送り致しませうかと言つたからつて、この女は怒らないだらう？

女は不思議さうに僕を見つめ、僕の心を讀まうとして顏をじろ〳〵見てゐたが、つと僕の腕を取つて言つた——

「さあ、行きませう！」

僕は跟いて行つた。僕等が二三歩行つて、馬車の側を通つた時、僕は取られた手を離して言つた——

「あのね、僕は一オウレも持たないんだよ。」

さう言つて、僕は自分の行かうとする方へ、道を歩かうとした。

初めは女は僕を信じなかつた。けれども僕のポケットを殘らず搜しても、一文もないことが分ると、とう〳〵怒つて胸を突き出し反り身になつて、僕を乾蟹だと罵つた。

「左樣なら！」と、僕は言つた。

「でもちよいとお待ちなさいよ！」と、女が叫んだ。「あんたの眼鏡は黃金緣？」

「いゝや。」

「えい畜生、失せやがれ！」

僕は行つた。

少時すると女は追ひかけて來て、又呼び止めた。

「でも、矢張り私と一緒にいらつしやいな。」

僕はあはれな娼婦からこの申込を受けたのを恥辱に感じて、厭だと言つた。のみならず、夜が更けてゐる上に、もう一ヶ所訪問しなければならなかつた。が、女の方では、僕がこんな犧牲を拂ふこと位ゐは、何とも思つてゐなかつた。

「ようつてば、一緒に行つてよう。」

「けれども、僕はそんなこと出來ないんだよ。」

「他の女のところへ行くんだわ、きつと。」と、女は言つた。

「いや、そんなことはない。」と僕は答へた。

あゝ僕は今まで遊びといふものをしたことがなかつたのだ。僕にとつては、女も男も同じことであつた。僕の情慾は乾涸びいてゐた。けれども僕はこの變な女に引つかゝり

ひどい目に會はされたので、どうかして體面を維持しようと決心した。

「お前は何て名だい。」と、僕は訊いた。「マリエ？　よし！ぢやマリエ、お聞きよ！」

そこで僕は自分の境遇を話して聞かせた。女は聞く事毎にいよ〳〵驚いた。夜街路に出て、娼婦にたはむれる人間の一人だと、僕を信じてゐたのか。僕を、そんなに劣等な人間と信じたのか。初めから僕は、彼女に丁寧にものを言つたぢやないか。惡いことを考へてゐる者は僕のやうにはしない筈だ。要するに僕は、女に說諭したのだ。そして、僕の言葉がどれ程の効果があつたかを見屆けようとして、女の後を一二歩跟けたのだ　なほ僕の名はこれ〳〵で、牧師某である——『行きて再び罪を犯す勿れ』といふところまでやつた！

さう言つて僕は別れた。

僕は自分の思ひ付きに狂喜して、手をこすり合せて、高く獨言を言つた。「善い事をして歩くのは何と愉快ではないか！　僕は多分この墮落した人間に、全生涯の向上を促す一つの衝動を與へたのだつたらう！　又女はこの事をよく考へたら、有難いと思ふに違ひない。なほ臨終には衷心から感謝の念に滿たされさへもするだらう。あゝ、何よりも正直であるべきだ。正直で、義しいことは自ら報はれたのだ！」

僕の氣分は晴れやかで、せい〳〵として、非常に氣持がよかつた。

若し蠟燭が一本ありさへすれば、僕は直ぐに原稿を書くことが出來るのだが！

僕は行く〳〵手のうちに新しい戶の鍵の環をがちや〳〵させ、鼻唄をうたひ、口笛を吹き鳴らしながら、蠟燭を手に入れる方法を考へた。たがペンと紙とを街路に持ち出して、瓦斯燈の下で書くより外には仕方がなかつた。そこで僕は門を開けて、紙を取りに行つた。

僕は二階を降りてから、門には外から錠を下して、瓦斯燈の光りの下に立つた。あたりはしんとして、たゞ十字路に巡査の重い、ぎゆう〳〵いふ足音と、遠くサンクト・ハンス丘の方で犬が一疋吠えるのが聞えるだけであつた。僕の邪魔をするものは一つもなかつた。僕は、衣服の襟を耳まで引き上げて、全力をこめて思索した。僕がこの小さな一篇をうまく仕上げれば、僕にとつて大きな助けとなるのであつた。僕は丁度面倒なところに來てゐた。まるで氣づかれないほど微かに、新しい發展を見せ、忍びやかに滑らかな終局を作るのだ。そして、射擊又は雪崩のやうな急激な、

驚くべき響を立てゝ絶頂に達する一筋の長い唸りを作るのだ。

けれども言葉が浮んで來なかつた。僕は全篇を初めから讀み直してみた、各節を朗讀してみた。が、この絶頂を考へ出すことが出來なかつた。僕がこんな事をしてゐる間に、巡査までが、僕より僅か離れた通の眞中に突立つて、すつかり僕の氣分を打ち毀してしまつた。

僕が『大將』の原稿に、立派な絶頂をつけようとして、ちよつと此處に立つて、書いてゐたからつて、巡査に何のかゝはりがあらう。あゝ、いくらやつてみようと跪いても、僕は浮世の海の水準線まですら首を出してゐることは出來ないのだ。

僕がしばらくそこに立つてゐると、巡査は去つてしまつた。寒さは、ぢつと立つてゐるに堪へない程、酷くなつた。この新たなる試みが駄目になつたので、がつかりと氣落ちして、僕はとう〳〵再び戸を開けて、自分の部屋へ上つて行つた。

二階は寒かつた。僕は眞暗がりの中に、やうやく自分の窓を見ることが出來た。僕は寢床にさぐり寄つて、靴を脱ぎ、足を手で握つて暖めた。それから横になつて寢た——今まで永い間してきた通り、蒼のみ蒼のまゝ、圓くなつて。

翌朝は、明るくなると同時に寢床の上に起き上つて、再び原稿を書き出した。かうして晝頃までは十行か十二行書きあげた。それでもなほ結末に到らなかつた。

僕は立ち上つて靴を穿き、體が暖まるように室内をあちこちと往來した。窓には霜が凍りついてゐた。戸外を見ると雪が降つて、家の後ろの鋪石や喞筒に深く積つてゐた。僕は部屋の中をごそ〳〵歩きまはつて、無意識に前へ行つたり後ろへ戻つたり、爪で壁に疵をつけたり頰をそつと戸に押し當てゝみたり、食指で牀をこつ〳〵叩いて注意深く聽いてみたりした。それは何か重大な事をでも企てゝゐるものゝやうに、靜かに、又思慮ありげにしたのであつた。がしかし、いづれも全然目的があつてしたことではなかつた。その間、絶えず獨言を言つて、それを自分だけで聞いてゐた——

「おい〳〵、それぢや全く氣違ひ沙汰ぢやないか！」

それでも、僕は矢張りその發狂を續けていつた。しばらく經つてから、多分一二時間もしてから、僕は氣がしつかりして來たので、唇を噛んで、出來るだけ體を眞直にのばした。

もうこんなことは止めにしなければならない！

僕は鉋屑をさがし出して、それを噛みながら、再び書き始めた。

一二の短い章句がやつとのことで出來あがつた。二十ばかりの貧しい言葉であつたが、僕はどうにかそれを發展さしたいと苦しんだのだつた。僕はその時行き詰つてしまつて、頭は空つぽになり、もう一歩も前へ進めなくなつた。僕はどうにもかうにも出來なくなつたので、そこに腰かけたまゝ、たゞ大きな眼を開けて、その最後の言葉や、まだ書いてない紙やを瞶めてゐるきりだつた。小さな毛蟲のやうに、紙から突立つてゐるこの不思議な、顫へてゐる文字を眺めてゐると、終ひには全體が分らなくなつて、何にも考へなくなつた。

時は過ぎた。僕は街路に通行の音を聞いた。荷車や、馬の蹄の音などがした。馬を叱るイエンス・オライの聲が二階まで聞えて來た。僕はすつかり疲れてゐた。腰掛けて、ちよつと唇をなめまはしたけれど、別に何にもしようとはしなかつた。僕の胸は頗るあはれな狀態になつてゐた。

暗くなり出した。僕は、愈々打ち萎れた。疲れて、再び寢床に入り、手を暖める爲めに、指を頭ぢゆうに輕くこすりつけた、すると少し拔毛がついて來た。指の股にもぢやもぢやとくつゝいたり、枕の上に散らばつたりした。僕も初めはちつとも氣がつかずにゐたので、まるで何事も起らなかつたものゝやうであつた、僕はまだ、澤山の髮をあとにもつてゐたのだから。僕は、霧のやうに僕の全身を襲ふこの奇怪な睡氣から醒めようとして、立ち上つて、平手で自分の膝を叩いた。胸の堪へ得る限り強く咳拂ひをした——そして又臥た。どうしても駄目だつた。僕は眼を開いて天井を見詰めたまゝ、どうすることも出來ないで死んで行くところだつた。最後に食指を口に突込んで、それを舐つた。僕の頭の中に何やら動いた。思想が——狂氣じみた思想が舞ひ起つた。

若しやこの指を食べてしまつたら？

と考へるや否や、眼を瞑つて、がりつと齒を噛みしめた。

僕は跳ね起きた。遂に僕は目が醒めた。指からは血が少し滴つた。僕はそれを、一雫づゝ舐めた。痛みは感じなかつたし、傷も亦大したものでなかつた。が、そのうちにふと我に歸つて、僕は頭を振り〳〵、窓のところへ行つて、繃帶になる布片を發見した。その布片を卷きつけてゐるうちに、眼には涙がたまつた。僕は獨りで忍び音に泣いた。この細い、咬まれた指はあはれつぽく見えた。天に在す神は、僕とはどれ程遙かに隔たつてゐることであらう。

闇はます〳〵濃くなつた。若し僕が蠟燭を一本もつてゐたなら、夕方には原稿の結末を書き上げることが出來たのだらうに。僕の頭は再び明かになり、思想は平生のやうに動いた。僕は格別苦しまなかつた。決して、この間のやうにひどく飢ゑに苦しまなかつた。次の日まで十分泳へることが出來た。日用品を賣る店に行つて事情を話したら、その店ではよく顔を見知られてゐるのだから、蠟燭ぐらゐ一本借りることが出來るかも知れない。僕がまだ工面のよかつた時分には、その店から澤山のパンを買つたこともあるんだ。正直な僕の顔で蠟燭を手に入れることはきつと出來るに違ひない。で、久振りにズボンに少し刷毛をかけて、暗がりではあつたが、出來るだけよく上衣にくつゝいた脱毛を拂ひ落した。それから足場をさぐり〳〵僕は階段を降りて行つた。

通に出た時、それよりも寧ろパンを乞うてみる方がよからうと思ひついた。僕はちよつと迷つたので、立ち止まつて考へた。

「いやどんなことがあつてもそれはいかん！」と、やつとのことで僕は心に頷いた。が、不幸にして僕は今食慾を辛抱することの出來ぬ狀態にゐた。幻想、豫感、又は氣違ひじみた考へといつたやうな、いつもの同じ事が、又々繰り返されるだけのことで、僕の原稿は決して出來上る氣遣ひもなく、それを持つて行つたところで、その時にはもう『大將』は僕を忘れてゐるだらう。

いやどんなことがあつてもそれはいかん！

で僕は、蠟燭の方にきめて、店へ行つた。

賣臺のところに、一人の女が立つて、買物をしてゐた。その女のそばには、紙に包んだいろ〳〵の小さな品物が澤山あつた。僕を見知つてゐて、いつも僕が何を買ふかを覺えてゐる店員は、女の客を差し措いて、僕に訊きもしないで、新聞にパンを一つ包んで僕の前に出した。

「いや——今夜は蠟燭を一本貰ひたいのです。」

僕は店員に腹を立たせて、蠟燭を手に入れる目算を外すまいと、なるべく穩かに、卑下して言つた。

この答へは彼にとつて全く意外であつた、僕が彼にパン以外のものを求めたのは初めての事であつたから。

「さうでございますか、では少々お待ちを願ひます。」と言つて、彼は又女の方の事をした。

女は品物を受取つて、金を拂つた。一枚の五クローネル金貨だつたので、釣錢を取つて行つた。

今度は店員と僕と二人きりになつた。

彼は言つた——

「えゝと、蠟燭でございましたね。」

彼は蠟燭の包みを開けて、その中から一本とつて、僕に差出した。

彼は僕を見、僕は彼を見た。僕は借りたいといふことを唇にのぼすことが出來なかつた。

「おや、さうでございましたね。お金をいたゞいたのでございましたね。」と、彼は突然言つた。彼は、僕が金を拂つたと無雜作に言つた。僕は彼の言つたことを一語はつきりと聞きとつた。彼は抽斗から銀貨を、光つた、見事な金を一クローネづゝ算へて——あの女の五クローネル金貨に對する釣錢をも一度僕に渡した。

「有難うございます。」と、彼は言つた。

僕は立つて、この金をちよつと眺めた。僕にはどうやら變だつたが、別に深く思つてもみず、考へてもみなかつた。只僕の眼の前に置かれて、光つてゐるその實を訝しさうに眺めてゐるのみであつた。そして僕は機械的にその金をとりあげた。

僕は、たゞもう驚いて、ぼんやりと、賣臺の前に立つてゐた。やがて一歩戸口に向つて進み出て、再び立ち止まつた。僕は壁を眺めた。そこには首環に付ける一つの小さな鈴と、その下に一卷きの絲があつた。僕は立つて、その品物を見てゐた。

店員は僕がいつまでも立つてゐるので、話がしたいのだと思つたらしく、賣臺に散らばつてゐる紙を片付けながら、かう言つた——

「もう本當に多でございますね。」

「ふむ、さう。」と、僕が答へた。「もう本當に多ですね。もうすつかり冬らしいです。」

それから又少し經つて、言ひ足した——

「えゝ早くはありません。まつたく冬らしいですね。それでも早いことは少しもありませんよ。」

僕は自分でこの言葉を聞いてゐたが、どの言葉もまるで他の人が言つてゐるやうに聞えた。

「さうお考へなさいますかね？」と、店員は言つた。

僕は金を握つた手をポケットに入れ、戸の把手を捻ぢて出て行つた。自分が左樣ならと言つて、店員がそれに答へるのを僕は耳にした。

二三歩、店の階段から離れると、店の戸が跳ね開けられて、店員があわてた風で僕を呼び戻した。だが僕は驚きもせず、又心配もしないで後ろを振り向いた。僕はたゞ金を握つて、いつでもそれを返す覺悟をきめてゐた。

「もし〳〵、貴方は蠟燭をお忘れになりました。」と、店員

は言つた。

「おや、さう、どうも有難う。」と、僕は靜かに答へた。「有難う、大きに有難う！」

僕は手に蠟燭をもつて、再び通を下つた。

最初に氣づいたのは金の事であつた。僕は街燈のところに行つて、改めてその金を勘定し、手で重さを秤つてみて微笑した。

さあ立派に僕は助かつたぞ、大いに、吃驚する程立派に、永い〳〵間、助かるのだぞ！

僕はもう一度ポケットの金に觸つてそこを立ち去つた。

僕はストオル街の或る飲食店の前で立ち止まつた。大膽に入つて行つて、直ぐに、ちよつと一口食べようと、冷靜によく考へてみた。僕の耳は、皿やナイフの觸れ合ふ音を聞いた。これが强い誘ひとなつて、間もなく僕は中へ入つた。

「ビーフテキ一つ。」と、僕が言つた。

「ビーフテキ一丁。」と、給仕女が料理場の窓のうちへ叫んだ。

僕は戸口の直ぐ前の小さな卓子について、待つてゐた。僕の坐つてゐるところは少し暗かつたので、十分に人目につかないでゐられると、落着いて考へ始めた。折々給仕女は珍らしさうな眼付で、じろ〳〵と僕を見た。

僕は初めて不正直を――初めて盜みをした。僕のこれまでの善からぬ行ひは、それに比べては物の數ではなかつた。僕の最初の小さな、しかし大きな墮落……あゝ！　もう、それをどうしやうもなかつた。けれども、機會さへあれば、その店員の方はいつでも自由にかたをつけられるのだ。この上そんなことにかゝづらつてゐる必要も僕にはないのだ。又僕は他の人達以上、正直に生活して行くべき義務を負うたのでもなければ、何の約束も……

「ビーフテキは直ぐ出來ますか。」

「はい只今。」

給仕女は窓を開けて、料理場を覗き込んだ。

けれどもこの事が暴れてしまつたら？　若しか店員が間違ひを覺つたら？　パンを賣つたこと、女の客が受取つた五クローネルの釣錢のことを思ひ出したとしたら？　彼が氣がつかずにゐる筈はない、たとへばこの次に僕があの店へ行つた時？　おゝさうだ！……僕はそつと肩をすぼめた。

「お待遠樣！」と、給仕女は丁寧に言つて、卓上にビーフテキを置いた。「でも貴方、別な部屋へいらつしやいませんこと？　此處は暗すぎますから。」

「いゝや有難う。此處に置いて貰はう。」

と、僕は答へた。けれども女の深切は、ふと僕に感謝の念を起さした。僕は直ぐにビーフテキの代を拂つて、ポケットから、手當り次第に摑み出した金をありつたけ彼女に與へて、握手した。女は微笑した。僕は眼を沾ませながら冗談を言つた――

「剩つた金で、君は家邸を買ひ給へ……君にはそれこそ持つてこいだ。」

僕は食べ出した。大きな肉塊を嚙まずに嚥み込む度に、僕は愈々食ひ意地が增した。僕は食人種族のやうに肉を食ひ切つた。

給仕女は僕のところへ戻つて來て、訊いた――

「何かお飲みなさいませんか。」

さう言つて彼女は僕の方へ少し體をまげた。

僕は女を見返した。彼女は非常に、穩かに、殆ど含羞みながら言つた。彼女は眼を伏せた。

「麥酒はいかゞですかつて言ふんですわ……それとも何か他のものを……差上げませうか……他に……若し御註文でしたら……」

「有難う！」と、僕は答へた。「いや、今はいらない。またいつか來た時にしよう。」

女は引き退つて、帳場の前に腰掛けた。僕には、その頭だけしか見えなかつた。何といふ不思議な……

食べ終つたので、僕は急に戸口へ行つた。もう胸がむかついて來たのだ。給仕女は立ち上つた。僕は光りのうちに入ることを恐れた。給仕女に僕の見窄らしい樣を見られたくないので、逃げるやうに、急いで左樣ならを言ひ、頭を下げて出て行つた。

空き腹に澤山詰め込んだ罰は、てきめんに見え出した。僕はその爲め、非常な苦しみをした、そしてもうそれに堪へることが出來なかつた。僕は、通り掛りに物陰を見付けては、生唾を吐いて、僕を苦しめる嘔氣と鬪ひ、手を握り身を堅くして、街路を踏みしめ、こみ上げてくる嘔吐を、必死となつて嚥み込んだ。――駄目だつた。

とう〳〵僕は、或る門內に飛び込み、湧き出る涙に物のあいろも分らなくなつて、又げい〳〵あげた。

僕は苦しんだ、泣きながら路を行つた。結局、それが何であらうとも、僕に跟き纏うていつも離れぬ闇の力を呪つた。そんなものは地獄に墮ちて、永劫に苦しめと罵つた。

この闇の力には騎士らしい立派さがない、まつたく爪の垢程もないと、言はなければならない！……

僕は店の窓を覗き込んでゐる一人の男のそばに行つて、

あわたゞしく、永いこと飢ゑてゐる者は何を食べたら善いかと訊いた。

「生き死にの大問題です。」と僕が言つた。「胃がビーフテキを受け付けないのです。」

「ミルク――沸かしたミルクが良いと聞いてゐます。」と、その男は、非常に驚きながら答へた。「貴方が仰しやるのは一體誰のことなんですか。」

「有難う、有難う！」と、僕が言つた。「きつとそれが良いでせう、沸かしたミルクが。」

さう言つて僕は去つた。

一番さきに見つかつたカッフェに僕は入つて、沸かしたミルクを註文した。僕はミルクを受けとつて、熱いのをそのまゝ嚥み込んだ。雫ものこさず、がぶ〳〵と飲んで、金を拂つて又出かけた。僕は家の方へ向つて行つた。

すると今度は奇妙なことが起つた。僕の住居の入口にある瓦斯燈のそばに、その光りの裡に、一人の人が立つてゐるのを僕はもう遠くの方から見掛けたのだつた。それは、例の黒裝束の女であつた。前に幾晩も來た同じ黒裝束の女であつた。間違ひはなかつた。彼女は、四度も同じ場所に立つてゐた。ぢつと靜かに立つてゐた。

僕が覺えず足をゆるめた程、これは意外なことであつ

た。そのとき僕の頭に異狀はなかつた。けれども僕の體はぼうと熱くなり、僕の神經は今食べた食物にすつかり刺戟されてゐた。僕は例によつて女のそばを通り過ぎ、殆ど門口に來て、いざ入らうとして、立ち止まつた。僕はふと心が動いて、何の用意もなしに振り返ると、つか〳〵と女に近づき、その顏を見ながら話しかけた――

「今晩は、お孃さん！」

「今晩は！」と、女は答へた。

「失禮ですが、誰方かお訪ねですか？　僕は貴女を以前から知つてゐます。何か僕で御用が出來ますなら……けれどどうぞ僕の無躾を免して下さい。」

まつたく、女ははつきりと分らなかつた、何を求めるのか……

此處には僕と、三四頭の馬を除けば、誰も住つてはゐなかつた。家は、厩と、ブリキ工場とに使はれてゐたのだから、若し此處に誰かを搜すのなら、彼女は間違つたところを搜してゐるのであつた。

そのとき女は顏をそむけて言つた。

「私は誰も搜してゐませんわ。たゞ此處に立つてゐるだけですの。」

まつたくさうだ。彼女は只そこに立つてゐたのだつた。

幾夜も〳〵只そこに立つてゐたゞけなんだ。それは聊か變だつた。僕はそのことを考へると、愈々益々その女のことについて思ひ惑つた。それで僕は一つ大膽にやつゝける覺悟をきめた。僕はポケットの錢をかすかにぢやり〳〵と鳴らして、女に、葡萄酒を一杯つきあふか、それとも何處かへ行かないかと誘つてみた。

「……多が來てゐるんですからね、へゝゝ……別にお暇はとらせません……お厭ですか？」

「えゝ有難う。でもそれはいけませんわ。」いや、そんなことはこの女に出來さうもない。けれども、ちよつと送つてあげたら……向うの方はひどく眞暗だし、こんなに遲くなつてから、カルル・ヨハンス街を唯一人、女の身で歩くのは憚られる事だ。

「有難う、ではお氣の毒ですけれど……」

僕等は歩いて行つた。女は、僕の右に添うて行つた。特殊な快感が僕に起つた。それは若い女が近くにゐるといふ自覺であつた。僕は始終女に目をつけて行つた。髮の香水、その體から出る溫み、女の香り、顏を此方へ向ける度にかかるその呼吸――そんなものが、皆僕の體に流れ込んで、僕の五官を無暗と壓迫した。僕は、面紗に包まれた、肉付のよい、やゝ蒼白い顏や、マントの下にもち上つたその乳

を出來るだけよく見た。何の理由もなしに、無性にいそいそとしてゐた。僕は怯へきれないで、女の手を握つたり、その肩をつゝいたりした。僕は自分の心臟がどき〳〵するのを聞いた。

「まつたく、貴女は變な女ですね！」と、僕が言つた。

「どうして變ですの？」

さうとも、第一彼女は、何の目的もなしに、たゞ氣紛れに、毎晩々々あの入口に立つてゐる習慣をもつてゐたことが……

いや、それにはきつと何かの理由があるだらう、のみならず彼女は夜遲くまで起きてゐることが好きなのだ。

僕だつて、十二時前に、寢ようと思つたことがあるかしら？

僕が？　僕にとつてそれほど厭なものは、天下にありやしない、夜の十二時前に寢床に入ることより以上に、へゝゝゝ。

へゝゝゝ。それ見給へ！　だから矢張りこの女もそれと同じことなんだ。毎晩、きつとこの散歩をやつてゐるんだ。女はサンクト・オラーヴス廣場に住つてゐたのだ……

「ユラヤリィ！」と、僕が叫んだ。

「何ですつて！」

「たゞユラヤリィと言つただけです…… それで？」
「私サンクト・オラーヴス 廣場に住つてますの、母と二人で。母は金聾で、誰とも話が出來ませんの。ですから、私が外出したがるのも不思議ではありませんんでせう？」
「えゝ、別に不思議ぢやありません。」と、僕が答へた。
「おや、どうして？」
僕は女がくす〳〵と笑つたのを聞いた。
この女は姉妹をもつてゐなかつたらうか？
さう姉をもつてゐる――どうして僕がそんなことを知つてゐるものか。――姉はハムブルヒに行つてしまつたんだ。
「近頃？」
「えゝ、五週間前に。」
僕は何處でこの女が姉をもつてゐることを聞いたのか。
僕はちつともそんなことを聞きやしない。只訊ねてみただけなんだ。
僕等は少時默つてゐた。一人の男が靴を一足腋に抱へて、僕等を通り過ぎた。それを除けば街路は見渡す限りがらんとしてゐた。遙かティヴォリイの方には、五色の燈が燦々と列をつくつて點つてゐた。雪はもうやんで、空は晴れてゐた。
「おや、貴方は外套なしでお寒くはありませんの。」と、女は突然僕を見て言つた。
僕が外套をもたないわけを言つて聞かしたものだらうか。僕の事情が分つたら、女はすぐに去つてしまふだらう、どの女も皆同じやうに。けれども女と並んで行くのは、矢張り愉快だつた。もう少し知らさずに置いた方がよい。僕は嘘をついて、答へた。
「いゝえ、ちつとも。」
そこで他へ話を向けようとして訊いた――
「ティヴォリイで見せてゐる動物園を御覽でしたか。」
「いゝえ。」と、女は答へた。「何か見るものがありますの。」
この女、そこへ行きたい氣持があるのかな。明るい人ごみの中へ！ そんなことをしたら、女はさぞ困るだらう。こんな汚ない衣服を着て、二日も洗つたことのない痩せこけた顏をしてゐる僕と一緒に行つたなら、女はひどく間の悪いことだらう。そればかりではない、僕が胴着も持たないことを見つけるだらう……
「いゝえ、なに……」と、僕は答へた。「見るやうなものなんかありませんよ。」
すると一つ巧いことを思ひついたので、それを直ぐにやつてみた。――ちよつとした言葉、乾上つた僕の頭腦の殘滓である。そんな小つぽけな動物園など、何の見どころがあ

るものか。一體檻に入つてゐる獸を見ることは、僕にはちつとも面白くない。その獸は、人が立つて、自分等を見てゐることを知つてゐる。彼等は、幾百の好奇の眼が自分達に注がれてゐることを感じて、それを覺つてゐるのだ。が、僕は寧ろ人が自分達を眺めてゐると知らないで、その巣の中をうろつきまはり、鈍く碧い眼を開き、横になつて、その爪を舐めながら考へ込んでゐる陰鬱な獸、そんな獸をこそ僕は求めてゐるのだ。
さうだ、僕の言つてゐるのは確かに當を得てゐる。
面白いのは、そのあらゆる特殊な恐ろしさ、特殊な野性を獸が發揮してゐる間のことだ。夜の暗黑裡の音もない忍び足、森の囁きと怪異、飛び過ぎる鳥の叫び、風、血腥い臭、廣野の咆哮といふやうなもの、一言にして言へば野獸の精神が溢れてゐる野獸の世界だ……
けれども、僕はそんな小面倒臭いことを言ひ出して女を退屈からせるのを恐れた。そして自分の貧乏といふ感じが、再び僕をとらへて、僕をいぢめた。
若し、も少しどうにか服裝が小薩張としてゐたならば、僕はティヴォリイに女を伴れて行つて喜ばしてやれたらうものを！ 僕には、こんな半裸體の乞食みたいな男をつれて、カルル・ヨハンス街を歩いて、喜んでゐられる女の氣が知れない。一體まあこの女は何を考へてゐるのだらう？ 又僕はこの美しい絹ぐるみの鳥に引張られて、こんなに永い散歩をすべき、何かの理由をもつてゐるのか？ なぜ僕は、この女とつれだつて歩いて、何でもないことに、馬鹿のやうににや〳〵笑ふのか？ 僕は努めてそんなことをしてゐるのではあるまいか？ 一寸した向ひ風が吹いてさへも、心臟が凍つて死ぬやうな寒さを僕は感じないのか？ 僕の頭は、幾月も食ふ物がなかつたのが基で、發狂してゐるのではないか？ 女は、自分の家へ僕をつれて行つて、少しのミルク、多分僕の胃の腑が受け付けることの出來る、新鮮なミルク一匙を、僕の舌に注いでくれる爲めに、僕を引つ張つてゐるのではあるまいか？ なぜ僕に背を向けて、勝手に失せろと言はないのだらうか？……
僕は失望した。失望は極度に嵩じて、こんなことを僕は言つた――
「一體貴女は僕と一緒に歩いちやいけないんですよ、お嬢さん。僕がこんな衣服を着てゐるので、皆の眼に貴女までが汚なく見えますよ。僕は本當のことを言つてゐるのです。又さう思つてゐるのです。」
女はびつくりした。あわたゞしく僕を見て、口を噤んだ。それから言つた――

「あら、まあ！」
それ以上言へ　かつた。
「それは何の事ですか。」と、僕が訊いた。
「いゝえ、何でもありませんの。そんなことを仰しやつちやいけませんわ……あゝもう近くなりました。」
女は足を早めた。
僕等は大學通りを曲ると、もうサンクト・オラーヴス廣場の街燈を見た。そのとき女は歩度をゆるめた。
「私共は、無分別なことはしないやうにしませうね。」と、僕が言つた。「でもお別れする前に、お名前だけ聞かして戴けませんか。それに面紗をとつてちよつとお顔を見せて下さい。そしたら、ほんとに感謝しますが。……」
間。……僕は待つてゐた。
「貴方は前に私を御覽になりましたわ。」と、女は答へた。
「ユラヤリィ！」と、僕は再び言つた。
「貴方は半日私の後を跟けて、私の家の前までいらしつたぢやありませんの。あの時には醉つていらしつて？」
僕は女がくす〳〵と笑ふのを聞いた。
「えゝ。」と、僕は言つた。「全くです、あの時は醉つてゐました。」
「あれはみつともないことでしたわ。」

僕自身もみつともなかつたことを、すつかり承認した。
僕等は噴水のところへ來て、立ち止まり、第二號館の燈火のついた多くの窓を見上げた。
「さあ、もうこれでようございます。」と、女は言つた。「今晩はどうも有難うございました。」
僕は頭を下げたが、何も言ふことが出來なかつた。僕は帽子をとつて行かうとした——。女は僕に手を出してくれるだらうか。
「なぜ貴方は、もう一度ちよいと引き返してみようと仰しやいませんの。」と、冗談のやうに女が言つた。けれども僕の顔を見ないで、下を向いて、自分の靴の尖を眺めてゐた。
「おやさうですか。」と、僕が答へた。「若し貴女がそれをお望みなら！」
「えゝ、でもほんのちよつとですよ。」
そこで僕等は再び引き返した。
僕はすつかり迷つた。行つたものだらうか、それとも止めたものだらうか、ちつとも分らなかつた。この人間は僕の頭をすつかり掻き亂した。僕は有頂天になつて、むやみと悦んだ。僕は心底から愉快だと思つた。女は殊更引き返さうと望んだのだ。それは、僕の考へ出したことではなくて、彼女自身の希望であつた。僕は行く〳〵彼女を眺め、いよ〳〵愉快な氣持になつた。彼女は僕を喜ばした。一つ物を言ふたびに、僕は彼女自身に牽きつけられた。僕はちよつとの間、自身の窮乏を、低い位置を、あはれな事情を、すべてを忘れた。僕は零落しない以前のやうに、僕の全身に血が暖に通ふのを覺えた。僕は小當りに當つてみようと思つた。
「ではこの間僕が跟けて行つたのは貴女ではなかつたのですか。」と、僕は言つた。「あれはお妹さんだつたのですね。」
「あれが私の妹ですつて。」と、彼女は非常に驚いた風で言つた。彼女は立ち止まつて、僕を見つめ、その答へを待つた。彼女の質問は非常に眞面目であつた。
「えゝ。」と、僕は答へた。「僕の先に立つて行つたのは、二人の婦人のうちで、年のお若い方でした。」
「年の若い方？」と、彼女は突然、高く、心から、まるで子供のやうに笑つた。「いゝえ、貴方ずるいわ！　私の面紗をとらせたいばかりに、そんなことを仰しやるのですわ。私それはちやんと分つてゐますの。けれども、貴方お門違ひよ。今に悄氣なさるわ……それが罰よ。」
僕等は終始笑つたり、巫山戯たりした。僕は自分で何を言つてゐるかを知らなかつた。僕は喜んでゐた。彼女は久しい以前、芝居で一度僕を見たことがあると言つた。そのとき僕は三人の仲間を伴れてゐた、そしてまるで狂人のやうな振舞ひをしたと彼女は言つた。
あの時は醉つてゐたのだらう、生憎なことだつた。
なぜ彼女は醉つてゐると思つたのだらうか？
いや、まつたく僕が餘り笑つたから。
あゝさう、うんさうだ、あの時はまつたく僕はげら〳〵笑つたつけ！
けれども今はもう笑はない？
おゝさうだ、今も亦。ほんとにそんな事があつたつけ。
僕等はカルル・ヨハンス街を下りて行つた。彼女は言つた——
「もう此處までにしませうよ！」
そこで僕等は踵をかへして、再び大學通りを上つて行つた。噴水のところまで來ると、僕等は少し歩度をゆるめた。僕はこの上一緒に行つてはならないことを知つた。
「さあ、もうお歸り下さいな。」と、彼女は言つて、立ち止まつた。
「さうですか。では歸りませう。」と、僕が答へた。けれども少し經つと、彼女は、僕に戸口までは來てもいゝと言つた。
おや〳〵ちつと變だぜ。さては……？

「いや、止しませう。」と、僕が言つた。

けれども僕等が門口に立つと、僕のみじめさが再びひしひしと身にこたへた。

こんなに零落してしまつては、どうして勇氣なんかもつてをられよう。僕は此處に、若い女の前に、汚れたぼろ〳〵の姿で、飢ゑに窶れ、垢ついた半裸體で立つてゐる――地の底に滅入つてしまひさうだ。僕は覺えず身を縮めて、俯向いて言つた――

「もうこれつきりでお目にかゝれないでせうか？」

僕は彼女に、も一度會ふ許しを受けられるといふ希望は抱いてゐなかつた。僕は鋭い『否』の一言を聞いたら、少しはしつかりして自分も冷靜になるだらうと、それを望んでゐたのだ。

「いゝえ。」と、彼女は言つた。

「では何時？」

「それは分りませんわ。」

間。

「面紗をちよつとお脱ぎ下さいませんか。」と、僕が言つた。

「僕は、どんな方とお話してゐるか知りたいのです。ちよつとでよいのです。僕は、どなたとお話してゐるか知りたいのですから。」

間。

「火曜日の晩、又此處でお目にかゝれますわ。」と、彼女は言つた。「よろしうございますの。」

「えゝ〳〵。」意外にも僕は許しを得たのだ！

「では八時に。」

「承知しました。」

僕は彼女の外套を撫で下して、雪を拂ひ落してやつた。それはたゞ彼女に觸る口實を見つける爲めであつた。彼女の身邊にゐるのが、僕にとつては愉快だつたのだから。

「私をものずきな女だなんて思つては厭ですよ。」と、彼女は再び微笑した。

「いゝえ、どうしまして……」

突然、彼女は思ひ切つて體を動かした、そして面紗を頰の上まで引きあげた。僕等はお互に一寸見合つた。

「ユラヤリィ！」と、僕が言つた。

彼女は背伸びして、兩腕を僕の頸に卷き付け、僕の口に接吻した。僕は彼女の胸がどんなに浪を打つて、彼女が荒い呼吸をしてゐたかを自分の胸にはつきりと感じた。

と忽ち彼女は僕の手から、俄かに身を引きちぎつて、息せはしく、囁くやうに左様ならと言ふと、身をひるがへして、何にも言はずに階段を駈け昇つた。

門の戸は閉つた。

* * * *

次の日は雪がなほ一層ひどかつた。雨のまじつた大雪が烈しく降つて、そこらぢうを泥沼にした。凍てつくやうに寒かつた。

僕はやゝ遲く目を醒ました。前夜の心勞で、頭は恐ろしくこんがらかつて、胸は美しい會見に醉うてゐた。夢中で、しばらく目をあけたまゝ横になつて、僕のそばに臥てゐるユラヤリィを想像した。僕は腕をひろげ、自分の胸を抱いて、空を接吻した。それからやうやく起き上つて、ミルクを飲み、續いてビーフテキも食べて、もう飢じさを覺えなくなつた。只僕の神經は再びはずんで來た。

僕は衣服市に行つた。上衣の下にひつかけられる胴着が、安くて手に入るかも知れないと思つたのだ。階段を昇つて、市場へ行き、一着の胴着を手に取つて、檢めた。それをいぢくつてゐるところへ一人の知人がやつて來た。彼は頸で僕に來いといふことを示した。僕は胴着を元のところへ懸け、彼の方へ降りて行つた。彼は技師で、その事務所への出がけであつた。

「一緒に來給へ、麥酒を一杯飲まう。」と、彼が言つた。「だが早くし給へ、僕は時間がないから……ときに、昨夜一緒に歩いてゐた女は何者だい。」

彼の露骨な言ひ方が癪にさはつた。

「僕の許嫁だつたら、どうするのか？」

「おや〳〵！」と、彼が言つた。

「昨日きまつたのだ。」

僕は彼をすつかり狼狽へさした。彼は一も二もなく僕を信じた。僕は、彼が二度と口出しの出來ないやうに、すつかり彼を騙してやつた。僕等は麥酒を飲んで、別れた。

「ぢや左様なら……」と、彼は言つて、突然附け足した。

「おい。僕は何クローネルか君に借金してゐたが、永いこと返さないでゐて、氣まりが惡いよ。然しいづれ、近々に返すからね。」

「やあ、それはどうも有難いね。」と、僕は答へた。が、彼がその金を決して返しはしないことを、僕はよく知つてゐた。

麥酒は、直ぐ、びんと頭に來た。僕はひどく熱くなつた。おまけに前夜の出來事が、すつかり僕の頭を占領してゐた。僕はひどく落着きを失つてしまつた。

若しやあの女が火曜日に會つてくれないとしたら！　若しや、あんな約束をしたのは、間違つたことだつたと思ふやうになつたら？　が、何の間違ひだ？……

僕は考へてゐるうち、俄かにハッとして、金のことが氣

にかゝり出した。僕は心配した、死ぬほど自分の身の上を思ひ煩つた。盗みしたことが、一から十まで嵐の如く心に闖入して來た。僕は眼の前にあの小さな店、帳場、錢を取つたときの僕の細い手。それから巡査が來て、僕を捕へようとするその時の光景などを想像した。手足に錠をはめられる、いや單に手にだけだ、恐らくそれも片手だけだらう。訊問所、看守の記錄、書いてゐるそのペンの音、彼の眼付、その恐ろしい眼付——

なに、タンゲンといふ姓名だと？

それから永久に暗黑な監房……

ふむ。

僕は勇氣をつける爲めに兩手を強く握り締め、段々足早に歩いて大市場に來て、腰掛けた。

何て子供臭い！　誰が僕の盗みをしたことを知つてゐるものか。そればかりぢやない、店員があの出來事を想ひ出す日が來たとしても、自分から騷ぎ出すやうなことはあるまい。あれだつて自分の位置は大切なんだから。どんな騷ぎも、どんな場面も、顧つたからつて、起りはしない！

けれどもその金はポケットの中で、いつも荷厄介になつて、僕の心をやすませなかつた。僕は自分の身の上を考へてみた。すると、最も困窮しきつてゐた時の方が遙に幸福であつたことを明瞭に悟つた。

それにユラヤリィは？　僕はこの罪の手で彼女の手を握りしめはしなかつたか。あゝユラヤリィー　ユラヤリィー

僕は海鼠のやうにぐでん〳〵に醉つぱらつたやうな氣持になつてゐたが、突然飛び上つて、象の看板をかけた藥屋の傍の菓子屋の婆さんのところへ行つた。僕はまだ名譽を恢復することが出來るのだ、それはまだ遲くはないのだつた。僕は全世界に、名譽を恢復することが出來るのを示さなければならない！　僕はそこまで行く途中、一オウレも殘さないやうに、ちやんと手に握つた。そして、婆さんの前に行つて買ひ物をするやうな風に頭を下げ、不意に握つてゐた金を拋り出して、一言も言はずに、直ぐその場を立去つてしまつた。

再び正直な人となつた感じは驚くほど快美なものであつた。僕の空つぽなポケットは、もう荷厄介にならなかつた。改めて無一文になつたことが、僕にとつては愉快であつた。この金が結局どれほど竊かに僕を苦しめてゐたかを考へるにつれて、一歩々々身顫ひせずには居られなかつた。僕は決して固意地な人間ではなかつた、僕の正直な性質は、賤しい行爲に反抗した。それは全くその通りだつた。

有難い、僕は再び正氣にかへつた。「今後は自分のする通

200541

りにしなさい！」と、僕は自分に言つて、雜沓する市場を眺めた。「たゞその通りにしなさい！」

僕は貧乏な老婆を悅ばしてやつた。うまい具合に行つた。彼女は、どうして可いやら、途方に暮れてゐたのだが、今夜、彼女の子供達は空腹で眠ることはないのだ……

僕はかう考へて、昂奮した。そして僕は立派な行爲をしたやうに思つた。

有難い、あの金はもう僕の手を離れたのだ。

よろめきながら、神經質に肩を怒らして、僕は街路を歩いて行つた。潔白、正直な身になつてユラヤリィに會ひ、彼女の顏を見られる喜びが、よろめいてゐる僕の體ぢうに滲み渡つた。僕はもう何の苦痛も持たなかつた。僕の頭は明かで、輕くなつた。僕の肩の上に載つてゐるのは、淸い光りで出來てゐる頭であつた。それは輝いてゐるやうだつた。僕は、頓狂な眞似がしてみたくなつた。人を驚かすやうな事をしてみたくなつた。市中をひつくり返すほどの騷ぎを演つてみたくなつた。僕は、グレンセンの通を狂人のやうに騷ぎまはつた。僕の耳は少しざわ〳〵と鳴り、頭はふら〳〵した。突拍子もなく大膽になつて、僕は郵便配達のところへ行き、だしぬけに年齡を言ひ、握手をして、じろ〳〵その顏を見て、何も言はずに去つてしまはうと思つた。僕は通行者の聲や笑ひに濃淡を感じた。僕の前をぴよん〳〵跳んでゐる小鳥を見た。鋪石の狀態を觀察して、それにあらゆる模樣と、形式とがあることを發見した。兎角するうち僕は、議事堂前のストールチングス廣場に來た。

ふと僕は立ち止まつて貸馬車に眼をつけた。馭者は何やら喋りながら、そこらをうろつき、馬は立つたまゝ、悪い天氣に前こゞみになつてゐた。

「よしきた！」と、言つて、僕は一番近くの馬車に行つて、それに飛び乘つた。

「ウルレヴォルス小路三十七番地！」と叫んだ。馬車は走り出した。

途中馭者は振り返つては、前屈みになつて、幌の中の僕を覗き込んだ。

此奴、疑つてゐるのか？

僕の見窄らしい容姿が馭者の氣になつたことは勿論である。

「僕は或る人に會はなけやならんのだ！」と、僕は先を越して言つた。そしてその人に是非とも會はなければならんのだと言つてやつた。

僕等は三十七番地の前に駐つた。僕は馬車を跳び出すと、

階段を駈け昇つて、三階に行き、ベルの紐を引いた。ベルは六七度内部で消魂しく鳴り響いた。

一人の女中が出て來て、戸を開けた。僕はその女中が耳に金の環を下げ、灰色の胸當に黒釦をつけてゐるのを認めた。女中は僕を氣味惡がつてゐるやうだつた。

僕はヒェル・ウルヴ、即ちヨアキム・ヒェル・ウルヴを訊ねてゐる、商賣は羊毛商だ。きつとさうなんだ。……

女中は頭を振つた。

「ヒェル・ウルヴなんて人は、此處に居りませんよ。」と言つた。

女中は僕をぢつと見つめながら、いざといへば戸をしめて、内へ引込む身構へをした。別にその人を搜してくれようとするのでもなかつた。でも、彼女が、僕のたづねてゐる人をよく考へてみると、そんな人の名を聞いたことがあるといふ風に見えた。僕は荒々しく、女中を後ろに、階段を駈け下りた。

「ゐない！」と、僕は馭者に叫んだ。

「おいでになりませんか。」

「うん。トムテ街十一番地へやつてくれ。」

僕は非常な劇幕で馭者に言つたので、馭者もそれこそ間違ひなく實在の人物だとすつかり思ひ込んでしまつたらしい。で何も言はずに、驀地に馬車を驅つた。彼はすつかり意氣込んでゐた。

「その人は何と言ひますかね？」と、彼は馭者臺の上から此方を振り向いて訊いた。

「ヒェル・ウルヴ、羊毛商ヒェル・ウルヴ。」

馭者もまたその人を間違へてはならんと思つたに違ひない。

「若しやその人は、派手な色の衣服を着てゐる人ぢやありませんか。」

「何だつて？」と、僕は叫んだ。「派手な色の衣服を？　君は氣が違つちやゐないのか。君は僕が茶碗をさがしてゐるとでも思つてゐるのか。」

派手な色の服は、僕には非常に調子外れに聞えた、そして僕が今まで想像してゐた人間をすつかり打ち毀してしまつた。

「何と仰しやいましたかね、その人のお名前は？　ヒェル・ウルヴてんですか。」

「さうだよ。」と、僕が答へた。「それがをかしいのかね？　惡い名ぢやないぜ。」

「赤い髪をもつた人ぢやないんですか？」

多分赤い髪をもつてゐるだらう——馭者がその事を言ふ

と、僕は直ぐに、成程さうだわいと思つた。僕はこのあはれな馭者に對して感謝の念を抱いた。そして、お前はきつとその人に會つたことがあるのだと言つた。それはまつたく馭者が言つた通りであると認めた。

「そんな人で赤い髪を持たないのは、」と、僕は言つた。「滅多にないことだからね。」

「わつしも一二度乘せたことのある、あの人でせう。」と、馭者が言つた。「その人は、瘤のついた杖を持つてゐたでせう？」

馭者の言葉で、僕にはその人間がはつきりと分つた。僕は言つた——

「うん、あの男が瘤のついた杖をもつてゐないのを見たことがない。それなら確かだよ、全く確かだよ。」

さうだ、この馭者が乘せて行つたことのあるのは明白にその人である。馭者はその男を見知つてゐるのだ……

僕等は蹄鐵から火花を散らしながら、再び馬車を驅つた。

この昂奮した最中にも、僕は瞬間も自覺を失はなかつた。僕等は一人の巡査が立つてゐるところを通り過ぎた。僕はその巡査が六十九といふ番號をつけてゐることを認めた。この數字は、恐ろしくはつきりと僕の頭に入つた。格子のやうにきつぱりと頭に嵌り込んだ。

六十九、きつかり六十九、僕はもう決してそれを忘れまい！

僕は馬車の中で後に凭りかゝつて最もくだらない妄想の捕虜となつてゐた。誰も僕の口を見ることが出來ないやうに幌の下に隱しておいて、馬鹿げた口をきいた。狂氣が頭中をあばれ廻つたが、僕はその暴れ廻るに任した。僕は或る一種の力の傀儡になつてゐて、自分では自分をどうする事も出來ないのだといふことを十分に覺つた。僕は何の理由もなしに、にこ〳〵と心の底から笑つた。曩に飲んだ一二杯の麥酒の醉が、まだ醒めなかつたのだ。少しづゝ僕の昂奮は去つて、次第に冷靜に返つた。僕は噛んで傷つけた指に寒さを感じたので、それを少し溫めようとして、襟の間に挿し込んだ。兎角するうち、トムテ街に來たので馭者は馬をとめた。

僕は急がないで悠々と馬車を降りた。頭はぼんやりして重く、何の考へも起らなかつた。僕は門を入り、奥庭に出て、それを横切ると戸口に來たので、開けて中に入り、一つの廊下に自身を見出した。そこには二つの窓があつて、一種の玄關のやうな風になつてゐた。一方の隅に二つのトランクが積み重ねてあつた。壁際に、古い、塗りの剝げた寢椅子があつて、その上に覆ひがしてあつた。右の隣りの部

屋からは、人聲や子供の泣聲が聞え、又上の二階からは、鐵板を槌で打つ音が洩れて來た　僕は入るや否や、又直ぐにこの音を聞いたのだ。

僕は靜かに部屋を横切つて向うの窓に行つた、急ぎもせず、逃げようとする心もなく、その戸を開いて、ヴォウンマンス街に出た。僕は今通り抜けた家を振り返つて、戸口の掛札を讀んだ——

飲食店兼旅宿。

僕を待つてゐる馭者をまいてしまはうといふ心も起らなかつた。僕は、自分が思いことをしてゐるとも氣づかず、恐れる風もなく、濟ました顏で歩いた。永い間僕の頭を煩はしてゐた羊毛商ヒェル・ウルヴは、何處かに實在してゐるかも知れないが、是非とも僕が會はなければならないと思つたその人間は、他のいろんな馬鹿げた考へと一緒に、いつの間にか頭の中から消え去つた。僕は、それを一種の想像、一個の記憶としての外、少しも憶えてゐなくなつた。

歩いてゐるうちに愈々僕は正氣に歸つた。それと同時に、ひどく大儀になり、足を曳きずりながら、仆れさうになつて歩いた。雪は濕りを帶びて、大きな塊になつて降つた。とう〳〵僕はグルウンランス街に來て、その教會前のベンチに腰掛けて休んだ。通る人は皆、不思議さうに僕を見て行つた。僕は考へた。

あゝ、僕は今何といふ悲しい身の上だらう！　僕の生涯はどこまで慘めなんだらう。僕は心から自身に對して愛想が盡きる。全く、飽き〳〵して來た。この上苦闘して生きて行く價値がないことを發見し、厭だといふ氣持が嵩じて、自棄糞になつた。僕は以前の姿の影と思はれる程、目立つて痩れてゐた。兩方の肩は落ちて幅がなくなり、歩くときにはなるべく胸の氣持をよくするやうに、前屈みになる癖をつけてしまつた。二三日以來、二階の部屋で自分の體を檢めては、始終悲しくなつて涙を滾してゐたのであつた。僕は、幾週間も同じ襯衣を着てゐるのだが、垢で硬くなつて、膚に食ひ込み、その傷から血の雜つた汁が少し出た。痛みはしなかつたけれど、腹の中央に傷が出來たのには弱つた。が僕はどうすることも出來なかつた。それはひとりでには癒らなかつたので、僕は水で洗つて、そつと拭きとり、その上から又襯衣をかぶせて置いた。それより外にどうすることも出來なかつた。……

僕は教會前のベンチにかけて、そんなことを想ひ出すと、悲しく、自分の身がいやになつた。自分の手すらも、いやな氣持を起させた。手の甲のたるんで不樣なのは、僕をひどく不愉快にした。

僕は自分の纖細い指を見て、ぞつとした。僕は乾からびてしまつた自分の體全體を憎んだ、そしてそんな體をもつてゐることを、又そんな體をしてゐることを、たまらなく思つて、ぞつと身顫ひした。

あゝこんなものが皆なもうお終ひになつたら、どんなによからう！　僕はつく〳〵死にたいと思つた。

自分で自分にすつかり嫌想がつきて、侮辱せられ、けなしつけられた氣持で、僕は機械的に起き上つて、家へ行きかけた。途中、或る家の門を通り過ぎると、次のやうな札が出てゐるのを見付けた——

屍衣お仕立所、ヨンフルウ・アンデルセン

（門内右側）

「あゝ、あれだ！」と、僕は言つた。僕はハムメルスボルで以前に住つた部屋、小さな搖椅子、戸の傍に貼りつけてあつた新聞、燈臺監察官の告示、パン屋ファビアン・オルセンの燒き立てのパンの廣告などを想ひ出した。

あゝさうだ。あの時はまだ今よりも良かつた。或る晩などは、僕は十クローネルの原稿を書いたことがあつた。けれども今はもう何も書くことは出來ない。僕は全くもう何も書けない。書かうとすると、直ぐ頭の中には何にもなくなつてしまふ。あゝ、もうそんな事を考へるのは止めだ、止めだ。

僕は歩いた、歩きまくつた。

日用品を賣る例の店に段々近寄つた時、半ば無意識に、危險なものに近寄つたことを感じた。けれども僕は自分の目的を變へなかつた。自分の罪を自白しようと思つてゐたのだつた。僕は靜かに階段を昇つた。戸口で手にコップを持つた少女に出會つて、それと行き違つて、戸を閉めた。店員と僕とは又もや二人きり、差向ひになつた。

「いらつしやい！」と、彼が言つた。「悪いお天氣でございますね。」

何だつてこんなしらをきるのだらう？　なぜこの男は直ぐ樣僕を引つ捕へないのだらう。僕はむかつ腹を立てゝ言つた。「僕は天氣のことなんかを喋りに來たんぢやありませんよ。」

そのえらい剣幕に彼は呆氣にとられた。彼の小商人式の頭は、度を失つた。彼は僕が五クローネルを誤魔化して行つたことは少しも知らないのだ。

「ぢや、僕が誤魔化したことを君は知らないのだね？」と、僕は氣短かに言つた。そして鼻息荒く、身慄ひしながら、彼がすぐ本題に入らないやうだつたら、力づくでも入れてやらうと待ちかまへてゐた。

けれども、可哀さうにこの單純な人間は、少しも推察することが出來なかつた。

いやはや一體、なんて馬鹿な人間にまじつて僕は生きていかなけりやならないのだらう！

僕は彼を罵つた、どうしてさうなつたかを、一つ〳〵說明して聞かした。何處に僕が、また何處に彼が立つてゐてそんなことが起つたか、何處に金は置いてあつたか、どんな具合に僕がその金を手で搔き集めて、そのまゝ握つてしまつたかを言つて聞かした。彼はやうやく分つたが、それでも僕をどうともしなかつた。彼はあたりを見まはして、隣室の足音を聽き、僕に、もつと低い聲で話してくれと制して、しまひにかう言つた——

「貴方は大變さもしいことをなさいましたね！」

「いや、少し待ち給へ！」と、僕は叫んだ。彼に反抗して、怒らしてやらうといふ氣分に驅られたのだつた。それは彼の小商人式のあはれな頭で考へた程、低劣なことではなかつた。僕は勿論、その金を現在手にもつてなんかゐなかつた。そんなことは思ひも寄らなかつた。僕にとつてはそんな金に用はない。それは僕の潔白な性質に反するものだ……

「その金をどうなさいましたか。」

「僕はそれを貧乏な老婆にやつちまつた、一文も殘らずやつちまつたのだよ。」

彼は知らなければならなかつた。——僕はそんな人間だといふことを。僕は世の中の貧乏人といふものを丸つきり忘れてはゐなかつたのだ……

店員は立つたまゝ暫く考へてゐた。どれ程まで僕が正直か、或は不正直かと、非常に疑つてゐる樣があり〳〵と見えてゐた。とう〳〵彼は言つた

「貴方はそのお金を返して下さる筈ではなかつたのでせうか。」

「いや、まあ聞き給へ。」と、僕は剛々しく答へた。「僕は君に迷惑をかけたくないと思つたのさ。君を煩はすまいと思つたのだ。けれども正直な人間は有難いものだ。今僕は此處に立つて、一切を君に白狀してゐる。だのに君は、犬かなんぞのやうに、恥つてことを知らないね。せめて議論でもして、どこまでも僕と爭ふならまだ話せるがね。だから、僕はもうこの事件から手を引いてしまふ。僕は君なんかにかかりあつてゐられないんだ。勝手にしやがれだ。あばよ！」

僕はぴしやりと後ろに戸を閉めて、出て行つた。

けれども柔かい雪にづぶ濡れとなり、終日の歩行に疲れて、よろめきながら家へ歸つて、自分の部屋へ入ると、僕

は直ぐに自尊心を失つて、又ぐつたりしてしまつた。

僕は、可哀さうな店員を攻擊したことを悔いて泣いた。そして、自分の不埒な行爲を罰する積りで自分の咽喉を締めた。僕は何といふ狂氣じみたことをしたのだらう。店員は無論彼れ自身の位置を非常に氣遣つたのだ。商賣の上で失くしたこの五クローネルの爲めに、何の騷ぎをも持ち上げる勇氣もなかつたのだ。然るに僕はその恐怖に附け込んで、大きな聲をあげて彼を惱まし、僕が叫ぶ一語々々で彼を苦しめたのだ。又店主も或は次の部屋にゐて、まさに僕等のところへ、何事が起つたかを訊きに出て來る間一髮の際であつたかも知れない。いや考へれば、僕の仕打の卑劣さには際限がない！

然し、なぜ僕は取り押へられなかつたのだらうか。さうしたら事は結着したのだらう。僕は、手錠を嵌めるようにと、手を出したのだ。僕は何の抵抗もしようと思はなかつたばかりか、自分から進んで縛られようとしたのだ。天地の神よ、僕の生涯の一日を一瞬間でも再び幸福になし給へ！　否、僕の全生涯を平穩になし給へ！　どうぞ今度だけでも許し給へ！……

僕は濡れた衣服を着たまゝで寢た。ぼんやりと、今夜死ぬだらうと思つてゐた。で朝になつて、あたりが少しでも片づいてゐるやうに、最後の力を絞つて、寢床の上を少し片付けた。

すると突然、僕はユラヤリィを想ひ出した。今まですつかり彼女を忘れてゐようとは！　一筋の光りが、極めて弱いながらも再び僕の心にさし入つた。僅かな日光が幸にも僕を溫めた。その太陽はだん〳〵大きく、柔かになつて、美しい絹の光りで僕を愛撫し、愉快にうつとりとならしめた、次第に力强くなつて、銳く僕の蟀谷に燃え付き、僕の疲れきつた頭の中に、强く沸きたちながら輝いた。又その焰は遂に僕の眼に光りの異常な毬、燃える天地、火の人、火の獸、火の野原、火の惡魔、深淵、颶風、火の全世界、煙の立ち上る世の終りの日を見せた。

もう僕は何も見ず、何も聞かなかつた。

* * * *

次の朝、目が醒めると、僕は體中、ぐつしよりと汗をかいてゐた。熱が高かつたのだらう。初め僕は自分の身に何事が起つたか、ちつとも分らなかつた。僕は不思議さうにあたりを見まはした。すつかり別人になつたやうで、自分で自分が分らなかつた。僕は自分の體を、手や足やを撫でて見た。窓は以前の處にあるが、いつも僕が向つてゐる壁にあいてゐなかつたのに驚かされた。又下の通の馬の足音

が、頭上から聞えてきたりした。まだ幾分か吁き氣があつた。

僕の髪は濡れて、頬に冷たくかゝつた。僕は腹ん觔ひに突き肱をして、枕の上を見た。濡れた髪は小さな房となつて、パラリと頬に垂れかゝつた。足は夜中靴を穿き通したので腫れ上つてゐた。痛みはしなかつたが、足の指は硬くなつて、地につけることが出來なかつた。

午後になつて、最早幾分暗くなり出した時、僕は寢床から起きて、部屋の中を歩きまはつた。努めてそつと忍び足で歩き、體の平均をとつて、なるだけ歩みを節約した。僕は大して苦しみもせず、又泣きもしなかつた。格別悲しくもなく、却つて幸福で滿足してゐた。僕はこれより外には、氣の持ちやうがないと思つてゐた。

そこで僕は外出した。

只少し困つたことは、吁き氣があるにも拘らず、矢張り飢ゑを感じてゐることだつた。恥かしいことだが、また意地汚ない食慾が出始めた。やがて、そいつは内部からこみ上げて來て愈々猛烈になつた。そして容赦なく僕の胸を嚙んだ。胸の中には人知れぬ不思議な働きが行はれてゐた。何でも二十疋ばかりの、齒をもつた小さな蟲がゐて、先づ一方に頭を向けて少し胸の内側を嚙る、すると次には向きをかへて、も一方を又少し嚙る。ちよつと休んでは、又始める。音も立てず、急ぎもしないで、穴をあけて行く。そしてその蟲共が觔ひずりまはつた跡には、皆溝が掘れてゐるのだつた。

僕は氣分が悪く、疲れて、汗を流しはじめた。僕は市場に行つて少し休まうと思つた。道は遠く難儀であつたがどうやら、そのそばまで漕ぎつけた。僕は市場の一廓、門のところに立つた。汗が眼に流れ込み、眼鏡を曇らして見えなくした。僕は汗を拭かうとして立ち止まつたが、何處に立つてゐるのか分らなかつた。あたりは恐ろしく騒々しかつた。

突然、氣をつけろ！といふ冷たい、鋭い叫びが聞えた。僕はこの叫びをはつきり聞いた。そして僕の悪い脚を動かせるだけ早く一歩踏み出して、慌てゝ傍へ寄つた。パンを積んだ素敵に大きな馬車が僕を掠めて通り過ぎ、その車輪で上衣をこすつた。もう少し早く避けてゐたら、何でもなかつたのだ。又僕も努力したなら、もう少しは早く避けられたであらう。どうも仕方がなかつた。僕は片方の足をやられた。足の指を一二本挫かれた。僕はその指が靴の中でぺちやんこになつたことを感じた。

馭者は力一ぱいに馬を停めた。彼は馬車の上から後ろを

振り向いて、どうしたかと驚いた顔して訊いた。實際それは、思つたよりもひどくなつてるかも知れない……が恐らく重傷といふ程のことではなかつたらう……僕は骨が折れたとは信じなかつた……「なに、いゝんだよ。」

僕は出來るだけ急いで、ベンチのところへ行つた。澤山な人が立ち止まつて僕を見てゐるので、僕は厭な氣持がした。勿論それは大した傷ではなかつた。結局不幸が來なければならないものなら、それは比較的運よくいつた方だつた。一番困つたのは、靴が滅茶苦茶に破れてしまつたことで、尖の方の底が缺けてゐた。足を手でもちあげてみると、その裂け目に血が滲み出てゐた。どつちからも態々求めて、こんなことをしたのでもなければ、馭者の方でもこれほどひどいことをする積りではなかつたのだ。彼は非常に驚いてゐるやうに見えた。だから若し僕が、馬車の上のパンを少しくれないかと言つたら、或は貰へたであらう。否、彼はきつと喜んで與れたにちがひない。神よ、彼を憐み、彼を祝し給へ！

僕は非常に飢ゑてゐた。僕は自分の無恥な食慾を、どう處置していゝか分らなかつた。僕はベンチの上で身悶えしながら、胸をすつかり膝に押し付けてゐた。

暗くなつてきた時、僕は市廳の方へ行つた。どうしてそこまで行けたかは自分にも分らない。それからその欄干の端に腰掛け、一つのポケットの裏を引ちぎつて、それを舐り始めた。何の目的もなく、何を見るともなく、暗い顔をして、前方を瞶めた。僕はそこらで遊んでゐる子供達の聲を聞いてゐた。又本能的に誰かゞ自分の傍を通つて行くのを知つてゐた。その外には何にも氣付かなかつた。

その時ふと、足下の肉市場に行つて、生肉を一片手に入れようと思ひついた。僕は立ち上り、欄干に沿うて、市場の他の端に行つて、下に降りた。肉屋のところへ行く時、昇降口を見上げて、犬を呼ぶやうな叫びをあげた。そして、つか〳〵と一番近い店へ行つた。

「犬にやるのですから、どうか骨を一本下さい！」と、僕は言つた。「骨をほんの一本。肉がついてゐなくても構ひません。たゞ口に咬へられさへすればいゝのです。」

僕は骨を一本貰つた。それにはなほ、少しの肉がついてゐた。僕はそれを上衣の下に隠した。僕は店員に體を述べたが、それが又餘りに丁寧だつたので、先方では却つて吃驚した。

「聽なんか言はなくたつていゝですよ。」と、彼が言つた。

「いやそんなことはありません。」と、僕は呟いた。「御深切にどうも有難う。」

僕は再び階段を上つて行つた。心臓かどき〳〵と強く鼓動した。

僕は鍛冶場の小路に深く潜り込んで、或る荒れた裏門の前へ來て止まつた。どこを見ても燈火が一つもなく、僕の周圍は幸にも闇であつた。僕は骨を嚙り始めた。

それは何の味もしなかつた。骨からは胸のわるくなる古血の臭氣がした。僕はすぐ嘔吐したが、懲りずにもう一度やつてみた。それを堪へることが出來れば、飢ゑを凌ぐだけの効はあるのだ。たゞ腹の中に落着かせればいゝ。けれども又吐いた。僕は腹を立てゝ、烈しく肉に嚙み付き、少しばかり喰ひ切つて無理矢理に嚙み込んでみた。けれどもそんなことをしたとて駄目だつた。肉が胃の中で温まるや否や、すぐ又嘔吐してしまつた。僕は兩手を握り締めて、絶望に泣き、憑物でもしたやうにばり〳〵骨を嚙り取つた。骨が涙に濡れて、汚れる程泣いた。吐いた、呪つた、歯嚙みをした。胸も張り裂ける程泣いた。そして大きな聲で、世界のあらゆる力を呪つた。

靜寂。一人の人もあたりになく、燈火も見えず、物音も聞えなかつた。

僕は無暗に腹を立て、ぜい〳〵咽喉を言はしながら、歯ぎしりして泣くと、その度に肉が口にもどつて來た。食べられたら、それでも幾分か、腹の足しになるに違ひなかつたが、いくら食べようとして見ても出來なかつた。で、すつかり癪にさはつて、その骨を門の方に抛り投げて、怒り狂ひ、天に向つて叫び罵り、ぜい〳〵と息をして神の名を連呼しながら、指を獸の爪のやうに折り曲げた。

……天の神聖なバアル（神を殊更に惡魔の名で呼ぶ）よ、確かに、お前なんてものはありはしない。若し本當にあるなら、俺はお前の天國が地獄の火で震へるように呪つてやる。俺はお前の用をしようと言つたのに、お前はそれを斥けたぢやないか。お前は俺を突き飛ばした。俺はお前が試みを下す時機を知らないから、永久にお前に尻を向けるのだ。俺は今自分が死ぬといふことを知つてるのだ。それでもお前を嘲つてやる。後生なんか何でもない。死の牙をもつた神らしい面のアビス（埃及の牛頭神此處では惡魔）め！　お前は俺に對して暴力を用ゐたな。だがお前は知らなかつたんだ、俺は決して逆境に屈するものでないつてことを。お前はそれを知らないでもよかつたのか。お前は俺の心臓を睡つてゐるやうに造つたのか。俺の生命全體と、俺の血の一滴々々は、お前を罵り、お前の恩寵に唾を吐きかけることを喜んでゐるのだぞ。俺は今からお前がする事爲す事全部を振り棄てゝやらう、若しか俺の心が再びお前を思ふ時があつたら、俺は自分の心

を呪つてやる。も一度お前の名を呼ぶなら、俺は自分の舌を切り取る。若しお前といふものが存在するなら、この後まだ俺が生きてゐやうと、又死んでしまはうと、これがお前に向つて言ふ最後の言葉だ。俺は左樣ならと言ふ。そして默つて、お前に背を向けて、自分の路を行く……

靜寂。

僕は憤怒に顫へた。まだ惡口をぶつくさ言ひながら、同じ場所に立つてゐた。烈しく獻欷り上げた、狂氣じみた激怒の發作の後はげつそりして、ぼんやりとそこに立つてゐた。

あゝ、こんな慘苦の裡にあつてすら、僕は文章や、文獻の引照だけは立派にしたいものだと骨折つた。その結果が卽ち前に言つた文句となつたのだ。

僕は多分三十分もそこに立つてゐたらう。そして獻欷りあげたり、ぶつ〳〵呟いたりしながら、びつたり門に寄り添うてゐたが、その時僕は、人の話聲を聞いた。鍛冶場の小路を話しながら此方へ來る二人の人の會話であつた。で、僕は急いで門を去り、家の壁に沿うて進み、再び明るい通に出た。

ヤングス丘を降る時、僕の頭は突然、妙な方向に働きはじめた。市場の端にある見窄らしい小屋、物置、破れ着物のかゝつた古板壁は、この場所を汚してゐると思つた。それは市場の外觀をすつかり傷つけてゐた。市の體面を損じてゐた。ちえつ、襤褸屑なんざあ失せやがれ！

僕は心のうちで、今通り過ぎて來た地理學協會のあの美しい建物を取り除けるには、どれ程金がかゝるだらうと、見積つて見た。あんな建物をこゝへ持つてくるには七萬、或は七萬二千クローネル以下では出來まい。けれどもほんのちよつとした金だ、まづ小遣錢だ、ハ、、、。

僕は體全體を前へ〳〵とのめるやうに進めながら、なほも折々獻欷り上げた。

僕は自分の身のうちには、もういくらも生命が殘つてゐないで、最後の讃美歌を唱ふだけの氣力もないことを感じた。然し今僕はもう大分平靜になつて、そんなことは氣にかけなくなつてゐた。僕は市を下つて、波止場へ向け、愈々自分の家から遠のいて行つた。僕は地にびつたり體をつけて、死んでしまひたかつたのだ。苦惱はいよ〳〵僕を無感覺にした。傷ついた足は疼いた。痛みは、肝全體に亙つてゐるが、そんなにひどく痛いとも思はなかつた、僕はもつとつらい目を悐へて來たのだから。

そこで僕は鐵道棧橋に來た。そこには車輛の往復は一つもなかつた、何の物音もしない、たゞ一人二人の人足又は海員と見える者が手をポケットに入れて、あつちこつちぶら

ぶらと歩いてゐるきりだつた。僕はたゞ、行き違つた時、横目で此方をじろ〳〵見て行く跛足の男がゐるのに氣がついた。本能的に僕は彼の傍に足を止めて、ノンネン號はもう出帆したかと聞いて見た。そしてその次には、そいつの眼の前に指を鳴らして、

「おい、ノンネン號だ。」と言はないわけには行かなかつた。

ノンネン號の事は今まですつかり忘れてゐた。けれども知らず〳〵の裡に、それが僕の心に滲んでゐたのだが、自分ではそれを知らないで、始終頭に持ち廻つてゐたのだつた。

さうだ、ノンネン號はもう夙に出帆してゐた。

この男はその船が何處へ行つたか知つてはゐまい？

彼はちよつと思案して、長い方の脚で立つた。で、短い方が持ち上つて、少しぶら〳〵した。

「いや知りません。」と、彼は言つた。「貴方はあの船が此處で何を積んだか御存じですか。」

「いや、知らない。」と、僕は答へた。

けれども僕は直ぐにノンネン號のことは忘れてしまつて、彼に、在來の、正確な地理學の里數で積れば、ホルメストランまでどれくらゐあるかと訊いた。

「ホルメストランまで？　それなら多分……」

「それとも、ヴェーブルウングス・ネスまでは？」

「私は何と言つてゐましたかね。さう〳〵ホルメストランまでは、……」

「いや、もういゝよ。それで僕はすつかり想ひ出した。」と、僕は再び遮つた。「時に君、煙草を少しくれませんか、ほんの少しでいゝから。」

僕は煙草を貰つて丁寧に禮を言つて立ち去つた。僕は煙草が入用ではなかつたので、それを直ぐポケットに入れた。彼はなほ僕から眼を放さなかつた。僕はどうやら彼に疑ひを起さしたやうであつた。その目は僕の一擧一動を、疑ひを以て跟けて行つた。僕は彼に跟けられることが厭だつたので、向き直つて、再び彼のところへ行き、彼を見て言つた——

「靴直し。」

只この『靴直し』の一語だけで、それ以上は言はなかつた。僕はさう言ひながら、きつと彼を睨んだ。恐ろしい劍幕で睨み付けたと思ふ。それは、僕がまるで幽靈になつて別な世界からでも彼を見てゐるやうに凄かつた。僕はこの言葉を出した後暫く立つてゐた。それから又停車場の方へ歩いて行つた。彼は一言も言はずに、只僕に目をつけてゐるきりだつた。

靴直し？

僕は俄かに立ち止まつた。さうだ、僕は氣がついた、この跛足には、前に會つたことがある。晴れた朝、グレンセン街で出會つたのだ。僕は胴着を質入れして金をやつたのだつた。それからこつち、僕には千年も經つてゐるやうな氣がする。

立ち止まつて、この事を考へてゐる間、僕は、廣場と港町の角に當る家の壁に身を倚せかけて立つてゐたのだが、ふと氣がついて、歩かうとした。けれどもそれが出來なかつたので、きつと前を見つめた。あらゆる羞恥が頭を嚙んで、どうにも仕方がなかつた——と、思ひも寄らず僕は『大將』と顏つき合せてしまつた。

僕は棄鉢に無暗と大膽になつて、わざと先方に認めさせるやうに、靠れてゐた壁から一歩離れて行くやうなことさへもした。だが僕は同情を惹かうとして、そんなことをしたのではなく、自分を嘲り、自分を笞打つつもりでしたのだつた。僕は通路へ躍り出て、僕の顏を踏み付けて通つて下さいとも言へたゞらう。が、僕はまだ今晩はと挨拶も言はないのだつた。

『大將』は、僕が少し變だと覺つたらしかつた。彼はちよつと歩度をゆるめた。僕は彼を呼び止めた——

「僕、原稿を貴方のところへとうに持つて上らなければならなかつたのですけれど、まだ出來ませんので……」

「えゝ？」と、彼は疑ひながら答へた。「貴方はもう書き上げたのぢやありませんか？」

「いゝえ、まだ書き上げません。」

すると突然僕の眼には、『大將』の深切に、涙が湧いて來た。僕は冷靜な態度に還らうとして、烈しく咳拂ひをした。『大將』はびつくりして、僕の顏を見た。

「近頃貴方の生活はどうです？　やつて行けますか？」と、彼は言つた。

「いゝえ。」と、僕は答へた。「無一物です。今日はまだ食べないのです、けれども……」

「そりやひどい、飯も食はずに、此處らをうろついてゐるのは！」と言つて、彼は急いでポケットに手を突込んだ。

今僕は羞恥の念が起つたので、再び壁によろめいて行つて、仆れようとする身を支へた。僕は『大將』が、手に金をもつて、僕を呼んでゐるのを見た。彼は十クローネル札を一枚差し出した。彼は何の條件をもつけないで、十クローネルを與れた。同時に、僕が飢死するのを看過すわけには行かないと、幾度も繰り返した。

僕は躊躇して、直ぐにはその札を取れなかつた。僕は恥ぢたのだ。……しかもそれは、餘りにひどい恥ぢやうであ

つた。

「さあ早く！」と言つて、彼は時計を見た。「私は汽車を待つてゐたんです。そら來ました、お聞きなさい、あれ、あの音を。」

僕は金を取つた。僕は喜びの餘り、呆然として一言も言はなかつた、有難うとも言はなかつた。

「遠慮なさる程のものぢやありませんよ。」と、編輯長は言つた。「貴方にはあの話が書けることを私は信じてゐます。」

さう言つて、彼は去つた。

彼が二三歩行きかけた時、突然、僕はその助けに對して、感謝の一言も言はなかつたことに氣がつき、急いで後を追はうとしたが、脚がきかないので獸目だつた。僕は幾度も前にのめつた。彼は愈々遠く去つた。僕は追ふのを止めて、呼びかけようとしたけれども、出來なかつた。でも、とう〳〵勇氣を出して、一二度呼んだ時には、彼はもう遠くへ去つて、その耳に屆くには僕の聲は餘りに弱かつた。僕は歩道に立つて、その後を見送りながら竊かに涙にくれた。

「僕にはどうも分らない！」と、自分に言つた。「あの人が僕に十クローネルくれるなんて！」

僕は戻つて來て、『大將』のゐた處に立ち、そのあらゆる行動を眞似てみた。僕は十クローネルの札を濡れた眼のそばに擦り付けるやうにして表裏を檢め、聲の限り呶鳴りはじめた——僕が手にもつてるのは、正眞正銘の十クローネル札だぞ。えへん、どんなもんだい！

暫くの後——恐らくは餘程永く經つてからだらう、もうあたりはひつそりとしてゐたから——僕は不思議にもトムテ街十一番地の前に立つてゐた。そこは、僕を乘せて來た馭者をまいたところだつた。誰にも見咎められないで、家の中を通り抜けたところだ。僕は其處に立つて、一寸考へて、自分が曝にしたことに驚いたが、再び門を入つて、飲食店兼旅宿の中へ進み入つた。そして其處に宿を求めて、直ぐ床に就いた。

* * * *

火曜日。

晴れ、靜穩、珍しく明るい日だ。雪は歇んでゐた。生命、光明、嬉しい顏、微笑、哄笑。噴水からは、日光に鍍金せられ、蒼い空に色づけられて、水柱が弧形を描く……

晝頃、僕は、編輯長の奥れた十クローネルのお蔭で、なほ滯在してをられたトムテ街の旅宿を出て、市中へ行つた。僕は非常に嬉しい氣持になつてゐた。そして午後のうちは

ずつと一番繁華な街路をうろついて、いろんな人の涌るのを見た。まだ午後七時にならぬうち、サンクト・オラーヴス廣場に出掛けて、第二號館の窓をこつそりと覗き込んだ。若しかしたら彼女を見かけはしまいかと云ふのだつた。僕は始終、輕い、妙にそは〳〵した氣持でゐた。

どんな事が起るだらうか？　若し彼女が階段を降りて來たなら、何と言つたらよからうか。「今晩は、お孃さん？」それともたゞ微笑だけしたものだらうか。

僕は靜かに微笑することに決めた。勿論はつきりと頭は下げるつもりだつた。

僕はこつそりとそこを去つた。約束の時間より早過ぎたので、氣まりが惡るかつたのだ。ちよつとカルル・ヨハンス街をぶらついて、大學の屋根時計を見た。八時が鳴つたので、再び大學街を上つて行つた。途中で、僕は一二分遲れてしまつたかなと思つて、出來るだけ急いだ。僕の足は非常に痛んだ。でもそれ以外、何の故障を持たなかつた。

僕は噴水の傍に立つて、ほつと息を吐いた。僕はそこに隨分永く立ち止まつて、第二號館の窓を見上げてゐた。けれども彼女は出て來なかつた。

なあに、待つてゐればいゝのだ。急ぐことはない。何か差支へが起きてゐるのだらう。

そこで僕は尙ほ待つた。

僕はこんなことを夢に見てゐるんぢやないだらうか。あの晩、僕は熱があつたのだから、初めて女に會つたのも、或は幻想だつたのかも知れないぞ？

僕は段々分らなくなつて、自分の事が皆確かでないやうに感じ出した。

「ふむ！」と、僕の後ろで言つたものがあつた。

僕はその暖拂ひを聞いた。又、近く輕い足音を聞いた。けれども振り向かなかつた。たゞ眼の前の大きな階段を見上げたゞけだつた。

「今晩は！」と、その聲が言つた。

僕は微笑するのを忘れた。すぐ帽子を取ることさへしなかつた。僕は、彼女が其方から來たのに、すつかり面喰つてゐたのだ。

「長いことお待ち下さいまして？」と、女は言つた。歩いた後なので、やゝ呼吸が荒かつた。

「いゝえ。」と、僕は言つた。「今少し前に來たばかりです。でも、僕が永く待つてゐたつて、何でもありませんよ。僕は、貴女が別な方面からおいでになることだと思つてゐました。」

「私は母を或る家へつれて行つたのです。母は今夜は宅に

をりませんの。」
「あゝさうですか！」と、僕は言つた。
僕等は歩き出した。一人の巡査が街の角に立つて、僕等を見てゐた。
「でも、何處へ參りませうか。」と、女は言つて、立ち止まつた。
「お好きなところへ、貴女のお好きなところでいゝです。」
「えゝ、ですけれど、先にきめなけや厭ですわ。」
間。
そこで何とか僕が言はなければならなかつた。
「貴女の窓は暗いですね？」と、僕が言つた。
「えゝ、さうですの。」と、女は元氣よく答へた。「女中も出て行つたものですから。私たつた一人なんですの。」
二人は第二號館の窓を、まだ一度も見たことがないもののやうに、珍らしさうに眺めた。
「ぢやお宅へ行つちやどうですか。」と、僕は言つた。「僕は、さうしろと仰しやるなら、戸口に立つて、中へは入りませんが？」
けれども今僕は胸がどきついて、顫へて來た。自分が餘りに大膽であつたことを悔いたのだ。
若しかするとこの女にもこれつきり會へなくなりやしまいか。あゝ僕の服裝のみじめさ！
僕は失望しながら、答へを待つた。
「戸口になんぞ立つていらしつちやいけませんわ。」
僕等は上つて行つた。
廊下の暗いところで、女は僕の手を取つて、案内して行つた。
「そんなに溫順しくしていらつしやらなくてもいゝんですよ。」と、女が言つた。「お話しなすつても構ひませんわ。」
僕等は入つた。女は蠟燭を點した。——女が點したのはランプでなくて、蠟燭であつた——女はくす〳〵笑ひながらこの蠟燭を點した。
「私を御覽になつちやいけませんよ。厭ですわ、私恥かしいわ。もうあんな事はしませんよ。」
「しませんつて、何をです。」
「もうしないわ……ほゝゝ。いゝえ、……貴方を接吻しないつていふんですわ。」
「ほんとに接吻しませんか。」と言つて、僕等は笑つた。
僕は女に向つて兩手を擴げた。女は巧みに躱して、卓子の向うへ行つた。僕等は暫く睨み合つてゐた。二人の間には蠟燭があつた。
女は面紗をとり、帽子を脱いだ。その間、その眼は巫山

戯るやうに僕を見、僕が抱きに來ないやうにと油斷なく見張つてゐた。
僕はもう一度飛びついて行つたが、敷物に躓いて仆れた。僕の傷ついた足は最早支へきれなかつたのだ。僕はすつかり悄氣て起き上つた。
「おやまあ、お顏の赤いこと！」と、女は叫んだ。「けれども、貴方はひどいぶきつちよねえ。」
「えゝ、さうですとも。」
僕等は又卓子のまはりを跳び廻つた。
「貴方は跛足ね、ぢやなくつて？」
「そりやさうでせうよ、でもほんの少し。」
「この間は指を痛めていらしつたが、今度は足なのね。さう災難續きぢや堪りませんわ。」
「僕、二三日前にちよつと車に轢かれたのです。」
「車に轢かれた？　ぢや又醉つてらしつたの？　まあ、何てことでせう、お若いのに。」
女は僕を指さして、眞面目な顏をした。
「さあ掛けませう。」と、女は言つた。「いゝえ、戸の傍ぢやなくつてよ。貴方あんまり遠慮しすぎるわ。こつちへいらつしやいよ。貴方はそこ、私は此處、さう、それでいゝわ……ほゝゝ。遠慮深い人は、ほんとに厭ですわ！　自分から進んで、どし〳〵言つたり、爲たりしなけりや、何の役にも立たないわ　たとへば貴方が、私の椅子の凭れに手を置くことなんか、何でもなく出來ることだと、私は思ひますわ。私がこんな事をいふと、貴方はそれをお信じなさらないで、眼をお剝きになりますわね。えゝほんとよ、私それは幾度も見たわ、貴方は今もさうなすつたわ。貴方は御自分を高く見せるお積りなんでせうけれど、あんまり臆病だつてことを思はなけりやいけないわ。醉つてらした時は、貴方は大膽だつたわ。私を家まで跟けて、出鱈目を仰しやいましたわね。——お孃さん、御本が落ちました。きつと貴女は本をお落しになりましたよ、お孃さん、つてね。ほほゝ——本當に貴方、厚かましかつたわ！」
僕はぼんやりして、たゞ女を見てゐた。頭は高く音を立てゝ鳴り、血は脈管に漲つた。再び人間の住居に坐つて、時計のチクタク動くのを聞き、獨りぼつちでなく、若い、生きてゐる女と話してゐるといふ意識が、驚く程愉快であつた。
「なぜ何にも仰しやらないの？」
「……何てまあ貴女の美しいこと！」と、僕は言つた。「僕は此處に坐つて、貴女にチャームされてしまひました、今すつかり囚はれてしまつてゐるんです。だつて何とも仕方が

ないのです。貴女は全く驚くべき人ですね……時とすると、貴女の眼は僕がまだ見たことのない程光りますよ。えーと、何でせうかね。いえ〳〵花でもない、寧ろ――もう貴女に惚れ込んでしまひましたよ、それはまるつきり無茶なんです。けれど貴女　お名前は何と仰しやいますか、もうお名前を仰しやつてもいゝでせう……」

「お名前は何と仰しやいますかつて？　あらまあ、私すつかり忘れてをりましたわ。私は昨日一日、貴方のお名前をお訊ねしようと思つてゐましたの。尤も、まる一日思つてゐたとは言はれませんが……」

「僕が貴女を何と呼んだか覚えていらつしやいますか。僕は貴女をユラヤリィと呼びましたよ。それを貴女どうお考へになりますか、こんな滑らかな音を？」

「ユラヤリィ？」

「えゝ。」

「それは外國語ですの？」

「ふむ、いや、さうぢやありません。」

「でも、さう悪くもないわ。」

しばらく押問答の末、僕等はお互に名乗り合つた。彼女は僕の直ぐ傍のソオファにかけて、足で自分の椅子を押しやつた。そこで僕等は又話を始めた。

「貴方は今晩、髪を刈つていらしたのね。」と彼女が言つた。

「貴方は一體に、前よりもよく見えるわ、けれどもほんのちよつとよ……自惚れちや厭よ……この間はほんとに見苦しかつたわ、おまけに指には汚ない襤褸なんか捲いていらしつたんですもの。それですのに、何處かへ入つて、私と一緒に葡萄酒を飲みませうなんて……眞平ですわ。」

「では矢張り、僕の風態が悪いから、あのとき貴女は一緒にいらつしやらなかつたのですか。」と、僕が言つた。

「いゝえ。」と、女は答へて、下を向いた。「決してさうぢやなかつたの！　そんなこと私一度だつて考へたことはありませんわ。」

「お聞きなさい。」と、僕は言つた。「貴女は今きつと、僕が、思ひの儘に着たり、食べたりしていける人間だと信じておいでゞせう。けれども僕はそれが十分にやれないのです。僕はほんとに貧乏なんです。」

女は僕を見上げた。

「本當？」と、彼女は言つた。

「本當です。」

間。

「あらまあ、私もさうなんですわ。」と、元氣よく頭を振つて、女が言つた。

彼女の一言一句が僕を酔はした、酒の雫のやうに僕の心臓に沁みた。尤もこの女は氣取つた言葉をつかひ、且つ聊か厚かましい饒舌で、至つて俗悪なクリスチャニヤ娘ではあつたが。僕が何か言ふとき、その頭を少し傾げる彼女の癖は、すつかり僕を逆せ上らした。そして、女の呼吸が僕の顔にかゝるやうに感じた。

「お話しゝませうか？……」と、僕は言つた。「けれども怒つちやいけませんよ　昨夜寢床に入つて、僕は貴女の方へ腕を伸ばしたのです……まるで貴女がそこに臥てゞもゐるやうにですよ。それから寢ました。」

「おやさう？　それはよかつたのね！」

間。

「けれども貴方にそんなことが出來るのは、お互ひが遠くに離れてゐる時だけでせう。でなかつたら……」

「でなかつたら出來ないと言ふのですか。」

「えゝ、お出來なさらうとは信じませんわ。」

「なあに、何だつて僕に出來ないことはありません。まあ見ていらつしやい。」と言つて、僕は彼女の腰に腕をまはした。

「なんだか……危いもんだわ。」と、女は言つたゞけであつた。

女が僕をそんなに甘く見てゐるのが、僕の癪に障つた。僕は勇氣をふるひ、臍を堅めて、彼女の手を取つた。けれども女はそつと手を引つ込めて、少し傍の方へ除いた。僕の勇氣は挫けて、恥かしくなつたので、てれ隠しに窓の方を見た。でも僕がそこに腰掛けてゐるのは、如何にもみじめだつた。僕は何よりもまづ、自分がいつぱしの人間だといふことを思はないやうにしなければならなかつた。これが少くも、どうにか自分の體面を維持し得られるだけのものをもつた時分のことならば、それは又別な事であつたが。僕は今更非常に零落したことを感じたのだつた。

「それ御覽なさい！」と、彼女が言つた。「それ御覽なさい、ちよつと眉を寄せただけで、私、貴方を自由にすることが出來るぢやありませんか。ちよつと貴方から逃げれば、貴方は直ぐに恥かしがつておしまひでせう……」

彼女は巫山戯たやうに笑つた。顔を見られるのが堪らないといふやうに眼を伏せた。

「そんなことはない！」と、僕は突つ掛つて行つた。「ぢや待つておいでなさい！」

僕は女の肩を強く抱き締めた。

彼女は理性を失つてはゐなかつたか？　僕を初心だと思つてゐるのか？　よし、それなら、やつて見せる。……僕

がこんな事で後れを取るなんて、誰だつて言へるものか。この人間には惡魔が憑いてゐるのだぞ！　若したゞそれだけのことなら……

女はまつたく靜かに、やつぱり眼を伏せてゐた。僕等はどつちからも口をきかなかつた。僕は女を堅く抱き締めて、その體を僕の胸に押しつけた。女は一言もいはなかつた。僕は心臟の鼓動を聞いた——自分のも、彼女のも。それは蹄のやうに鳴つた。

僕は彼女を接吻した。

僕は最早我を忘れてしまつた。僕は何か囈語を言つたので、女に嗤はれた。彼女の口に顏を近寄せ、甘えた名を呼び、女の頸を撫でゝ幾度も〳〵接吻した。僕は女の胴着の釦を一つ二つはづして、その奥の胸、白く、丸い、二つの美しい奇蹟のやうに、リンネルの後ろから覗いてゐる乳房をちらりと見た。

「見せて頂戴！」と、僕が言つた。そしてなほ多くの釦をはづして前をはだけて見ようとした。けれども僕は餘りに昂奮してゐたので、胴着の狹くなつた部分の一番下にある釦をはづすことが出來なかつた。

「ちつと見せて頂戴、ちつと……」

女は僕の頸に手を巻いた、きはめてそろ〳〵と、又柔かに。彼女の呼吸は、その赤い、顫へてゐる鼻の孔から、すう、すうつと僕の顏にかゝつた。彼女はも一方の手で、自ら一つづゝその釦をはづし始めた。てれ隱しに笑つた。短い笑ひだつた。彼女は、自分が恐がつてゐることを僕に見破られはしまいかと危ぶんで、幾度も僕の顏を見上げた。彼女はバンドを解いて、コルセットを押し上げた。うつとりとして、又そは〳〵してゐた。僕は荒くれた手でこの釦やバンドを弄つてゐた……

それから注意を轉ずる爲めに、彼女はその左の手で僕の肩を撫でゝ言つた——

「おや、澤山拔毛があるわね！」

「えゝ。」と僕は答へた。そして口を、女の胸に押し付けようとした。この時女の前は殆ど全部開いてゐた。ふと、女は、これはひどすぎると思ひついたらしく、再び胸を合はせて、少し腰をあげた。そしてそのてれ隱しに、僕の肩に落ちてゐる澤山の拔毛のことを言ひ出した。

「貴方の髮はこんなに落ちて、どうしたんでせう？」

「知りません。」

「勿論お酒がすぎるからだわ、きつと……おゝいやだ、私そんな事言ひたくない！　貴方恥ぢるがいゝわ！　いゝえ、私貴方を信じやしないわ。まだ若いくせにこんなに髮が拔

けるんだもの……さあ、一體貴方どんな生活をしていらつしやるか、私に話して下さい。きつとそれは恐ろしいものでせう。でも本當のところを、ねえ貴方、嘘はいけませんよ。貴方、隱したつて分つてるわ。ですからお話しなさい！」

あゝ、僕は疲れてしまつた！　僕はこんなことに骨を折るよりも、ぢつと坐つて女を眺めてゐたかつた。僕は何の役にも立たない、襤褸屑に過ぎなかつた。

「さあ、お始めなさい！」と、女が言つた。

僕はそれを機會に、一切を話した。たゞ本當の事ばかりを話した。僕は有りのまゝよりも惡くは話さなかつた。彼女の同情を惹く積りではなかつたのだから。僕は又、或る晩五クローネルを誤魔化したことも白狀した。

女は口を開け、蒼くなつて、恐ろしさうに、白い眼をむいて、聞いてゐた。僕は自分の與へた悲しい印象を打消し、以前の感じを恢復しようとして、立ち上つた——

「そんなことはもう濟みました。もうそんなことはないのです。今僕は生れかはつてゐます……」

けれども女はすつかり氣落ちがしてゐた。たゞ「あらまあ！」と言つたきりで、口を噤んだ。彼女はちよつと間をおいては、この間抜詞を言つて、その度に口を噤んだ。

僕は巫山戲かゝつた、女を擽つた。胸に抱き上げた。女はもう釦をかけてゐた。それが僕の氣にさはつた。

何だつて釦をかけるのだ？　僕は今、女の眼には一層下等に見えるやうになつたのか。假りに髮の拔けたのが僕の罪であるとしても、今の事はそれよりも一層いけないのだらうか。僕が放蕩兒であつたとしたら、彼女は却つてもつとよく思つたゞらうか、今囈語は言ふべき時でない。たゞやつゝけさへすりやいゝんだ。やつゝけられゝば。僕も男だ——

僕はもう一度試してみなければならない。

僕は女を下に置いた、單にソオファの上に置いた。彼女は抵抗した、尤も、ほんの僅かではあつたが——そして吃驚したやうに僕を見上げた。

「いけない……何をするの？」と、彼女は言つた。

「何をするかつて……」

「いけない……いけない、でも……」

「いゝよ、いゝよ……」

「いゝえ、いけない！」と、女が叫んだ。そして、ひどいことを言つた。「私、貴方は氣違ひぢやないかと思つてゐるんですよ。」

僕は思はずぎよつとして、言つた——

「嘘だ、貴女はそんなことを思つてゐやしない！」
「本當に貴方は變に見えたのよ！　私をお跟けなすつたあの朝――あの時にも、よろ〳〵していらしつたんぢやなくて。」
「いゝえ。飢ゑてなんかゐませんでした、丁度食べたばかりの時でしたから。」
「それぢや猶ほ悪いわ。」
「僕がよろ〳〵してゐた方が、却つてよかつたと言ふのですか？」
「さうよ……おゝ、私貴方が恐い！　放して下さい！」
僕は考へた。僕は放されない。僕はそのことにもう夢中になり過ぎてゐた。
「へん、この場になつて何の囈語をいふ！　僕が嘗い！　よし、ぢつと溫順しくしてをれ！　愚圖々々吐すな！」
女は非常に烈しく抵抗した。辱めを免れたいばかりで、烈しく抵抗した。僕はうつかり蠟燭を突き落して、消してしまつた。彼女は必死に抵抗した、涙聲で叫んだ！
「いけない、いけない！　そんなことしちやいけない！　お乳に接吻がしたいのなら、さして上げます。どうぞ、それば　つかりは止して下さい！」
僕は直ぐに止めた。女の言葉は恐ろしげに、たよりなく、

僕の胸の眞唯中を射拔いた。
女は僕にその代りとして、乳を接吻することを許したのであつた！　何とそれは美しい、美しい、又單純なことであつたらう！　僕は女の足元に仆れて、跪かうと思つた。
「けれども、貴女、」と、僕はすつかり慌てゝゐた。「僕は分りません……まつたく分りません。これはまあ何といふ冗談でせう……」
女は起き上つて、顫へる手で蠟燭を點した。僕はソオファへ腰掛けて、何もしなかつた。何が出來るものか。僕はもうすつかり厭になつてゐた。
女は壁の時計を見て、吃驚した風で……
「あゝもう女中が歸るわ！」と言つた。「一時には歸ると言つたから。」
僕はこの暗示の意味を悟つて、立ち上つた。女はマントを取つて着ようとしたが、それを置いて、煖爐の傍へ行つた。女は愈々蒼ざめて、更に落着きがなくなつた。僕に出て行けといふのではないかと、試みに言つてみた――
「お父さんは軍人でいらつしやいますか？」
さう言ふと同時に、僕は立ちかけた。
「えゝ軍人ですの。どうしてそれを御存じ？」
「知つてやしません、只さう思つただけです。」

「まあ不思議ね！」
「えゝ、ふとそんなことを思つたのです。へゝゝゝ。そこが狂人なんでせう……」
女は急いで僕を見上げたが、何とも答へなかつた。僕は、女の神經をいらだゝせたことを察し、手早くこの場を切り上げてしまはうと思つて、戸口に行つた。
女はもう僕に接吻しないだらうか。手も延べないだらうか。僕は立つて待つてゐた。
「ぢやお歸りなさるのね？」と言つて、女はまだ煖爐のところに、ぢつと立つてゐた。
僕は答へなかつた。僕は恥ぢ、又迷つて、何も言はないで女を見上げた。
何と僕は慘めなものではないか。僕が今行かうとしてゐることも、女に何の注意も起させない。女は突然僕を忘れてしまつたのだ。僕は別れの言葉を、女を刺戟して少しでも感動させさうな鋭い言葉を探した。が、僕の堅い決心とは全然反對に、冷靜にするどころか、そは〳〵と落着きなく、途轍もない話をしてしまつて、鋭い言葉なんか出て來なかつた。僕は極度に頭が空になつてゐた。それに僕の話は又も演說と朗讀とになつてしまつた。
なぜ女は、はつきり〻、分るやうに、さつさと出て行けと言はないのだらうか、と僕は訝いた。
さうだ！　なぜそれを言はないのだらう？　遠慮したつて何にもならないぢやないか。
女中がもう歸つて來るなんて言はずに、簡單にかう言つたらよさゝうなものだ――
「さあ、もうお歸り下さい。私は母を迎ひに行かなけやなりませんの。御一緒に參ることは出來ませんから。」
女もかう言ふ事を思つてゐたのではなからうか？　うん、さうだ、きつとさう思つてゐたのだ、僕は直ぐにさう感づいた。がそれは、僕の思ひ違ひであると氣づくのは何でもないことだつた。たゞマントを取つて、それを又置いたゞけの容子で、直ぐ僕には分つたのだ。――前に言つた通り僕は直ぐに推察する能力をもつてゐたのだつた。それは全く狂氣のせゐだとは言つてしまはれまい……
「でも貴方、どうぞ狂氣なんて言つたことをお免し下さい。私、ついロを辷らしてしまつたんですから！」と、女は叫んだ。けれども矢張りそこに立つたまゝで、僕のところへは來なかつた。
僕はそれにも屈しないで、なほ續けた。僕はそこに立つてゐて、女が厭になつたことや、僕の言葉が少しも效果のないことを知りながらも矢張り喋つてゐた。

一體本當に氣が違つてゐないでも、可なり敏感な性質を持つた人はあるものだ。と僕は思ひきつて言つた。世には些細なことに調子づいてぐん〳〵伸びて行くが、ほんのちよつとでも苛酷な言葉をかけられると、死んでしまふといふ性質もあるものだ。僕は自分がこんな性質をもつてゐることを、彼女に了解さした。實のところ僕の貧乏は、僕のうちの或る力を鋭利にして、その爲め僕を不愉快にした。それは確かに不愉快である。けれども又確かに利益であつて、或る場合それで助かつたのだ。智慧のある貧者は、智慧のある富者より、遙かに精緻な觀察者である。貧者は一歩踏み出す毎に、身のまはりを見、その會ふ人より聞く言葉を一つ〳〵注意して耳を傾ける。彼が運ぶ一歩々々は、彼の思想と感情と任務(勞働)を言ひつける。彼は耳敏く、感じ易い、彼は世故に長けた人である。彼の魂には烙痕がある。

僕はまつたく永い間、僕の魂に印せられた烙痕のことを話した。けれども、僕が話せば話す程、女は落着きがなくなつた。とう〳〵女は、『たまらない！』と言つて、一度その手をぢれつたさうに捻ぢ合はした。僕は、すつかり女を惱ましたことを知つた、そんな積りではなかつたのだが。けれども、ついさうなつて了つたのだつた。

でも、どうやら僕は是非言ひたいと思つたことを、ほゞ言つてしまつたと思つた。僕は女の困惑した眼付に動かされて叫んだ——

「もう行きますよ、行きますよ！　戸の把手を握つてゐるのが見えませんか。左様なら、では左様なら！　僕が二度も左様ならと言つて、しつかりと足ふみしめて行くやうに身構へしたら、貴女でも返事が出來ませう。貴女にとつては御迷惑なんですから、もう決して二度とお目にかゝらうとは願ひません。けれども言つて下さい、なぜ貴女は僕を安心して行かしてくださらないのですか。僕は貴女に何をしましたか。僕は貴女に御迷惑はかけなかつたでせう、えッ？　ではなぜ貴女は、僕を見も知らぬ人のやうに、突然そつぽを向いてお了ひなさるのですか。貴女は今僕を滅茶滅茶にして、以前よりも僕を一層哀れなものにして了ひました。なんてひどいことでせう。けれども僕は狂人ぢやありません。お考へになつたら、僕に間違ひのないことは貴女によく分る筈です。此處へ來て、お手を貸して下さい！　さもなければ、僕を傍に行かして下さい。いけませんか。何にも悪いことはしません、只ちよつと貴女の前に跪いて、貴女の前に、牀の上に跪くだけです。いゝでせう？　いえ〳〵そんなことを僕はしやしません。貴女は僕を恐がつておいでゞすね。でもそんなことはしません、決してしません、お聞きですか。おや、なぜそんなに恐ろしさうな眼付をなさるのです。僕は靜かに立つてゐます。身動きもしません。僕は敷物の上、お足のすぐ傍の赤い薔薇の花模樣の上に、ちよつと跪けばいゝのです。けれども貴女が恐がつておいでのことを、直ぐ貴女の眼付で見てとりました。だから此處にぢつと靜かに立つてゐたのです。一歩も進まないで、お願ひしたのですよ、いゝですか。僕が跪きたいところは、その敷物の赤いところだといふことを貴女にお見せさへしたら、今のやうに、ぢつと此處に立つてゐる積りでした。僕は指さへも指しません、ちつとも指しません、指して貴女を驚かしません、僕は只顎をしやくつて、そこを眼で知らせればいゝのです。貴女は僕がどの薔薇をさしてゐるかよくお分りになつてゐる筈です。けれども、貴女は僕に跪くことをお許しになりません。貴女は僕を恐がつて、近寄らしたくないのです。僕を狂人だとお思ひなさる貴女の心が分りません。さうぢやありませんか。貴女はもうそんな風に思つてはいけません。ずつと以前、夏の時分でしたよ、僕が發狂してゐたのは。僕は非常に勉强して、餘り考へることが澤山あつた時には、定つた時間に、お晝の御飯を食べに行くのを忘れてゐました。そんなことが毎日でした。僕はそれを記憶してゐなければならないのに、又直ぐに忘れました。それは、神に誓つて、本當です。若し嘘だつたら、神に生命を召上げられてもかまひません。ですから、貴女の仕向けはどんなにいけないことかゞお分りでせう。僕は餘儀なくさうしたのではありませんよ。僕は信用を得てゐます、大きな信用をもつてゐます、インゲブレット館やグラーヴェスン商會では——。また澤山お金をポケットに入れながら、忘れて、食物を買はなかつたこともあります。聞いておいでゞすか。何とも仰しやいませんね？　御返事なさいませんね？　煖爐の傍からちつともお離れになりませんね？　たゞ立つて、僕の出て行くのを待つておいでなのですか……」

女は急いで僕の方へ來て、手を差し延ばした。僕は深く疑ひながら彼女の顏を見た。

悅んで、本心からそんなことをするのであらうか。それとも、單に僕を追ひ拂ふ爲めにするのであらうか。

女は僕の頸に手を卷いたが、その眼には涙があつた。僕は立つたまゝ、彼女を見た。女は唇を突き出した。僕は信ずることが出來なかつた。それは、多分女が僕に捧げた犧牲であつたらう、きまりをつける一つの手段であつたゞらう。

女は何やら言つた、それが僕にはかう聞えた——

「でも私、貴方を愛しますわ。」

女はこれを非常に低く、殆ど聞えぬくらゐに言つた。だから恐らくこれは僕の聞き誤りであつたゞらう。女ははつきりかうは言はなかつたゞらう。けれども烈しく僕の頸を抱き締めて、少時は兩手で僕の頭を抱いて、十分に身長をのばす爲め、足を爪立てゝそこに立つてゐた。

僕は、女が強ひて優しい風を見せかけてるのだらうと危ぶんだ。僕は單にかう言つた——

「貴女は今大變美しいんですね！」

それ以上、僕は何にも言はなかつた。

僕は後退りして、戸に突き當りながら、後向きになつて出て行つた。女はそのまゝ内に殘つた。

四

冬が來てゐた。殆ど雪のない、霧の深い濕々した冬が來た。霧と常闇の夜が、そよとの風も吹かないで、まる一週間ぶつ通しに續いた。街頭には終日瓦斯が點されてゐたが、人はそれでも霧の裡に衝突した。すべての音——寺の鐘の響、辻馬車の鈴の音、人の聲、蹄の音など、皆沈み果てゝ濃厚な大氣の中に埋もれた。來る週間も來る週間も、天氣は同じであつた。

僕は依然としてフアテルランドに泊つてゐた。

僕は困つてゐたが、いよ／＼深くそこに馴染んだ、金はとうの昔に失くなつても、まるで自分はその旅宿にゐる權利をもつてゐて、打ち寛いでをられるものゝやうに、すましてそこを出入した。主婦はまだ何とも言はなかつた。けれども支拂ひが出來ないことが、僕を惱ました。

こんなことで三週間經つた。

僕はもう幾日も前から、創作に取りかゝつてゐたのだが、自分の滿足する程のものが生憎と書けなかつた。朝早く、又は夜更けてまで勉强して、努力してみても、どうしてもうまく行かなかつた。僕の努力は效がなかつた。幸運は僕を見棄てゝ行つた。

二階の一室、最上の客室で、僕は書いてゐたのだつた。僕は金が懷中にあつて、支拂ひが出來た最初の晩から、そこに納まつてゐたのだ。僕は、兎に角一篇を書きあげて、間代も、又その他の支拂ひも濟まさうといふ希望を、始終抱いてゐたのであつた。僕が勉强したのは、その爲めであつた。僕は書き始めた本屋の火事の比喩譚に特に非常な期待をもつてゐた。その深遠な構想を一つ書き上げて、新聞社の『大將』に持つて行かうと思つてゐた。さうしたら『大將』は、あの時（鐵道棧橋で十クローネルを與へた）

は、本當に一箇の天才を助けたのだと思ふであらう。僕は彼のさう覺ることを信じて疑はなかつた。だから今はたゞ霊感（インスピレーション）の來降を待つだけのことであつた。どうして僕に霊感（インスピレーション）が來降しないものか。何でそれが絶大な勞ひで僕に來降しないものか。最早僕の邪魔をするものとては一つもない。僕は毎日主婦から少しづゝ食物を供給された。パタ付きのパンを、朝と夕とに少しづゝ。そして僕の神經過敏は殆ど消失してしまつた。僕はペンを執るとき、最早手に襤褸を卷く必要はなかつた。又二階の窓から通を見下しても、眩暈のするやうなことはなかつた。僕の能力は、すべての點に於て、非常に改善されたにも拘らず、まだその比喩譚が出來ないのを怪しく思つた。僕にはそれが何の關係でかは分らなかつた。

或る日僕は、どんなに衰弱してゐたか、又どんなに頭が鈍く、働きがなくなつてゐたかといふことを、つくづくと思はされてしまつた。その日、主婦は書附を持つて來て、これを見て呉れと言つた。

「勘定書には何か間違ひがあるかも知れませんから……」と、彼女は言つた。それは彼女の控帳とは合はなかつた。けれども彼女は何の間違ひも發見しなかつたのだ。

僕は計算してみた。主婦は僕の眼の前に坐つて、此方を見てゐた。僕はその二十項の數字を、初めから順に一通り計算して、合計が正しいことを知つた。それからも一度今度は逆に計算して、矢張り同じ結果を得た。

僕は主婦の顏を見た。彼女は僕の眼の前に坐つて、僕の言葉を待つてゐた。僕はそのとき彼女のお腹が大きいことに氣がついた。それは僕の注意を免れなかつたけれど、僕は、無作法にぢろ／＼見るやうなことは避けた。

「締高は違つてゐませんよ。」と、僕は言つた。

「えゝ、でも内譯を調べて下さい。」と、主婦は言つた。

「そんなに澤山はない筈ですから。私、さう思つてゐますの。」

そこで僕は各項を一々檢めた——

パン二個	二五オウレ
ランプホヤ一個	一八オウレ
肉汁	二〇オウレ
パタ	三二オウレ

……こんな勘定をするのは賢い頭の要るべき仕事ではなかつた。それは小商人の勘定で、天下の大問題でもないんだから。

僕は、主婦が言つてゐる間違ひを見付けようとしてみたが、見付からなかつた。

二三分間この數字を調べた後、僕は頭が天手古舞ひをするのを覺えた。僕にはもう貸方借方の區別が分らなくなつて、兩方をごつちやにしてしまつた。僕はとう〳〵次の項になつて、ばつたりと行き詰つてしまつた……

三ポンド5 16・乾酪、一六オウレ

僕の頭はすつかり減茶々々になつた。ぼんやりとその乾酪を見詰めてゐるきりで、もう何もしなかつた。

「これは又どうしてごちや〳〵に書いたものだらう！」と、僕は當惑しながら叫んだ。此處に十六分の五といふ乾酪がある。へゝ、譯が分らない。まあ御覽なさい、これですぜ！」

「えゝ。」と、主婦は答へた。「さう書く習慣なんです。それは綠乾酪（野菜を入れたもので綠色をしてゐる）です。えゝ、間違ひありません。十六分の五は五ロット（一ロットは半オンス）……」

「それはよく分つてゐる。」と、僕は遮つた。尤もそれだけで、後は分らなかつたのだが。

僕は一二ヶ月前なら、たつた二分間で終つてしまふこの小さな計算を、又改めて初めからやりなほした。僕は全力を盡して、汗みどろになつて、この謎のやうな計算を考へ、まるで一心不亂になつて研究してゐるものゝやうに、瞬きしたりした。けれども僕は投げ出してしまはなければならなかつた。この五ロットの乾酪はすつかり僕の心を轉倒せしめた。僕は頭の内で何か破裂したやうに感じた。

僕は矢張り計算に耽つてゐるやうに思はせる爲め、唇を動かし、時々數字を口に出して言つた。段々計算を進めて、遂に終りに近づいたやうに見せかけた。

主婦はぢつと坐つて、待つてゐた。

遂に僕は言つた——

「さあ僕は今初めから終りまで調べましたが、見たところでは何の間違ひもありませんね。」

「ありませんか。」と、主婦は言つた。「ほんとにありませんか。」

けれども主婦は、僕を信じてゐないことが分つてゐた。そして突然、今まで僕が知らなかつた冷淡な調子と、僕に對する輕蔑とが、その言葉のうちに現はれた。彼女は、僕が恐らく十六分の幾つといふ計算には不馴れだらう、だから誰か外の、計算のうまい人のところへもつて行かなければならんと言つた。彼女は僕に恥を掻かせるやうなひどい言ひ方をしないで、却つて僕を考へさせ、又眞面目にさした。彼女が戸口に行つて、出ようとした時　僕の方を見ないでかう言つた——

「お邪魔をしました。御免下さい。」

主婦は行つてしまつた。

少時たつてから、戸が再び開いて、主婦が又入つて來た。廊下に出て、さう遠くまでは行かずに引返して來たらしかつた。

「ほんとのことを申上げるんですが。」と、彼女は言つた。「惡くお取りになつちやいけませんよ。私貴方に少しお願ひがありますの。貴方がお泊りなすつてから、昨日で三週間になりませう？　多分さうだと思ひますわ。貴方も、よくお考へなすつて下さいな。こんな大きな家族で暮していくのは、生やさしいことではありませんよ。ですからねえ、いつまでも信用でお泊め申すなんてことは、實際出來ないんですの……」

僕は彼女の言葉を遮つた。

「僕は、前にお話したやうに新聞の原稿を書いてゐますから、」と言つた。「それが出來上れば、直ぐに金が手に入ります。安心しておいでなさい。」

「けれども、いつまで經つてもそれをお書き上げにならないぢやありませんか。」

「主婦さん、さう思つてゐますかね。だが靈感が明日にも、又今夜のうちにも僕に降つて來るかも知れません。或は今夜來ないとも限らない。そしたら、せい〳〵十五分間で僕の文章は出來上るんです。僕の仕事は、他の人のとは同じでないことが今に分るでせう。僕は幾日のうちと日を限つて自分の仕事をしやしません。僕はたゞ或る機會を待つてゐるのです。何時幾日に靈感が降るつてことは誰も言ふことは出來ないでせう。それは靈感の都合次第なんですからね。」

主婦は去つた。けれども僕に對する彼女の信用は確かに動搖してゐた。

僕は獨りになると直ぐに跳び上つて、自棄に頭を掻き毟つた。

本當に僕には一つも救ひがない、一つも、一つも救ひがない！　僕の頭腦は破產してしまつた！　僕はもう綠乾酪の一小片の價すら計算することが出來ない程、馬鹿になつてしまつたのか。併しこんな疑問が自分に起つてゐるのに、それでもやつぱり僕は理性を失つてしまつてゐるのだらうか。のみならず計算をしてゐる最中に、主婦が姙娠してゐることを明瞭に看て取つたではないか。僕が前からそれを知つてゐる筈がなかつたのだ。誰もそれを僕に話して聞かしたのでもなかつた。又ひとりでにそれを考へ出したわけでもなかつた。僕はそこに腰かけて、自分の眼で見て、直ぐに、僕が十六分の五を計算する一瞬間に、それを覺つたのだ。僕はさうした僕の頭の働きを何と解釋しよう？

僕は窓のところへ行つて、外を見た。窓はヴォウンマンス街に向つてゐた。二三人の、ぼろ〳〵な衣服を着た子供が、汚ない町の通で遊んでゐた。子供達が一つの空罐を投げ合つて喚き叫んでゐる傍を、家具を積んだ荷車が一臺のろ〳〵と通つて行つた。それは家を追ひ出された家族で、家移り時（諸國では三月十月の十四日）の來ない前に、居所を移すのであらう。

僕は直ぐにこの方へ頭を向けた。

荷車の上には蒲團や道具や、蝕んだ寢臺、簞笥の抽斗、三脚の赤く塗つた椅子、莫蘭、古ぼけた鐵やブリキ製の道具などが積んであつた。まだほんの子供で、ひどく醜く、鼻に凍傷のした小娘が荷物の上に乘つて、落ちないように、その哀れな、蒼白い手でつかまつてゐた。娘は、その上に子供を寢かしたものらしい、恐ろしく汚れた蒲團を積み重ねた上に坐つて、空罐を投げ合つてゐる子供達を瞰下してゐた……

こんなものを僕は立つて見てゐたが、何事が起つてゐるかを理解するのに、何の骨も折れなかつた。

僕が窓際に立つて、こんなことを見てゐる間に、臺所で、この家の娘が唱つてゐるのを聞いた。その歌は僕も知つてゐた。だから僕は、歌を間違へはしないかと思つて聽いてゐた。そして僕は獨語ちた——

「こんなことは白痴に出來ることではない。有難い、僕は矢張り他の人間と同じやうに正氣なんだ。」

突然僕は、通の子供のうち、二人が喧嘩を始めたのを見た。その一人は僕が知つてゐるのであつた。それはこの家の主婦の子であつた。僕は窓を開けて、何を言ひ合つてゐるかを聞いた。すると直ぐに窓の下に子供等は集つて、何物かを僕に期待するやうに見上げた。

何を待つてゐるのだらうか。何か投げてゞも貰へると思つてゐるのか。萎びた花、肉のついた骨、葉卷の屑といふやうな、嚙るか、それとも玩弄に出來るものを投げるとでも思つてゐるのか？

子供達は寒さに蒼ざめた顏をして、いかにも物欲しさうな眼付で、窓を見上げた。その間に喧嘩をしてゐる二人の子供は、お互に惡口を吐き合つた。この子供達の口には、大きな、粘々した怪物のやうな言葉がうよ〳〵たかつてゐた。恐ろしい下等な言葉、賣女や、船員などの言葉が叫び交はされた。恐らく、波止場で聞き覺えたものであらう。この二人の子供は喧嘩にすつかり夢中になつてゐて、主婦が、どうしたのかと、そばへ駈けつけて來たのも氣が付かなかつた。

「うん！」と、主婦の子は言つた。「あの野郎、俺の咽喉をしめやがつて、俺、もうちつとで息がきれッちまふところだつた！」

そして、そこに立つて、意地惡く薄笑ひをしてゐる相手に向き直り、躍起となつて、呶鳴り立てた——

「地獄へ失せろ、こん畜生！　人の首をしめやがつて！どうするか、見てゐやがれ！」

すると母親——大きなお腹で、狹い小路一ぱいになつてゐる姙娠の女は、その十歳になる子供の手を取つて、家に引張り込まうとしながら答へた——

「しッ！　お默り！　そんな口をきくものぢやない！　お前何だつてそんな下等な口をべら〳〵ときくんだね！　内へお入りつてば！」

「いやだ。入らない！」

「お入りつてば！」

「いやだ。入らない！」

僕は窓のところに立つて、母親がます〳〵腹を立てるのを見た。

この不愉快な場面は烈しく僕を昂奮させた。僕はもう、ぢつとして居られなかつた。下の子供に、僕のところへちよつと上つて來いと叫んだ。僕はこの場を早くをさめようとして、一二度叫んだが、たゞ彼等の邪魔をしただけだつた。最後に、うんと聲を張り上げて叫ぶと、母親は佛頂面をして此方を振り向いて、僕を見た。そして直ぐにきつとなつて、忌はしさうな眼付きをし、ひどく傲慢な顏をして僕を睨み付けた。それから、息子を罵りながら、元の通りに向き直つたが、聲が高いので、何と言つてゐるか、僕は聞きとることが出來た——

「えゝ、お前恥かしくはないかね。人が皆見て、お前を嗤つてゐるよ！」

こんな具合に、僕が立つて見てゐたすべてのものゝうちで、どんなつまらぬ事にしろ、只の一つでも僕の注意を免れなかつた。僕の注意力は非常なものだつた、僕は細かい事を、一つ〳〵注意深く吸入して、何事か起る度ごとに、それをしつかりと心にとめて置いた。だから、僕の頭腦に故障がある筈がなかつた。どうして故障なんか、あるものか？

「おいこら、お前は知つてる筈ぢやないか。」と、不意に僕は自分に言つた。「お前はもう永い間、理解力がどうのかうのつて、そればつかり心配してゐるぢやないか。だが、もうそんな馬鹿げたことは止めにしろ！　お前のやうにすべてのものを正確に認めて、それを覺れるのに、それがどう

して狂氣の印なものか。いやもう確かに。お前はほんとに僕を噴き出さしてしまふ。それは滑稽でないでもない。簡單に分りよく言へば、人はすべて一度はとらはれることがあるものだ。しかも、ほんのつまらぬことに拘泥るものだ。別に深い意味があるのでなくて、只ほんの偶然にさうなるのだ。今も言つたやうに、僕は間一髪で噴き出しちまふところだつた。あの小さな勘定、みすぼらしい、貧乏人の乾酪とでも言ふべきあんなものが何だ――へゝ、青物と、胡椒の入つた乾酪――あの笑ふべき乾酪の事なら、世界一の悧巧者でも、馬鹿になつてしまふ。あの臭ひだけでも人は馬鹿になつてしまふ……僕は綠乾酪で大馬鹿者になつた……いや、食べるものを僕に持つて來いといふのだ。なんなら十六分の五の良い牛酪をもつて來い！　それならば又別の事だ！」

僕は自分の思ひ付きに對して、病的な笑ひを漏らした。そしてそれが、非常に愉快であつた。僕の頭には本當に何の缺陷もなかつた。僕はしつかりしてゐた。

僕の愉快は、部屋の中を歩き廻つて獨言を言つてゐるうちに益々加はつて來た。僕は高々と笑つた、非常に嬉しかつた。この僅かな間――かうも心に何の隈もなく、明るい喜びに滿たされてゐる瞬間、僕の頭は十分仕事に堪へるだらうと思つた。

僕は机に向つて、あの比喩譚を書きにかゝつた。すると大變具合がよかつた。これまでよりもずつとよかつた。早くは進まなかつたが、少しばかり書き終へたものは、皆素晴しい出來ばえであつた。僕は疲れもせずに一時間程書き續けた。

そこで僕は、この比喩譚の眼目とも云ふべき點、本屋の火事のところへ來た。こゝは僕にとつて最も肝要で、既に書き上げた他の部分とは迚も比較にならないやうに思はれた。

僕は、燒けたのは本ではない、それは頭、人間の頭であるとすつかり考へを決めてゐたところだつた。そしてこの燃えてゐる頭で聖バルトロメの夜（一五七二年八月廿四五の兩夜佛蘭西で新教徒を虐殺した故事。虐殺の比喩）をまざ〳〵と描き出すつもりだつた。そのとき不意に、慌だしく戸口が開いて、主婦がつか〳〵と入つて來て、いきなり部屋のまん中に立つた。一寸でも戸口に止まるやうな遠慮なんかしなかつた。

僕は小さな、嗄れた叫びをあげた。僕はまるでポカリと一つ擲られたやうだつた。

「何ですつて？」と、彼女は言つた。「何か仰しやつたやうですね。私共ではお客さんがお見えになりましたので、この部屋にお入れ申さなければなりません。貴方は今夜から階下の私達の部屋にお泊めすることにして、別に寢床を差しあげます。」

そして僕がまだ何とも返事をしないうちに、主婦はさつさと机の上の原稿を掻き集めて、順序を滅茶々々にしてしまつた。

僕は愉快な氣分を荒らされて、立腹し、失望して、直ぐに立ち上つた。そして主婦が机を片付けるに任せて、何も言はなかつた。すると彼女は原稿を皆そつくり僕の手に渡した。

どうにも仕方がなかつた。僕は部屋を立ち退かなければならなかつた。

さあ、この貴重な刹那も破られてしまつた！

僕は新來の客と早くも階段で會つた。彼は袖に大きな錨の印をつけた若者で、後ろには、肩に船乘りの用ゐる箱をかついだ人足が一人跟いてゐた。この人はきつと海員で、夜間に偶々上陸したのだらう。だからさう永くは僕の部屋を占領することはあるまい。多分明日立つだらうから、僕が再び靈感を受ける好機會にあふ時には、もう邪魔もなくなつてゐるであらう。たつ　五分のことで、火事の場面が出來上るところだつたのに！　それもまた運命だつたのだ……

僕は前に一度も家族の部屋に來たことがなかつた。それはたつた一つきりの部屋で、そのうちには晝も夜も、主人夫婦、祖父及び四人の子供がごた〳〵と一緒にゐるのであつた。女中は臺所に住つて、夜もそこで寢た。僕は非常に厭だと思つたが、戸に近づいて、叩訪した。が何の答へもなかつた。内では話し聲が聞えてゐた。

亭主は、僕が入つても一言もいはなかつた。僕の挨拶にも答へなかつた。彼はまるで僕に關係のないものゝやうな冷淡さで僕を見た。彼は一人の男と骨牌遊びをしてゐたが、その男は僕が波止場で見た、『硝子板』と呼ばれる擔ぎ人足であつた。向うの寢床には赤坊が寢てゐて、獨りで何やら片言を言つてゐた。主婦の父は寢椅子にうづくまり、自分の胸か腹かゞ痛みでもするやうに、手で頭を支へてゐた。その老人の髮は、殆ど眞白であつた。彼が坐つてゐる姿は、何かの獸が聞耳を立てゝ蹞つてゐるやうだつた。

「御迷惑でせうが、今晩此處に置いていたゞきに來ました。」と、僕は亭主に言つた。

「あれがそんなことを言ひましたか。」と、彼は訊いた。

「えゝ、新らしいお客が僕の部屋に見えましたので。」

亭主はこれには答へなかつた。彼は再び骨牌を始めた。

この男は、來る日も來る日もかうして、誰とでも骨牌を

やつてゐるのだつた。何の爲めにするでもなく、たゞ時間を潰して、手慰みをしてゐればよかつたのである。彼は何をしようともしなかつた。彼のぐうたらな體が欲しない限りは、殆ど身動きもしなかつた。けれども主婦は階段を昇つたり降りたり、家中を駈けまはつて、客の待遇に氣を揉んでゐるのであつた。彼女は波止場人足と關係をつけて置いて、それが新らしい客をつれ込んで來る度に、ちやほやするのであつた。人足を一晩泊めることも度々であつた。今、この『硝子板』も、新らしい客を手引きして來たのだつた。

二人の男の子供と、痩せた、雀斑の出來た二人の娘とが入つて來た。何れもひどく見窄らしい姿をしてゐた。それから少し後に、主婦も入つて來た。

僕は主婦に今晩何處に泊めてもらへるかと訊いた。彼女は簡單に、皆と一緒に此處へ寢るとも、又玄關の間の長椅子の上に寢るとも、どちらでも都合の宜いようになさいと答へた。彼女は僕にかう言ひながら、部屋の中を歩き廻つて、いろ〳〵なものを片付け、ちつとも僕の方を見ようとしなかつた。

僕はその不愛想な言葉にがつかりして、戸のそばに立つて、まるで自分の部屋を、一晩他の者へ貸したことに滿足してゐるものゝやうに、出來るだけ體を小さくしてゐた。僕は主婦の氣にさはらないようにと、又ひよつとして、家から追ひ出されてしまはないようにと、強ひてにこ〳〵したのであつた。

僕は言つた——

「それでは、どうにでも御都合のいゝやうにしませう！」

さう言つて、僕は默つた。

主婦は矢張りせか〳〵と室内をかたづけて廻つた。

「ですがね、私は、信用でお客樣にお宿をしたり、御飯を差し上げたりすることは出來ませんよ。」と、主婦は言つた。「そのことは、前に申し上げて置きました通りなんです。」

「さうですよ、主婦さん、もう、ほんの二三日です、僕の原稿が出來上るのは。」と、僕が答へた。「そしたら、宿錢の他に五クローネルあげますよ。」

けれども主婦は矢張り、僕の原稿が出來るものと信じてゐないことは分つてゐた。僕はそれを推察することが出來た。が僕は、傲然としてこの家を出て行くことは出來なかつた。僕は少し加減が悪かつたのだから。若し出て行つたなら、僕の體はどうなるか、ちやんと分つてゐた。

＊　＊　＊　＊

一兩日經つた。

僕は矢張り下の家族室に同居してゐた。玄關の間には煖爐がないので、ひどく寒かつた。おまけに夜は牀の上に寢たのだ。

海員の客は、矢張り僕の部屋を占領して、容易に立ち退くやうにも見えなかつた。お午に主婦が來て、あの人は一ヶ月分の前金を拂つたと言つた。その上にあの人は一等運轉士の試驗を受けに來てゐるのだから、當分この市に留まるのだと言つた。僕はそばでそれを聞いて、僕の部屋は永久に塞がつてしまつたのだと悟つた。

僕は玄關に出て行つて、腰をおろした。何かうまく書けるものなら、靜かな此處こそ善い筈だ。僕が書きかけてゐた比喩譚は、もう駄目だつた。僕は新らしい考へ、もつと、非常にすぐれた考案を得たのだつた。僕は、『十字章』といふ、中世紀に材をとつた一幕物を書かうと思つた。特に僕はそれに出てくる主要人物を、考へ出してゐた。それは、一人の美しい、幻想的な娼婦であつた。彼女は、その弱さからではなく、又好奇心からでもなく、却つて天に對する憎惡から、神殿を瀆すのである。彼女は、天に對する反感から、祭壇の下で、その覆ひを枕にして罪を犯すのである。

時が經つまゝに僕は愈々この幻影に惹きつけられた。その女は遂に生きて、はつきりとした姿で僕の眼の前に立つた。それが又丁度僕の望み通りの姿であつた。彼女の體は缺點だらけで、厭はしいものである。丈が高くて、非常に黑く、歩く時には、その長い脛は一足毎に裾をとほして見えるのである。彼女は又大きな、飛び出した眼をもつてゐる。簡單に言へば、迚も見るに堪へぬ代物である。

彼女が僕の興味を呼んだ點は、驚くべき程無恥で、突飛な、又必死の手段によつて罪を犯したことである。

彼女はまつたく僕を力强く牽き付けた。

僕の頭はこの畸形の人物の姿で膨脹しきつてゐた。僕は二時間打つ通しにこの戲曲を書いた。

僕が十枚、恐らくは十二枚も書いた時——その間には面倒で、長いこと一向書けないで、紙をずた〳〵に引き裂いて、投げてしまつたこともあつた——僕は疲れた、寒さと疲勞とに體がすつかり硬張つてしまつた。僕は立ち上つて通へ出た。

僕は三十分ぐらゐ前から、家族室の子供の喚き聲のうるさいのに、とても、そこに落着いてをられなくなつたのだつた。

そこで長いことドラムメンス小路を散歩してゐるうち、

夕方になつた。その間、僕は歩く傍ら、絶えず、どうしたら戯曲を續けて行かれるかを考へた。

僕がその夜、宿に歸るとき次のやうなことが起つた——

僕はカルル・ヨハンス街のはづれ、殆ど停車場近くで、或る靴屋の前に立つた。なぜこの靴屋の前に立ち止まつたかは分らない。僕は店の窓を覗き込んだ。けれども別に、その時、靴が入用だと思つたのでもなかつた。僕の考へは遠く別な世界へ飛んでゐたのだ。

僕の後ろを人が話しながら歩いてゐた。が、何を言つてゐるのか、ちつとも分らなかつた。そのとき一つの聲が僕を呼びかけた——

「今晩は！」

それは『お孃さん』が、僕を呼びかけたのだつた。

「今晩は！」と、僕はぼんやりとして答へた。僕は『お孃さん』だと、直ぐには氣づかなかつた。

「どうだね、君？」と、彼が訊いた。

「うむ、別に變りもない……例によつて例の如くさ。」

「ところで、」と、彼が言つた。「君、矢張りクリスチィにゐるのか。」

「クリスチィ？」

「君はいつぞや雜貨商のクリスチィに勤めてゐると言つたやうだが？」

「あゝ！　いや、あの家は出たんだ。あんな者と、一緒には働けなかつたさ。すぐ、ひとりでに居れなくなつたんだよ。」

「なぜ？」

「或る日僕が書き違ひをすると……」

「嘘を書いたんだらう？」

嘘を書いたんだつて！　畜生、『お孃さん』の奴め、まるつきり僕が本當に嘘を書いたやうな訊きかたをしやがつた。あいつおまけに、面白いことのやうに、急きこんで訊きやがつた。僕はあいつの樣子を見て、つく〴〵厭になつたので、返事をしなかつた。すると、

「うん、そりやもう上手な人にでもあることだ。」と、あいつは僕を慰めるやうに言つた。矢張り僕が嘘を書いたのだと思つてゐるのだ。

「何だいその、そりやもう上手な人にでもあることだといふのは？」と、僕が訊いた。「嘘を書いたんだつて？　おい、君、僕はそんな下等なことをする者だと思つてるのか。僕が？」

「けれども、君、僕は君がさう言つたやうに思つたのだが……」

僕は空嘯き、『お孃さん』に尻を向けて、街の下手を見た。僕の眼は、此方へ近寄つて來る赤い女服にとまつた。一人の女が、一人の男と伴れ立つて來るのであつた。若し僕が『お孃さん』と話し込んでゐたところでじもなければ、その飛んでもない思ひ違ひに立腹して、空嘯いて、向き直らなかつたならば、僕は氣づかずに、この赤い女服をやり過したことであらう。

然し、一體それが僕にとつてどうしたつていふんだ？

それが女官ナーゲル孃の赤服であつたとしても、僕自身に何の關係があるのか？

『お孃さん』の奴め、思ひ違ひを訂正しようとしてなほ喋つたが、此方はあいつの言ふことをちつとも聞いてゐなかつた。立つたまゝで、愈々近づいて來る赤い女服を瞶めてゐた。すると胸騷ぎがしだした。僕は口へは出さずに心のうちで、呟いた——

「ユラヤリィ！」

『お孃さん』もそつちの方を振り向いて、この男女を見ると、それに會釋して、眼でその後を跟けた。（僕は帽子を取らなかつたつもりだつたが、無意識にさうしたかも知れない—英補譯）赤い女服はカルル・ヨハンス街を上つて、消え失せた。

「あの女の連れは誰だらう？」と、『お孃さん』が訊いた。

「あいつは『公爵』だよ、君はまだ見たことがないのか。『公爵』といふ綽名がついてゐるんだ。でも君はあの女の方は知つてるだらう？」

「うん、いくらか。君は？」

「いゝや。」と、僕は答へた。

「でも、君は丁寧にお辭儀をしたやうだつたが？」

「僕がお辭儀をした？」

「おやッ、君はしなかつたのか。」と、『お孃さん』が言つた。

「それは變だ！　でも、あの女は始終君にだけ眼をつけてゐたぜ。」

「何處で君はあの女と近付きになつたんだい？」

彼はしつかりしたことは知らなかつた。が……

何でも秋の或る夕方である。もう遲くなつてゐた。上機嫌な三人の仲間が、グランド・ホテルの方から來て、その女が獨りでカムメルマイエルの本屋にゐるのを見て、聲をかけたのであつた。

女は最初、厭々返事をしてゐた。けれども仲間の一人で水火も恐れぬほどの無鐵砲な男が、女の拒むのを無理に、その家まで送らうと言ひ出した。その男は、神に誓つて、聖書に書いてある通り、髮の毛一筋だも女にさはらないどころ

か、ちやんと送つて行つて、女が確かに自分の家へ歸りつけるやうにしてやる。でなければ、どうしても自分は安心してその晩眠ることが出來ないと言ひ張つた。

彼は歩きながら盛んに女に話しかけた。あれやこれやとだん〳〵お喋りをした。自分からワルデマル・アッテルダークと名乘つて、寫眞師だと言つた。女はこの陽氣な、自分が仕向ける冷淡さに辟易しない男に笑顔をみせなければならなくなつた。そして男は、とう〳〵女を家まで送り屆けることになつた。

「では、それからどうなつたのだ？」と、僕は訊いて、片唾を呑んだ。

「どうかつて……おやッ！　あれ、あの女があすこにゐるぜ！」

僕等はちよつと默つた。

「うん、あの男は、矢張り『公爵』のやうだ。きつとさうだ！」と、彼は考へながら言つた。「けれどもあの女があいつと關係があるんなら、僕はあの女のする事に責任を持たうなんて思はない。」

僕は矢張り默つてゐた。

勿論『公爵』はあの女をつれて行くんだらう！　それは何の不思議もないぢやないか！　そんなことが僕に何の關係があるものか！　僕は彼女の魅力に涙もひつかけやしない、あの女なんか僕にとつちやなんでもないのだ！

僕はあの女のことを極度に悪く思つて、自分を慰めた。女を泥の裡に引きずり込んで、嬉しがつた。

僕は彼奴等二人の前になぜ脱帽したのか。あんな人間に、なんだつて脱帽することがあるものか。僕はもうあの女に用はないのだ、決してないのだ。あの女はもうちつとも美しくはない。墮落してしまつてゐる。ヘッ畜生、あの女め、すつかり色が褪せちまつた！　あの女はたゞ僕だけに目をつけたんだらう。それはありさうなことで、不思議でも何でもない。あいつ、きつと後悔しかけてゐるのだらう。だからと言つて、僕があいつの足下にひれ伏したり、會釋したりする必要があるものか。まして、あの女は近頃あんなに汚れてゐるではないか。『公爵』のお相手に丁度お誂へ向きだ！　いつか、あの娘のゐるのに目もくれずに、大威張りでそばを通れる時が僕に來るだらう。いや、きつと來る！　ヘヽ、そしたら僕の勝ちだ！　若し僕の考へが間違はないならば、僕は今夜ぢうに戯曲を書き上げて、八日以内にはあの娘に膝を折らしてみせよう。あの女がどんなに美しくても。ヘヽ、あの女がどんなに美しくても……

「左樣なら！」と、僕はぶつきら棒に言つた。

でも、『お孃さん』は動かなかつた。彼は訊ねた——

「けれども、今君は何をしてゐるのかね？」

「何をしてゐるか？　勿論書いてゐるさ。他に何が出來るものか。それでこそ僕は生きて行けるのだ。現在は一大戯曲『十字章』を書いてゐる、題材は中世紀だ。」

「へヽえ！」と、『お孃さん』は正直に言つた。「君はそれを書ける見込みがある？」

「書けることについちや僕は何の心配もしない！」と、僕は答へた。「八日も經てば君は僕から何とかたよりを聞くだらう。」

さう言つて、僕は別れた。

僕は家へ歸ると直ぐに主婦にランプを點してくれと言つた。このランプを貰ふことは僕に取つて一大事であつた。僕は今晩寢ない。僕の戯曲が、頭の中で荒れまはつてゐる。僕は朝までには、立派なものが出來上ると確信してゐる。

部屋に入ると、主婦が非常に不機嫌な顏をしたのを見て、僕は自分の用事を、きはめて謙遜に持ち出したのであつた。

「僕は今えらい芝居を、もう少しで書き上げるところです。」と言つた。「もう、後一二場足りないのです。きつと何處かの芝居小屋で舞臺にかけられると信じてゐます。——僕自身すら、その臺詞を覺え込む暇もないうちに……ですから若しか貴女が大事なランプを……」

けれども主婦はランプを一つも持つてゐなかつた。彼女は考へてみたが、何處にもランプを餘分に持つてゐることを想ひ出さなかつた。若し十二時過ぎまで待つてゐたなら、或は臺所のランプが使へるかも知れない。なぜ僕は蠟燭を買はなかつたのか。

僕は口を噛んだ。

僕は蠟燭一本買ふ十オウレの金を持つてゐなかつた。主婦はそれを知つてゐるのに……

勿論、僕はまたやり損ふのだ！

その時、僕等のそばに女中が腰かけてゐた。女中は唯この部屋に坐つたまゝで、臺所なんか少しも構はなかつた。だから臺所のランプは、決して點されたことがなかつたのだ。僕はその事を思つたが、もう何も言はなかつた。

突然、女中が僕に言つた——

「貴方はさつき、お城から出ていらしつたのを見たやうに私思ふわ。貴方、お城で御陪食になつたのね？」

女中はかう嘲つて、げら〳〵と笑つた。

僕は默つて腰掛けると、紙を出して、此處にゐる間に、幾らか書いてみようとした。紙を膝に置いて、氣を散らすまいと、一心に牀を見つめた。けれどもそれは駄目だつた。

何にもならなかつた。僕はその後を續けることは出來なかつた。

家の二人の娘が猫を一疋もつて來て、大騷ぎをしてゐた。その猫は殆ど毛のない、奇妙な病氣の猫で、娘達がその目を吹くと、ぼろ〳〵涙が出て、鼻筋を傳つて流れるのであつた。亭主と他の二人の者は卓子によつて、骨牌の百一をやつてゐた。主婦獨りだけが、例の如く忙しさうに何やら縫つてゐた。

主婦はこんなに騷々しい中では、僕が何も書けないといふことをよく分つてゐた。が、もう僕などに構つては居られなかつたのだ。それに女中が僕に、書飯のことを言つてからかつた時には微笑さへした。一家を擧げて僕を敵視してゐるのだつた。僕が部屋なしになつて、まるつきり闖入者のやうにあしらはれてゐることが、意氣地なしに見えたのだ。だからこの下女——ちつぽけな、眼の碧い、額に縮れ毛のある、胸の平べつたいすべたまでが、僕が夕方バタ付のパンをお情けに貰ふのを、馬鹿にしてゐるのだつた。この女は僕に、何處でいつも書飯を食べるのか、僕が外出して物を食べたのを見たことはないなんかと言つた。僕の困りぬいてゐることを知つてゐて、僕を馬鹿にして、悦んでゐるのだ。

ふと僕は、これぢや脚本の臺詞が一句も浮びはしなからうと思つた。僕は一歩々々、徒らに跪いてゐるのであつた。もう頭の中はがん〳〵鳴り出したので、とう〳〵書くことを止めてしまひ、紙をポケットに入れて、顏をあげた。女中は丁度僕の前に坐つてゐた。僕は彼女を見た、その小さな背や、まだ本當に成長しないやうなその低い兩肩を見た。

なぜこの女は僕に喰つてかゝつたのだらう。僕が宮城から出て來たところで、それが何だ。この女に何の妨げがあるのか？

この女は二三日來、僕が運惡く、階段に躓いたり、裂けたところを繕ふ爲めに衣服を釘に掛けて置いたりすると、無禮な笑ひ方をした。この女が、玄關に僕が裂き捨てゝおいた原稿の屑を拾ひ集めて、僕の戲曲を家族室で讀み上げ、聽いてゐる奴等と一緒に馬鹿にして笑つたのは、昨日のことだ。僕はまだこの女に迷惑を掛けたことはない、何一つ用を頼んだ覺えもない。それどころか、僕は毎晩自分で寢床を牀に敷いて、この女の手を煩はすのを避けてさへゐるのだ。この女は又、僕の髮が脱け落ちるといつて馬鹿にした。朝、洗盤に髮が散らばつて浮いてゐたりすると、大へん悦ぶのだつた。もう、僕の靴は惡くなつて來た。特にバ

ンを積んだ馬車に轢かれた方がいけなくなつた。するとこの女は又それを愚弄した。

「おやまあ、貴方の靴はどうしたんです？」と、言つた。「御覽なさいな、大きくつてまるで犬小舍程あるわ！」

この女の言ふのは本當だつた、僕の靴は穿き潰されてゐた。けれども僕は當分それをどうすることも出來なかつた。

僕が、下女のこの無遠慮な惡意を想ひ出して驚いてゐるうちに、小さい娘達は、寢床の老人を窘めだした。二人の娘は老人の周圍をぴよん〳〵跳ねまはり、夢中になつて惡戲をした。二人は藁の莖をもつて、それを老人の耳の穴にさし込んだりした。

僕は暫くそれを默つて見てゐたが、ぢつと我慢して敢て干渉しなかつた。

老人はそれに敵對しようと指一本動かすことさへしなかつた。彼は刺される度に、怒つた眼付をして、惡戲者ども を睨め付けるか、或は突き刺さつた藁を除く爲めに、頭を振るだけであつた。

僕はその有樣に段々と激昂して、それから眼を放すことが出來なくなつた。

父親は骨牌から目を上げて、二人の子を見て笑つた。彼は又骨牌の相手に、目顏でそれを知らした。

なぜ老人は默つてゐるのだらうか。なぜ彼は、手で子供達を押しのけないのだらうか。

僕は堪り兼ねて一歩、寢床に近寄つた。

「子供にかまひなさるな。子供にかまひなさるな！　老人は足がきかないんだから！」と、亭主が叫んだ。

こんな事に干渉して、亭主の不機嫌を買ひ、もう追付け夜になるのに、追ひ出されたりしては厄介なので、僕は靜かに元の席へ戻つて、ぢつと溫順しくしてゐた。

家内の爭ひに鼻を突き込んで、宿とバタ付パンとを、棒にふるやうな危いことをしてよいものか。半分死んでゐる老人の爲めに、馬鹿なことをして、損をしちや此方がたまらない。

僕は立ち上つて、まるで燧石のやうに硬くなつた。

二人の饑鬼はその惡戲をやめなかつた。老人が頭を動かすのにぢれて、しまひには老人の眼や鼻の孔まで刺した。老人は凄い目で、子供を睨んでゐたが、何も言ひもしなければ、手も動かさなかつた。

突然老人は體の上部を少し上げて、一人の娘の顏に唾を吐き掛けた。彼はもう一度延び上つて、別の一人にも吐き掛けた、けれども今度はかゝらなかつた。

僕は亭主が骨牌を置いて立ち上るのを見た。彼は眞赤な

顔をして叫んだ――

「うぬ、子供の眼に唾を吐きかけやがつたな、老耄め！」

「だが、老人だつて困つてゐたんだからな！」と、僕は我を忘れて叫んだ。然し追ひ出されやしまいかと、始終懸念してゐたので、馨に餘り力を入れることはしなかつた。僕は激昂して、體中がぶる〳〵と顫へた。

亭主は僕の方へ向き直つた。

「何だい貴樣は！　どうしたつていふんだ？　餘計な口をきかずに、俺が言つた通りにしてゐろ、その方が貴樣の爲めに一等いゝのだ。」

すると、今度は主婦が叱鳴り立てゝ、家ぢうが鳴り渡つた。

「何だね お前さん達、みんな氣がちがやしないかい？」と、彼女は叫んだ。「此處にゐる積りなら、溫順しくしてゐなさいよ、えゝ！　破戸漢に宿を貸して、飯を食はして置くでさへ並大抵ぢやないんだよ。それに近頃は、地獄の牛頭馬頭までこの部屋へ入りこんぢまつた。私ヤそんなものはもう眞平だよ！　お默んなさい、子供達も鼻をお拭き。拭けなけや、私が拭いてやる。私ヤまだこんな人達を見たことがありやしない！　何處からか、十オウレの蠟燭一本買ふ金さへ持たないものがまぐれ込んで、眞夜中まで家の奴等と一緒に騷ぐなんて、堪つたものぢやない。お前さん達は、よくまあそんな我儘なことをやらかして、私を踏み付けにするんだね！　そんな眞似は止して貰ひませう。此處の家の者でない人達は、みんな各々勝手に何處へでも行つて貰ひませう。私もちつたアゆつくりしなけやならないんだから！」

僕は何も言はなかつた。僕は少しも口をきかなかつた。けれども再び椅子にかけて、騷ぎを聞いてゐた。

皆の者が喚き立てた。子供や女中までが、爭ひが起つた譯を口々に言ひ罵つた。若し僕がたゞ默つてさへをれば、それはお終ひになるのであつた。又僕に何が言へよう。

戸外は冬ではないか。おまけにおつゝけ夜ではないか。決然卓を叩いて、帽子を取るに適當な時機ではなかつたのだ。馬鹿なことをしちやいけない。

僕は靜かに坐つて、家を出なかつた。出て行けと言はれたも同樣であつたけれど。僕は、ぢつと壁を見詰めた。そこには、印刷した油繪のキリストの像が揭げてあつた。僕は主婦が何と惡態を吐いても、堅く口を噤んでゐた。

「さうか、主婦さん、行けつていふんなら長居して、お前さんのお邪魔はしますまいよ。」と、骨牌をとつてゐる一人が言つた。

彼は立ち上つた。も二人の骨牌の相手も立ち上つた。

「いゝえ、お前さんのことでもないでせう。」と主婦は二人に向つて言つた。「私の言つたのは他の奴さ！　誰だかそれはちやんと分つてゐるさ！」

主婦は、少し間を置いて、かう僕に突つかゝつて來た。そして自分が暗示してゐるのは僕であると一層はつきりさせるやうに、態とのろ〳〵言葉を長く引つ張つた。

「默つてろ！」と、僕は自分に言つた。「たゞ默つてろ！主婦は僕に出て行けと、素振でも、口でも言ひやしなかつた！　此方ぢや傲慢な心を出してはならない、時機を辨へぬ尊大な心を起してはならないぞ！　耳を塞いでをれ！……だが、あの油繪のキリストの髮は、餘りに靑いな。といつて、あれは靑草とも見えない。正確に言へば、茂つた牧草だ。ほう、僕の見立ては實にうまい、まつたく茂つた牧草だ……」

この時祕やかな聯想が僕の頭の中に起つた――僕の全心は靑草から、あらゆるものゝ燒かれる最後の審判を書いた聖書の文句に、それからリスボンの地震に外れて、とうとう西班牙製の眞鍮の痰壺、僕がユラヤリィのところで見た黑檀のペン軸にまで移つて行つた。

あゝ！　何もかも過ぎ去つたことだ！　草のやうに燃えてしまつた！　すべてのものが、四枚の板（棺を指して言つてゐる。棺は方形だから、四枚の板で作られる）と屍衣で――門内右側、ヨンフルウ・アンデルセンのそれで――始末がついてしまつた。

この絕望的な瞬間、こんなことが僕の頭の中に起つてゐる時、主婦が僕を追ひ出しに來た。

「この人は聞いてゐないんだよ！」と、主婦が叫んだ。「家を退いて下さいと私ヤ言つてゐるんだよ。お前さん、分つてるぢやないか！　この人はまあ狂人なんだらう！　さあ、さつさと行つてお呉れな、もう餘計なことなんか言はないで！」

僕は戸口を見た、行かぬつもりで、決して出て行かぬつもりで。僕は大膽なことを考へた。

若し戸に鍵があるなら、それを捩ぢて、他の者と一緒に內に閉ぢ籠つて、決して出て行くまいと。

僕は戸外へ出るのを、神經的に恐れた。けれども戸には鍵がなかつた。僕は立ち上つた。もう何の希望も殘つてゐなかつた。

その時突然、亭主の聲が主婦の聲と一緒に聞えた。僕は吃驚して立ち止まつた。今まで僕を脅してゐた亭主は意外にも僕のかたをもつた。彼は言つた――

「夜中に人を追ひ出すのは御法度だつてことは、分つてゐるぢやないか。そんなことをすれば罰を食ふんだぞ。」

僕は、所罰されるかどうか知らなかつた。僕はそんなことを信じなかつたが、多分さうなのだらう。主婦は直ぐ思ひ返して、靜かになつて、もう僕に何にも言はなかつた。そればかりでなく彼女は僕に、夕食のバタ付パンを二つ出した。けれども僕は手を付けなかつた。外出先で食べたふりをして、亭主に對する眞の感謝の念から、それを受け取らなかつた。

僕がとう〳〵玄關に寢に行くと、主婦が後を追つて來て、戸口に立つて、大きなお腹を僕の方に突き出して、高い聲で言つた——

「お前さんが此處に泊るのも今夜ぎりですよ、分つてませうね。」

「えゝ！」と、僕は答へた。

僕が精出して探したら、或は明日中に別な宿を見つけられるだらう。僕は何處かに泊るところを見つけなければならないのだつた。けれども、差し當り、僕はその晩に追ひ出されなかつたことを有難く思つた。

* * * *

僕は朝の五六時頃まで眠つた。醒めた時には、まだ明るくはなつてゐなかつた。けれども直ぐに起き上つた。寒いのでごろ寢をしてゐたから、別段衣服を着更へる必要はなかつた。僕は水を飲んで、なるべくそつと音のしないように戸を開けて外へ出た。主婦に再び會ふのを恐れたからであつた。

徹夜してゐた一二の巡査だけが、僕の見た街路にゐる唯一の生物であつた。それから少し經つて又二人の者が瓦斯燈を消してまはつた。

僕は當もなく歩き廻つた。キルヶ街を要塞の方へ行つた。寒いのと、まだ眠いのと、長い散歩の後、膝も背も疲れてゐるのと、且つ非常に空腹を感じたのとで、或るベンチに腰掛けて、永いこと眠つた。

僕は三週間、朝夕主婦が呉れるバタ付パンだけで生きてゐたのだつた。が、今は最後の食事をしてから殆ど二十四時間も經つてゐた、飢ゑが又僕を苦しめだした。僕は直ぐにそれに對する方法を發見しなければならなかつた。さう考へたので、ベンチの上に又もや寢込んでしまつた……

僕は、近くで話をする人聲に目が醒めた。我に返つてみると、好天氣で、人は皆起きてゐた。僕は立ち上つて、歩き出した。

太陽は丘の上に昇つた。空は青く美しかつた。この幾週

間の闇の後、美しい朝が來たので、僕は一切の苦しみをけろりと忘れたが、今受けた苦しみは、今まで幾度となく受けたそれよりも、もつと酷かつたやうにさへも思ふのだつた。僕は自分の胸を叩いて、ひとりで何やら小唄をうたつた。が、僕の聲はかすれて、まつたく力が拔けてゐた。僕は、我知らず涙を誘はれた。この美しい日、この青く、光りに滿ちた空さへも、僕には辛かつた。僕は聲を出して泣いた。

「あなたは何處かお悪いのですか。」と、一人の男が寄つて訊いた。僕は返事をしなかつた。すべての人に自分の顏を隱して、急いで立ち去つた。

僕は波止場に下りた。

露西亞の國旗を揭げた大きな船が、石炭を下してゐるのを見た。僕は舷側の船の名をコペーゴロと讀んだ。この外國船の甲板に行はれてゐることが、ちよつと僕の注意を惹いた。それは、荷役はもう大方すんで、すつかり空船になつたらしく、船脚は十一呎も水上に出てゐるし、石炭人足がその重い長靴で甲板の上をどし〳〵歩くと、船ぢうがぼん〳〵響くのであつた。

太陽、光り、海からの潮風、この忙しい、愉快な生活が僕を力づけさせ、血を沸き立たした。ふと僕は想ひついた——今のうちなら、戲曲の二場を仕上げることが出來るだらうと。そこで僕はポケットから原稿紙を取り出した。

僕は一條道士の口から一句、力と苛辣に滿ちた臺詞を書かうと試みたが、成功しなかつた。僕は條道士を止めにして一つの演說、神殿の冒瀆者に對する裁判官の演說を書かうとしたが、これも半頁で止してしまつた。どうしても本當の氣分に入つて行けなかつたからだ。僕の周圍の忙しさ、荷揚唄、揚錨機の音、絶えず鎖のがちや〳〵觸れ合ふ音。——それ等は僕の戲曲のうちに、霧のやうに立たねばならぬ中世紀の、ぼんやりとした黴臭い空氣とは、そぐはぬものであつた。僕は紙を疊んで立ち上つた。

けれども今僕は良い方に向つて來た。僕は事情がゆるせば、きつと何か書けると、明かに感じた。

靜かな場所さへあれば！

僕はそれを思つて、道ばたに立ち止まつて考へた。けれども、僕が一時間と腰を落ちつけ得られる靜かな場所は、全市中何處にもなかつた。只フアテルランドの旅宿へ歸つて行くより外には、仕方ないのであつたが、僕は嫌つて、それはいけないことだと始終自分に言つてきかした。けれども僕は依然そつちの方へ行つて、段々と禁制の場所へ近寄つた。それが哀しむべきことだとは僕自身も認めてゐ

た。まつたくそれは汚ないことで、卑屈な話だつた。が、何とも仕方がなかつた。僕はその時、少しも傲慢な心は持たなかつた。最も傲慢ならぬ人間の一人であつたのだ。で、僕は行つた。

僕は門のところに立ち止まつて、も一度考へてみた。

一か八か、思ひきつてやつゝけろ！　いけなかつたらちよつと體の向きを變へるだけのことぢやないか。第一、ほんのちよつとの間のことだ。第二に、僕が又もやこの家に逃げ込んで來たのは、神も許し給ふことだらう。

僕は中庭へ入つた。凸凹な石疊を歩いてゐるうちには、まだ心がきまらないで、門の方へ引き返さうかと思つた。

僕は歯を喰ひしばつた。

いや、尊大な自負心を起すべき時ではない！　一番運悪く行つたところで、僕は公然と別れを告げ、勘定の話をしに來たと言譯をすることも出來る。

僕は戸を開けて、玄關に入つた。

僕は内へ入つて、ぢつと立つてゐた。僕の直ぐ前、僅か二歩のところに、亭主が帽子も被らず上衣も着ないで、鍵穴から、家族室を覗き込んでゐた。彼は手眞似で、僕に靜かにしろと命じて、再び鍵穴から覗いた。彼はにやりと笑つた。

「此處へ來て御覽。」と、彼は囁いた。

僕は爪立ちして近寄つた。

「此處を見なさい。」と言つて、亭主はくす〳〵と笑つた。

「覗いて見なさい、ヒ、、、、。あすこに寢てゐらあ、あいつ等が！　老人を見なさい！　お前さん、老人が見えるかね？」

寢床のうち、油繪のキリストの下、右側、丁度僕に向つた方に、二つの影、即ち、主婦と外人の運轉士が寢てゐるのを僕は見た。主婦の白い脛が、黑い夜具にくつきりと對照を作つてゐた。又他の壁際にある寢床には、主婦の親父の跛足な老人が坐つて、例の如く頬杖ついて蹞つて、身動きもしないでゐた。

僕は亭主の方に向き直つた。彼は自分の口を手で塞いで、一生懸命に高い笑ひを怺へてゐた。

「老人を見たかね？」と、彼は囁いた。「見たらう？　老人は坐つて、ぢつと見てゐるんだ！」

亭主は又もや鍵穴を覗いた。

僕は窓に行つて、そこに腰掛けた。

この光景は容赦なく僕の思想を掻き亂して、僕の氣分をすつかり打毀してしまつた。

これが僕に何の關係があるのか。若し亭主がそれを見て

面白がつてゐたなら、またそれに非常な興味をもつてゐたのなら、何も僕がそれにかゝづらふことはない。又老人はたゞ老人に過ぎない。彼はまだ、一度もそれを見たことがなかつたのだらう。恐らく坐つて眠つてゐるのだらう、或は、死んでゐるのかも知れやしない。彼が坐つたまゝ死んでゐたからとて、僕に何の不思議があらう。そのことで何も僕の良心を煩はすことはないのだ。

僕は紙を取り上げた。そして中絶した印象を再び得ようとした。

僕は裁判官の演說の眞最中に身を置いた……

「――神と法律とが我に斯く命ずるのぢや、聖賢の敎へは我に斯く命ずるのぢや、また我が良心が斯く命ずるのぢや――」

僕は窓の外を見て、裁判官の良心が彼に何と命じたことにしようかと考へた。

小さな物音が部屋の内から僕の耳に聞えて來た。

そんなことは構つたことぢやない、ちつとも構つたことぢやない、老人は死んでゐるんだ。多分今朝の四時に死んぢまつたんだ。だがその音は、祕やかで僕の冷靜を妨げない。えゝ糞ッ！　なんだつてそんなことを考へるのだ。靜かにしろ！　えゝと……

「――我が良心が我に斯く命ずるのぢや――」

けれども物事が皆、僕に對して逆行した。

亭主はその鍵穴のそばに、少しもぢつとしてゐなかつた。僕は彼の忍び笑ひを聞き、彼が顚へるのを見た。外の通では又、僕の氣を散らす何事かゞ行はれてゐるのであつた。向う側の歩道には、一人の子供が日向に遊んでゐた、彼は平和に、何の危險をも感じないらしく、たゞ細長い紙片を撚つてゐるだけで、何も黑戲をしてゐなかつた。が突然、彼は跳び上つて、悪口を吐いた。彼は車道に後退りして行つて、向うの二階の開いた窓から顔を出してその頭に唾をひつかけた赤鬚の大人を睨んだ。子供は怒つて泣いた、そして窓を見上げて、ひどい悪口を吐いた。大人の方では子供の顔を見下して笑つた。こんなことがおよそ五分ばかりも續いたゞらう。

僕は子供の泣くのを見まいとして、向き直つた。

「――我が良心が我に斯く命ずるのぢや――」

それ以上僕は續けることが出來なかつた。とう〳〵何もかもこんがらかつてしまつた。既に書き終へたものさへも物の役には立たない、實に、全體の思想が恐ろしく馬鹿げてゐるやうに思はれた。

もと〳〵、中世紀の人間の良心を語るといふことは出來

ないことだ。良心は舞踏の教師シェクスピアによつて始めて發見されたものである。だから、僕のこの演説は全然間違つてゐる。すると、この原稿のうちには何の良いところもないのか。

僕は讀み返して見た、そして直ぐ前の疑ひを解いた。僕は立派な、非常に目立つ、ほんとに良い文句を發見した。それがまた僕をすつかり逆上せあがらして、どうしてもこの戯曲の結末を書かなければならないと思はせた。

僕は立ち上つて、亭主が、靜かにしろと怒つた手眞似をするのには構はないで、戸口へ行つた。僕はぷん〳〵しながら、思ひきつて玄關を出て、二階の階段を昇ると、僕がもと居た部屋に入つた。運轉士は實際そこにゐなかつた。

だから此處にちよつと僕が居たところで何の差支へがあるものか。僕は何も彼の所有物に觸りはしない、ちよつとだつて彼の机を使ひはしない。たゞ戸口のそばの椅子に腰掛けて、それで滿足するだけである。

僕は膝の上に、勢ひよく原稿紙を披げた。

さて、幾分かの間は格別のこともなくて過ぎた。一句は一句と次々に僕の頭の中に出來上つて、僕は絶えずそれを書きつけて行つた。僕は一頁又一頁と白紙を文字で滿たして、驀地に進んだ。僕の良い氣分をほく〳〵悦びながら、殆ど我を忘れて。この間に僕が聞いた唯一の物音は、たゞ自分の嬉しさうな鼻聲だけであつた。

又僕の戯曲の或る部分で、教會の鐘を一つ鳴らさなければならぬといふ、面白い考案が浮んだ。すべてが素晴らしい勢ひで進んだ。

その時、僕は階段に足音を聞いた。僕は顫へた。殆ど氣がちがひさうになつた。まるで撥條の上に腰かけてゐるやうにそは〳〵と、心配しながらも、飢ゑにのぼせ上りながらも、强ひてそこに腰を落ちつけてゐた。僕は神經を鋭くし、鉛筆をぢつと摑んで聽いてゐた。もう一語も書けなかつた。戸が開いて、下の部屋から來た二人の人が入つて來た。

僕がまだ、御免なさいと言ふ間もあらせず、主婦はいきなり頭から呶鳴りつけた。

「あゝ、こりや、どうしたことだえ、この人又此處に來てゐるぢやないかね！」

「御免なさい！」

僕は後をつゞけようとしたが、出なかつた。

主婦は戸をがらりと開けて叫んだ——

「出ていけ、ぐづ〳〵すると巡査さんを呼んでくるから！」

僕は立ち上つた。

「僕はたゞ貴女にお別れを言ひに來ただけです。」と、口ごもりながら言つた。「貴女を待つてゐたのです。何にも觸りはしませんでした。たゞ椅子にかけてゐただけで……」

「いやなに、そんなことは何でもない！」と運轉士が言つた。「何をするもんか。うつちやつて置きなさい。」

僕は階段まで來ると、突然、あとをつけて來て、僕の出て行くのを急かしたてる、太つた、孕み女が、むやみに癪にさはつたので、最もひどい惡口を跳ねかけてやらうかと、口をもぐ〳〵さして、ちよつと立ち止まつた。けれども、僕は思ひ直して默つた。主婦の後ろにゐる運轉士に對する感謝の念から、その人に聞かれてはと思つて、默つてゐた。

主婦はずつと僕のあとをつけて來て、しつきりなしに惡口を吐いた。だから僕は歩いて行くうち、だん〳〵腹が立つて來た。

僕等は庭へ降りた。僕は主婦の相手になつたものだらうかしらと、考へながら、なほもぐづ〳〵と歩いて行つた。

僕はこの時怒りに心を搔き亂されてゐた。そして、最惡な血まみれ騷ぎまでも考へてゐた。たつた一突きでこの場に主婦を殺してやらうか、たつた一蹴りで、腹を突き破つてやらうか？とさへ思つた。

一人の郵便配達が門内へ入つて、僕に會釋して行き過ぎたが、僕はそれには答へなかつた。彼は僕の後ろにゐる主婦に向つて、僕のことを聞いてゐた。けれども僕は振り向かなかつた。

門を出て一二歩行くと、配達人は、僕に追付いて、改めて僕に聲を掛けた。彼は一通の手紙を渡した。僕はぷりぷりして、澁々と封を切つた。封筒の中には十クローネル札が一枚入つてゐたきりで、手紙もなければ、何とも書いてない。

僕は配達人を見て訊いた——

「何だい、この馬鹿げたことは？　誰が寄越した手紙だ？」

「私は知りません。」と、配達人は答へた。「けれども、それをお頼みになつたのは、お孃さんでした。」

僕は靜かに立つてゐた。

配達人は去つた。

僕は再び金を封筒に入れ、それを押し丸めて、なほ門の内から僕の方を見てゐる主婦の向つ面にそれを投げつけてやつた。僕はうんともすんとも言はず、主婦がその揉みくちやになつた紙を檢めてゐるのを尻目に見て、さつさと行つてしまつた。

へん、これこそ立派な行ひと言へよう！　封筒の中味は何とも言はずに、大きな札を、濟まして揉みくちやにして、

迫ひかけて來た奴の面に叩き付けてやつたんだ。これこそ堂々たる行ひと言へよう！　あんな畜生共にはかうしてやらなけりや！……

僕がトムテ街の停車場の角に來た時、突然、僕の眼にはあたりの世界がくる〳〵廻つて、頭ががん〳〵と鳴つた。もう一歩もあるけなかつたので、家の壁へ仆れて寄りかゝつた。前屈みになつた體をのばすことすら出來ず、壁に靠れて立ちながら、氣を失ひかけた。僕の狂つた心は、この困憊の極に起つた發作に、只いきり立つた。そして鋪道に地團駄を踏んだ。僕は他にいろ〳〵力を出さうとしてみた。齒を喰ひしばつたり、額に皺を寄せたり、自棄に目を瞠つたりしてみた。するとそれがどうやら、役に立つて來だした。

僕の頭は明るくなつたので、もう仆れるところだなと覺つた。そこで手を前に伸べ、壁から身を放した。街路は矢張り僕の眼にくる〳〵と舞つてゐた。僕はぢれて、歔欷り上げた。自分の慘苦に對して魂の奥底から鬪つた。仆れるのが厭さに、立つてゐようと勇敢に抵抗した。立ちながら死なうと思つた。

一臺の荷車がのろ〳〵と通つて行つた。僕は、その上に馬鈴薯が積んであるのを見た。けれども怒つてゐるのと、心が頑固になつてゐるのとで、僕は態とそれを馬鈴薯と認めず、甘藍と思つた。僕は何といつてもそれは甘藍であると言つて、恐ろしく誓ひを立てた。

僕は自分で言つてゐることをよく聞いてゐた。そして、只自分は途方もない虚僞の誓ひを立てゝゐることに、愉快な滿足を求める爲め、この嘘を絶えず吐いてゐるのであつた。僕はこの稀有な罪にすつかり醉はされて、三本の指を空にあげて、これこそは甘藍であると、顫へる唇で、父と子と聖靈の御名によつて誓つた。

時は經つた。

僕はそばの階段にどつかりと腰を下して、額や頸の汗を拭ひ、深く空氣を吸つて、心を強ひて落着けようとした。

もう午後で、太陽は傾いてゐた。

僕は再び自分の位置を案じ始めた。飢ゑが烈しく僕に襲つて來た。その上に、もう少し經てば夜になるのであつた。まだ日の暮れないうちに、何とか身の振方をつけなければならなかつた。僕の考へは又もや手ひどくやつゝけられた、あの旅宿へ戻ることであつた。が、戻つて行きたいのではなく、それを考へないでは居られなかつたのだ。

勿論主婦が僕を追ひ出したのは當然であつた。金を拂はないで、誰のところにだつて住つてをられるものではない。

それにも拘らず、主婦は時には僕に食物すらも與へて呉れたではないか。僕が主婦の不機嫌を買つた昨夜でさへも、二つのバタ付パンを出したのだ。僕にその必要があると知つてゐたから、好意で出したのだ。だから何も不足を言ふところはなかつたのだ。

僕は心のうちで、主婦に對して怒つたことを竊に詫びた。特に僕が最後に恩を忘れて、その顔に札を拋りつけたことをひどく後悔した……

十クローネル！

僕は吐き出すやうに言つた。

配達人が持つて來た手紙は何處から來たのか？

今始めて僕はそれをはつきりと思ひ浮べて、不意に一切の關係を推察した。僕は苦痛と恥とに打ち萎れた。僕は幾度も、嗄れた聲でユラヤリィと呟いて、頭を振つた。

僕があの女に今後出會つたなら、最も冷淡な風をして、彼女のそばを通り過ぎてやらうと決心したのは、ついまだ昨日のことではなかつたか。然るに僕は却つてあの女から同情を受けて、金を惠まれてしまつた。いや、はや、僕の墮落は限りがない！　僕は決して彼女と同等の位置に立つことは出來なかつた。僕が向ふところ、すべてこれ墮落であつた、膝まで、腰まで。僕は汚濁の底に沈んで、もう二度と浮び上れない、二度と！　それはどん底だ！　匿名の施與者に突き戻しもしないで、お情けの十クローネルばかりの端金を取れと言はれるまゝに、兩手に攫み、内々惜しくて、厭だと思ひながら、それを宿料に使つてしまふ……

僕はどうにかしてこの十クローネルを取り戻すことは出來ないかしら。主婦のところへ行つて、金を返して貰はうなんて出來ない相談にきまつてゐる。若し考へてみたら、もつとよく考へさへしたら、別な方法がある筈だ。あたりまへの考へ方ぢやいけない、この十クローネルを取り戻す方法は、僕の全身、全力を盡して考へなければならないのだ……

そこで僕は一生懸命に考へ始めた。

多分、四時頃だ。二時間ばかりして僕が戲曲を書き上げさへすれば、劇場の支配人に會へるだらう。僕は原稿を取つて、一生懸命に最後の三四場を仕上げようとした。僕は考へた。僕は汗を流した。そして始めから讀み直して見た。けれども何にもならなかつた。

「馬鹿なことはいけないぞ！」と、僕が言つた。「もう頑固なことをしてはならないぞ！」

僕は夢中で戲曲を書いた。急いで仕上げて、筆を擱きたさに、何でも頭に浮んだだけは皆書いた。僕は新たに大切

な時機が來たと想像した。僕はすつかり自分を欺いた、明かに欺いて、恰も何の言葉をも捜す必要のないものゝやうに書きまくつた。

「これは善い！　まつたく發見だ！」

僕は始終かう呟いた。

「たゞ書け、書け！」

兎角するうち、僕が今書いてゐた豪詞が信用できないやうに思はれ出した。それは第一幕の豪詞とは餘り似つかぬものであつた。のみならず、中世紀の人の口の端にのぼるやうなものではなかつた。僕は鉛筆を嚙み折つて、地團駄ふんで、原稿をずた〳〵に引き裂いた。一枚々々ずた〳〵に引き裂いた。帽子を路に投げて、踏みにじつた。

「僕はもう駄目だ！」と、獨りで呟いた。そして帽子を踏みつけてゐるうちは、それより外のことは何にも言へなかつた。

一人の巡査が數歩離れたところにゐて、僕の方に氣をつけてゐた。彼は車道の中央に立つて、僕より外のものには少しも注意してゐなかつた。

僕は頭をあげると、彼と眼を見合はした。恐らく彼はもう永い間そこに立つて、たゞ僕を瞋めてゐたのであらう。僕は帽子を取り上げて元の通りに被り、巡査のところへ行つた。

「何時ですか。」

彼は時計を取り出すのにちよつと躊躇いたが、その間も始終僕から眼を放さなかつた。

「四時頃です。」と、彼は答へた。

「まつたく！」と、僕は叫んだ。「四時頃、よく當りました。貴方は自分の職務をよく御存じですね、僕はよく貴方を覺えて置きませう。」

さう言つて僕は巡査の傍を去つた。巡査は非常に驚いて、口をあんぐり開け、手に時計を持つたまゝ僕を見送つてゐた。ローヤル・ホテルの前に來てから振り返つて見ると、巡査はまだそこに立つて、眼で僕を跟けてゐた。

ハツハツ、あんな奴にはかうしてやるべきものだ！　最大の侮辱を與へてやるんだ！　ひどく脅かされてやがる！　吃驚してやがる！

僕はすつかり悅に入つて、又もや小唄をうたひ始めた。昂奮の爲めに、最早苦痛も感じないで、又少しも不愉快な氣持すらしないで、羽のやうに輕く道を行つた。市場のところを曲りヴォール・フレールセルス教會傍のベンチに腰を下した。

僕が十クローネルの札を送り戻してやるかどうかは無關

心にすましてをられることぢやなかつた。一旦受取つた以上、あれは僕のものだつた。そして又奚れた人には、確かに必要のないものなのだ。態々僕に宛てゝ送られたものなら、僕はそれを受取るべきであつて、配達人の手に留めて置くのは無意味であつた。尙ほ又僕が受取つたあの金でなく、別の十クローネルを返してやるのもいけない。だから何とも仕方がないのである。

僕は市場の繁昌を見て、心を紛らはしてしまはうとしたが、駄目だつた。僕は始終十クローネル札のことを考へてゐた。しまひには手を握り締めて、怒り出した。

「若し送り戻したなら、」と　僕は言つた。「あの女は腹を立てるだらう。だから、どうしてそんなことをしていゝものか。」僕はいつだつて、あらゆるものに對して、自分の優越を感じ、傲然と、頭を擡げて――「いや、有難う、もう澤山です！」と答へる。今僕は、その結果がどうなつたかを知つた。

僕は再び野天の街頭へ出てしまつたのだ。僕はあの良い暖かな旅宿に泊つてをられる機會を握りながら、それを利用し得なかつたのだ。僕は傲慢だつた。最初の一言でもう跳び上つた。俺はそんな吝な人間ぢやないんだぞ、と右と左にばつばと十クローネルを拂つて、自分の路を行つたのだ。……

僕は自分の宿を去つたので、困つたけれど、正しく自分を處置して、過らなかつたのである。

その他は僕は皆黃金魔の爲すに任した。僕はあの十クローネルを下さいなんて言つたのではなかつた。たゞその時ちよつと手に取つただけで、直ぐにそれをやつてしまつた。も一度會へるか會へないかさへ分らない、何の緣もない無作法な人間に拂つてしまつた。僕はこんな人間であつた。當然さうすべきものなら、最後の一オウレまでも拂つてしまふのだ。ユラヤリイが僕の理解してゐる通りの女ならば、彼女は、僕にあの金を送つたことを後悔しない筈だ。だから、何だつて僕はぢり〳〵怒つてゐるのだ？　折々彼女が僕に十クローネル送ることは、彼女に出來る一番小つぽけなことなのだ。あはれな娘は、全く僕に惚れ込んでゐる。へゝゝ。多分死ぬ程僕に惚れてゐるのだらう……

僕はかう考へて、自分で大に威張つてみた。あはれなあの娘が、僕に惚れ込んだのは疑ひもないことであつた。

五時であつた。僕は永い間神經を昂奮さしたので、又もや頭の中ががん〳〵鳴るやうに思つた。僕は前を見つめて、眼をかつと見開き、象の看板を出したエレファント藥店の方を見た。すると飢ゑが又ひどくなつて、僕は大に苦しん

だ。そこに坐つて空間を見てゐるうち、僕の緊張した視覺に一つの影が少しづゝあらはれて來て、とう〳〵明瞭にそれが分つた。エレファント藥店のそばの駄菓子屋の老婆だつた。

僕は身顫ひして、ベンチの上に伸び上り、考へ始めた。

やあ全くだ！　あの賣臺の前、あの場所にゐる、あの婆さんだ。僕は二度ぶつ〳〵言つて、指を鳴らし、ベンチから立ち上つて、藥店の方へ行つた。

馬鹿なことは止せ！　それは罪惡の金だらうが、それともコングスベール産の銀で造つた、良い諾威の小鋏だらうが、僕にはどうでもいゝんだ！　僕は嗤ひものにされたくはない、あんまり威張ると、死ぬやうなことにもなる……

僕は角のところへ行き、老婆に目をつけて、その前に立ち止まつた。僕は笑ひかけて、親しさうに頷いて、僕が再びやつて來たのは、さも當然であるかのやうな調子で言葉をかけた。

「今晩は！」と、僕が言つた。「お前さんは多分僕を見知つちやゐなさるまいね？」

「えゝ。」と、婆さんはゆつくり〳〵と答へて、僕を見上げた。

僕は、婆さんが覺えてゐないといふのは、まつたく冗談に言つてゐるのだと思つてゐるやうな振りをして、やつぱりにや〳〵笑ひながら、言つた——

「この前、お前さんに五クローネルあげたことを覺えてゐないかね？　僕はあの時には、何とも言はなかつたやうに思つてゐる。何とも言はなかつたに相違ない。正直な人を相手にする時には、一々約束なんか要らないからね。つまり小さな事に一々證書を取らないでもいゝのだ。ハ、、、。あの金を上げたのは、まつたく僕だつたよ。」

「あらさう、貴方でしたか。考へてみると本當にさうですね、貴方でしたね……」

僕は婆さんがお金の禮を言ふのを止めようと思つた。だから、大急ぎで臺の上に、何か食ふものはないかと見廻した。

「だから僕は菓子を貰ひに來た。」

婆さんはその意味が分らなかつた。

「お菓子だよ。」と、僕は繰り返した。「僕は今菓子を貰ひに來たのだ。なあに皆でなくてもいゝ、あの金のうち、いくらでもいゝのだ。今日皆貰つて行かうと言ふんぢやないよ。」

「貴方はお菓子を取りに來なすつたのか。」と、婆さんは訊いた。

「あゝ貰ひに來たのだよ！」と、僕は答へた。そして婆さんに、僕が菓子を取りに來たことを氣づかせるように、高く笑つた。僕はなほ臺の上から佛蘭西麵麭のやうな菓子を一つ取つて、それを食べ始めた。

婆さんはそれを見ると、賣臺の前に立ち塞がつて、我知らず、その品物をかばふ身振りをした。そして僕に、品物を盗まれるのを、決して手を拱いて待つてはゐないぞと、悟らした。

「さうぢやないか。」と僕は自分に言つた。「ほんとにさうぢやないか。婆さんは實際立派な人だ。誰だつて一山もある金を預けて置いて、あとで取り戻しに來ない人はなからうぢやないか。それ御覽！　婆さんは僕があんな風に金を投げつけたので、あれは恐らく盗んだ物と思つたのだらう。いや、無論そんなことを思つてゐるのぢやない。それで宜しいのだ。まつたく宜しい！　婆さんが僕を正直な人間と思つてゐるのは、誠に有難いと言はなけりやならないのだ、ハ、、、。まつたく、婆さんは善い人だ！」

けれども何だつて僕は婆さんに金をやつたのだ？

婆さんは怒つて、喚いた。僕は婆さんに金をやつたことを説明した。低い聲で、嚙んで啣めるやうに説明した。

僕は誰でも信用してゐるのだから、あんな具合にするのが習慣であつた。いつだつて、誰か僕に、契約をしようとか、證文をやらうとか言ふ時には、僕は頭を振つて「いゝえ、どうしまして！」と言ふのであつた。僕がさうすることは誰だつて知つてゐる。

けれども婆さんには矢張り分らなかつた。

僕は他の手段を取つた。僕は下らんことを言ふなと烈しく叱鳴りつけた。

「こんな風にして、まだ一度も前金といふものを受取つたことがなかつたのかね。」と、僕は婆さんに訊いた。勿論僕は裕福な人、たとへば領事のやうな人からのことを言つてゐるのだ。そんな例はなかつたのか。でも僕は、それが婆さんにとつては、未だ嘗て知らない習慣であるからといつて、許しては置けない。それは外國の風俗、習慣である。婆さんは恐らく外國に行つたことがあるまい。それ御覽！だから婆さんはこんな話が出來ないのだ……

僕は臺の上の菓子をなほ二つ三つ取つた。

婆さんはぶつ〳〵言つて、頑固に拒んだ。僕の取つたものを一つ奪ひ返して、それを臺に戻しさへした。僕はすつかり怒つて、臺を叩き、巡査を呼んで來ると脅かしつけた。

「僕は婆さんに情をかけてやつたのだ。」と、僕が言つた。

若し僕が價だけのものを皆取つたなら、店は潰れてしまふのだ。僕が婆さんに前渡しして置いた金は莫大な額である。けれども僕はそれだけの菓子を取らうとは言はない、僕はその價の半分だけ取ればいゝのだ。そればかりぢやない、もうこれつきりで來ないといふのだ。婆さんがこんな人間だと知つた上は、もう誓つて來やしない……

とう〳〵婆さんは、二三個の菓子を法外な値をつけて投げ出した。四つか五つの菓子に途方もなく高い値段を言つて、それを持つて、さつさと行つてくれと言つた。

僕はなほ婆さんと言ひ爭うて、婆さんが少くとも一クローネを誤魔化し、その無法な高價で、僕の金を絞り取つたと主張した。

「こんな悪いことをすると罰せられるつてことを知らないか？」と、僕は言つた。「大變なことだぜ、お前さん一生涯牢屋へ打ち込まれてしまふぞ。」

婆さんはも一つ菓子を拋り出して、噛んで吐き出すやうに、行つてくれと言つた。

そこで僕も去つた。

ふん、あんな仕方のない糞婆つたら見たことがない！

僕は路を歩き〳〵、むしや〳〵菓子を食ひながら、婆さんの悪口を言つた。今しがた僕等がお互に言ひ合つたことを繰り返した。僕は、婆さんよりもずつと立派な人間であると思つた。僕は人の皆見てゐる前で菓子を食べて、そのことを喋つた。

菓子は一つづゝなくなつた。僕がどれ程食つたからとて、少しも腹にたへなかつた。僕は無限に飢ゑてゐたのだから。畜生め、何ぼ食つたつて腹にたまらない！　僕はあぶなく最後の菓子まで食べてしまふところであつた。それは赤鬚の男に唾をひつかけられた、ヴォウンマンス街の子供にやる爲めに、殘して置く積りだつたのに。僕はその子供のことをよく想ひ出した。彼が跳び上つて、泣きながら罵つたその顏を忘れることが出來なかつたのだ。彼は、大人に唾をかけられた時、僕の倚つてゐる窓に向つてゐたが、僕もそれを見て笑つてゐるだらうと思つたらしく、僕の方を見た。僕があそこに歸つて行つたら、今、あの子供に會へるかどうかは分らない！　が、僕は出來るだけ急いで、ヴォウンマンス街に行かうとして、さきに作りかけの戲曲を引き裂いたところを過ぎた。そこには、まだその紙片が殘つてゐた。僕は曩に驚かした巡査の前を通り過ぎ、とう〳〵子供が坐つてゐた階段に立つた。

子供はもうそこに居なかつた。街路は、殆どがら空きで、あたりは暗くなりかけてゐた。僕は子供を何處にも見つけ

出せなかつた。で、菓子をそつと出して、戸の端に置き、烈しく戸を叩いて、直ぐに跳び退いた。

「子供はきつと見つける！」と、僕は自分に言つた。「あの子が出て來て、一番さきに目につくものは、きつとこの菓子だ！」

僕の眼には、子供が菓子を見つけ出すといふ馬鹿げた悦びの爲めに、涙が湧き出した。

再び鐵道棧橋のところへ來た。

今、僕は飢ゑを感じなかつたけれども、曩に食べた甘いものゝお蔭で胸が悪くなつた。頭には新たに、最も馬鹿げた考へが騷ぎ出した。

若し僕がこの船の纜をこつそりと斷つてしまつたら、どんなものだらうか。突然火事だと叫んだら、どうであらうか。

僕は棧橋の先へ行つて、一つの箱を見つけると、その上に腰掛け、腕を拱んだ。僕は頭が益々狂ふのを感じた。僕は動かなかつた。ちつとも身を眞直にしてゐようとは思はなかつた。

僕は腰を下して、露西亞の國旗を揭げたコペーゴロ號を眺めた。欄干のところに一人の男がゐた。後甲板の赤燈がその頭を照らしてゐた。僕は立ち上つて、彼に話しかけた。何の目的があつてゞもなく、又返事を受けようとも思はなかつた。僕は言つた——

「今晩出帆ですか、船長？」

「あゝ、もうぢき。」と、彼は答へた。彼は瑞典語で話した。だからきつと芬蘭人だと僕は思つた。（芬蘭は昔瑞典領にて、且つ露西亞に對する反感から瑞典語をよく話す）

「ときに、船長さんの方で、人は御入用ぢやありませんかね？」

僕はこの時、要ると言はれようが、要らんと言はれようが、構はない。どんな返事をこの男がしたからとて、無頓着であつた。僕は答を待つて、彼を見た。

「あゝ、若い者が一人要る。」

若い者！　僕はぎつくりした。そつと眼鏡を外して、ポケットに入れ、架け板を渡つて、甲板に上つた。

「僕は、まだ海員になつたことはありませんが、何でも、言ひつけられたことはやります。船は、何處へ行くんですか。」

「レースまで空船で行つて、石炭を積みにカヂスへ行くのだ。」

「そりや結構です。」と、僕は船長に迫つた。「僕は何處へつれて行かれたつてかまひません。僕はするだけの仕事は

します。」

彼はちよつと僕を見て、考へてゐた。

「君はまだ無經驗だね？」と、彼が訊いた。

「えゝ、けれども今も言つた通り、何かさして下されば、やつてお目にかけます。」

彼は再び思案した。僕は、必ずつれて行つて貰はうと決心した。それと同時に、陸へ追ひ戻されはしまいかと心配し始めた。

「どうお考へですか、船長？」と、僕は訊いた。「僕は何でもやります。きつと！ 言ひつかつた事が出來ないやうなら、僕はまつたくつまらない人間です。僕は二直（當直二週の意味、航海用）を交代せずに一氣につゞけてやれます。僕にはそれをやれます、十分堪へます。」

「さうだね、ぢや試してみよう。」と、船長は僕の最後の言葉を聞いて、微笑した。「それが出來なかつたら、英國で船から下すことにするよ、いゝかね。」

「勿論かまひません！」と、僕は喜んで答へた。そして若しいけなかつたら、英國で下船することを僕等は繰り返して言つた。

で、船長は僕に仕事を言ひつけた……

峡灣を出ると、僕は熱と疲勞とに汗を搔いた體を伸ばして、陸の方に向ひ、家々の窓から華やかに燈火がかゞやいてゐるクリスチャニヤの市に別れを告げたのであつた。

——了——

アルネ

ビョルンソン作

生田春月譯

（一）

二つの岩山にはさまれて、深い峡谷があつた。その峡谷の中程には、圓い石や尖つた岩の上を、水量のゆたかな溪流が、重苦しさうに流れてゐた。兩岸はだん〳〵に高く嶮しくなつてゐた。その一方の絶壁は、少しの草木も生えてゐなかつた。けれど、春や秋に水が漬く位ゐ溪流に接したあたりには、さま〴〵な群りをなした、みごとな森があつて、上を見上げ、前を見やりしながらも、ぢつとそこに立ちつくしてゐるのであつた。

「おれたちがあの山をすつかり蔽うてしまつたらどうだらう？」と、或る日、杜松は他のどの木よりも自分の近くに立つてゐた外國種の樫の樹に言つた。樫の樹は、一體そんなにしやべるのは誰だか見ようとして、下を見おろしたが、また眼を上げて、默つてゐた。溪流は滔々と流れて、すつかり泡で白くなつてゐた。北風はこの峡間へ吹込んで來て、岩の間隙に咆えてゐた。露はな岩は重さうに身を乗出して、ぶる〳〵顫へてゐた。

「おれたちがあの山をすつかり蔽うてしまつたらどうだらう？」と杜松は別の方にゐた樅の樹に言つた。

「蔽ふものがあるとすれば、まづおれたちの外にはあるまいな」と樅の樹は言つて、その鬚を握り、樺の樹の方を見やつた、「君はどう思ふね？」

けれど樺の樹は考へ深さうに岩山を見上げた。その山は、殆んど息も出來ないと思はれる位ゐ、彼等の上に重苦しくのしかゝつてゐた。

「ほんとに、さうしたいものだね」と樺の樹は言つた。けれども、もう三人の外には仲間がなかつたので、彼等は自分たちで岩山を蔽ひはじめる事にした。杜松が先頭に立つた。

彼等が少しばかり行くと、ヒイス（註、土の乏しい岩山や荒地の上に生える北歐特有の一種の草）に出會つた。杜松は通り抜けようとした。

「いや、ヒイスも連れて行かう」と樅の樹が言つた。そし

て、ヒイスも仲間に入つた。まもなく、杜松が滑り出した。

「わたしにつかまりなさい！」とヒイスが言つた。杜松はその通りにした。そこには小さな間隙しかなかつたので、ヒイスがまづ指を一本差し入れると、杜松は手をすつかり入れる事が出來た。かうして彼等は上へ〳〵と這ひ上つた。

樅の樹もだるさうに續くと、樺の樹も續いた。

「天佑たつたね」と樺の樹は言つた。

ところで、岩山は自分の上に這ひ上つて來るものは、どんな生き物だらうと考へはじめた。そして、二三百年も考へた末に、樣子を見にと小さな溪流を送つた。それは丁度、春の水のあふれ出す時だつたので、小川は樂しさうに躍つて、ヒイスのところに突き當つた。

「ヒイスさん、どうぞ通らせて下さい、わたしはこんなに小さいんですから」と、小川は言つた。

ヒイスは恐ろしく忙しかつたので、一寸顔を上げたばかりで、また仕事を續けてゐた。小川はその下をくゞつて、どん〳〵流れて行つた。

「杜松さん、どうぞわたしを通らせて下さい。わたしはこんなに小さいんですから。」

杜松は鋭い眼で見やつたが、ヒイスと同じやうに、通り抜けさせた。小川はその下をくゞつて、どん〳〵流れて行つて、樅の樹が絶壁を這つてゐるところまで來た。

「ねえ樅の樹さん、どうぞ通らせて下さい。わたしはこんなに小さいんですから」と言つて、樅の樹の足を接吻した。そのやさしい、甘やかなしうちに、樅の樹はすつかり紅くなつて、道をあけた。ところが、樺の樹は、小川が言はない先きから、足を上げてゐた。

「ヒ、ヒ、ヒ！」と忍び笑ひして、小川は大きくなつた。

「ハ、ハ、ハ！」と高笑ひして、小川は大きくなつた。

「ホ、ホ、ホ！」と笑ひこけて、小川はヒイスや、杜松や、樅や、樺の樹を打ち倒して、その背中に乘せて、高い山脈の間を漂はせて行つた。岩山は何百年もすわりながら、あの日、自分が笑ひはしなかつたかしらと、考へ込んでゐた。

それは疑ひのないことであつた。たしかに岩山は、自分の上を蔽はれる事を好まなかつたのだ。ヒイスは腹を立てて、すつかり青くなつてしまつて、またそこから歩きはじめた。

「さあ元氣を出せ！」とヒイスは言つた。

杜松は地面にへたばつたまゝ、ヒイスを見やつてゐたが、長いことうづくまつてゐた後で、やうやく身を起した。彼は髪をかきむしつて、また歩き出し、山が氣付かずにゐられまいと思ふ程、岩にしつかり嚙みついた。

「君の方でいくらいやがつても、こつちは放しやしないぞ。」

樅の樹はまだ別狀がないかどうか見ようとして、足の指を少しばかり曲げて見た。それから片足を持ち上げて見た。それも別狀はなかつた。そして今度は、今一方の足を持ち上げて見たが、何ともないので、兩足で立ち上つた。彼は先づ、その最初、歩き出して行つたところを見やつた、それから、その倒れたところを、最後にその向つて行くべきところを見廻して、それから、これまでまるで一度も倒れた事がないかのやうに、歩き出した。樺の樹は恐ろしく泥まみれになつてゐたが、今やまた身を起して、泥をはらひ落した。そして、またもや歩き出した。だん〳〵早く、上の方へ、また横の方へと、陽に照らされ、雨にさらされながら。

「一體これはまた何とした事だらう？」と、岩山は夏の太陽が射して來て、すべてが露に輝き、小鳥がうたひ、野鼠が鳴き、兎が跳ねまはり、黄鶺が叫びながら身を隱したときに言つた。

そして、つひに、ヒイスが絶壁のふちから、一方の眼で下をのぞく事の出來る日が來た。

「おゝ、何て綺麗なんだらう！」とヒイスは言つて、行つてしまつた。

「全體、ヒイスは何を見たのだらう？」と杜松は言つて、自分も下をのぞけるほど身を乘り出した。「おゝ、何て、何て綺麗なんだらう」と彼は叫んで、行つてしまつた。

「杜松は今日どうしたと云ふんだらう？」と樅の樹は言つて、暑熱の中をずつと歩いて來た。やがて樅の樹は、足を爪先き立てゝ、のぞき込んだ。

「ほんとに綺麗だ！」

樹も葉も驚嘆のあまり逆立つた。彼も骨折つて攀ぢ登つて、行つてしまつた。

「みんなが見て行つて、わたしの見ないものは何だらう？」と樺の樹は言つて、裾をからげてちよこ〳〵下りて來た。その頭全體を絶壁のふちに差出した。

「これはすてきだ！　あのむかうの野には、樅や、ヒイスや、杜松や、樺の大きな森が出來て、わたしたちを待つてゐるぢやないか！」と樺の樹は言つて、その葉は日光にふるへ、露がきら〳〵と滴り落ちた。

「さうだ、努力さへすれば、こんなものだ」と杜松は言つた。

（二）

アルネは上區のカムペン（註、その土地の名で、同時にそこに住む家の姓である）に生れた。彼の母親はマルギットと云つて、カムペンの小さな農場の一人娘であつた。彼女が十八歳の時に、一度、舞踏會に長居しすぎたことがある。連れのものたちが歸つてしまつたので、舞踏の終るまで待たずに、直ぐ歸つたところで、どうせ道程に變りはないと、マルギットは思つた。で、やつばりさうしてすわつてゐると、樂師の仕立屋ニルスが、醉つばらつた時いつでもするやうに、ヴァイオリンを傍に置き、舞踏者には勝手に拍子をとらせておいて、自分はその中のいちばん美しい娘をつかまへて、唄の拍子に合せるやうに、足をしつかり上げながら、靴のかゝとで、自分の眼についた、いちばん背の高い男の頭から、帽子をはたき落して、「ホウ！」と言つた。

その夜、マルギットが家路についたときには、月光が雪の上に、驚くばかり美しく戯れてゐた。彼女は自分の寢室になつてゐる屋根部屋に上つて行つたとき、もう一度外をのぞいて見ずにはゐられなかつた。彼女はその上衣をぬいで、それを手に持つたまゝ、暫くそこに立つてゐた。が、急に寒くなつたので、急いで着物をすつかりぬいで、羊毛の蒲團の中に深くもぐり込んだ。その夜、マルギットは大きな赤い牝牛が、自家の畑の中へ迷ひ込んで來た夢を見た。彼女はその牛を追ひ出さうとしたけれど、いくら追つても、その場を去らうとしなかつた。牝牛は靜かに立つた儘、たらふく食べながら、ときゞ〳〵マルギットの方を、その大きなだるさうな眼で見やるのであつた。

その次にまた教會區に舞踏會のあつた時も、マルギットは行つてゐた。その夜、彼女はあまり踊りたい氣がしなかつた。で、ぢつとすわつて、樂の音を聞きながら、他の人たちもやはりその音に大して興味をもたないのを、不思議に思つた。けれど、遲くなると、樂師は立上つて、踊らうとした。彼はつか〳〵とカムペンのマルギットの所へ行つた。彼女は殆んど無我夢中で、仕立屋ニルスと一緒に踊つた。

まもなく氣候が溫かくなり、舞踏會もなくなつてしまつた。その春、マルギットは病氣になつた一匹の小羊の面倒ばかりを見てゐたので、母親にはそれが殆んど度外れに思はれた位ゐであつた。

「たかゞ小羊一匹ぢやないか！」と母親は言つた。

「えゝ、でも病氣をしてるんですもの」と、マルギットは答へた。

もう長いこと、彼女は教會に行かなかつた。「わたしよりもお母さんが行つて下さい、どうせ一人は留守居をしてゐなくちやならないんですから」と、彼女は言つた。それは夏の初めの日曜の事で、大變いゝ天氣で、乾草はもう一日外に出して置いてもいゝんだから、今日は二人で行かうぢやないかと、母親は言つた。マルギットは別にさからふ事もないので、それに同意した。けれども、教會の鐘の聞えるところまで來ると、彼女は突然、わつと泣き出した。母親は死人のやうに眞蒼になつた。二人は歩いて行つた、母親が先きに立ち、マルギットが後について。說教を聽き、讃美歌を終ひまで一緒に歌ひ、祈禱を一緒にあげて、鐘の鳴つたとき、はじめて教會を出た。ところで、二人が家に歸つたとき、母親は兩腕でマルギットを抱いて言つた、

「ねえおまへ、わたしには何も隱し立てをしておくれでないよ！」

また冬が來た。が、マルギットはもう踊らなかつた。仕立屋ニルスは、それとは反對に、前よりも一層はげしくヴァイオリンを彈いたり、飲んだりして、その後ではきまつて舞踏會の中のいちばん美しい娘を相手に踊つた。その當時、この教會區のどんな美しい金持の娘でも、彼は好き勝手に選擇出來るといふ、專らの評判であつた。なほそれに附け加へて、エリ・ペエン夫人が、彼を思つて戀わづらひをしてゐる自分の娘のビルギットのために、彼に結婚してやつてくれと、賴み込んだといふものもあつた。

ところが、丁度その時分に、カムペンの水呑百姓の娘の赤ん坊が、洗禮を受けに來て、アルネといふ名をつけて貰つたが、何でもその子の父親は仕立屋ニルスだといふ話であつた。

丁度その日の夜にも、ニルスは或る大きな婚禮の席に行つて、思ふさま飲んでゐた。彼はヴァイオリンを彈かうとはしないで、立て續けに踊りまはつてゐたので、他の男は一人も踊り場にゐなくなつてしまつた。けれど、彼がビルギット・ペエンのところへ行つて、一緒に踊つてくれと言ふと、彼女はそれをことわつた。彼はふゝんと笑つて、踵をめぐらして、ついそこにゐた娘をつかまへた。けれど、その娘も尻込みした。彼はその娘の顏をのぞき込んだ。それは小さな、色の黑い娘で、彼をぢつと見入つてゐたが、今では眞蒼な顏をしてゐた。彼はその娘の方に身をかゞめて囁いた。

「ね、カレン、わしと踊つてくれないか？」

彼女は答へなかつた。彼はもう一度訊いた。すると彼女は、彼が訊いたのと同じやうな小聲で答へた。

「あんまり踊り過ぎると大變ですから。」

彼はゆつくり後しざりして、部屋の眞中まで來ると、そこで一つくるつと跳ね返つて、それから一人でホーリング（註、諸國獨特の去さして四分の二の拍子の急激な舞踏）を踊りつゞけた。誰も他の者は踊らないで、みな默つて彼を見てゐた。

すると彼は納屋へ出て行つて、そこに身を投げ出して、泣いた。

家ではマルギットが赤ん坊を抱いてすわつてゐた。彼女はニルスが舞踏會から舞踏會へと駈け歩いてゐる事を聞いた。彼女は赤ん坊を見て泣いた、が、また見やつて、嬉しいと思つた。彼女が最初子供に教へた言葉は、お父さんといふ言葉であつた。けれど、お母さん、いやむしろお祖母さん（今ではさう呼ばれてゐるから）が近くにゐる時には、さう呼んではならなかつた。その結果、子供がお祖母さんをお父さんと呼ぶやうなことになつてしまつた。マルギットはそれをさうさせないために、大層骨を折つた。けれど、それが又、子供を早く智慧づかせる事になつてしまつた。彼はまだあまり大きくならないうちから、仕立屋ニルスを自分の父親だと知つてしまつた。また、冒險的な事に興味を惹かれる年頃になると、その仕立屋ニルスがどんな人物かをも知るやうになつた。お祖母さんは、ニルスといふ名をさへも口にしないようにと嚴しく言ひ付けた。カムペンの狹い土地を立派な農場にして、娘と孫とが心配のない暮しの出來るようにするのが、彼女の大目的となつた。彼女は隣の農場主の手許不如意をつけ目にして、その土地を買入れ、その金を年拂ひにして、男のやうに働いた。彼女はもう十四年以來、寡婦だつたのである。カムペンは大きな農場になつて、四頭の牝牛と、十六頭の羊とを飼ひ、その上に一頭の馬から半分割前を取るやうになつた。

仕立屋ニルスは、相變らず、教會區中を歩きまはつてゐた。仕事は減つて行つた。一つは彼がもう前のやうに仕事に身を入れないためであつたが、一つはまた彼がもう元のやうに人に好かれなくなつたためである。それで彼はだんだんヴァイオリンに身を入れ出した。それがまた酒に浸つたり、喧嘩をしたり、よくない日を送らせるようになつた。彼が愚痴をこぼすのを聞いたといふ人も多かつた。

アルネが六歳位ゐのときの事であつたが、或る冬の日に、その寢床で、いろ〳〵な悪戯をしてゐた。蒲團を帆にこしらへて、大きな柄杓を持つて、船を漕ぐ眞似をしてゐた。お祖母さんは部屋にすわつて、絲を紡ぎながら、何か考へ事をしながら、とき〴〵その考へを確めるやうに、一人でうなづいてゐた。そこで子供は自分が注意されてゐないの

を知つて、習ひ覺えた荒つぽい仕立屋ニルスの歌を、うたひはじめた。

生れたばかりの子供でなけりや
仕立屋ニルスが誰だか知らう。
他處から來たばかりの人でなきや知らう
ニルスがクヌウトをどう倒したか。
オーレ・ペエルを屋根から投げて
「今度來るときや辨當持でやつて來い」
何處へ行つてもえらいで通る
ハンス・ブッゲが威張つて言つた、
「仕立屋ニルスよ、おまへ何處で寢たい、
そこへ唾はいておまへを寢かさう」
「さあ拳固のとゞくところへ寄つて來い、
口さきばかりで何が出來る」

最初の取組や勝負なしで
どちかゞ勝つまでやつて見ろ。
二度目はブッゲがひよろ〳〵しだす、
「ハンス、もうお疲れか、熱い踊りに」
三度目はハンスがぶつ倒れ、血が迸る
「さあ唾はいてみろ、その鼻はどうだ」

その先きを子供は歌はなかつた。けれども、母親が教へる氣になれなかつた句が二節あつた。

雪に蔽はれた樹立を見たか？
ニルスと話してる娘を見たか？
踊りで飛んでるニルスを見たか？
娘、お逃げよ、つかまらぬうちに。

この二節をお祖母さんは知つてゐた。それが歌はれなかつたので、一層はつきりと思ひ出した。彼女は子供には何も言はなかつたが、マルギットに向つてかう言つた、

「子供におまへの恥辱を教へるなんて、結構な事だよ、終りの二節も忘れないようにおしよ！」

仕立屋ニルスは酒に身を持ちくづして、昔とは別人のやうになつてしまつた。彼奴ももうやがておしまひだと言ふものも多かつた。

丁度その頃、この教會に來てゐた二人の亞米利加人が、近くに婚禮があるといふ事を聞いた。すぐに彼等はその式に列して、土地の風俗を知りたいといふ氣を起した。ニルスは丁度その席で彈いてゐた。彼等はめい〳〵一タアレルを樂師に拂つて、さらにホーリングを所望した。いくら賴んでも、誰もおれがやらうと言つて出るものがなかつた。多くのものはニルスに踊つてくれと賴んだ、彼がいちばんの上手だつたからだ。彼がことわればことわるだけ、人々は一層言を盡して、終には異口同音に踊りを求めた。それが彼の思ふ壺だつたので、彼はヴァイオリンを他の人に渡して、上衣をぬいで、帽子を投げ出すと、輪になつてゐる人達の眞中に進み出て、微笑した。今や以前のやうな注意が、彼にそゝがれた。それがまた、彼に以前の力を貸し與へた。人々は出來るだけ近くへ押し寄せて行き、後の方のものは、卓子や腰掛の上に攀ぢのぼつた。娘たちの中には、他のものよりも高いところにゐるものもあつた。その

いちばん前にゐたのは、ビルギット・ペエンであつた。彼女は輕い、褐色に輝いてゐる髮をした背の高い娘で、ひろい額の下に深い窪んだ碧い眼と、長く引いた口をしてゐたが、その口はとき〴〵微笑して、その度に少し横の方へ歪むのであつた。ニルスは天井の横木を量つたとき、彼女に氣付いた。音樂がはじまつた、深い沈默が生じた。ニルスは踊りはじめた。輕々と床の上を飛んだ。拍子に合せて半ば身を前に屈めて、一方に進み出て、あちらこちらに身を傾け、とき〴〵足を十字に組み、また急に飛び上り、身を投げかけるやうな姿勢を取り、それからまた最初のやうに身を斜めにして進み出た。ヴァイオリンは確かな手腕で彈かれるので、曲調はだん〳〵急に猛烈になつて行つた。ニルスが頭を次第に後にそらせて、突然、踵で天井の横木をめがけて蹴り上げたので、塵埃や石灰が皆の上に落ちかゝつた。

彼のまはりのものは、笑つたり叫んだりした。娘たちは息をひそめてゐた。ヴァイオリンの音は、醉はすやうに絶えず響いて、ます〳〵けしかけるやうな旋律を立てた。ニルスもそれに逆らふ事が出來ないで、身を前に屈め、拍子に合せて跳びまはり、身を投げ出すやうに伸び上り、それからまた忍び足に歩いて、人の思ひもかけぬ時に、踵で天井の横木を蹴とばして、も一度、それを繰り返してから、前へ後へと、とんぼがへりをして、それからまたしやんと立つた。もう十分だと彼は思つた。ヴァイオリンはまづ急な調子を奏でゝ、それから深い調子に移つて行き、だん〳〵弱くなつて行つて、低音を一つ長く引つぱつて、消えてしまつた。見物は散つて行つた。今までの靜寂の代りに、盛んな話聲や、高い呼び聲が響いた。ニルスは壁に凭れて立つてゐた。亞米利加人たちは通譯を連れて彼のところへ行つて、めいめい五タアレルづつを彼に與へた。ふたゝび沈默が生じた。

亞米利加人は暫く通譯と話をしてゐた。それから通譯はニルスにむかつて、この人達の雇人になつて行く氣はないかと訊いた。給金は望み通り與へるとの事であつた。

「何處へ行くんだね？」とニルスは訊いた。人々は出來るだけ傍へ押寄せて來た。

「世間へ出て行くのさ」といふのが、その答だつた。

「いつ？」とニルスは訊いて、きら〳〵する眼であたりを見廻して、ビルギット・ペエンの眼に出會ふと、もうその眼をはなさなかつた。

「一週間以内にこちらに歸つて來るから」と、答はかうだつた。

「大抵それ迄にや用意をしときませう」とニルスは二個の五タアレルの金貨を手で量つて見ながら答へた。彼は傍らに立つてゐる男の肩によりかゝつて、ふる〳〵顫へてゐた。それで、その男は彼を腰掛に掛けさせようとした。

「何でもないんですよ」とニルスは言つて、床の上を二三歩よろ〳〵踏んだが、またしやんと踏み直つて、それから向き直ると、ホプサア（註、四分の二の拍子の急速な舞踏）を踊つてくれないかと申し出た。

娘たちはみな前の方に立つてゐた。彼は長いことゆつくりと見廻して、それから、黑い上衣を着けた娘のところへ眞直に歩いて行つた。それはビルギット・ペエンであつた。彼が片手を差出すと、彼女は兩手を差出した。彼は笑つて、後へ引き退つて、その隣にゐた娘の腕を取つて、彼女と一緒に樂しさうに踊つて行つた。ビルギットの顏は襟もとまで眞赤になつた。柔和な背の高い男が、彼女の後に立つてゐたが、このとき彼は彼女の手を取つて、彼女と一緒にニルスのすぐ後のところで踊り出した。ニルスはそれを見た。そして、多分不注意からであらう、彼は踊りながら二人にひどくぶつ突かつたので、その男もビルギットも、はげしく床の上にぶつ倒れた。笑ひや囃し聲がそこら中に起つた。ビルギットは起き上つて、隅の方へ行つて、はげしく泣き出した。

柔和な顏の男は、もつとゆつくり立ち上つて、なほも踊りつゞけてゐるニルスのところへつか〳〵と行つて、

「ちよつと止めてくれ」と言つた。ニルスが知らぬ顔をしたので、男は彼の腕をつかまへた。彼はその腕を振りはなして、男の顔を見た。

「わしは君を知らん」とニルスは微笑つて言つた。

「さうだらう、だが、今すぐに分るんだ」と柔和な顔の男は答へて、拳をかためて、ニルスの眼の上をなぐりつけた。思ひがけぬ事なので、ニルスは燧燈の鋭い角をめがけて、ひどい勢ひでぶつ倒れた。すぐ起き上らうとしたが、起き上れなかつた。脊骨が折れたのである。

カムペンでは、變化が來た。お祖母さんは、近頃病氣がちになつたので、それからは、農場を買つた借金の年賦の最後の支拂ひをすますために、前よりも一層心を配るやうになつた。

「それさへすめば、おまへもあの子ももう困るやうな事はないだでな。だが、おまへが誰かにせがまれて、その人を引入れるようだつたら、わしは墓の中で寢がへりを打つぞよ」とお祖母さんは言つた。

秋の頃に、彼女は嬉しい事には、農場の大部分を有つてゐる前の地主のところに、負債の最後の拂込の金を拂ひに行く事が出來た。そして、家に歸つて、腰掛の上にすわつて、「やれ〳〵、これで埒があいた」と言ふ事の出來たときには、彼女は本當に嬉しかつた。けれども、丁度その時から彼女は不治の病氣に罹つてしまつた。床に就いたきり、二度と起き上る事が出來なかつた。教會の墓地の空地に、娘は母親を埋葬して、美しい十字架の墓標を立てゝ、その上に姓名と年齢と、キンゴ（註、トマス・キンゴ、丁抹の讃美歌詩人）の讃美歌の文句とを刻みつけさせた。

葬式から二週間もたつと、早くもお祖母さんの黒い日曜の晴衣で、子供の着物が仕立てられた。子供がそれを着ると、アルネはまるでお祖母さんが、また生き返つたやうな嚴肅な氣持になつた。彼は我ともなく、お祖母さんが日曜毎に讀んだり、歌つたりしてゐた、大きな活字の、釘金でしつかりくゝつてある讃美歌集を引つ張つて來て、それを開けると、中にお祖母さんの眼鏡があつた。それはお祖母さんの生きてゐた間は、子供は手を觸れる事を許されないものであつた。今、彼はおづ〳〵と、それを取り上げて、鼻の上にかけて、硝子越しに書物を見た。が、何もかも霧がかかつてゐるやうに見えた。不思議だなあ、こんなもので、お祖母さんは神樣のお言葉を讀んでゐたのかなあと子供は思つた。彼はどうして見えないのか調べようと思つて、眼鏡を光にすかして見てゐた——すると、眼鏡は床の上に落ちた。

アルネはぎよつとした。そのとき、戸が開いたので、彼にはお祖母さんが入つて來るやうに思はれた。けれども、それは母親であつた、その後からは、六人の男が、どさくさと大きな音させて、擔架をはこび込んで來て、部屋の眞中におろした。戸は長いこと開け放しになつてゐたので、部屋の中が冷たくなつた。

擔架の上には、蒼い顏をした暗色の髪をした男が寢てゐた。母親は泣きながら、うろ〳〵してゐた。

「そつと寢臺に寢かして下さい」と彼女はたのんで、自分でもそれを手傳つた。男たちが擔架を引つ張つて行かうとすると、その足の下で物の碎ける音がした。

「あゝ、お祖母さんの眼鏡だ」と子供は思つたが、何も言はなかつた。

（三）

前にも言つた通り、それは秋のことであつた。仕立屋ニルスがマルギット・カムペンの家に擔ぎ込まれてから一週間目に、亞米利加人から準備をとゝのへてくれと云ふ報知があつた。彼は丁度ひどい苦しみをしてゐた時なので、齒を食ひしばつて叫んだ

「地獄へでも行きやがれ！」

マルギットはこの答が耳に入らなかつたやうに立つてゐた。彼はそれを見ると、暫くしてから、ゆつくりと、ものうげに繰り返した、

「勝手に——行くがいゝや！」

冬のころになると、彼はもうすわれる位ゐに恢復した。體はもう一生涯、元通りにはならなかつたのだけれど。彼ははじめて起き上られると、ヴァイオリンを取り出して、かき鳴らした。が、昂奮のあまり、また床に就かなければならなかつた。彼はひどく寡默になつた。然し、氣むづかしくはなかつた。しばらくすると、彼は子供に文字を教へたり、家の中で仕事をするやうになつた。外へは出ないで、たづねて來る人々とも話をする事はなかつた。最初マルギットは、教會區内の出來事を話して聞かせたが、その後では彼がいつも陰氣になるので、それも止してしまつた。

春が來ると、彼とマルギットは、夕飯後、いつもよりも遲くまですわつて、何か話してゐた。そんな時、子供は寢床に追ひやられた。春になつて間もなく、彼等の結婚は教會で布告された、やがて彼等はこつそり結婚式を擧げた。

ニルスは畑で一緒に仕事をした。そして、何事をも巧み

に手落ちなく處理した。マルギットは子供に言つた、

「あの人はわたしたちを助けても下さるし、喜ばせても下さるんだよ。だからおまへもおとなしく行儀をよくして、あの人に好かれなくちやいけないよ。」

マルギットはいろ〳〵心配事があつても、少しも窶れはしなかつた。薔薇いろの顏に、大きな眼をしてゐたが、その眼は周圍に隈が出來たので、一層大きく見えた。ふつくらした唇と、圓い顏とをしてゐて、いかにも生々と力强さうに見えた、そんなに力强い方ではなかつたのだけれど。その頃になつて、彼女は前よりも一層元氣に見えて、いつもの癖で働きながら始終歌つてゐた。

或る日曜日の午後、父親と息子とが、今年の畑の具合を見に出かけた事があつた。アルネは嬉々として父親のまはりを飛び廻つて、弓を射た。その弓はニルスがこさへてやつたものである。こんな風にして、二人はだん〳〵に、教會と牧師館とから原村と呼ばれてゐる方に通じてゐる道へと出た。ニルスはそこの路傍の石に腰をおろして、考へ込んでしまつた。子供は道のむかうに矢を射ては、その後を追うて走つて行つた。

「あんまり遠くへ行くなよ」と父親は言つた。子供は嬉しさうに飛び廻つてゐたが、不意に立止つて聞き耳を立てた。

「お父さん、樂隊が聞えるよ。」

ニルスも耳をすました。ヴァイオリンの音が、とき〴〵呼び聲や、高い騷ぎ聲にかき消されて聞えた。又、馬車の軋る音や、馬の蹄の音も絶えず聞えて來た。それは教會から歸つて來る婚禮の行列であつた。

「坊や、こつちへ來な！」と父親は呼んだ。アルネは直ぐ走つて行かねばならぬ事を、その聲音で知つた。

父親は急しく立上つて、大きな樹の蔭に身を隱した。子供もその後について行つた。

「こゝぢやない、むかうだ！」

子供は急いで赤楊の藪の蔭にうづくまつた。

馬車の列は、早くも樺の樹の森の蔭から出て、疾驅して近づいて來た。馬はみんな汗にびつしより濡れて、醉つた人たちは叫んだり、囃し立てたりしてゐた。父子は馬車の數をかぞへてみた。すべて十四輛あつた。先頭の馬車には、二人の樂師が乘つてゐた。婚禮の行進曲が、透明な大氣の中に響きわたつた。一人の少年がその後に立つて、馬を馭してゐた。その後から、花嫁が來た。その高い花冠は、太陽にきらめいてゐた。彼女は微笑して、口を一方に歪めてゐた。彼女の傍らには、靑い服を着た柔和な顏をした男が掛けてゐた。行列がその後に續いた。男どもは女た

ちを膝の上に乘せてゐた。その後には、子供がかけてゐた。一頭立の馬車に六人も乘つてゐたが、みな醉つぱらつてゐた。最後の馬車には、料理番が膝の上に火酒の樽を置いて乘つてゐた。叫んだり歌つたりして、一行は通り過ぎて、坂をまつしぐらに下りて行つた。ヴァイオリンの音、叫び聲、馬車の響は、後に起る砂塵の中から、なほ遙かに聞えて來た。やがて、風がきれ〴〵の叫びを搬んでくるきりになると、鈍い物音となつて、たうとうすつかり聞えなくなつてしまつた。ニルスはやつぱりぢつと身動きもせずに立つてゐた。後でがさ〳〵いふ音を聞いて、彼が振返つて見ると、それは子供が這ひ出して來たのであつた。

「あれ誰なの、お父さん？」

けれど、子供は父親の顏の嶮しい色を見て顫へ上つた。アルネはぢつと立つた儘、答を待つてゐた。いくら待つてゐても答がないので、彼はなほも立つてゐた。たうとう辛抱がしきれなくなつて、思ひ切つてまた訊いてみた、

「行きませうか？」

ニルスはやつぱり婚禮の行列を見送つてゐたが、今や、氣を取直したやうに、歩き出した。アルネはその後についた。彼は矢を弓につがへて、射放しては、走つて行つた。

「草を踏みつけるな！」とニルスは叱りつけた。子供は矢を落して、戻つて來た。暫くすると、またそれを忘れて、父親が一度立止つてゐた時に、そこにころがつて、とんぼがへりをはじめた。

「草を踏みつけるなと言ふのに！」

彼は腕をつかまへて、ぐつと引かれたので、腕が拔けさうに思つた。それからは、アルネはおとなしく父親の後について行つた。

戸口のところで、マルギットが二人を待つてゐた。彼女はつい今まで牛小舍でせつせと働いてゐたと見えて、頭の髪も亂れ、襯衣も着物もよごれてゐた。でも、戸口に立つて、彼女はにこ〳〵してゐた。

「牛が二三匹逃げ出して、いたづらをしましてねえ。でも、もう繫いでしまひました。」

「日曜には少しはさつぱりと出來さうなものだが」とニルスはその傍を通つて、部屋の中へ入りながら言つた。

「えゝ、もう仕事もすみましたから、きちんとしますよ」と彼女は答へて、その後について行つた。彼女はすぐ着替へにかゝつて、そして歌つた。マルギットは上手に歌つたが、とき〴〵かすれ聲を出した。

「わめくのはよせ」とニルスは寢臺の上に仰向けにころがりながら叫んだ。マルギットはぴたつと止めた。そこにアル

ネが駈け込んで來た。

「大きな黑犬が庭へ入つて來たよ、厭な犬！」

「默れ、餓鬼奴！」とニルスは寢床から言つて、片足をぶら下げて、床を踏みつけた。「此奴、惡魔にとつ憑かれてるに違ひねえ」と彼はつぶやいて、足をまた引き上げた。母親は人差指で子供をおどした。

「ねえ、お父さんの御機嫌がわるいのが、わからないのかえ」と彼女はなだめるやうに言つた。

「濃い珈琲にシロップを入れて少し召し上りませんか？」と彼女はニルスの機嫌を直させようとして言つた。この飲料はお祖母さんの大好物だつたので、自然皆好いてゐた。ニルスは好きでなかつたが、他のものが飲むので、自分も飲んでゐた。「濃い珈琲にシロップを入れて少し召し上りませんか？」とマルギットは答がないので、また繰り返した。ニルスは肘で起き上つて叫んだ。

「そんな物がおれに飲めると思つてるのか？」

マルギットはひどく吃驚して、彼の顏を見たが、子供を連れて部屋を出てしまつた。

二人は戸外でいろ〳〵な仕事があつたので、夕飯前まで歸られなかつた。歸つてみると、ニルスはゐなかつた。アルネは、彼を呼びに畑へやられたが、何處にも彼の影は見えなかつた。二人は食事の冷たくなるまで待つてゐたが、たうとう食べる事にした。が、ニルスはやつぱり歸らなかつた。マルギットは心配になつて來たので、子供を寢つかせて置いて、一人すわつて待つてゐた。眞夜中過ぎにやうやくニルスは歸つて來た。

「何處へ行つてらしつたの？」と彼女は訊いた。

「何處へ行かうと、こつちの勝手だ」と彼は答へて、ゆつくり腰掛に腰を下ろした。彼は醉つてゐた。

その日から、ニルスはよく村の方へ出かけては、いつも醉つぱらつて歸つて來た。

「手前の家にかうしてゐるのは堪らねえ」と彼は一度歸つて來たとき言つた。彼女はやはらかに辯解しようとした。けれども、彼は床を踏み鳴らして、彼女を默らせてしまつた。彼は、おれが醉つぱらつてるのは、手前のせゐだ。おれが放埒なのも、手前のせゐだ、おれが不具者になつたのも、一生涯不幸な人間になつたのも、手前と、厭な手前の餓鬼とのせゐだと言ふのだつた。

「なぜ手前はいつもおれの後ばかり追つかけたんだ？」と彼は言つて泣いた。「手前におれが何を惡い事をしたんで、おれをそつとして置かなかつたんだ？」

「まあひどい事を仰しやる！」とマルギットは答へた、「わ

たしがあなたを追つかけたんですつて？」

「さうさ、手前がさ」と彼は叫んで、飛び上つて、泣きながらつゞけた、「それで結局、手前の望み通りになつたんだ。今おれはこゝで樹から樹へと這ひ歩いちや、毎日々々、自分の墓をのぞき込んでゐるんだ。おれはこの教會區の、いちばん金持の、いちばん綺麗な百姓の娘と立派な日を送れたんだ、お日さんの照つてござる處なら、何處迄でも旅する事も出來たんだ。それに手前と、厭な手前の餓鬼とが、おれの道を塞いでしまやがつたんだ。」

彼女は「何と仰しやつても、子供がわるいんぢやありません」と言つて、ふたゝび辯解しようとした。

「默らねえとなぐるぞ！」とニルスは叫んで、彼女を打つた。

翌日、彼は醉ひが醒めると、自分が恥かしかつた。そして、とりわけ子供に大變やさしくした。けれど、まもなくまた醉つぱらつて、マルギットを打つた。しまひには、醉つぱらふ度に、打つやうになつた。子供は泣きわめいた。それで子供まで打つやうになつた。とき〳〵は、深い悔恨にとらへられて、外へ出て行かずにゐられない事もあつた。この頃、彼はまた舞踏の方へと心を誘はれた。彼は前のやうにヴァイオリンを彈くやうになつて、子供にヴァイオリン箱を持たせて連れ歩いた。そこで子供はいろ〳〵なものを見た。母親は子供が一緒に連れて行かれるのを泣き悲しんだが、父親にそれを言ふだけの勇氣はなかつた。

「神様におすがり申すんだよ、何も惡い事を覺えてくれるなよ！」と彼女はアルネを愛撫しながら、たのんだ。けれど、家の母親の傍ではちつとも面白くないのに、舞踏の場處は大變樂しかつた。それで彼はだん〳〵に母親から離れて、父親につくやうになつた。彼女はそれを見たが、何も言はなかつた。舞踏會で彼はいろ〳〵な唄をおぼえて、それを後で父親にうたつて聞かせた。それが父親を興がらせた。とき〳〵は、笑はせるやうな事もあつた。子供はそれに大層力を得たので、それからは出來るだけ澤山の唄をおぼえようと骨折つた。まもなく彼はどんな唄がいちばん父親の氣に入るか、どんなところで彼が笑ふかを知つた。それでそんな個所が唄の中にない時は、子供は自分で出來るだけそれを織り込むやうにした。そのため、彼は早くも音樂に合せて言葉を綴り合せる練習をするやうになつた。富や勢力を得た人達を嘲り譏る唄が、父親にはいちばん氣に入つた。それで子供はさういふ唄をうたつた。

母親は夕方、いつもアルネを牛小舍に連れて行かうとした。彼はいろ〳〵の口實を設けて、逃げようとした。けれど、

何の役にも立たなかつた。彼が仕方なしについて行くと、彼女は熱心に神様の事や、あらゆる善い事を彼に話して聞かせて、しまひには、彼をぢつと抱きしめて、悪い人間になつてくれるなと、熱い涙を流してたのんだり、願つたりした。

母親は彼に讀書を敎へたが、子供は恐ろしく覺えがよかつた。父親は非常にそれを自慢にして、子供にむかつて、とりわけその醉つぱらつてゐる時に、おまへはおれの頭を受け繼いだのだと言つて聞かせた。

舞踏會で、父親は醉つぱらつてくると、皆さんに何か唄つて聞かせてあげろとアルネに言ひつけた。そこで彼はみんなの笑聲や喝采のもとに、次から次へと唄ひつゞけた。息子は父親よりも一層、喝采に喜ばされた。で、しまひには、彼がうたふことの出來ない唄は、一つもないやうになつた。彼の唄ふのを聞いた他家の母親たちは、心配して、マルギットのところへ行つて、その事を話した。それはこの唄の文句が子供のうたふやうなものでなかつたからである。母親は子供をわきへ連れて行つて、神様とあらゆる善事との名で、そんな唄をうたはぬようにと言ひつけた。そこで、子供には、自分の面白いと思ふものが、みな母親には氣に入らぬのだと思はれた。彼ははじめて父親に、母親の言つた事を話した。そのために彼女は、父親がまたも醉つぱらつた折に、ひどい目に會はねばならなかつた。父親は、いつも醉つぱらつた時まで、みんな留めて置いたのである。そこで子供には、自分のした事がどん事であつたかがはつきり分つた。彼は口に出して言ふだけの勇氣がなかつたので、心の中で、神様と母親とに許しを乞うた。母親は彼に對して前と同じやうにやさしかつた。それで彼の心は刺されるやうであつた。

けれども、一度、彼はそれを忘れた。彼はいろんな人たちの物眞似がうまかつた、とりわけ話し振りや、うたひ方を上手に眞似た。或る夕方、母親は部屋へ入つて來た時、子供はそれをやつて父親をたのしませてゐた。そして、彼女がまた出て行つたとき、父親は彼に母親のうたひ方を眞似させて見ようと思ひ付いた。最初、彼はことわつた。けれども、寢床に横になつて、笑ひこけてゐた父親は、母親のうたひ方を眞似してみろと言ひ張つた。

「お母さんは出て行つてしまつたから、聞えはしまい」と子供は思つた。そして、彼は彼女が聲がかすれて、泣き出しさうになつてゐる時にうたふやうな調子でうたつた。父親は子供が氣味がわるくなるくらゐ笑つた。それで彼はおのづと黙つてしまつた。そこへ母親が豪所から入つて來て、

子供を長いこと悲しさうにぢつと見てから、牛乳椀を一つ棚から取つて、また出て行つた。

彼は體中が火のやうになつた。お母さんはみんな聞いてしまつたんだ。彼はそのかけてゐた卓子から飛び下りて、外へ駈け出して、地に身を投げた、いつそそこへ身を埋めてしまひたかつた。それでも氣はやすまらなかつた。彼はまた起き上つて、駈け出した。納屋のところを通りすぎると、その蔭に母親はすわつて、彼の新しい襯衣を縫つてゐた。いつもはさうしてすわつて仕事をしながら、讃美歌をうたふのが常であつたが、今、彼女はうたはなかつた。また、泣きもしなかつた。たゞすわつて、縫つてゐた。するとアルネはもう堪らなくなつてしまつた。彼は彼女の前の草の上に身を投げかけ、彼女の方を見上げて、體中を顫はせて泣いた。母親は仕事の手をやめて、彼の頭を兩手で抱へた。

「かあいさうなアルネや」と彼女は言つて、その顏を彼の顏におしつけた。彼は一言も言はうとはしないで、これ迄になかつたやうに泣いた。

「わたしはよく知つてゐるよ、おまへは本當は善い子なのだ」と母親は言つて、彼の髪を撫でさすつた。

「お母さん、僕のたのむ事をいやと言つてはいけないよ。」それが彼の言ふ事の出來た最初の言葉であつた。

「わたしがいやと言はない事は、おまへも知つてゐるだらう」と彼女は答へた。彼は涙を抑へようと骨折つた。それから、頭を母の膝に押しあてながら、どもり〳〵言ひ出した。

「お母さん、僕に何かうたつて！」

「おまへ、わたしはうたへないんだよ」と彼女は小聲で言つた。

「お母さん、何かうたつて！」と子供はたのんだ、「でないと、僕はもうお母さんの顏が見られないんだもの。」

彼女は彼の髪を撫でさすつたが、やつぱり默つてゐた。

「お母さん、うたつて、うたつて、ねえ、うたつて！」と彼は哀願した、「でないと、僕は遠くへ行つてしまつて、もう家へは歸らないから。」

かうして十四歳になる大きな子供が、頭を母の膝に押當てゝ横になつてゐると、母は彼の上に身を屈めて、うたひはじめた。

主よ、荒磯にたはむれあそぶ
このいとし兒を護りたまへ、
聖靈をおくりたまひて

愛の紐もていましめたまへ。
水は深くて、砂はゆるさも
絆はつよく結ばれたれば、
永遠に救はれ、生きながらへて
きみがみもとにのぼり行かむ。

吾兒はいづこと行方知らねば
深き愁ひに母はしづみて、
戸をば開きて遠く呼べども
かすかに答ふる聲もあらず。
さあれ何處にさまよふも
このいとし兒を捨てたまはじ、
耶蘇ぎみやさしく天の御國へ
恙もあらで導きたまはむ。

彼女はなほ幾節かうたつた。アルネはたゞぢつと横になつてゐた。幸福な平安が彼の上に來た。彼は元氣づくと同時に、疲れをおぼえた。彼がはつきり聞いた最後の言葉は、耶蘇といふ名前であつた。それが彼の前に光明の世界をひらいた。十二人か十三人の聲の合唱を聞くやうな思ひがした。が、母親の聲がいちばんはつきりと聞えた。これよりも美しい聲音を彼はこれまで聞いた事がなかつた。どうぞそんなに歌へるように教へて下さいと彼はたのんだ。ほんとに小さな聲でうたひ出したとき、彼は自分にもうたへると思つた。それで彼はほんとに小さな聲でうたつた、もう一度小さな聲で、ます〳〵小さな聲でうたつた。この聲は全く神々しく響いた。それで彼は嬉しさのあまり、大きな聲を出したので、みんな消えてしまつた。彼ははつと目醒めた。あたりを見廻して、耳をすましたが、聞えるものは、納屋のすぐ傍を絶えずかすかにせゝらぎ流れてゐる小川と、瀧つ瀬の永遠のとゞろきとばかりであつた。母親はもうそこにはゐなかつた。彼女は彼の縫ひかけの襯衣と、自分の胴衣とを、彼の頭の下に當てがつて行つたのだ。

(四)

やがて、家畜を山の森に放し飼ひにする時節が來たので、アルネは自分がその番をしたいと言つた。父親はそれに反對した。彼は今までまだ一度も家畜の番をした事がなく、今はもう十五歳にもなつてゐるからである。けれども、彼は大變うまくたのんだので、たうとうその望み通りにやる

事が出來た。で、その春から、夏、秋にかけて、家ではただ寢るだけで、一日中、森でたつたひとりで過した。

彼は書物を持つて出かけた。彼はその書物を讀んだり、樹の皮に文字を刻んだりした。歩き廻つては思ひに耽り、あこがれては歌つた。けれど、夕方、家に歸つてみると、父親はしば〳〵醉つぱらつては、母親を打擲し、彼女とこの土地とを呪つて、おれは廣い〳〵世間へ出て行ける身分だつたんだと廣言した。それが少年の心に世間へ出て行きたいといふあこがれを起させた。家の中は恐ろしかつた、書物はさらに外へと心を誘つた。ときには空氣さへも、高い山のむかうに自分を誘ふやうに思はれた。

かうして、丁度夏の盛りのころ、彼は船長の總領息子のクリスティアンと出會つた。クリスティアンは馬に乘つて家へ歸るために、下男と一緒に森へやつて來たのである。彼はアルネよりは二つ三つ年上であつた。氣輕な愉快な少年で、考へは始終ぐらついてゐたが、そのくせ目的を變へるやうな事はなかつた。彼は氣ぜはしく、きれ〴〵に話した、好んで二つの事を一度に話した。裸馬に乘つたり、飛んでゐる鳥を射たり、蠅で魚を釣つたりした。アルネには完全無類な人間の標本のやうに見えた。彼はまた旅が好きで、アルネにいろ〳〵な知らない國々の事を話して聞かせたので、急に周圍の物までが輝いて見えるくらゐだつた。彼はアルネの讀書好きを知ると、自分の讀んでしまつた書物を彼に持つて來てやつた。アルネがそれを讀んでしまふと、また新しいのを持つて來た。日曜日には、二人で並んですわつて、彼は地理を教へたり、地圖の見方を說明して聞かせたりした。その夏と秋との間にアルネはあんまり澤山の書物を讀んだために、痩せて蒼白くなつてしまつた。

冬になつて、彼は家でも讀書する事を許された。それは來年は堅信禮を受けなければならなかつたし、また、一つは父親をうまく籠絡する事が出來たからである。彼は今では學校へ通ひはじめたが、學校ではぢつと眼を閉ぢて、家にある書物の事ばかり想つてゐた。彼は百姓の少年の間には、もう一人の友達も持たなかつた。

年と共に、父親が母親を虐待する事はます〳〵ひどくなつた。それと共に、酒癖もます〳〵惡くなり、體も衰へて行つた。それでも、アルネは母親に一時の平安を與へるために、父の傍にすわつて、その機嫌をとらねばならなかつた。また、しば〳〵自分が今では心の底から嫌厭してゐる事を口にしなければならなかつた。それで彼は父に對して憎惡を抱くやうになつた。その憎惡を彼は母親に對する愛情と共に、深く心に隱してゐた。彼がクリスティアンと